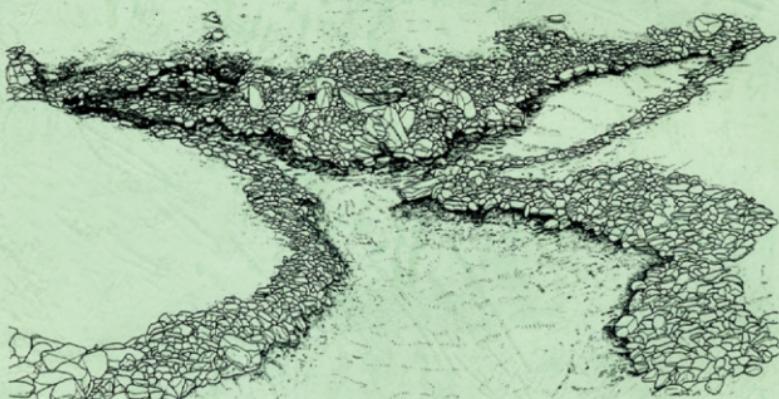


城之越遺跡

— 三重県 上野市 比土 —



1992・3

三重県埋蔵文化財センター



城之越遺跡 大溝上流部全景



▲箭弓 (449)



(表)



(裏)



▲劍形 (460)



▲劍形 (459)



▲刀形 (457)



▲韓式系土器 (上: 269 下: 325)



▲案 (裏面、492)



▲朱彩高杯 (223)

序

三重県では、伊勢地方を流れる河川が伊勢湾へ流れるのに対して、伊賀地方を流れる河川は最終的に淀川となって大阪湾へと注いでいます。このように、伊賀は古来より近畿地方との結びつきの強い地域であり、古代においては人和の東の玄関口でもありました。こうした地理的な条件もあってか、四方を山に囲まれた山国ですが、開発は早くから進んでいたようで、国指定史跡の御墓山古墳や美旗古墳群をはじめとして、県内でも100mを越える大規模な古墳はすべて伊賀地域に集中しております。

さて、今回報告します城之越遺跡は、美旗古墳群を台地上にひかえた上野市比土に所在する遺跡で、県営の農免農道とは場整備事業に先立って調査されたものですが、調査の結果、後世の庭園を思わせるような景観をもった古墳時代前期の貼石や立て石をもつ大溝をはじめとして、数多くの遺構や遺物を確認し、全国的にも類例のない貴重な遺跡であることが判明いたしました。こうした当初予想だにもしなかった成果を受けて、多数の市民、研究者が来訪するなか、文化庁の指導を得ながら、県農林水産部、上野市、地元土地改良区、県教育委員会の四者で協議を重ねた結果、最終的に遺跡の大半が工事地区から除外され、史跡指定も考慮にいれた保存の方策が図られることとなりました。

暑い中の発掘調査への御協力と遺跡の保存に御理解いただいた地元土地改良区の方々、調査を温かく見守っていた比土・古都地区をはじめとする上野市民の方々、様々な問題に対処していただいた上野市教育委員会や三重県農林水産部農村整備課・耕地課・上野農林事務所の方々、調査に際して多大の御指導と助言を賜った文化庁、余良國立文化財研究所をはじめとする諸大学・研究所その他文化財関係機関の方々に、厚くお礼申し上げます。

最後に、当報告書が伊賀地方の歴史や古代の祭祀、さらには当時の精神文化を解明するうえでの糸口になることを願いますとともに、県民の皆様の文化財保護へのより一層の御理解と御協力を念願して序文といたします。

平成4年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中林昭一

例　　言

1. 本書は、平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告書第3分冊として城之越（じょのこし）遺跡の発掘調査結果をまとめたものであるが、あわせて、城之越遺跡保存対策事業として実施した補足調査の結果も収録した。

2. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他を県農林水産部の負担によるもの（本調査）と、全額県農林水産部の負担によるもの（農道部分本調査及び立会い調査）および国庫補助金と県教育委員会の負担によるもの（補足調査）がある。

3. 調査は次の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査指導 牛川喜幸（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部）

八賀 齐（三重大学人文学部教授）

調査協力 三重県農林水産部農村整備課、耕地課、上野農林事務所

上野南部第三土地改良区

上野市教育委員会

4. 調査面積、期間、調査担当は以下のとおりである。

調査対象 面積　　期間　　調査担当

(A地区)

本調査 2500m² 平成3年　　技師 穂積裕昌　研修員 中浦基之
5/7～9/20

補足調査 1300m² 平成3年　　技師 穂積裕昌　主事 森川常厚　研修員 中浦基之
9/24～10/30

立会い調査 280m² 平成3年　　技師 穂積裕昌
11/2～11～8

(B地区)

立会い調査 700m² 平成3年　　技師 穂積裕昌　主事 吉澤良
12/16～12/26

5. 本書の作成は、遺物の実測およびトレースは調査担当者の他に三重県埋蔵文化財センター調査第1課技師伊藤裕偉、管理指導課主事小林秀、同補助員新井ゆう子、北山美奈子、小池洋子、瀧川ひとみ、松木春美、中村美智代、樋純子、石橋秀美が行い、遺物写真は、管理指導課主事田村陽一・調査第2課主事天野秀昭が行った。本書の編集は、調査1課第1係長倉田直純の指導のもと穂積裕昌が担当し、それぞれの執筆分担は目次および文末に記した。

6. 木製品の樹種鑑定ならびに種子鑑定、大溝埋土の花粉分析を天理大学付属天理参考館金原正明氏にお願いして玉稿を頂き、第VI章に収録した。記して謝意を表します。

7. 木製品の年輪年代測定を光谷拓実氏（奈良国立文化財研究所）にお願いし、建築部材については宮本長二郎氏（文化庁）の御指導を得た。記して謝意を表します。

8. 写真図版のうち、巻頭カラー図版(1)と図版P.L. 2下～P.L. 3・P.L. 6～P.L. 7・P.L. 8下～P.L. 9は、奈良国立文化財研究所佃幹雄氏と井上直夫氏の撮影による。

9. 発掘調査ならびに整理過程において、以下の方々から御指導・ご協力を賜りました。

記して感謝の意を表します。（順不同、敬称略）

池田征弘 石野博信 井上和人 猪熊兼勝 植木久 植田文雄 複村寛之 岡崎文彬 岡田精司 齋田雅昭
女屋和志雄 加藤允彦 河上邦彦 河原純之 黒崎直 近藤公夫 小玉道明 塩山則之 萩田稔 清水眞一
杉本宏 高瀬要一 龍居竹之助 辰巳和弘 田中哲雄 田中琢 田辺征大 坪井清足 中井均 西宮秀紀 橋
本澄夫 橋本博文 坂靖 深澤敷仁 古川眞澄 堀田啓一 松本洋明 森浩一 森下浩行 安原啓二 山田猛
山野満郎 吉川雷 和田革

10. 本書に使用した事務計画図面は農林水産部の提供による。
11. 図面における方位は、A地区が国土調査法による第VI座標系を基準とする座標北、B地区は磁北を真北に換算して用いた。なお、当地域の磁針方位は西偏約6°20'（昭和63年）である。
12. 本書で使用した遺構の名称・番号は調査時点での呼称を踏襲せず、新たに改称したものである。
13. 本書で使用した遺構表示略記号は下記による。

S A : 柱列・樋 S B : 捕立柱建物 S D : 溝・堀 S E : 井戸 S H : 積穴住居

S K : 土坑 S Z : 不明遺構・その他

14. 城之越遺跡の出土遺物や資料等は三重県埋蔵文化財センターに保管してある。
15. 本書作成以前に、『倉田直純・穂積裕昌「上野市北土城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター）や（穂積裕昌「三重県上野市城之越遺跡」「日本考古学年報」日本考古学協会掲載原稿）などに城之越遺跡の内容について中間的な報告を行ったが、それらと内容が異なる場合は本書をもって正式報告とする。
16. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本 文 目 次

I 調査に至る契機と経過	
1. 調査に至る契機	(倉田直純) 1
2. 調査の経過	(タ) 1
3. 調査の方法	(徳積裕昌) 2
II 位置と環境	(徳積) 5
III A地区の調査成果	
(1) 立地と概要	(徳積) 11
1. 立地 11
2. 全体の遺構配置 11
(2) 大溝の遺構と遺物	
1. 大溝の構造	(徳積) 13
(1) 概要 13
(2) 層序 13
(3) 各説 14
2. 大溝の遺物出土状況	(徳積) 30
3. 大溝の出土遺物	
(1) 土器類および石製品類	(伊藤裕偉) 35
(2) 木製遺物	(徳積) 54
(3) 微高地部分の遺構と遺物	(徳積) 75
1. 遺構の概要 75
2. 基本層序 76
3. 下段部分の遺構と遺物 79
(1) 壁穴住居 79
(2) 掘立柱建物 81
(3) 横・柱列 86
(4) 溝 86
(5) 井戸 87
(6) 土坑 87
(7) 包含層出土遺物 87
4. 中段部分の遺構と遺物 90
(1) 壁穴住居 90
(2) 掘立柱建物 90
(3) 横・柱列 99
(4) 溝 99
(5) 井戸 100
(6) 土坑 100
(7) 不明遺構 100
(8) 包含層出土遺物 101

挿 図 目 次

第1図	A地区トレンチ配置図	第55図	A地区土層概念図
第2図	遺跡位置図	第56図	下段部分南北トレンチ西壁土層図
第3図	西暦1900年頃の遺跡周辺の地図	第57図	下段部分実測図
第4図	伊賀地区主要占墳実測図	第58図	S H 2・3実測図
第5図	比土・古都小盆地地形図	第59図	S H 3出土状況図
第6図	A地区調査区位置図	第60図	S H 3出土遺物実測図
第7図	A地区遺構配置図	第61図	S H 5・6実測図
第8図	大溝土層図・断面図	第62図	S H 5・6出土遺物実測図
第9図	大溝上流貼石部分実測図	第63図	S H 26実測図
第10図	大溝・井泉1実測図	第64図	S II 26出土遺物実測図
第11図	大溝・井泉2実測図	第65図	S B 4実測図
第12図	大溝・井泉3実測図	第66図	S B 7実測図
第13図	大溝・第1合流点実測図	第67図	S B 9・10実測図
第14図	第1突出部実測図	第68図	S B 9・10出土遺物実測図
第15図	第2突出部実測図	第69図	S B 11実測図
第16図	大溝・階段状施設実測図	第70図	S B 12実測図
第17図	大溝・井泉3から第1合流点の貼石実測図	第71図	S B 13・14実測図
第18図	大溝・第1合流点から第2合流点の貼石実測図	第72図	S B 13出土遺物実測図
第19図	大溝・貼石実測図	第73図	S B 15実測図
第20図	大溝 S Z 1出土状況図	第74図	S B 22実測図
第21図	木製遺物種類別分布図	第75図	S B 23実測図
第22図	大溝上流部・木製遺物出土状況図	第76図	S B 25実測図
第23図	古式土器器の形式分類図①	第77図	S B 25出土遺物実測図
第24図	古式土器器の形式分類図②	第78図	S B 27実測図
第25図	古式土器器の形式分類図③	第79図	S B 28・29実測図
第26図	大溝出土土器等実測図	第80図	S A 16実測図
第27図	大溝出土土器実測図	第81図	S A 16出土遺物実測図
第28図	大溝出土土器実測図	第82図	S D 17断面図
第29図	大溝出土土器実測図	第83図	S D 17出土遺物実測図
第30図	大溝出土土器実測図	第84図	S D 24実測図
第31図	大溝出土土器実測図	第85図	S D 24出土遺物実測図
第32図	大溝出土土器実測図	第86図	S D 19・S E 20実測図
第33図	大溝出土土器実測図	第87図	S D 19・S E 20出土遺物
第34図	大溝出土土器実測図	第88図	S K 8実測図
第35図	大溝出土土器実測図	第89図	S K 18実測図
第36図	大溝出土土器等実測図	第90図	S K 18出土遺物実測図
第37図	大溝出土土器実測図	第91図	下段包含層出土遺物実測図
第38図	大溝出土土器実測図	第92図	中段部分宍内測図
第39図	大溝出土木製遺物実測図	第93図	S H 54・55実測図
第40図	大溝出土木製遺物実測図	第94図	S H 54出土状況図
第41図	大溝出土木製遺物実測図	第95図	S H 54出土遺物実測図
第42図	大溝出土木製遺物実測図	第96図	S B 30実測図
第43図	大溝出土木製遺物実測図	第97図	S B 31・32実測図
第44図	大溝出土木製遺物実測図	第98図	S B 33実測図
第45図	大溝出土木製遺物実測図	第99図	S B 34実測図
第46図	大溝出土木製遺物実測図	第100図	S B 36実測図
第47図	大溝出土木製遺物実測図	第101図	S B 37実測図
第48図	大溝出土木製遺物実測図	第102図	S B 37出土遺物実測図
第49図	大溝出土木製遺物実測図	第103図	S B 38実測図
第50図	大溝出土木製遺物実測図	第104図	S B 39実測図
第51図	大溝出土木製遺物実測図	第105図	S B 39内上坑出土遺物実測図
第52図	大溝出土木製遺物実測図	第106図	S B 40実測図
第53図	大溝出土木製遺物実測図	第107図	S B 41実測図
第54図	大溝出土木製遺物実測図	第108図	S B 42実測図
		第109図	S B 45実測図

第110図	S B46実測図	第161図	S B90実測図
第111図	S B47実測図	第162図	S B90出土遺物実測図
第112図	S B50・51実測図	第163図	S B91実測図
第113図	S B53実測図	第164図	S B91出土遺物実測図
第114図	S B59・S A60実測図	第165図	S B92実測図
第115図	S D35出土遺物実測図	第166図	S B99実測図
第116図	S D58出土遺物実測図	第167図	S B100実測図
第117図	S E48・S D49実測図	第168図	S B101実測図
第118図	S K57実測図	第169図	S B101出土遺物実測図
第119図	S Z56実測図	第170図	S B104実測図
第120図	中段部分包含層出土遺物実測図	第171図	S B104出土遺物実測図
第121図	S H61・62実測図	第172図	S B105実測図
第122図	S H62出土遺物実測図	第173図	S B106実測図
第123図	S H65・66・S Z67実測図	第174図	S B106出土遺物実測図
第124図	S H65・S Z67出土遺物実測図	第175図	S D75実測図
第125図	上段部分実測図	第176図	S D75出土遺物実測図
第126図	S H70実測図	第177図	S D97実測図
第127図	S H70出土遺物実測図	第178図	S D97出土遺物実測図
第128図	S H73実測図	第179図	S D102・103出土遺物実測図
第129図	S H73出土遺物実測図	第180図	S K68実測図
第130図	S H77実測図	第181図	S K68出土遺物実測図
第131図	S H77出土遺物実測図	第182図	S K93出土状況図
第132図	S H78実測図	第183図	S K93出土遺物実測図
第133図	S H78出土遺物実測図	第184図	S Z79出土遺物実測図
第134図	S H80実測図	第185図	S Z98出土遺物実測図
第135図	S H80出土状況図	第186図	上段部分包含層出土遺物実測図
第136図	S H80出土遺物実測図	第187図	A地区立合い調査部分実測図
第137図	S H83実測図	第188図	立合い調査部分各遺構実測図
第138図	S H83出土遺物実測図	第189図	B地区調査区位置図
第139図	S H84～88実測図	第190図	B地区上層図
第140図	S H84出土状況図	第191図	B地区S B 1・S B 2柱穴番号図
第141図	S H86出土状況図	第192図	B地区造構図
第142図	S H87出土状況図	第193図	B地区S B 1実測図
第143図	S H88出土状況図	第194図	B地区S B 2実測図
第144図	S H83～86出土遺物実測図	第195図	B地区S B 2柱根及びS B 1・2出土遺物実測図
第145図	S II87・88出土遺物実測図	第196図	B地区S H 3実測図
第146図	S H89実測図	第197図	B地区S H 3出土状況図
第147図	S H89出土遺物実測図	第198図	B地区S H 3出土遺物実測図
第148図	S H94・95実測図	第199図	B地区出土遺物実測図
第149図	S H95出土遺物実測図	第200図	木製遺物樹種組成図
第150図	S H96実測図	第201図	推定さる植生変遷
第151図	S H96出土遺物実測図	第202図	大溝西壁花粉組成図
第152図	S B64実測図	第203図	大溝北壁花粉組成図
第153図	S B64出土遺物実測図	第204図	小型丸底壺A非精製品の型式変化
第154図	S B69実測図	第205図	城之越遺跡出土高杯分類概念図
第155図	S B69出土遺物実測図	第206図	体部穿孔小形土器関連資料
第156図	S B71・72実測図	第207図	体部穿孔小形土器の諸類
第157図	S B74実測図	第208図	北堀池遺跡と城之越遺跡の木製品組成比較
第158図	S B74出土遺物実測図	第209図	扉板関連資料
第159図	S B76実測図	第210図	椅子・案間連資料
第160図	S B81実測図	第211図	関連遺構

図 版	目 次
P L. 1	比上・古都小盆地空中写真
P L. 2	城之越遺跡遠景
	城之越遺跡A地区全景
P L. 3	大溝上流部及び比土集落
	大溝及び古都集落
P L. 4	大溝上流部調査風景
	大溝上流部木製品出土状況
P L. 5	井泉2調査風景
	井泉2案(492)出土状況
P L. 6	井泉2から第1合流点
	井泉3から第1合流点
P L. 7	第1合流点
	第1突出部
P L. 8	第1突出部の貼石及び立石の状況
	第2突出部
P L. 9	階段状施設
	大溝上流部全景
P L. 10	井泉1から延びる溝の木製品出土状況
	井泉1
P L. 11	大溝上流部全景
	大溝下流部埋土の堆積状況
P L. 12	中段部分全景
	S B31・32とS B36
P L. 13	S B37とS B34
	S B39
P L. 14	S B38
	下段部分S B11(手前)、 S B12・13・14
P L. 15	S H26とS B25(左手前)・27~29
	上段部分の堅穴住居群
P L. 16	S H84内上坑遺物出土状況
	S H88遺物出土状況
P L. 17	S K93遺物出土状況
	S D19・S E20
P L. 18	S K68余景
	S K68遺物出土状況
P L. 19	城之越遺跡B地区から望む比土集落
	B地区S B1・S B2
P L. 20	B地区S B1
	B地区S B2
P L. 21	B地区S B2柱掘形(P 8)発掘風景
	B地区S B2柱掘形(P 8)断面
P L. 22	大溝IVb層出土遺物
P L. 23	〃
P L. 24	大溝IVb層・IVb層出土遺物
P L. 25	大溝IVa層出土遺物
P L. 26	〃
P L. 27	〃
P L. 28	大溝III層出土遺物
P L. 29	〃
P L. 30	〃
P L. 31	大溝S Z 1出土遺物
P L. 32	大溝S Z 1・I・II層・その他出土遺物
P L. 33	大溝I・II層・その他出土遺物
P L. 34	大溝出土木製品(武器・武器形祭祀具、武具)
P L. 35	〃(筋織具・椅子・脚材)
P L. 36	〃(案)
P L. 37	〃(幕材)
P L. 38	〃(軒材・壁板・挿入棒、有頸棒)
P L. 39	〃(組物・用途不明品)
P L. 40	S H 3・26・54・65・77・80出土遺物
P L. 41	S H83・84出土遺物
P L. 42	S II85・86・87・88・89出土遺物
P L. 43	S D75・S Z98出土遺物
P L. 44	各遺構出土遺物

表 目 次
第1表 木製遺物の樹種一覧
第2表 大溝西壁 花粉遺体一覧
第3表 大溝北壁 花粉遺体一覧
第4表 大溝出土種実一覧
第5表~第21表 A地区出土遺物観察表 (木製遺物を除く)
第22表 B地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)
第23表~第27表 A地区出土木製品観察表
第28表 B地区出土木製品観察表
第29表 大溝出土木製品年輪代測定結果

付 図

I 調査に至る契機と経過

1. 調査に至る契機

三重県教育委員会では、例年8月、開発関係各課に対し、翌年度の公共事業計画について照会を行い、早期に事業計画を把握してその保護に関し遺漏のないよう努めている。

県農林水産部農村整備課からは、平成2年9月28日付、農業第1052号で平成3年度農業基盤整備事業計画についての回答があった。

分布調査は、これに基づき同年11月頃から開始したが、上野管内の南部第3地区（県営は場整備事業）及び南部第2期地区（農免農道整備事業）については、平成3年1月後半に実施した。その結果、上野市比土字城之越（じょのこし）地内で、遺物の散布状況は非常に希薄であったが、近くに古郡という地名が残っていることや、遺跡の立地条件に適するところである高高地が何箇所か存在することから、ここを中心に約60,000m²に及ぶ古墳時代から中世にかけての遺跡の広がりが想定された。遺跡名は小字名をとって城之越遺跡と呼称することとした。

遺跡範囲の確定と遺構深度のデータを得るために試掘調査は、同年2月中旬に実施した。その結果、遺跡の最も北寄りのA地区で13,300m²、その南のC地区で5,500m²、谷筋にあるB地区で6,600m²の合わせて事業地内25,400m²に遺構・遺物が濃密に分布することが明らかとなった。この旨、教埋第63号で農村整備課並びに新地課へ報告するとともに、遺跡保存に関する協議を同年3月5日、13日の2回にわたり行った。その結果、大部分がT法変更等により保存され、最終的に農免農道部分1,500m²（A地区1,000m²、C地区500m²）の本調査と、県営は場整備部分2,200m²（うちA地区1,500m²、B地区700m²）の立会調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

調査は予め重機で表土を除去後、平成3年5月10日、A地区的農免農道部分から開始した。既にその初期の段階から古式土師器や木製品を多量に含む古墳時代前期の大溝が確認され、さらに調査が進む過程で溝の上流部では、法面に石貼りを施し、立石を

配した岬状の突出部を設けるなど他に例を見ない庭状の特異な遺構であることが次第に明らかとなってきた。

そこで、農村整備課と協議のうえ、7月以降に実施予定であった農道の両側に取りつくA地区の排水路部分1,000m²と面溝査部分500m²の立会調査も本調査に併せて実施されることになった。その後、考古学、庭園史を専門とする多くの研究者の方々から現地指導や有意義な御教示を得、調査に万全を期すとともに、7月25日、農村整備課、文化振興課、埋蔵文化財センターの三者で、8月5日には耕地課、上野農林事務所も加えた五者で城之越遺跡の取り扱いについて調整協議をもった。この中で遺跡の重要性を説明し、将来史跡指定もありうる旨示唆するとともに特異な遺構部分については、少なくとも設計変更等で保存することで合意をみた。

8月11日に開催した現地公開には、県内外から約1,800名もの見学者が訪れ、その後も跡を絶たずその数延べ7,000名に達するなど、関心の高さを示し現状保存を望む声も急速に高まった。こうした中、緊急に開いた県当局の部内調整で、この取り扱いについては文化庁の指導を得つつ、地元上野市、土地改良区を含めた「城之越遺跡保存対策調整会議」を開設し検討されることとなった。

8月30日には、文化庁主任調査官（安原啓示氏）、飛鳥藤原宮発掘調査部長（牛川喜幸氏）、県文化財保護審議会委員（八賀晋三・重大大学教授）の三氏による現地指導を受け、①検出した遺構は全国的に類例がなく、初的な庭とも考えられ貴重である。②これまでの調査結果を再整理し、補足調査を早急に実施する必要がある。③史跡指定に向け県、市の考え方をまとめておく必要がある。④露出展示も技術的には可能等の指導、助言を得た。

補足調査については、調整会議の了解と文化庁の同意を得て、新たに国庫補助を受け、9月後半から開始した。調査面積は1,300m²である。その結果、

石貼り大溝は3ヶ所の源流部から端を発することが確定し、その内の1つは非常に残りの良い円形枠状石組みをもつことが確認された。また比較的大型の掘立柱建物群が調査区西方に集中することも新たに確認された。

こうした結果を踏まえ、かつ、この間にもたれた数回にわたる地元での打合せ会や調整会議を経て、最終的に城之越遺跡（A地区）は、約12,000m²が共同減歩方式による工事除外地として、また農免農道については事業計画そのものを白紙に戻すこととなった。これにより当初予定していたC地区の調査500m²（A地区農免農道の延長部分）についてはその必要がなくなった。代わりに新たな設計変更により、は場整備に伴う排水路が、工事除外地のすぐ北側へ取りつくこととなり、11月後半、この部分について急遽280m²の立会調査を実施した。従って最終的にA地区では、合わせて約4,100m²の調査となった。そして以上のような経過を経て平成4年2月、県文化財保護審議会への諮問、答申を受けて除外地全面が県史跡に指定され、その中心部分については国指定の方向で保存が図られることとなった。

一方、12月中旬から開始した城之越遺跡（B地区）の調査（700m²）は、A地区から500m程谷筋に入った丘陵斜面にあり、試掘調査の結果から遺構・遺物の希薄なことが予想されたため工事直前の軽微な調査を実施する予定であった。しかし全く予想もしなかった古墳時代の四面埴付大型掘立柱建物が2棟並列して確認され、A地区との関連が俄に注目されることとなった。今後城之越遺跡の歴史的評価については、広範な分野からの総合的な判断が必要であろう。

（倉田直純）

3. 調査の方法

城之越遺跡は当初、A地区およびC地区的農免農道部分が同一日の発掘を行う予定地とされ、A地区およびB地区的県営は場整備部分はその終了後に行う予定であった。A地区とC地区とは距離も離れ、農免農道の路線の方向も大きく異なっていたため、調査区の設定等はそれぞれ独立して行うこととなっただ。

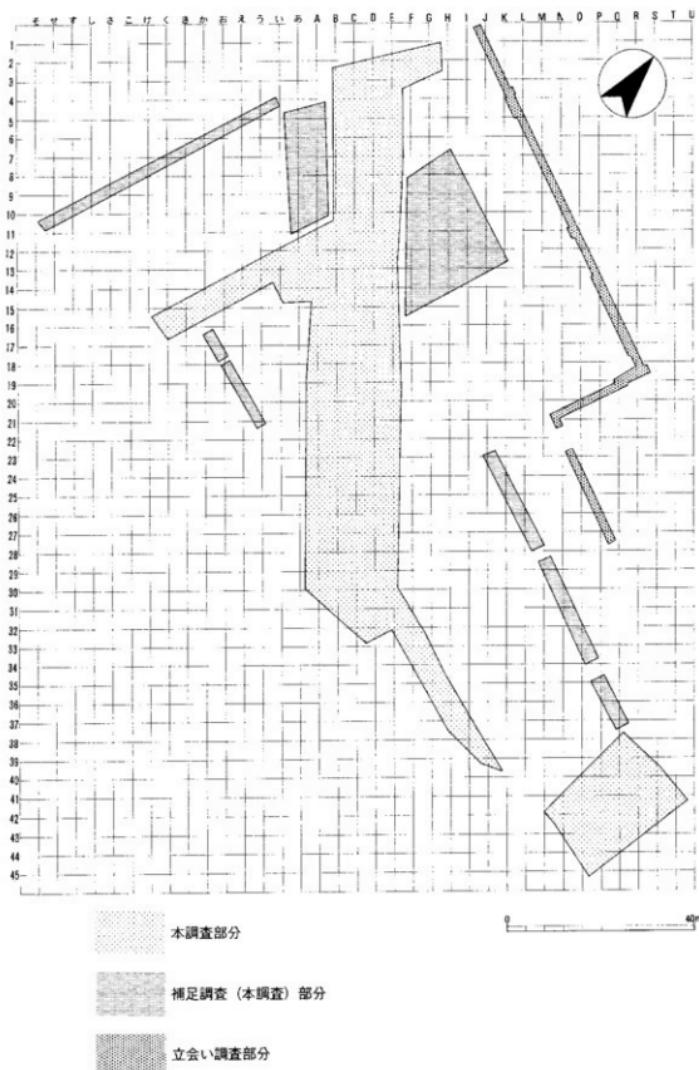
まずA地区的農免農道部分の調査対象区域は、幅8m、長さ125mという細長い範囲であったため、

グリッド（地区割）の設定は農道予定地の長軸に沿って任意で設定した。4m×4mをグリッドの1単位として、トレンチ長辺に平行するラインを算用数字（1～32）で、直交するラインをアルファベット（A～C）で表示し、グリッドの北西隅を表示の原点とした。

ところが、A地区農免農道部分の調査が開始されても、貼石や立石を有する大溝等の重要遺構が検出され、これをうけて当初本調査終了後の立会調査の予定であったA地点は場整備部分（農免農道の両側と東側の丘陵裾の部分）も本調査に切り替わり、農免農道部分と同時に調査することとなった。そのため、その部分のグリッド設定は、当初の農免農道部分での表示（アルファベット及び算用数字）をそのまま延長させて使用することとなったが、トレンチに直交するラインでAよりも西側へ延びる部分については新たに仮番名（あ～）を使用した。

以上の部分は、バックフォーによる表土除去後、人力による掘削・検出を行った。遺構名称は、ピットのみグリッド毎で通し番号を付したが、他の遺構は調査区全体のなかで種別毎に仮の通し番号を与えた（当報告での遺構番号はこれと異なる）。ただし大溝については、大溝全体としてひとつの遺構単位とし、大溝内のそれに伴う遺構は、たとえば「大溝 井泉1」「大溝 杖列」というように大溝内で枝番号を付与した。遺構実測は、必要に応じて1/20や1/10図を作成したほか、全体は大溝部分が1/20作図、その他の部分は1/50作図の航空写真測量を実施した。

その後の補足調査では、先に大溝が検出された部分の両側に開けた面的なトレンチ（北拡張区、南拡張区と仮称）では当初のグリッド設定の基準を踏襲したが、残りの線的なトレンチでは幅が3mといふこともありトレンチ番号（AからF、あくまで現場作業上の能率のため当報告においては使用していない）を付与したうえでトレンチの片側の壁に沿って4m毎に算用数字を与えるに止めた。ただしこの部分の遺構番号は、先の調査での番号に連続して与えた。遺構実測は、国土座標にのせるため先の調査の航空測量の基準杭をもとに1/20作図の造り方実測を実施した。



第1図 A地区トレンチ配置図 (1 : 1,000)

A地区の主要部分が工事除外地となることが確定した後、除外地のすぐ北側に県営は場整備事業に伴って排水路が通ることになった。その部分の調査とB地区的調査は、工事に入る緊急にせまった状況のもと、グリッドの設定は行わず、バックフォーによる掘削を遺構面の直上近くまで行い、その後に人力による掘削と検出を行った。遺構番号は、それぞれの調査区内で、ピットについて通し番号を板に与えた。遺構実測は、A地区的排水路部分が工事計画のセンター杭を基準とした1/20作図の実測、B地区が現況の畔壁をもとに1/20作図の造り方実測を実施した。
 (地質裕昌)

調査日誌抄

5/7 ~8	A地区、重機による表土除去。	者多数訪れ、上空にはヘリコプター。
5/9	道具搬入、ベルコン・トイレ・発電機設置。	この頃、考古学関係者の来訪者多し。
5/10	近鉄線沿いから現地調査開始、すぐSH2と大溝確認。	現場を一般公開。1800余名で終日賑わう。
5/13~24	雨にたなれつつも、当初の農免農道部分の大溝掘削。貼石や立石の存在にセンター内部や作業員さんの間でも議論沸騰。	8/12~18 現場夏休み。この間も県教育長や一般の方々の来訪者多い。
5/27~29	上村・浜口応援。大溝内木製品実測、取り上げ。	8/22 南東隅のトレーニング部分の検出。SH20は大形。
6/3	中浦、城之越の現場へ合流。	8/30 文化庁主任調査官原岡原氏・奈文研牛川喜幸氏・三重大学八賀晋氏による調査指導。
6/17	A地区南東側の丘陵下のトレーニングによる表土除去。	9/4 ~5 調査区清掃。
6/18	大溝断面図作成。I~V層を設定、以後大溝の遺物取り上げの基準。	9/6 奈文研田幹雄・井上直夫氏による大溝の写真撮影。
6/19	SZ1実測および取り上げ。	9/7 航空写真測量。前夜夕立のため水抜きにひと苦労。伊藤裕作、伊藤徳也水抜き応援。無事終了。
6/21	井泉1確認。	9/10 大理大学付属天理参考館金原正明氏による大溝理上の分析サンプリング。
6/27	大溝から錆弓出土、この頃大溝からの木製遺物の出土多し。	9/12 中段及び下段部分の掘立柱建物、柱根及び柱痕残存柱穴の断面図作成。
6/28	大溝IV-a層とIV-b層の間に灰色砂の貫入認む。上器量比較的多い。	9/24 補足調査開始。
7/2	当初立会い調査予定の南側排水路部分、本調査として調査開始。	9/27 県議団来訪。台風接近、中浦・吉澤夜急進現場にてテント倒し。
7/11	大溝の延長部分を探るため、NTTによる大溝延長想定部分の電波探査。中段部分掘立柱建物群、清掃及び写真撮影。	10/3 大溝の北側へ延びる部分、検出開始。
7/23	大溝完掘、横断土層図作成。	10/8 大溝上流部すべて調査区内で完結することが判明。井泉1確認。
7/24~25	名張市立桔梗ヶ丘中学校郷土研究クラブ体验発掘、SK68の遺物取り上げ。	10/11 再び台風接近。
8/8	調査概要を記者報道。県庁で山沢次長・倉田主査記者会見、現場は報道各社の記	10/19 文化庁主任調査官河原純之氏・奈文研安原氏・三重大学八賀氏による調査指導。井泉1掘削。
		10/21 近鉄線脇のトレーニング、重機による表土除去。大形の掘立柱建物確認。
		10/23 補足調査部分、清掃、写真。
		10/28 補足調査部分実測。
		11/1 伊藤克幸調査第1課長および倉田主査、関係者は場整備事業地除外地区の杭打ち。文化庁調査官加藤允彦氏現地指導道具収取。穂積・中浦、大溝貼石部分の航測図面の現地校正開始(～13日)。
		11/6 夜、地元土地改良区にてスライド会。北側排水路部分立会い調査開始。
		11/8 B地区調査開始。径1mの柱穴を確認。
		12/2 前日の柱穴、大形掘立柱建物2棟と判明。前面を擁て並ぶ。
		12/16 センターから多数の応援を得、B地区実測。
		12/24 水雨のなか、傘を片手に掘立柱建物穴掘形土層図作成。
		12/25 B地区写真。足場悪く、建物大きすぎて苦労。この日をもって現場作業すべて終了。
		2/17 鳥取財保護審議委員会が城之越遺跡を県指定史跡に答申。

II 位 置 と 環 境

[地理的環境]

城之越遺跡は、三重県上野市比土に所在する。

上野市は、三重県の北西部に位置し、上野盆地の中心部を占める。この盆地は、古琵琶湖の陸化によるものであるが、地勢及び水系の違いによって、名張川水系の名張盆地と、木津・服部・柏原川水系の狭義の上野盆地という二つの盆地に分けることができる。この上野盆地は、独立丘陵や低丘陵、台地によってさらにいくつかの小盆地に分割されている。城之越遺跡の所在する比土地区も、隣接する古郡地区とともに、小盆地を形成している。この小盆地は上野市域の最南部で、上野盆地中央部を縦断して最後は淀川となって大阪湾へ注ぐ木津川は、西流してきた流れをこの地で大きく北へ向ける。城之越遺跡は、この木津川上流右岸の標高約169~170mの丘陵麓の水田に立地している。

小盆地の木津川右岸域について、直接的な盆地形成のための沖積作用をもたらした主体は、城之越遺跡の東側の丘陵から小盆地へ流れ出した小河川である、通称「北川」である。城之越遺跡はこの北川の脇に所在している。

城之越遺跡は、遺物の散布状況からA地区・B地区それにC地区の3地区に分かれる。A地区は、東側の丘陵から低くのびた舌状の尾根筋にあたっており、周辺部に比べて若干の微高地になっている。北川は、A地区を取り囲むように流れるが、これは基本的に周辺部の水田と方向を揃えており、条里施行に伴う改変とも考えられる。B地区は北川が小盆地へ流れ出る以前の谷筋にあり、北川右岸の丘陵斜面に立地する。C地区は、A地区とは北川を挟んだ南側の沖積地に立地する。

[歴史的環境]

木津川上流域の小盆地は、本流に伴うものとして上流から阿保、比土・古郡、下神戸の小盆地が、支流に伴うものとして比自岐の小盆地があり、これら小盆地及びその周辺では、古くから数多くの遺跡や古墳が形成されてきた。このうち、阿保小盆地内の青山町柏尾(2)と、比土・古郡小盆地内の比土字東

賀柳(3)からは、弥生時代後期の突線鉢式銅鐸が発見されており、また、下神戸の天童山寿福寺(4)の門徒が銅鐸を充却したとの記録から、下神戸周辺での銅鐸の出土も推定されている。無量寿福寺門徒からの充却銅鐸がその周辺より出土したものと考えた場合、木津川上流域の4小盆地のうち3小盆地に銅鐸が存在したことになり、現時点では比自岐小盆地での銅鐸の出土はないものの、弥生時代後期にはこれら小盆地が地域集団の結合単位となっていた状況が窺える。

古墳時代になると、城之越遺跡(1)をはじめ高賀遺跡(17)や高瀬遺跡(23)などで活発な人間活動が進むほか、小盆地群の南北に、三重県内でも有数の古墳が築造されるようになる。なかでも、比土・古郡の小盆地を見下ろす南西側の台地上には4世紀末から6世紀前半にかけて一世代一墳的に前方後円墳や帆立貝形古墳が順次集中して形成された美旗古墳群(26~30、国史跡)があり、その勢力基盤のひとつとして比土・古郡地区が想定されている。また、城之越遺跡とは丘陵でさえぎられてはいるものの、北側2.5kmの比自岐小盆地内には全長120mの前方後円墳である著名な石山古墳(5)が所在する。石山古墳の周辺でも若干の前方後円墳や帆立貝形古墳等が存在し、前期末から後期に至る古墳群を形成している。こうした古墳群の築造にあたっては、当然弥生時代後期にみられた小盆地単位の結合をはかるかに越えたかたちでの力の結集を認めることができよう。

また、城之越遺跡A地区のすぐ東側の丘陵に所在する通称「狐塚」とよばれる城之越古墳群(20)をはじめとして、それぞれの丘陵には、数多くの小古墳が築かれている。これらの多くは、古墳時代後期の群集墳と思われるが、なかには円筒埴輪や家形埴輪が出土しているものもあって、首長墓の系譜につらなる古墳も存在するのであろう。実体の解明は今後の調査に委ねられているが、石山古墳近くの王塚古墳(6)や美旗古墳群中の貴人塚古墳(30)・赤井塚古墳といった群集墳以外の後期古墳の存在とともに、当地域が前期より一貫して伊賀における拠点的な地



主要遺跡（弥生・古墳を中心とする、丘陵部の無印は主要群集墳）

- | | | | | |
|-----------------|--------------|-----------------|----------------|----------------------------|
| 1. 城之越道路 | 7. 才良山1号墳 | 12. 森藤道跡（弥生中～） | 19. 南山古墳群 | 《美旅古墳群》 |
| 2. 柏原御磧出土地 | 8. 朝音寺山古墳 | 13. 下郡道跡（弥生中～） | 20. 城之越古墳群 | 26. 鹿塚古墳 |
| 3. 比土御磧出土地 | 9. 住吉神社古墳 | 都町聚落地 | 21. 北川道路 | 第1復旧古墳
高さ4.8m、幅90m、4.C末 |
| 4. 天保山寿福寺 | 10. うま塚古墳 | 14. 才良道跡（弥生後～） | 22. 稲出道路 | 27. 女良原古墳 |
| 門徒が御磧を先鋒との記録 | 11. 佐々木形前山古墳 | 財良曳寺（白鳳） | 23. 高麗道路（古墳前～） | 4.8m×4.8m、100m、5.C前 |
| 5. 石山古墳 | 12. ぬか畠古墳 | 15. 馬場西遺跡（古墳前～） | 24. 宮内庁所管墓道別名墓 | 28. 花汐門塚古墳 |
| 前方後円墳、120m・4.C末 | 13. ぬか畠古墳 | 16. 浮田道路（古墳～） | 25. 近代古墳 | 前方後円墳、65m、5.C中 |
| 6. 王塚古墳 | 14. ぬか畠古墳 | 17. 高賀遺跡（古墳前～） | 26. 馬塚古墳 | 前方後円墳、42m、5.C後 |
| 前方後円墳、41m・後期 | 15. ぬか畠古墳 | 18. 大師山古墳群 | 27. 貞人塚古墳 | 前方後円墳、47m、6.C前 |

第2図 遺跡位置図 (1:50,000)

(国土地理院 1:25,000 「阿保」・「伊勢路」この地図は、建設省国土地理院

院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 平5部複製、第40号)

城の一つであったと評価することは許されよう。

こうした伊賀における古墳時代の拠点的な地域としては、当地以外では伊賀北部の上野市佐奈具周辺があり、そこでも三重県最大の前方後円墳である御臺山古墳（全長188m）をはじめ、外山古墳群、後期の巨石墳である勘定塚古墳（墳頂・全長とも不明であるが奥壁幅は3m）などが前期から後期に至るまで存在している。まさに、上野盆地中央部をはさんだ南北に拠点的な地域が存在するわけである。このことは、盆地中央部が木津川の氾濫原であり有力な地となりえず、開発が盆地の縁辺から進んだことを暗示しているものといえよう。

古墳時代に引き続いている律令時代以降も当地域の先進性は保持されたようだ。当地が属する伊賀郡の初期の郡家は、地名が暗示するように古郡の地にその存在が推定されている。また、伊賀郡で確認されている唯一の白鳳寺院である財良庵寺（¹⁴ 内に存在）は、小盆地群から上野盆地中央部へはいってすぐのところに存在する。

こうした有力な遺跡がこの地に数多く形成された背景には、当地域の交通的条件を考えることも必要であろう。古くは倭姫命が伊勢へ行幸のおり穴穂宮（現神戸神社）で一時逗留したとの伝承（皇太神宮儀式帳）や、壬申の乱のおり大海人皇子が伊賀駿家（古郡？）を焚いて当地を北上したように、この地は、大和から伊勢へ向かう場合、上野盆地を北進して伊勢の北部、さらには東国へ抜けるルート（東海道）と、阿保（現青山町）を経て伊勢の中南部方面へ向かうルートとが分岐する交通の要衝地でもあった。古道は美旗古墳群周辺から比土へ入り、その地で二手に分かれたものと思われる。比土から阿保へ抜ける場合、現在は主要道である国道422号線と木津川伝いに南側を大きく迂回する道（この場合は高瀬道路の南側を抜ける）の二つが使われるが、明治年間に大日本帝国陸地測量部が作成した地図では、現在はほとんど使用されてないが城之越遺跡B地区の南側谷筋を青山町へ抜ける道も記されており、興味深い。

平安時代の天喜4年（1056）には、ここ古郡の地が伊賀の大領主であった藤原実遠の所領であったことが藤原実遠所領譲状案（「東南院文書」「平安遺文」

763）から知られ、その背景は石母田正氏の名著『中世的世界の形成』に詳しい。実遠は、治暦2年（1066）の元興寺大僧都房政所下文案（『三国地誌』卷之百六所取、「平安遺文」1002）に「右件田代荒野



第3図 西勝1900年頃の沿路周辺の地図（1:50,000）
（大日本帝国陸地測量部編 1:20,000 「阿保村」「古山村」から）



1. 石山古墳
120m・4C末



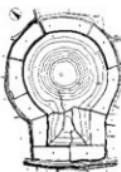
2. 荒木車塚古墳
93m・4C末



3. 御基山古墳
188m・5C初



4. 殷塚古墳
90m・4C末



5. 女良塚古墳
100m・5C前



6. 昆沙門塚古墳
65m・5C中

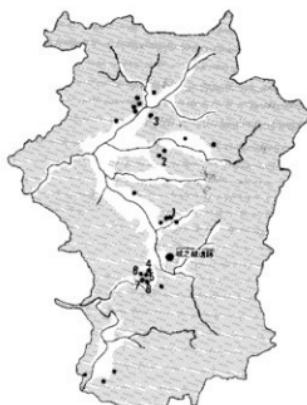


7. 貴人塚古墳
47m・6C前



7. 馬塚古墳・142m・5C後

0 100m



4～8は美旗古墳群

0 10km

第4図 伊賀地区主要古墳実測図 (1:4,000)

等、神戸住人実遠朝臣負物代」とあることから神戸郷の住人であったことが知られ、さきの所領譲状案では神戸郷地内の所領としては古郡村が見られることから、古郡は実遠の居住地があったことが推定されている。

城之越遺跡周辺での現在までの発掘調査事例としては、比土内地内では古墳時代の集落である高瀬遺跡があり、木津川を背にして堅穴住居群をV字溝で囲む「環濠集落」の景観と初期須恵器の出土で注目された。古郡地内では稻田遺跡^②(22)など盆地内でも比較的低地部で発掘調査が行われたが、明確な古墳時代のものや、飛鳥～平安期の遺構、すなわち郡衙や藤原実遠の屋敷地を思わせるようなものは見つかっ

ていない。

木津川を挟んだ対岸の上神戸地内では、31mの帆立貝形古墳である近代古墳(25)が調査され、主室部の堅穴式石室からは甲冑が出土した。^③ 5世紀後半の時期で、丘陵上に所在する美旗古墳群との関係が想定される。また、集落関係では、浮田遺跡(16)と高賀遺跡が調査され、浮田遺跡からは弥生時代の方形周溝墓群が、高賀遺跡からは多量の土器と木製品を出土した古墳時代の大溝と奈良～平安時代にかけての大型の擬柱柱建物群が発見され、「郡政」と書かれた墨書き土器の出土とあわせ、当地の有力者の存在が窺える。^④ (穂積裕昌)

(註)

- ① 遺跡名称は、「ジヨノコシ」と呼称したが、地元では「ジヨウノコシ」と呼ぶ人も存在する。
- ② 青山町史編纂委員会『青山町史』1979年
- ③ 森川桜男「伊賀路の古代史（中）」「伊賀郷土史研究』8 伊賀郷土史研究会 1982年
- ④ 前掲註③と同じ
- ⑤ 例えば、山田篤「上野市因波、塙塚古墳」「昭和53年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会 1979年
- ⑥ 早瀬保太郎「伊賀史概説 上」1973年

⑦ 日本書紀

⑧ 註⑥と同じ

⑨ 昭和62年度三重県教育委員会調査

⑩ 昭和63年度三重県教育委員会調査

⑪ 昭和61年度三重県教育委員会調査

⑫ 森川桜厚・穂積裕昌他「上野市神神戸 浮田・高賀遺跡」

『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告－第3

分冊－』 三重県埋蔵文化財センター 1991年

⑬ 同上



第5図 比土・古都小盆地地形図 (1:5,000)

III A 地区の調査成果

(1) 立地と概要

1. 立地

A地区の東側部分は、城之越古墳群の所在する丘陵から延びた低い尾根筋に相当しており、調査前の現況は水田であったが、約50cmから1m程南北両側の水田面よりも高く、周囲からは若干の微高地となっている。しかし、西側へいくにつれこの比高差も弱まり、最も西側の部分では比高差は全くなく、部分的にはむしろ周辺よりも低くなっている。

これらは大きくみた場合、現況での段の存在から上段・中段・下段の3段に分けることが可能で、そうした場合上段は標高171.28m～171.75mの部分・中段は標高169.99m～170.27mの部分・下段は168.54m～169.67mの部分であり、丘陵から続く低い尾根筋は中段までである。東側部分の微高地（上段及び

中段）は、当然のことながら水田としては水懸かりが悪く、地元では「尾小戸（オコド）」と呼ばれていた。これに対し、後に大溝が検出されることとなった西側の下段では、かえって周辺よりも微妙に低くなっていて、年中水はけが悪く「取掛（トリカケ）」と呼ばれていた。

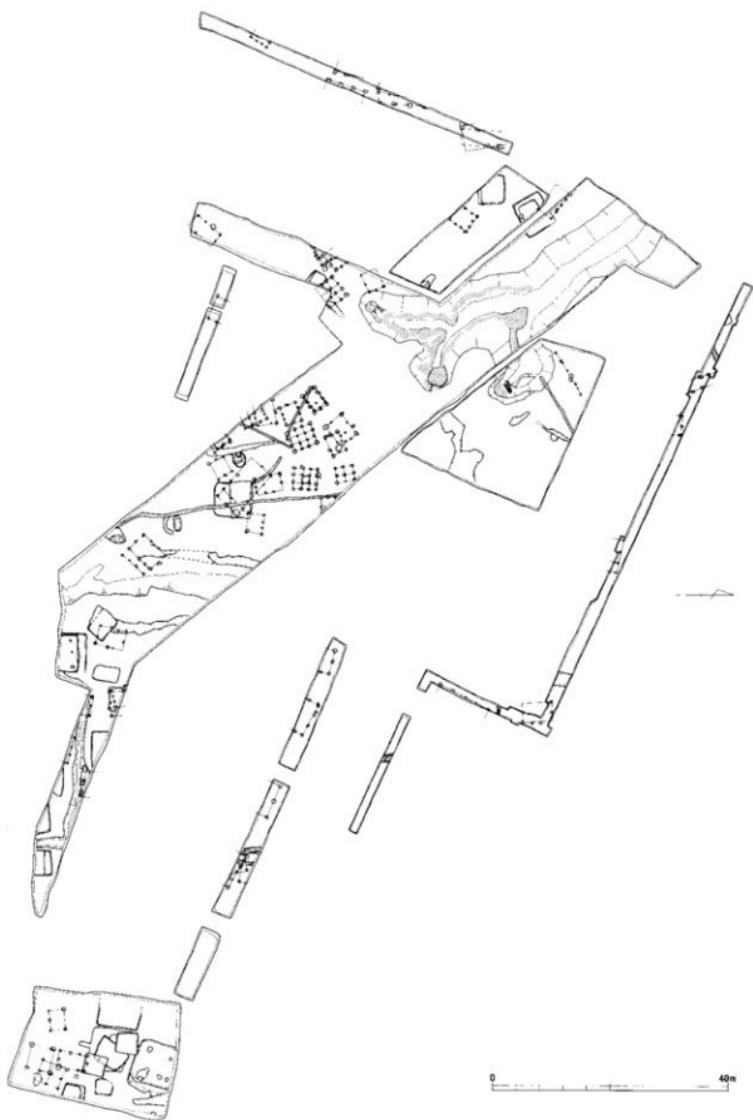
2. 全体の遺構配置

西側部分（下段）で古墳時代前期の貼石をもつ大溝を検出したほか、地点毎に細密はあるものの古墳時代から奈良時代の堅穴住居や古墳時代から中世の掘立柱建物を確認した。そのほか、奈良時代の井戸や中世の土坑、各時代の小さな溝などが存在した。

大溝は、後に詳述するが、枝分かれしている上流部では、それぞれに水源をもち、溝の法面に貼石を



第6図 A地区調査区位置図 (1 : 2,000)



第7図 A地区遺構配置図 (1:800)

有するのに対し、合流した後の下流部では素掘りのままとなっているもので、2ヶ所ある溝と溝の合流点ではそれぞれ大形の石で特異な形状を形成する。

堅穴住居や掘立柱建物は、調査区のはば全域に存在しているが、古墳時代前期の堅穴住居が疎らながら調査区の全域で認められるのに対し、古墳時代後期以降の堅穴住居は現状によるかぎりすべて上段に

存在している。ただし、これは多分に調査区の面積とも関係すると思われ、下段でも奈良時代の井戸が確認されていることから、調査区外には当然その時期の建物や住居は存在するものと思われる。掘立柱建物は、下段と、中段から一部下段にかけてのベルト状の部分で集中個所が存在している。

(2) 「大溝」の遺構と遺物

大溝は、下段のなかでも最も低い標高の部分に位置している。したがって、大溝は本来的には下段の説明のなかで触れられるべき遺構であろうが、大溝それ自体が提起する問題も大きく、ここでは大溝だけで独立した構成をとてその構造や出土遺物について述べることとする。

1. 大溝の構造

(1) 概要

大溝は、調査区内でその源流部を確認できた。以下、便宜上、溝が枝分かれしていく両側もしくは片面に貼石が施されている部分を上流部、溝がすべて合流し、素掘りのままの「大溝」となった部分を下流部として記述を進める。

〔上流部〕溝が曲線を描いて3本に枝分かれしている。このうち北側と中央の溝の源流部では、全面に石を貼た棒状の石組みが存在する。調査の途中においてもここからはかなりの湧水があり、こうした遺構は、溝の水源となる「井泉」であろうと思われる。北側の溝に存在するものを（井泉1）、中央部の溝に存在するものを（井泉2）とする。また、南側の溝には棒状に組んだ石組みこそ存在しないものの、源流部は若干掘り詰められており、当時はここからも水が湧き出していたものと思われる。これを、（井泉3）とする。

上流部の平面形は、極めて特異なもので、V字形に開いた2本の溝（井泉2と井泉3から湧き出たもの）が合流して1本の溝となり（第1合流点）、ここに立石をもつ突出部（第1突出部）が存在する。第1突出部の西向かいにも、これに対応するかたちで、大形の石が配置された突出部（第2突出部）が存在する。

第1合流点から下流は、溝幅を若干広げて大きくなっている。ただし、これがさらにもう1本の溝（井泉1から湧き出たもの）と合流する（第2合流点）。

第2合流点では、2本の丸木を下に敷いた上に大形の石を配した集石遺構がみられるが、これは現在はやや崩壊しているものの、造営当初は流路へ下りるための階段であった可能性が考えられる（階段状施設）。

〔下流部〕第2合流点から下流には、貼石は存在せず素掘りのままの溝である。溝幅は、10~15mに広くなり、直線的に約22m延びるが、そのさらに下流は調査区外のため不明である。

(2) 層序

溝埋土の層位は、上面からⅠ層～Ⅳ層に分かれ、Ⅳ層はさらに粘質の強さ、色調の濃淡によってⅣ-a層とⅣ-b層とに分層可能である（Ⅰ層－暗茶色土・Ⅱ層－黒灰色粘質土・Ⅲ層－暗灰褐色粘質土や砂質混じり・Ⅳ-a層－暗灰褐色粘質土・Ⅳ-b層－上より粘性の強い黒褐色粘質土・Ⅴ層－黄茶色木質混砂質土）。以上が基本層序であるが、さらにⅢ層とⅣ-a層、Ⅳ-a層とⅣ-b層のあいだでは部分的に別の層の貢入があったり、Ⅱ層が細分できたりする個所が存在する。そのなかでも、とくに大溝下流部の一部でⅣ-a層とⅣ-b層のあいだに灰褐色の貢入が認められた部分では、まとまった土器の出土があり（今回の報告でいうⅣ-b上）、部分的にはあったが比較的安定した層を形成していた。

最下層のⅤ層が砂質土であること、上述の下流部での部分的な灰褐色土の存在・Ⅲ層に若干の砂質が混じっているが、発掘部分の大溝の底面の比高差が最も上流と最下流とでは約90cm~1mもあるわりには全体的に粘性的な土が顯著で、おそらく水の流れとしては非常に緩やかであったものと思われる。

各層の形成時期を出土した土器からみてみると、Ⅰ・Ⅱ層では古墳時代後期から奈良時代の土器が混じった状況で出土し、貼石部の上面が完全に埋没するⅢ層からは須恵器をほとんど含まない古墳時代中期の土器が、貼石部が徐々に埋まっていくⅣ層からは布留式1～2式併行の古式土器が出土した。V層は、遺物をほとんど含まず砂質の強い植物等の有機物層であるが、わずかに出土した土器は弥生時代中後期の年代を示すものであった。

V層出土の遺物は極めて微量であるが、微量ながらもそのいずれもが弥生時代の所産とすると、大溝自体は弥生時代中後期に掘削された可能性も考えられる。しかし、もしそうだとすると、V層以降IV-b層の間の時期、理由は不明ながらいわゆる庄内式併行期が土器のうえでも層序のうえでも全く欠落していることとなり、土層観察で改修等の痕跡が認められない以上、その可能性は低いものといわざるを得ない。IV-b層から上の層と異なり、基本的にV層には上器類の人の為的な投棄はないものと思われ、現状では弥生土器も混入したものと思われる。したがって、土器のうえから大溝の掘削時期およびV層の形成時期を明確に特定することは難しい。

貼石は、V層が堆積した後に造営されたもので、大溝にとっては非常な画期であり、埋土の出土土器から古墳時代前期のものである。ただ、すべての貼石が同時に造営されたかというとそうでもなく、後述のようにIV層の堆積途中で造られている部分も存在する。

水分の多い土地を掘削して土を運び、溝を造ったのが造営当初の姿であったのであろう。ただ、V層出土の遺物が極端に少ないとや、V層のみが全く粘性のない木質の多い砂質土であることなどIV-b層以上の層とは差異が大きく、正確な形成時期やIV-b層以上の層との性格の相違なども含め、不明な点も多い。

なお土器の取り上げにあたっては、基本的に上述の上層分層に従って大溝の縦断上層面をもとに絶えずその正誤を断面で確認しながら順次取り上げを行った。しかし、調査の当初は未だ分層が確定しておらず、水平的に面を下げていって「黒灰粘」「暗灰砂」「黒黄粘」の3層分けて取り上げを行った。このう

ち「黒灰粘」はほぼ後のⅠ・Ⅱ層に対応するものの、「暗灰砂」はⅢ層を中心としたながらもその上下も含み、「黒黄粘」もⅣ層を中心としたながらもその上下を含んでおり、取り上げの精度としてはやや落ちたものになっている。

(3) 各説

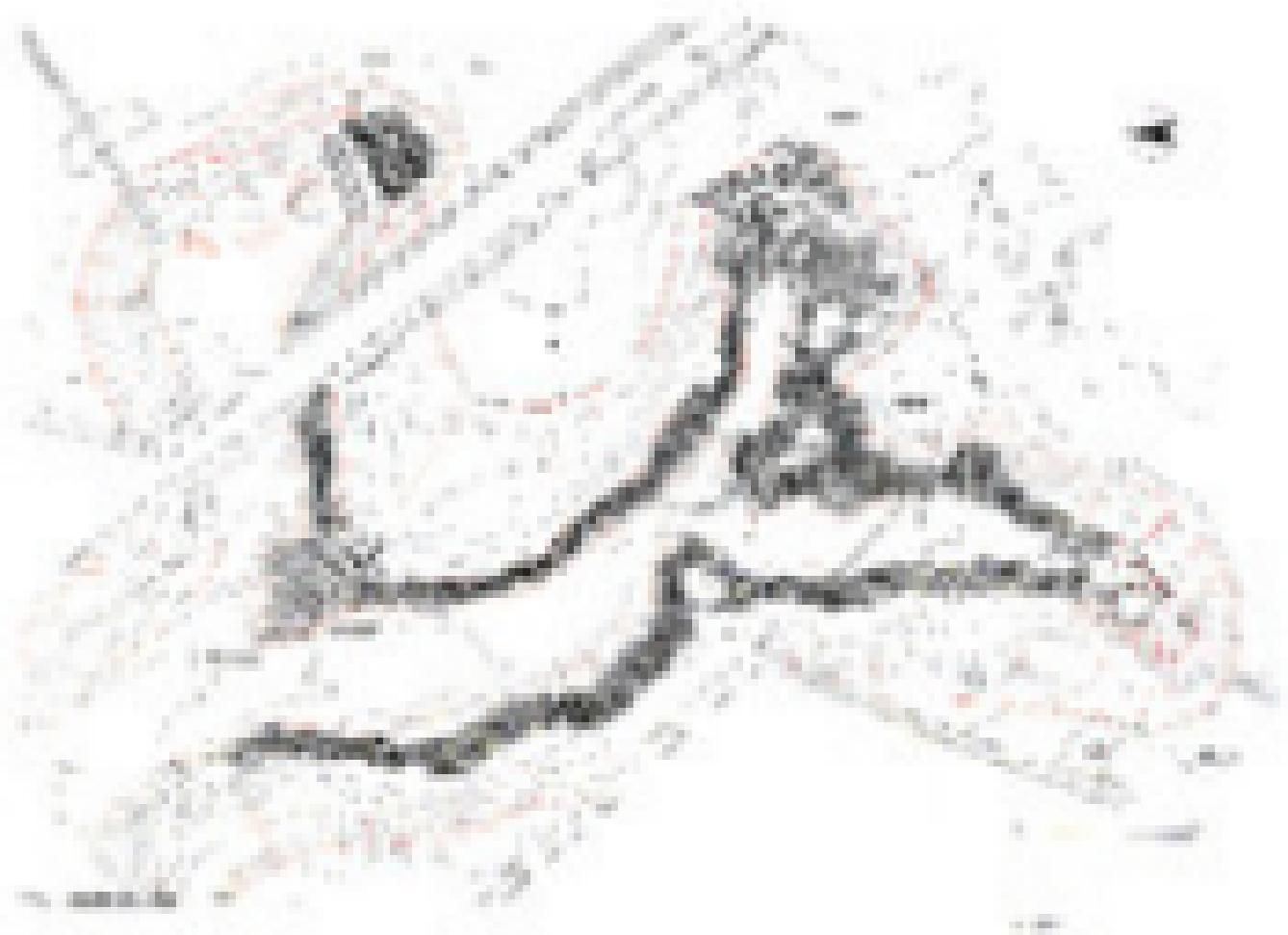
① 井泉1 北側の溝の最上流に位置する。溝の上面からやや下がった位置に、橋状の石組みが存在する。石組みは、 $2.7 \times 2.0\text{m}$ の半円形を呈し、底から60cmの高さまで拳丈から人頭大の石が全面に貼られていた。規模的には中央溝の最上流に存在する井泉2よりも小さいが、遺存状態は極めて良好であった。この石組みの前面には、石組みの大きさに合わせ、縦板による縫隙が設けられている。石組みの範囲は堰の部分までで、石組みは堰に密着しており、なおかつ石組みが貼られた面と堰が塗かれた面は同一面であることから、両者は同時に造られたものと判断される。

堰は、長さ2.75m・幅40cm・厚さ5cmの長方板(縦板a)と、長さ2.2m・幅40cm・厚さ10~12cmの長方板(縦板b)を1mの間隔をおいて横に立て、その間に土を充填して上面を別の2枚の長方板で覆つたものである。縦板aは、若干の石や杭によって支えられてはいるが、あくまでそれらは補助的なものであり、基本的には溝自体(特に両側の法面)に打ち込まれたものである。石組みと接する縦板は、板の下部を削り込んで尖らせてあり、より打ち込み易いものとなっていた。縦板bは下流部側(井泉1からみると下手側)にくるもので、その部分では溝幅も若干広がっており、縦板aのように法面へ縦板自体を打ち込めなくなっている。このため、縦板bを据えるにあたっては、まず掘削を掘ってそこに縦板bを置いて土を充填し、前面に頑丈な杭を打ち込んで縦板が前へ倒れてこないようにしていた。

石組みと堰は、溝の床面に組まれているのではなく、IV-b層を挟んだ上面に組まれている。したがって、溝の掘削当初には水は湧き出でていて井泉になつてはいても橋状石組みのない素掘りの井泉で、やや時期をおいてIV-b層の堆積後に石組みの井泉が造られたものであろう。

堰の機能は、橋状石組みから湧き出した水を一時溜







第10図 大溝・井泉1実測図 (1 : 40)

めるためであろうが、そこをオーバーフローさせることによって「淨水」としての意識をもたらしたことなどが考えられる。

堰の北側の溝底には、径5cm程の比較的細い杭を15本程度一列に打ち込んだ杭列が存在するが、堰の主軸や水の流れる方向と必ずしも対応せず、その性格は不明である。

橋状石組みの埋土からは、ヒュウタンの実が1個出土し、また上面には焼木が存在していたが、全体に土器等の出土は少量であった。

② 井泉2 中央の溝の最上流に位置する。井泉1同様、橋状石組みをもつが、井泉1の橋状石組みが溝上面からやや下がったところから施されるのに対して、井泉2では溝上面とはほぼ同レベルから石が貼られており、規模的にもこちらのほうが大きい。かなり崩れているものの、5×3mの半円形で、高さ1mの規模を有しており、拳大から人頭大の石を全面に貼る。床面の石は、比較的厚く貼られているようで、転落したものと原位置を保つものとの区別が難しいものも多い。堰や杭列などの施設は認められなかった。

中央溝と橋状石組みが接している部分では、中央溝の法面の貼石が、Ⅳ層を挟んで橋状石組みの下へもぐり込んでいるように観察される。これは、溝の貼石が施され、さらに若干の土砂が堆積した後に橋状石組みが施されたという施工時期の差によるものとも考えられ、そうした場合は井泉2の造営時期はほぼ井泉1と期を同じくしているものと思われる。ただ、橋状石組みは上部ではⅣ層を挟まず溝法面の貼石のベースと同じ土の上に貼られており、Ⅳ層堆積後、石組み上部が一部崩れたために見かけ上こうした状況になった可能性もある。この場合は、当然のことながら溝の貼石と橋状石組みの造営は同時期ということになる。現状では前者の可能性が高いものと思われるが、ちょうどこの部分はやや擾乱をうけていたことと、保存が決まったことによって断ち切による確認をしていないのでその関係は確定できず、結論は保留しておく。

石組み埋土からは床底の石に挟まった状態で案(492)が出土した他、井泉1と同様に上面には焼木が存在していたが、全体に土器等の出土は少ない。

③ 井泉3 南側の溝の最上流に位置する。井泉1や井泉2と異なり、橋状石組みはみられない。溝の法面を径3.5×2.5mにわたって2段に掘り込んでいて、溝上流部の溝底面よりも約20cm程深くなっている。

貼石はされていないが、溝貼石との境近くには、径60×40cmの大形の石が1個横に置かれていた。

溝の貼石は法面にだけ施されるのが上流部の通例であるが、井泉3から水が流れ出る部分のみは溝の床面にも貼石が施されており、法面に施された貼石と連続している。埋土に含まれていた土器のはか、特に目立った遺物はない。

④ 第1突出部 中央溝と南側溝が合流する第1合流点に、底辺4.5m×高さ3.5mの二等辺三角形状の突出部を造りだしたものである。各辺の頂点にあたる部分には高さ50cm程の細長い石が意図的に立てられたり置かれたりしている。

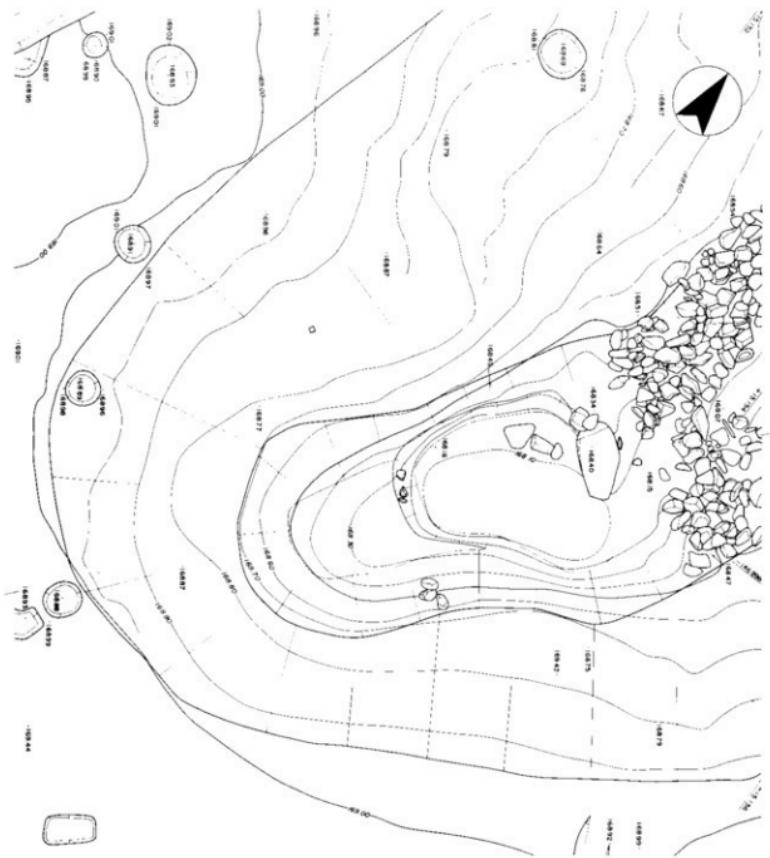
突出部上面は、1×2mの二等辺三角形の範囲で石が全く存在せず、テラス状になっている。この部分に細いトレンチを入れたところ、溝法面の貼石はさらにテラスの下へもぐり込んでいることが判明した。したがって、第1突出部は、溝貼石の上に付設されたものである。突出部上面の石の存在しない部分は、注意深く精査したが、特に遺物が集中するといった状況はない。

突出部構築にあたっては、まず溝法面に貼石を施した後、粘性の強い黒褐色粘質土を基礎としてさらにその上に青灰色砂質土を乗せ、三角形状に突出部を形成する。次に、先ず立石を立て、かかる後に大形石を置いたり、法面に貼石を施したりしている。ただし、この場合、法面の石は「貼る」というよりもむしろ「小口積み」されている状況である。

直径50cmをこえる大形の石は、突出部の基底部以外（基底部は大形石が多い）の全体で15個程度存在する。そのうち、明らかに意図的に立石としている石（大きい石を置いただけなのに結果として立って見える石や、他の石を支えとして立てかけてある石などではなく、ほかの石がなくとも単独で立っていることが可能な石）は5ないし6個である。角柱状の石が選択して立てられているようである。



第11図 大溝・井泉2実測図 (1 : 40)



169.2m

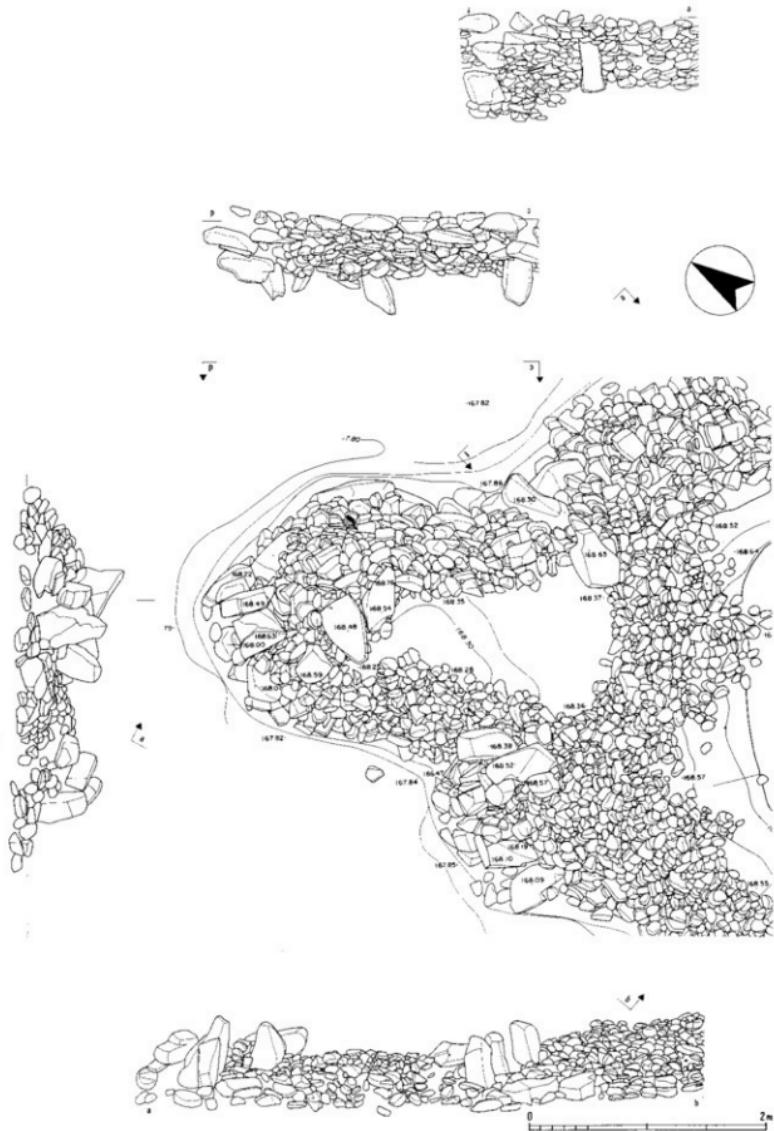


第12図 大溝・井泉3実測図 (1:40)

0 2m



第13図 大溝・第1合流点実測図 (1:40)



第14図 第1突出部実測図 (1 : 40) L = 168.0m



第15図 大溝第2突出部実測図(1:40)

⑤ 第2突出部 第1突出部の西向かいに位置する法面に貼石をもつ三角形状の突出部で、第1突出部とともに第1合流点の流路幅を狭める役割を果たしている。第1突出部のように、溝貼石を施した後に突出部が付設されたものではなく、突出部法面の貼石自体が本来の溝貼石の一部である。

突出部上面は 1.5×1.5 mの範囲で石が存在しないテラス状のものとなっているが、全体的に大溝に向かって低く傾斜している。

突出部の突端の部分には、直径40~50cm以上の大形石が集中しており、現在は細長い石が横に置かれた状況を示しているが、現状でも少なくとも1個の石は立っており、造営当初はもう少しの石が立っていた可能性も残る。

⑥ 階段状施設 第2合流点の南側に存在する、大形石の集中によって構成された突出部である。

厚さ20cm程度の丸木を60cm間隔で2本並べて胴木とし、その上に40~80cmの比較的長細い大形石を 4×2.5 mの範囲にわたって敷き詰めている。現在はかなり崩れているが、長辺に対して中央部の石を主に横方向、両脇の石を主に縦方向に配置している状況が窺われ、流路へ下りるための階段である可能性が考えられる。両脇の石のなかには、部分的に立石

状を呈する石も認められる。

溝貼石は、この下にもぐり込んでおり、この施設は溝貼石に後出する二次的なものである。また、胴木は、IV層中に存在しており、IV層が形成されている途中のある段階で、この施設が造られたことがわかる。IV層形成途中は、当然のことながら大溝が機能しており、直接大形石を溝へ置くには湿地により地盤が安定していなかったため、胴木を必要としたものと思われる。

胴木は、取り上げずそのまま現地で埋め戻したため、樹種等は不明であるが、先端部は、人工的に切断されたものであった。

⑦ 溝の貼石 上流部の大部分は溝法面に貼石を持つが、その貼り方や溝の傾斜角、石材の大きさなどはそれぞれの部分で差異が存在する。以下、部分毎に説明を加える。

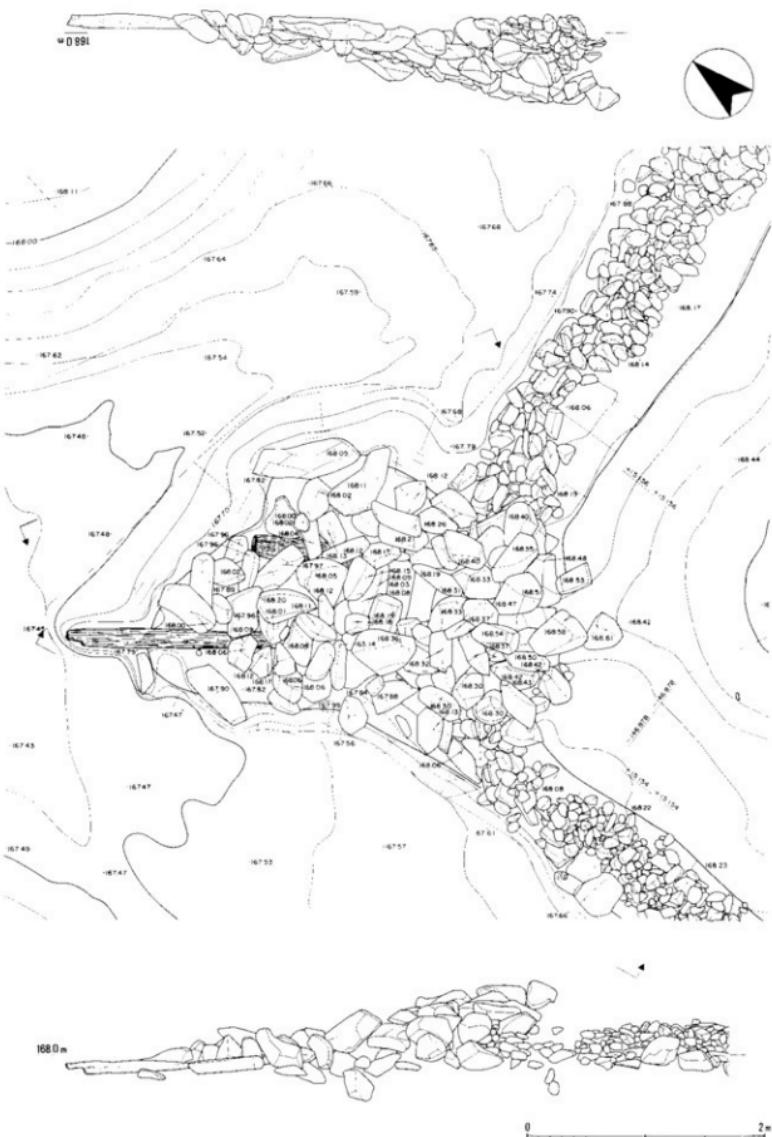
a. 井泉2から第1合流点 左岸は、かなり搅乱をうけており、いまひとつ明確でない部分もあるが、全長約7mあり、溝幅は、底1m・貼石部上面3~3.5m・溝全体の上面(以下、溝上面と記述)6mである。

左岸は貼石の貼付面も広く、傾斜も緩やかであるのに対し、右岸は傾斜も大きく、石材の大きさも右岸よりは全体にやや小さい。

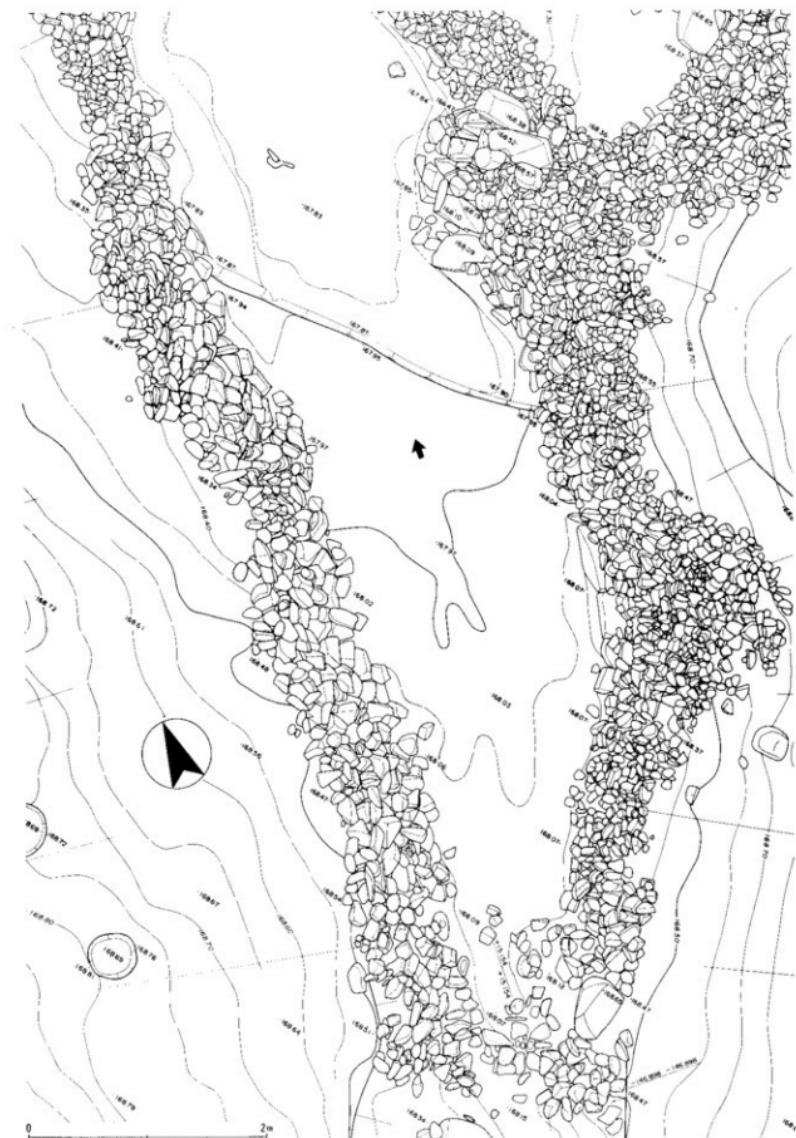
b. 井泉3から第1合流点 全長約11.5mあり、溝幅は、底1~2m・貼石部上面2.2~4.4m・溝上面7~8mである。溝自体の平面形としては、もっと曲線的になっている部分である。

右岸の貼石部には、貼石が 2×1 mの範囲で半円状に膨らむ部分があり、これに伴って溝上面の肩部も屈曲する。左岸の貼石は、大溝全体の貼石のなかでも、石の角がとれていないので「山石」状の石材が最も顕著にみられる。また、特に右岸で顕著であるが、貼石の基底部は比較的大形の石を横位に面を揃えて並べている。

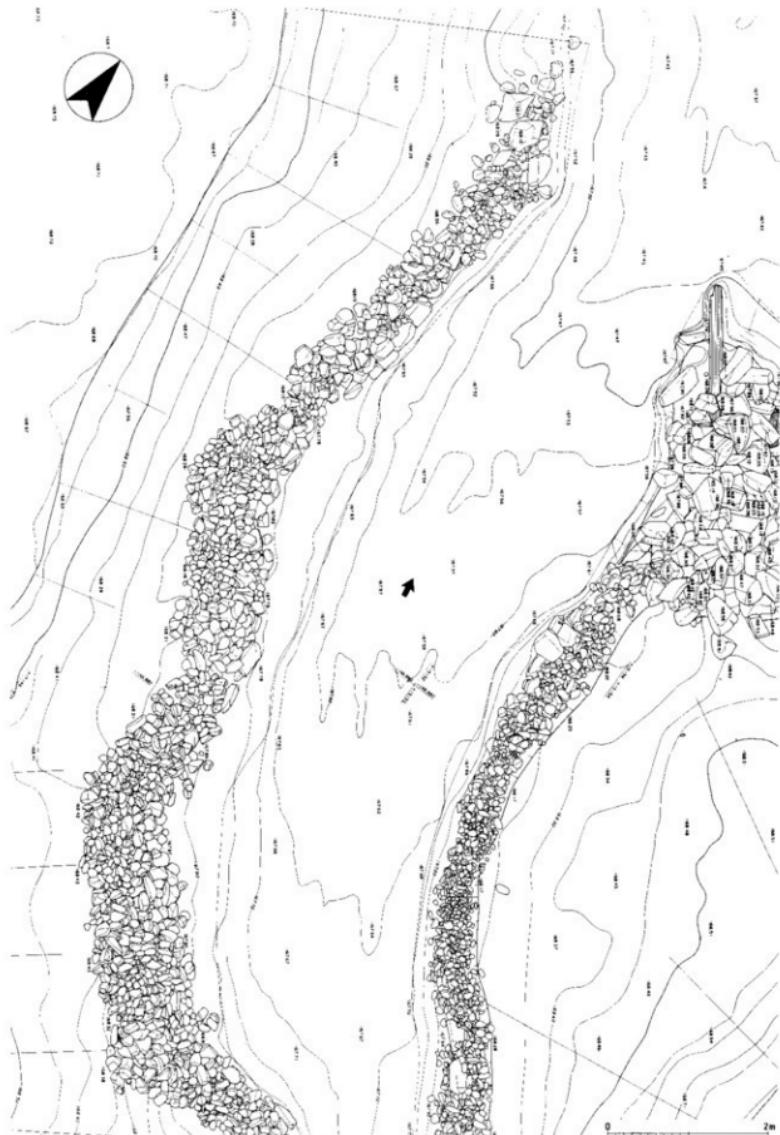
この部分がやや埋まった段階、つまり貼石が第一突出部の立石等を除いては埋まった頃、井泉3よりやや下った部分から第一突出部にかけての右岸部法面に沿うかたちで、かなり大きい木の幹が植たわっていた(第22図参照)。これが意図的なものである可能性は薄いが、もし意図的に置かれたものとした



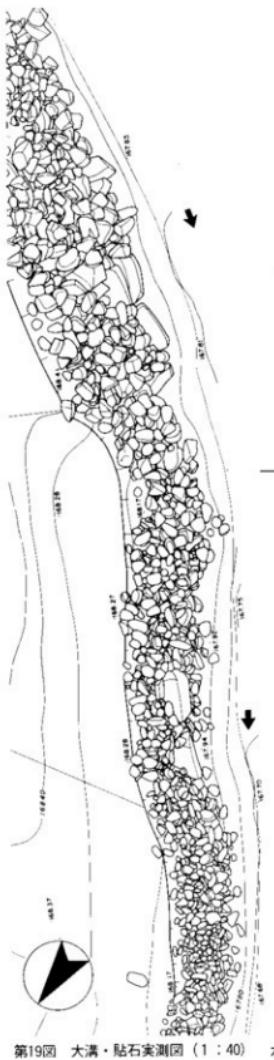
第16図 大溝・階段状施設実測図 (1 : 40)



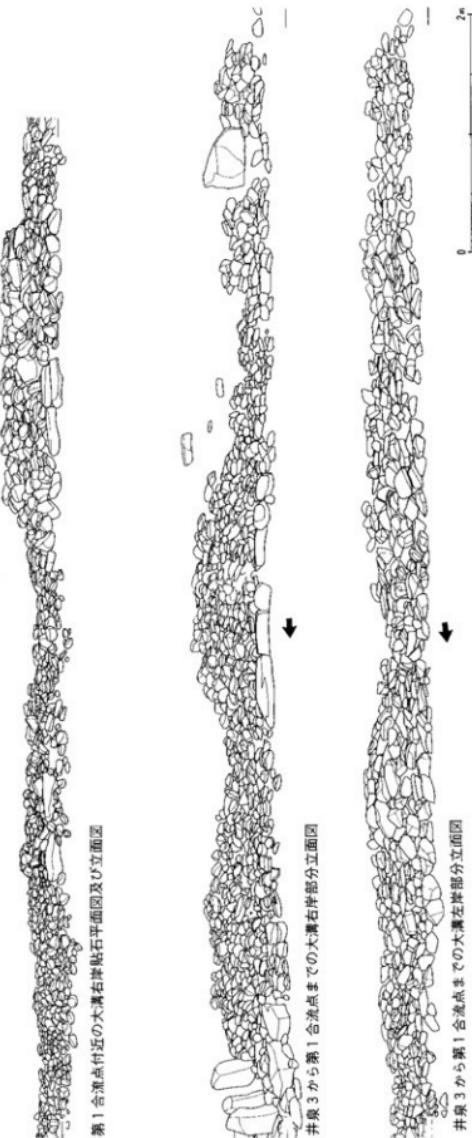
第17図 大溝・井泉3から第1合流点の貼石実測図 (1:40)



第18図 大溝・第1合流点から第2合流点の砾石実測図 (1:60)



第19図 大溝・貼石実測図 (1:40) 水糸高はすべて169.0m



第1合流点付近の大溝右岸貼石平面図及び立面図

井泉3から第1合流点までの大溝右岸部分立面図

場合、埋まりつつあった法面貼石に代わる役割が付与されていた可能性も考えられる。

c. 第1合流点から第2合流点 全長約15mあり、溝幅は、底2.5～3m・貼石部底面4.3～5.5m・溝上面10～11m（推定）であるが、第2突出部が延びている部分では、底1m・貼石部上面3mと狭くなっている。

右岸は、基底部こそ部分的に径40～50cmの大形石が置かれているものの、基本的に径10cm以下の角がとれたいわゆる「川原石」状の石材を大溝貼石部全体のなかでも最も多く使用している。貼石の貼付面は狭く、貼付されている法面の傾斜は約50°～60°と最も急角度である。これに対し、左岸では、部分的に基底部に大形石が配置されているのは右岸と同様であるが、全体的に使用されている石材が径20～40cm程度と大きい。貼石の貼付面は約1mと広く、法面の傾斜は30°と緩やかである。

右岸の、第1突出部および第2突出部の向かいになる部分では、2ヶ所で基底部に長径50cm程の石を横位に2個ずつ並べ、その間の約2.6mの範囲を微妙に溝の内側へ突出させており、第1突出部と第2突出部に対応したものとなっている。

左岸のはば中央部では、約4mの範囲で「造り出し」状の張らみがみられる。

左岸貼石の終結部分（素掘りの大溝となる部分との接点）では、大形石が3個あって、貼石の終結をより明瞭なものとしている。

d. 井泉1から第2合流点 L字状に、全長約15.5mあり、溝の屈曲点までは貼石が施されず、屈曲後も溝の左岸側の一部にのみ貼石が施されているだけである。したがって、貼石上面での溝幅は測定できないが、溝幅は、底2～4m・溝上面5～10mである。

東西方向に直線的に延び、「山石」状の石材を比較的多く使用している。

⑧ 広場 北側溝と中央溝にとり囲まれた部分は、約7×7mの範囲で柱穴等が全く認められない平坦地となっている。土層観察の結果、30～40cm程度の盛土が認められ、その上に大溝の埋土である第Ⅲ層が堆積している。北側溝では、右岸に貼石はないが左岸（つまり広場側）には存在しており、したがっ

て、この広場は、両壁に井泉をもち、貼石に取り囲まれた「内」の空間として認識されていたものと思われる。当然、階段状施設は、この「広場」にともなう施設と考えるのが妥当であろう。

広場上面は、第一突出部上面と同様、特に遺物が配置されていたという状況は認められなかった。

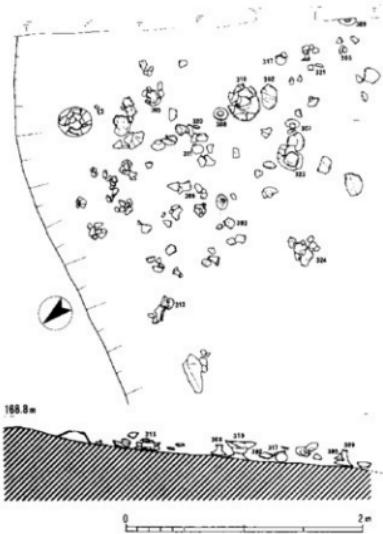
⑨ 方形壇 中央溝左岸と南側溝右岸それに第1突出部に開まれた部分は、約4m（短辺2m）×3.5mの範囲が台形状に削り出されており、貼石もこれに対応して張らんでいる。ここから貼石を経て第1突出部のテラスに至る部分の連続はスムーズであり、おそらく第1突出部とは一連のものであろう。

⑩ 第2合流点から下流 調査区外へ延びるが、現在長22m・幅約9～11mで直線的である。貼石は、全く存在しない。

2. 大溝の遺物出土状況

大溝からは、多量の土器・木製造物および植物遺体が出土している。

土器類は、量的には大溝全体からほぼ均一に出土しているが、1ヶ所のみ部分的にやや集中する箇所



第20図 大溝S Z I 出土状況図 (1:40)

が存在しており（S Z 1）、まずこの部分をみてみよう。

S Z 1 ここは下流部右岸の肩部から法面にかけての部分で、層位としては 3 層に含まれる。調査区外への未調査部分も含んでいるが、ほぼ 3×2.5 m 以上の範囲で、高杯や小形丸底甕を中心として、轉式系土器 1 個を含む比較的完形に近い土器がまとめて出土した。流れてきたというより一括投棄されたような状態で、一度にここへ投げ込まれたものと考えられる。ただ、正立状態で出土したものもあり、本来的には斜面に並べられていた可能性も考えられる。また、石製の管玉（349）は、S Z 1 のものとしての取り上げは行っていないが、出土位置としてはほぼ同じ位置である。

S Z 1 以外では、特に目立った土器の出土状況を示す部分はなく、各井泉についても特定の器種の土器がかたまって出土するという状態はなかった。

木製品の出土状況

本製造物の出土状況をみてみると、建築部材等の比較的大型の部材は、流れの方向に沿わず流れに直交するかたちで検出されるものが比較的目立った（第22図参照）。このなかで、明らかに意図的に直交方向を意識して置かれていたものは井泉 1 の前面に据えられた棚板だけであったが、こうした出土状況は、溝の出土状態としてはやや特異なものと思われる。これに対して先にも記した井泉 3 から第1合流点へかけての右岸部分に沿う木の幹は、流れに沿つたものであるが、もしこれが意図的に配置されたものであれば、護岸のものとして利用されていた可能性もある。しかし、これについてはどちらかというと凹みを利用して不要な材を廃棄しただけという感じが強い。

個々の製品をみてみると、一見大溝の各部からまんべんなく出土しているように見えるが、本製品の器種別の出土分布を層位も勘案すると、大溝の各部からはほぼ均一に出土している器種と、特定位置に集中していく器種とが認められる（第21図参照）。すなわち、建築部材は、大溝の上流部から下流部ま

ではほまんべんなく出土しているのに対し、刀形や剣形といった武器形木製品や武器・武具類の出土は大溝の下流部分と階段状施設を中心とした部分の 2 カ所で集中点がみられる。

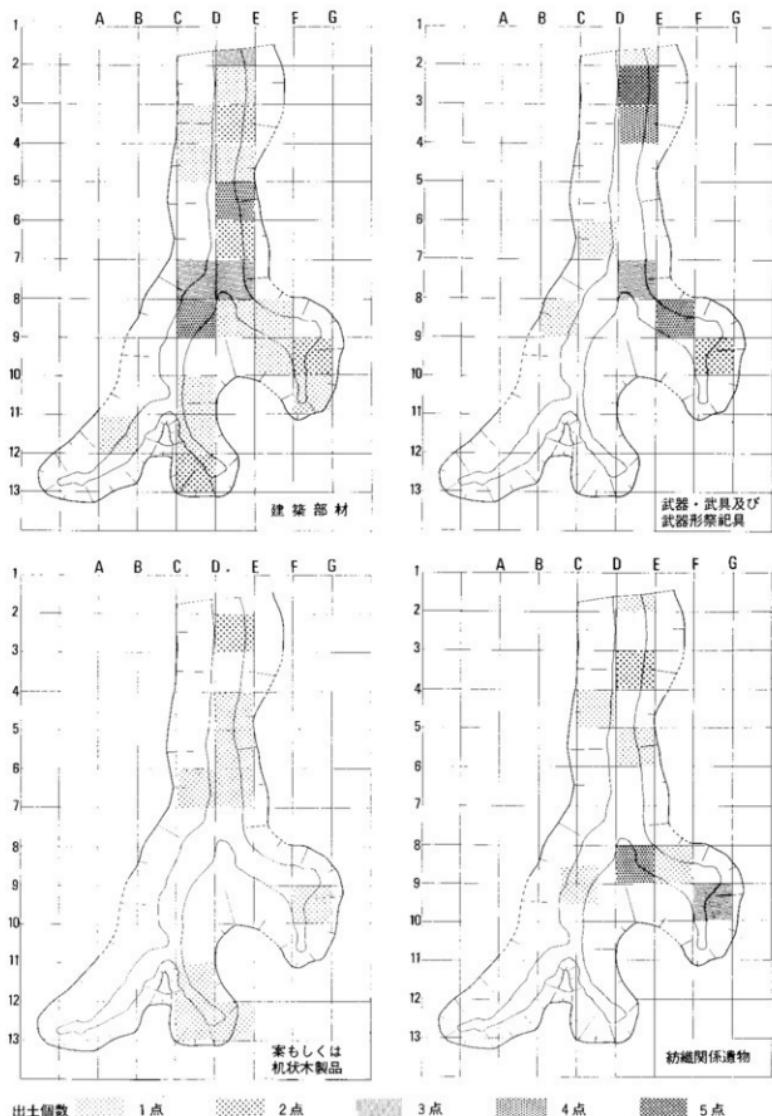
なかでも、大溝下流部分のグリッド番号 D-1 ~ D-3 の範囲では、IV-b層から刀形 3 (450.452.454) ・剣形 1 (456) が、IV-a層から剣形 1 (461) が、III 層から弓 1 (448) ・剣形 3 (458.459.462) ・刀鞘 1 (468) が出土している。勿論水辺のことでもあり二次的な移動は当然考慮すべきではあろうが、比較的小さな遺物が層位を越えて狭い範囲で集中していることは注目に値しよう。ちなみに、先にみた S Z 1 はこの隣である。

また、井泉 1 から階段状施設の周囲にかけても武器形木製品が比較的目立って出土しており、特に D-7 ~ E-8 の範囲では、いずれも目届から、飾弓 1 (449) ・刀形 1 (451) ・剣形 2 (457.460) ・小刀形 1 (463) ・剣鞘 (466 ~ 467) で 1 個の剣鞘を構成しており、これで 1 セットが出土している。この部分をさらに上下流へ 1 グリッドずつ広げてみてみると、さらに弓 (447) と刀形 (453) それに鎌形 (465) も出土していて、武器関係遺物のこの範囲での集中的出土の一端が窺える。

武器関係遺物以外で比較的多くの個体が出土した遺物をみてみると、家具（案）は、案 492 が井泉 2 の底面の石組みの部分から出土していることは注目されるが、とくに集中する出土部位もなく、比較的広範囲から出土しており、建築部材とよく似た状況を示す。これに対し、紡織関係の遺物は、武器関係遺物と比較的似通った出土傾向を示しており、大溝下流部と、井泉 1 から階段状施設のところでやまとまった出土がみられる。

このように、本製造物の出土位置をみてみると、すべての部材が雖然と廃棄されているのではなく、特定の器種（たとえば武器関係や紡織関係遺物）については、何らかの単位や溝への投人地点などに意図的なものがあると考えてもあながち否定されるべきものでもなかろう。

（穂積裕昌）



第21図 木製遺物器種別分布図 (1マス 4m×4m)



3. 大溝出土の遺物

(1) 土器類および石製品類

大溝出土の土器は、層位的にはⅠ～Ⅳ層に大別される。このうちⅣ層は、その土質からⅣa・Ⅳb層に区分され、さらにこの間に部分的に間層(Ⅳb層上)を含む。

このうち古式土師器の出土状況を見るならば、Ⅳa層からⅢ層にかけては比較的純粋に存在するものの、V層には当該土器を含まず、また、I・II層では古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器・須恵器を含む状況である。したがって、ここではⅣb層からⅢ層にかけての古式土師器を中心に記述し、付属的にV層およびI・II層の遺物について触ることとする。

なお、古式土師器の分類に関しては、大溝出土の土器と遺構出土の土器とを含め、器形を主とした分類案(第23～25図)に沿って記述していく。個々の遺物の詳細については、遺物観察表を参照されたい。なお、分類表には韓式系土器やミニチュア土器などの特殊なものは含んでいない。

1. V層出土の遺物(1～7)

前述のように、この層には古式土師器は全く含まれていない。出土したのは弥生時代の壺(1～3・6)、甕(4・5)および磨製石斧(7)である。1～5は弥生時代中期後葉、6は弥生時代後期に所属するものと考えられる。

2. IVb層出土の遺物(8～50)

IVb層は、大溝における古式土師器を含む層のなかで、最下層に相当するものである。この層からは壺A a(49)、壺B a(17・20)、壺B b(18～19)、壺C a(45・47・50)、小型丸底壺A(8～13)、小型丸底壺B(14・15)、小型丸底壺D(16)、小形鉢C(21)、鉢A(46)、小形鉢D(22)、器台B b(23)、高杯A(24～38)、壺A a(40)、壺B a(41～44)、甕C(39)がある。また、壺の一種かと思われる脚台を有するもの(48)もある。

壺A aは、口縁端部が肥厚するものである。体部外面のハケメや内面のヘラケズリから、布留系甕との関連を窺うことができる。

壺C aは二重口縁形態のものである。口縁部内面がやや肥厚するもの(45・50)と、その状況が觀察

されずヘラミガキを多用した丁寧なつくりのもの(47)がある。50の体部下半の成形手法からは、伊勢地域との関連を窺うことができる。

小型丸底壺Aは口縁部が若干内湾しながら開くものをを中心とし、体部はやや潰れた形態を呈しているものの丸みがある。11は二重口縁状の形態を呈するものであるが、全体の形状から小型丸底壺Aの範疇に含めて過度ないであろう。小型丸底壺全般についてみてみると、ヘラミガキや丁寧なヘラケズリを多用し、比較的丁寧なつくりのものが多いといえよう。

高杯は、杯部について見ると、杯下部内面が若干隆起するもの(25・28)を含むが、全体としては口縁部が外反して開くものである。この層で主体となっている形態(26～28・30・33)を見ると、杯下部と口縁部との差があまりなくことがわかる。脚部は、脚柱から明瞭な屈曲を持って開くものをを中心とし、脚柱外側にはハケ状工具によるナデが明確に確認できるものが多い(28・33・35・36)。

甕Aは、形態的には畿内の庄内系甕との関連が窺えるものである。ただし、内面のヘラケズリは頸部にまで及んでおらず、この点では布留系甕と関連していると思われる。

甕Bは典型的な布留系甕の系統のものである。体部外面には縱方向のハケメの後、横方向にハケメを施すもの(41・43・44)がある。41・42は体部外面上半肩部に棒状工具による突穴を施すものである。

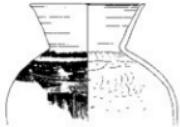
甕Cは、S字状口縁を呈するものである。体部外面上部には横方向のハケメではなく、口縁端部はやや尖りながら短く収めるものである。

3. IVb層上出土の遺物(51～59)

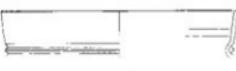
IVb層上からは、壺A b(60・61)、壺B c(56)、壺C a(63)、小型丸底甕A(51・52)、小型丸底壺C(53・54)、小型丸底壺D(55)、高杯A(66～69)、高杯D(65)、甕C(57)、甕D(58・59・62)が出土している。また、分類表には含めていないが、鉢かなにかの底部(64)も出土している。

甕A bのうち、60は体部内面にヘラケズリが認められる。

甕B cでは、体部に焼成前の穿孔をもつ甕形態の土器が見られる。層位的にはこの資料が甕形態のな

器種	器形	器形細分	形態	特徴
A	a			口縁部が長く、直線的に開く。体部内、外面の調整および口縁部の形状に、型B aとの共通性が認められるものもある。
	b			口縁部がやや短く、直線的に開く。
壺	a			口縁部は長く、あまり広がらずに直線的に開く。型A aとの共通性が認められるものもある。
	b			口縁部は短かい。上方にあまり開かない。
	c			口縁部が内弯気味に開く。越形態のものもある。
C	a			大形で平底の形態を中心とする。口縁部は、上段部の長さが短いものと長いものを含む。
	b			小形。丸底の形態を呈する。
	c			外面に粘土を付加することによって口縁部外面に段をなす。

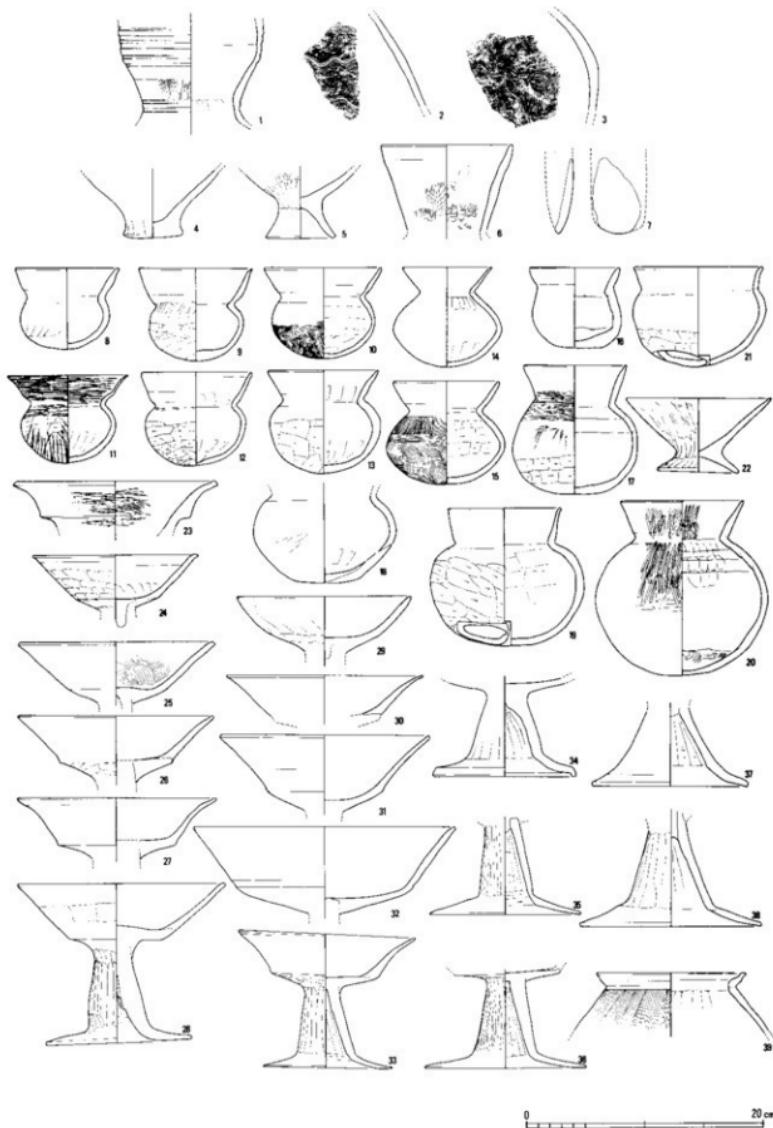
第23図 古式土師器の形式分類図（1）

器種	器形	器形細分	形態	特徴
小 型 器 台	A			受部は大きく開き、口縁部にはヨコナデによる面を有する。受部内・外面、脚部外側にヘラミガキを施すのが通常である。
	B			口縁部と脚台部の径がほぼ等しく、個面形が鼓形を呈する。
壺	A	a		広義の「庄内系壺」の系統。 口縁部が上方に突出する。 体部内面にヘラケズリを施すものもある。
		b		口縁部が上方に突出しない。 体部内面調整にヘラケズリが認められない。
		c		長頸形を呈する。 外面調整は粗い。
	B	a		口縁部が若干内弯して開き、口縁端部が内側に肥厚する、体部内面にヘラケズリを施す。
		b		口縁部が内側に肥厚する。口縁部は外反するものや内弯するものなど統一されていない。 aの崩れた形態である。
	C			脚台を持ち、口縁部は短く屈曲する。 体部外側から脚台部にかけて粗いハケメを施すのを通常とする。 いわゆる「S字状口縁台付壺」である。
	D			脚部が丸く、上方に直線的に開く口縁部をもつ。 体部内面にヘラケズリを施す。 いわゆる「山陰系壺」である。
鉢	A			直線的に開く口縁部を持つ。壺Dとの形態的類似性がある。 当遺跡で明確に「鉢」といえるのは、この形態のみである。

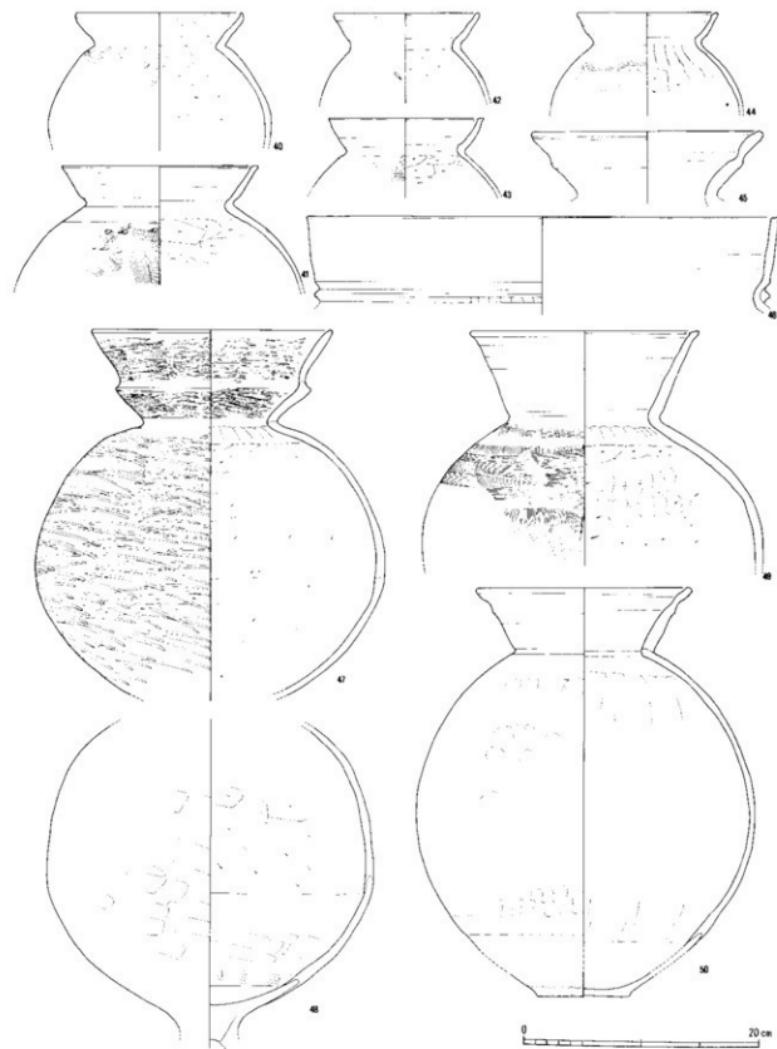
第24図 古式土師器の形式分類図（2）

器種	器形	形態	特徴
高 杯	A		平坦な杯下部から直線的に開く口縁部を有する。 明瞭な脚柱から大きく聞く脚据を持つ。 杯下部内面が盛り上がるるものも認められる。
	B		Aの形態とはほぼ同じであるが、杯部と杯下部の外周境が突唇状に張り出す形態を呈する。
	C		純粋な杯下部から外反して開く口縁部を有する。
	D		純粋な杯部を有する。
小型丸底壺	A		丸底の体部から直線的に開く口縁部を持つ。器壁は薄く、体部内・外面にはヘラケズリの後、ヘラミガキを施すものも認められる。
	B		頭部が細く、直線的に開く口縁部を持つ。
	C		Aの形態と類似するが、器壁は厚く、ヘラミガキも施されない。やや平底のものも認められる。
	D		口縁部が短く、直口するものや開くものがある。粗製で、平底の形態となるものが多いが、分類の都合上、小型丸底壺とする。
小形鉢	A		二段に屈曲する口縁部を有し、内・外面にヘラミガキを施す。
	B		口縁部は若干外反をせるものと、そのまま収めるものがある。明瞭な頭部を持たない。
	C		小型丸底壺に類似するが、口縁部が短く、頭部もあまり頭れないものである。
	D		脚台を有する。

第25図 古式土師器の形式分類図（3）



第26図 大溝出土土器等実測図 (1 : 4) V層1~7 IV-b層8~39



第27図 大溝出土遺物実測図 (1 : 4) IV-b 層

かでの絞りのものとなる。

小型丸底壺Aは、形態的な特徴はIVb層出土のものとほぼ共通するが、体部の形態がやや潰れたものとなっている。また外面のヘラケズリは下半部を中心とした狭い範囲である。ただしこの傾向は小型丸底壺C・Dとは共通しない。54は今回の分類では小型丸底壺Cに含めたが、形態的には56と共通している。

高杯Aも、66・67については形態的な特徴はほぼIVb層出土のものと共通する。しかし、68では口縁部がさらに広く開くようになっている。脚部についても明瞭な屈曲をもって開く点では4b層と共通するが、69のようにその屈曲の度合いが緩いものもある。ただし、これはあくまでも相対的な差であり、基本的にはIVb層とIVb層上との顕著な差は見い出せない。

4. IVa層出土の遺物 (70~151)

IVa層からは、IVb層・IVb層上と比べて多くの土器が出土している。この層には、壺A b (136・137)、壺B a (129~131)、壺B b (132・133・135)、壺B c (79)、壺C a (138~140)、壺C c (134)、小型丸底壺A (70~73・77)、小型丸底壺B (74~80)、小型丸底壺C (75・76・78・83~85・87~91・93・95・96)、小型丸底壺D (81・82・86・92・94)、小形鉢B (97~99)、鉢A (149)、高杯A (100~107・109~125)、高杯D (108・126~127)、甕A a (141・146)、甕B a (147・148・150・151)、甕C (142~144)、甕D (145)がある。分類図には示していないが、甕と考えられるものの(128)もある。

壺では、口縁部外面にヘラミガキを施すもの(129)、体部外面にヘラミガキを施すもの(131)があり、ともに壺B aである。

小型丸底壺Aは、IVb層・IVb層上で見られたものと比較して口縁部が直線的に大きく開き、体部が小さいもののが存在する(70・71)。体部外面に施されるヘラケズリは、この2点についてはIVb層上のものと同様狭い範囲であるが、形態的には小型丸底壺Cとの類似性が認められる77(小型丸底壺Aとした)ではその範囲が広い状況も観察される。小型丸底壺Cには、やや大きめのもの(87・88)や平底の

もの(95・96)もある。

高杯Aには、内外面にヘラミガキを施すもの(100~102)や杯部外面の棱が消失したもの(109・113)を含むものの、主体となるのは口縁部が若干外反しながら大きく開くもの(105・112・114・115・117~124)である。この一群の脚部は中空のもので内面にヘラケズリを施すものが主体であるが、外見がエンタシス状に膨らむもの(115)も認められる。また脚柱から脚根への屈曲部は122に見られるようにやや緩やかである。口縁部の形態には上方に若干つまみ上げるものも認められる(105・112・114・115・118・120)。このなかで口縁部が若干外反しながら大きく開く点と口縁端部が若干つまみ上げられる点、さらに脚柱がやや外開きで顯著な屈曲を見せずに脚部へと至る点などは、IVb層上との異なりとして指摘できる。なお、125も便宜上高杯Aに含めたが、厳密には別細分形式として抽出すべきものであろう。

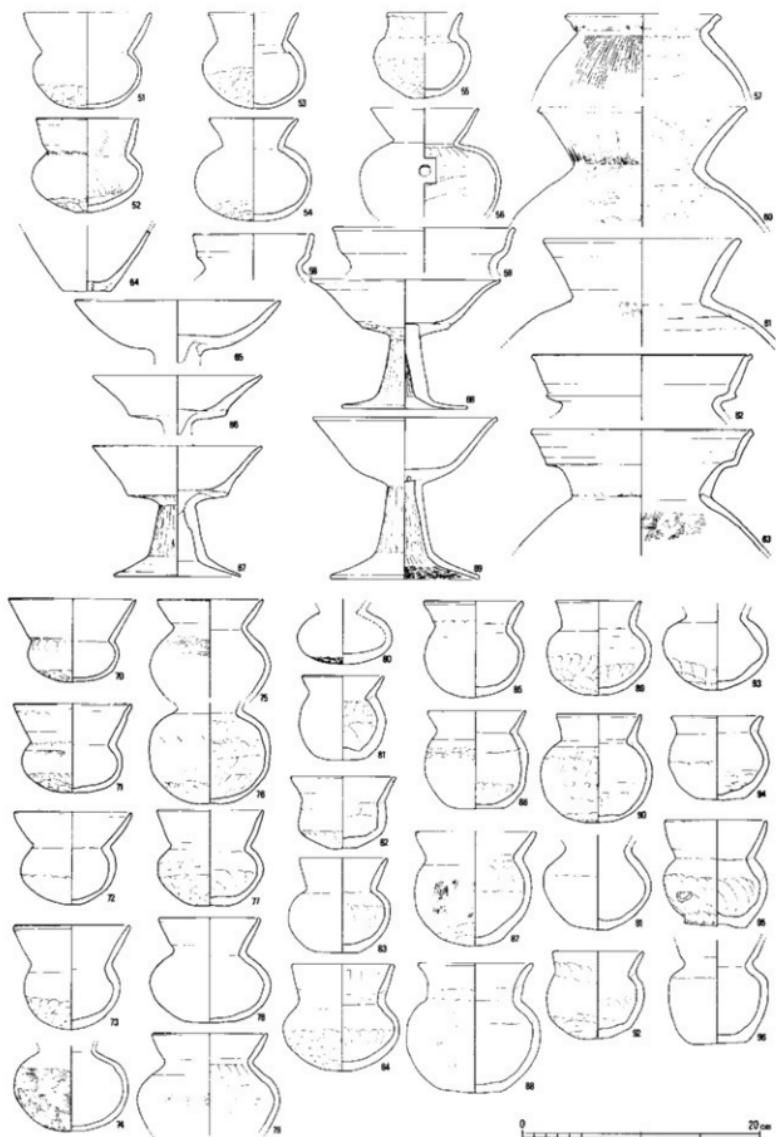
小形鉢Bは、厳密には半球形を呈するもの(97・98)と、皿状のもの(99)とに形態区分すべきものである。後者はあるいは小形鉢Aの範疇で考えられるかも知れない。

鉢Aは、形態的には山陰地方によく認められるものである。

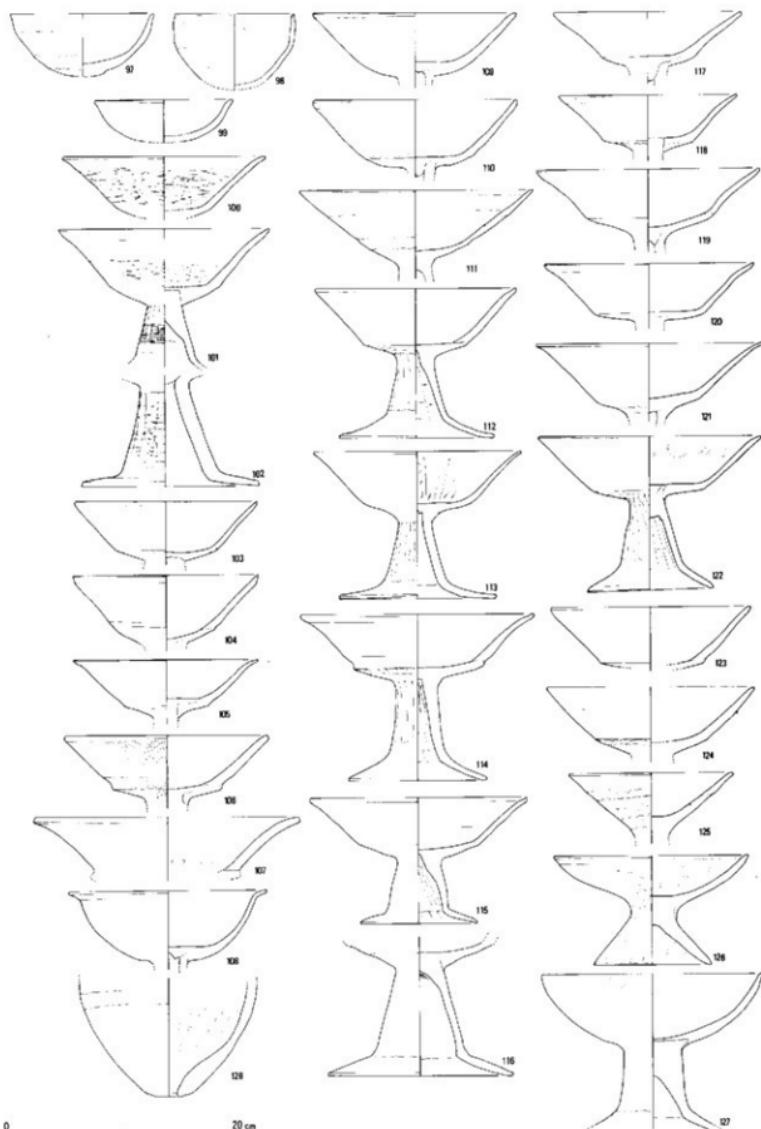
甕Bには、肩部に棒状工具による刺穴を施すもの(147)がある。甕Cは口縁端部外面に面を持たずにくく收め、頸部内面にハケメの見られるもの(143)と、口縁端部外面に面を有するもの(142・144)とがある。

5. IV層出土の遺物 (152~301)

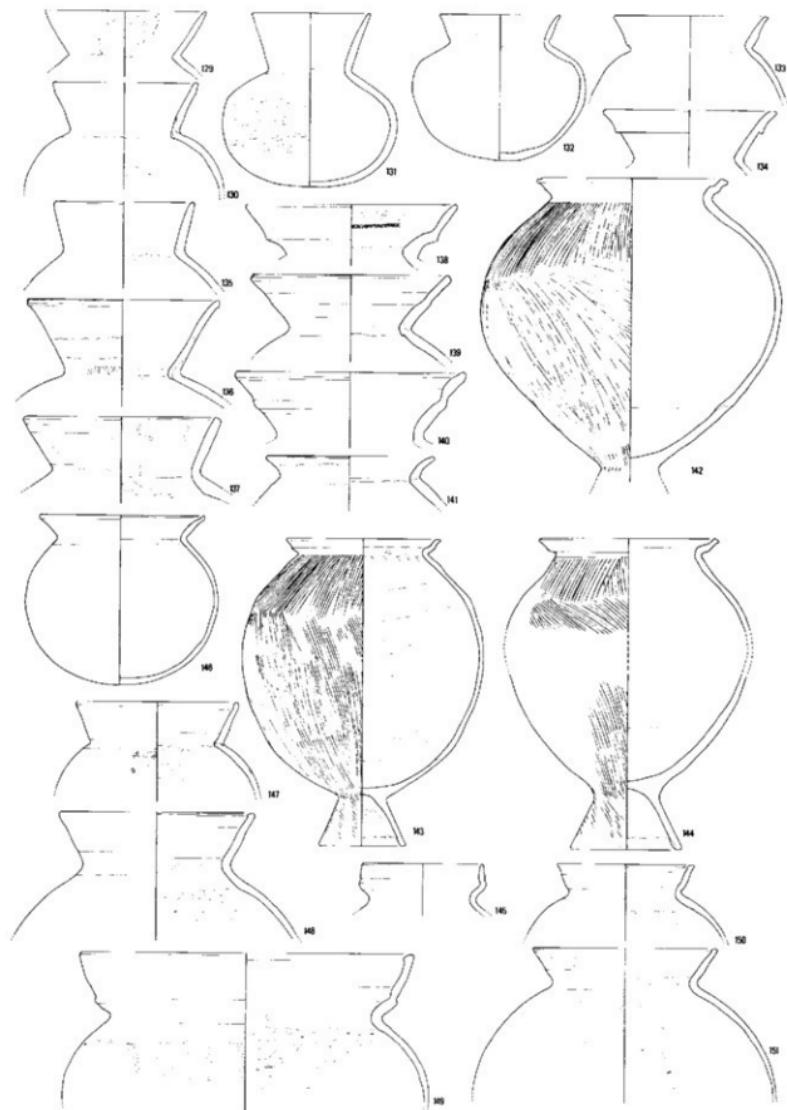
IV層は大溝の各層中で最も土器が多い層である。この層には、壺A a (263)、壺A b (208・209・258・265・266)、壺B a (201)、壺B b (204・206)、壺B c (185・202・203)、壺C a (259~262・267)、小型丸底壺A (161~163・165・166)、小型丸底壺B (175・199・200)、小型丸底壺C (164・167~174・176~186・188・189・191・192・194~198)、小型丸底壺D (187・190)、小形鉢B (155・156)、小形器台(157)、高杯A (210~230・233~241・243・244・246~257)、高杯D (231・232)、甕A a (280・282~284)、甕B a (276~279



第28図 大溝出土土器実測図 (1 : 4) IV-b層上(灰色砂) 51~69 IV-a層70~96



第29図 大溝出土器実測図 (1 : 4) IV-a層



第30図 大溝出土土器実測図 (1 : 4) IV-a層

・281・285・287～294)、壺Ba(300・301)、壺Bb(295～299)、壺C(270～275)、壺D(268・286)がある。また、高杯AとCの折衷形のようなもの(242・245)や、分類図には示していないが、韓式系土器壺(269)や二重口縁形態の小形壺(183)、ミニチュア高杯(152)、ミニチュア鉢(153・154)、ミニチュアの小形丸底壺(158～160)、脚台付小形壺(206)などもある。

壺C aに分類される267は、体部外面のハケメの施し方は壺Cに見られる手法に類似する。

小型丸底壺では、形態を呈するものがこの層中で最も多く確認されている(162・182・184・201)。小型丸底壺Aは、口縁部が大きく開かず、体部の幅も狭いため、全体的に縱に細長い形態となっている。口縁部は基本的には内湾しないものである。小型丸底壺Cは、体部最大径が中央や下になり、下彎れ形を呈するものが目立つ。

高杯Aでは、IV a層と比較して口縁部が外側へ大きく開くようになる傾向が認められそうである。脚柱外面は明瞭なハケメ(板ナデ)を施すものが少なくなり、脚柱も脚柱から明瞭な屈曲をもって開かずには、ややだらけた開きとなる。232・236のような脚部が増える傾向にある。脚柱内面にはヘラケズリを施す例が多い。なお、267のように脚柱そのものを粘土粗巻き上げで成形するものも存在する。210・211・228は一応高杯Aに含めておいたが、形態的には別のものとするべきであろう。

壺Aでは、口縁端部に明確なつまみ上げが認められるものをA a、口縁端部外面に面を有したり口縁端部を丸く収めたりするものをA bとした。これらは構成要素からみれば壺B bの範疇に含まれるものが多い。

壺Bでは、この典型例となる壺B aを祖形とした形態を呈する壺B bが量的に多く存在するようになる。295・296のように、口縁部が外反する形態のものも見受けられる。

壺Cは、口縁部が2段に屈曲して開くもの(270・271)が少くなり、口縁部内面に強いヨコナデを施すことによってその名残を留めているもの(272～275)が増える。274・275のように脚台部内面に折り返しのないものも認められるようになっている。

壺Dでは、口縁部が直線的に立ち上がるもの(286)とやや開くものの(268)がある。

韓式系土器壺(269)は、体部外面に細かい格子目タキを施すものである。口縁端部は面をなす。なお、この層からはこの個体とは別の韓式系土器の体部片が丁点出土している。

6. 大溝S Z 1出土の土器(302～325)

壺C a(320)、小型丸底壺B(315・316・319)、小型丸底壺C(311～314)、小型丸底壺D(317)、高杯A(302～309)、高杯C(310)、壺A a(323)、壺A b(322・324)、壺C(321)のほか、韓式系土器把手付鍋(325)がある。318は壺Dの範疇に入るものと考えられる。これらは絶じてⅢ層に併行する時期のものと考えられる。

韓式系土器把手付鍋は、外面に粗い格子目タキを施す。把手は2方向にあり、基本的に円柱状を呈している。把手下部の先端近くには棒状工具による刺突が見られる。

7. I・II層出土土器(331～370)

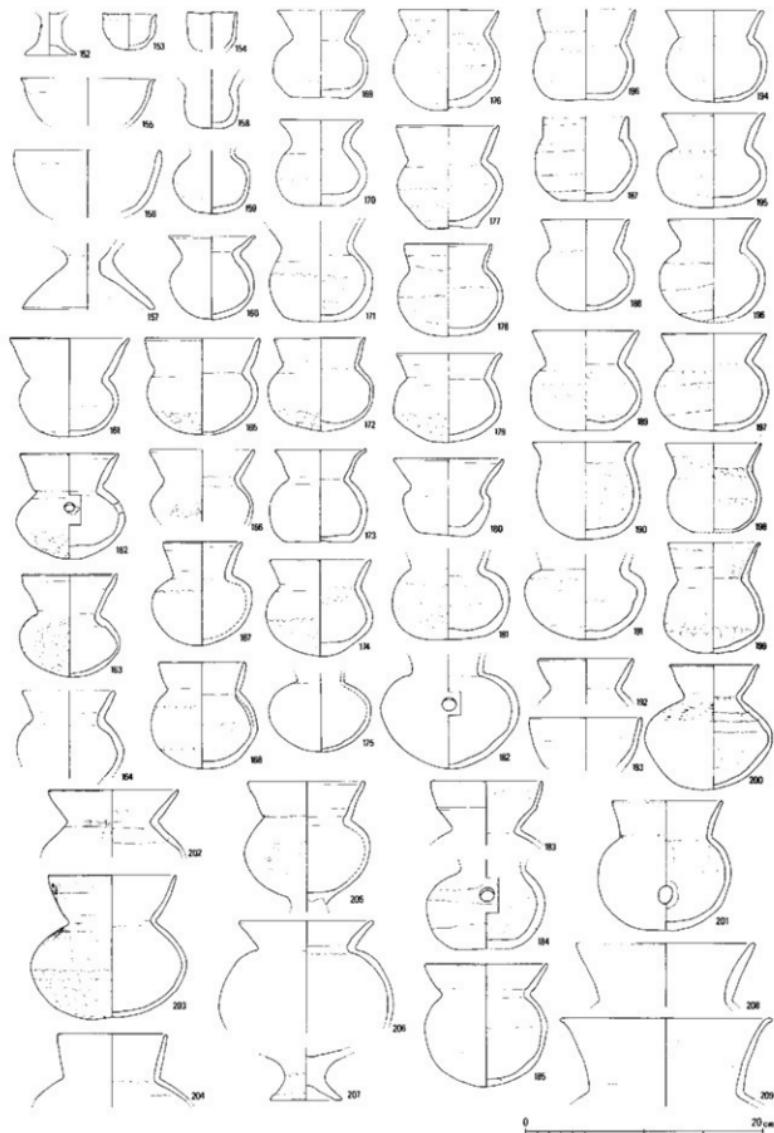
I・II層は、古墳時代後期から奈良時代にかけての上師器・須恵器を含む層であるが、古式土師器も比較的多く含んでいる。しかし、III層以下と比較すると、安定して存在しているわけではない。

古式土師器の多くはIII層のものが含まれていると考えられ、多くはその範疇で考えることができるものである。このなかで興味深い資料に345の壺がある。外面は板ナデを施しているものではあるが、口縁部の形態とこの板ナデの施し方を見る限り、壺Cの範疇に含まれるものと考えられる。

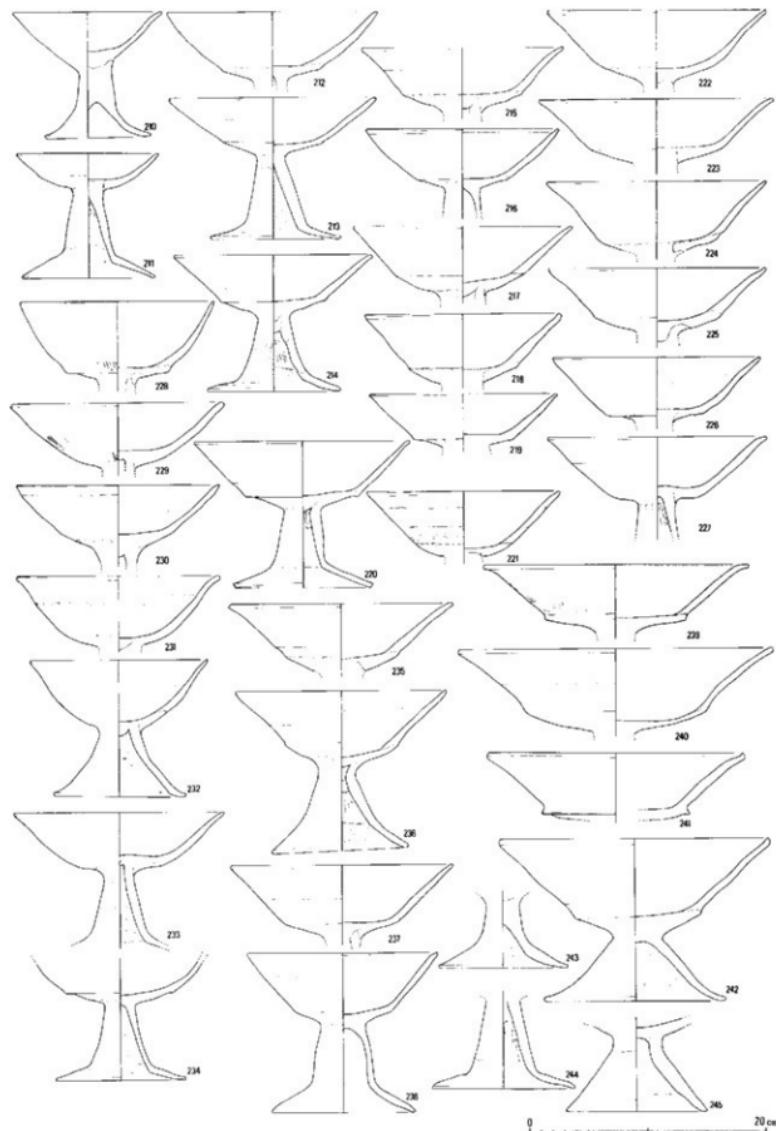
349は壁玉製の管玉である。これもⅢ層に相当する遺物と見なししてよいであろう。

350～370にかけての遺物は、古墳時代後期～奈良時代にかけての土器類である。確実に古墳時代後期に比定できるものには須恵器(352・357・358)がある。出田昭三氏による編年T K43型式と見てよいであろう。

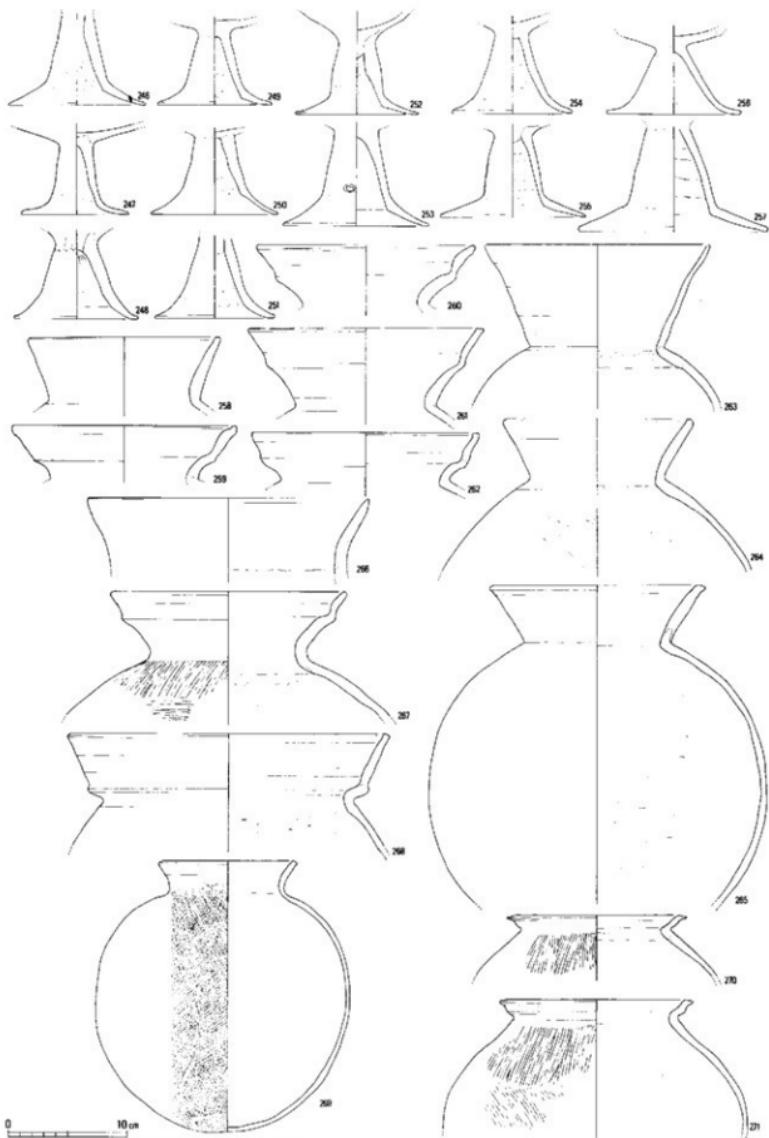
奈良時代の土器(350・351・353・354～356・359～370)のうち、353～355には墨書きが認められる。353が「建」と読める以外は破片のため、不明と言わざるを得ない。



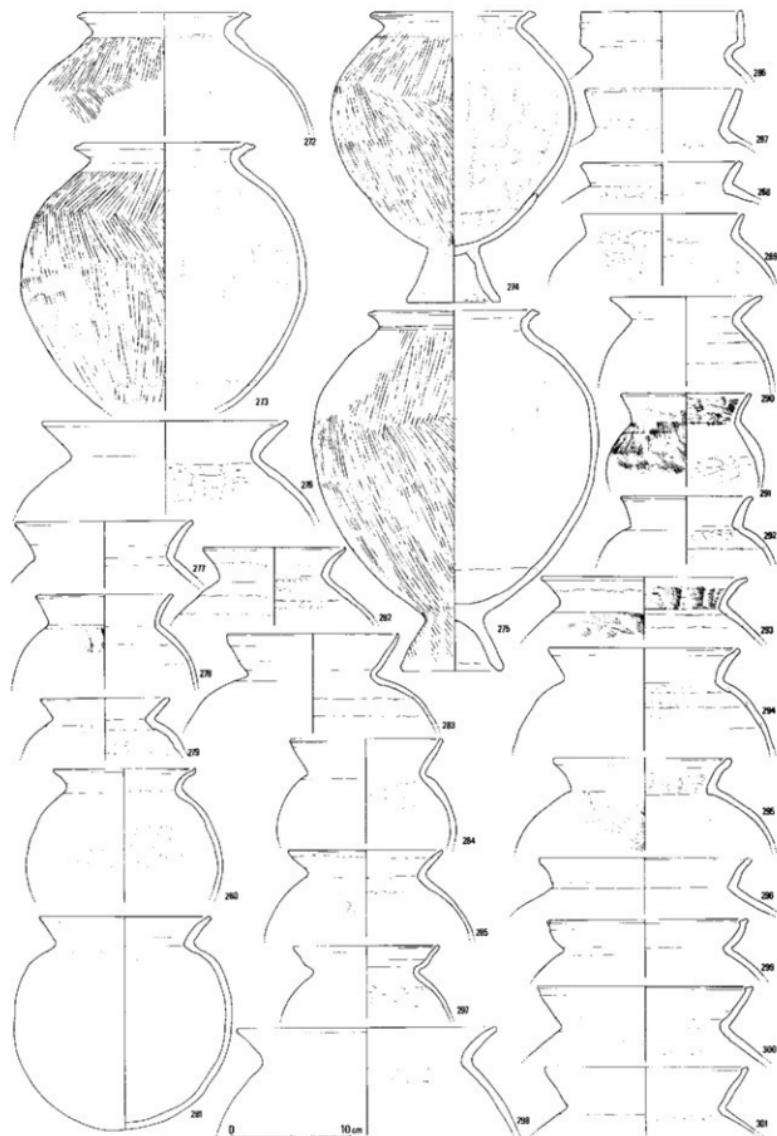
第31図 大溝出土土器実測図 (1 : 4) III層



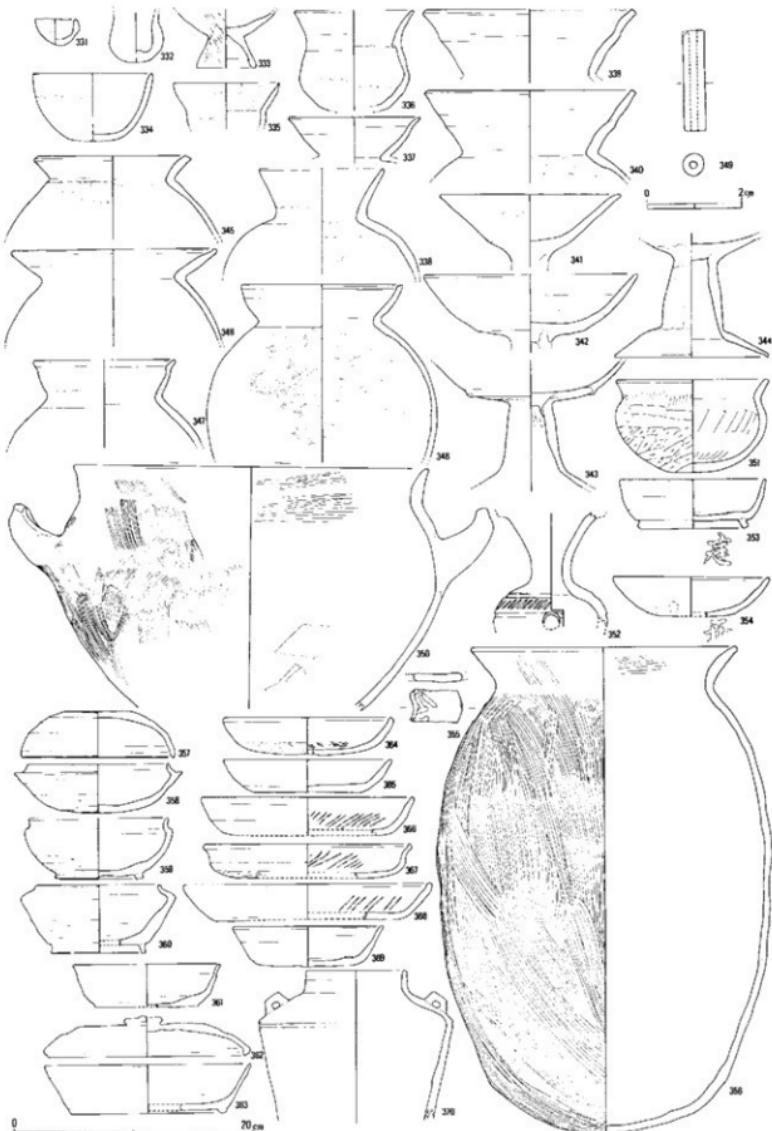
第32図 大清出土土器実測図 (1 : 4) Ⅲ層



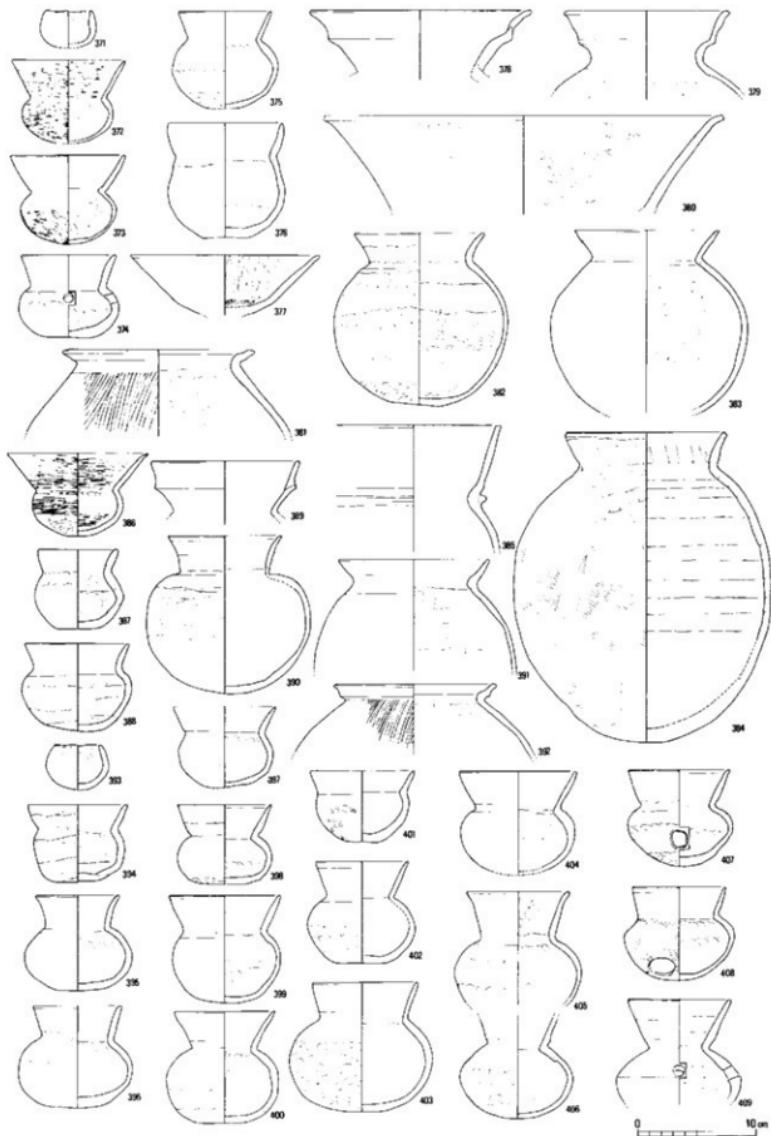
第33図 大溝出土土器実測図 (1 : 4) Ⅲ層



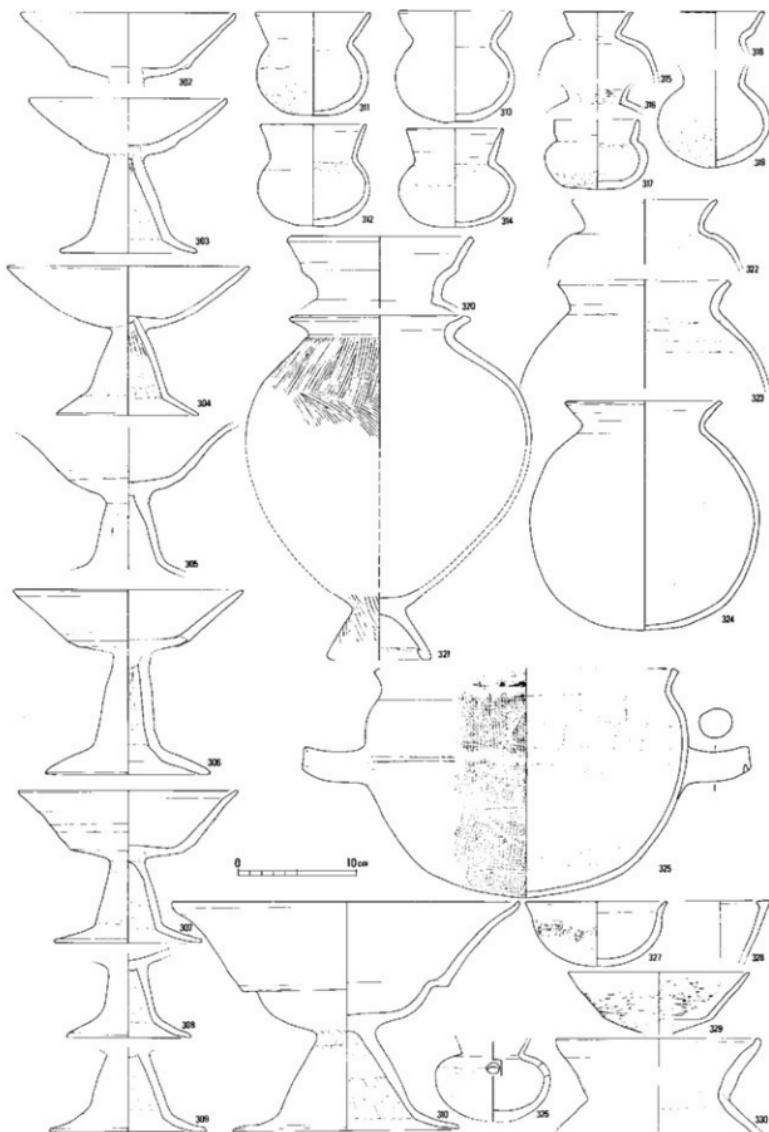
第34図 大溝出土土器実測図 (1 : 4) 田畠



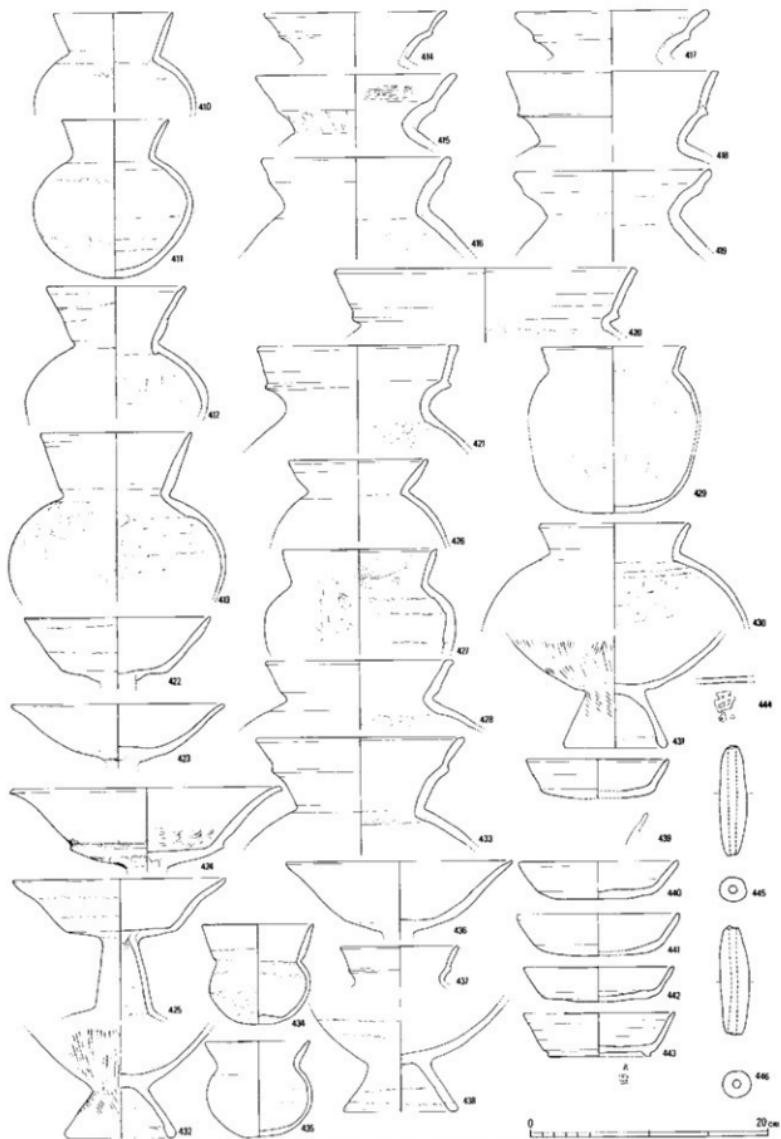
第36図 大溝出土土器等実測図 (349のみ実大・その他は1:4) I・II層



第37図 大溝出土土器実測図 (1 : 4) 暗灰砂371~385 黒黄粘386~392 黒灰粘393~409



第35図 大溝出土土器実測図 (1 : 4) S.Z.1 (Ⅲ層) 302~325 井泉1 328 中央溝貼石間326~327・329~330



第38図 大溝出土土器等実測図 (1 : 4) 黒灰粘410~431 I・II層432~446

8. その他の出土土器（371～446）

371から446にかけての土器は、最終的な分層をする前に出土したものである。371～385は「暗灰砂」から、386～392は「黒黄粘」から、393～431は「黒灰粘」からの出土である。おおよその対応関係を再度述べると、「黒黄粘」がⅣ層を中心としつつもⅢ層も混じり、「暗灰砂」がⅢ層を中心としつつもⅣ層も混じり、「黒灰粘」がⅠ・Ⅱ層を中心としつつもその下の層も混じる、という状態である。これらの土器はほぼ各土層中の土器と対応しているようであるが、体部に焼成後の穿孔を持つ407の小形丸底壺Aは、形態的にはⅢ層に認められた162の土器よりは古い。若干の層位の混乱があるようである。

9. 小結

以上、大溝出土の土器を概観してきた。これを段階的に当てはめるならば、Ⅳ層は布留1期～2期の資料を中心とし、Ⅲ層は布留3期～4期を中心とする、と考えられよう。

またⅢ層の土器のなかには、報文でいう要C（S字状口縁台付壺）のなかで比較的後出するもの（赤坂次郎氏のいう「半多型」^①）に近い形態を呈するものがある。大きくは須恵器を伴っている時期と考えられる時期のものが含まれているにもかかわらず、大溝では当該時期の須恵器は一切含まれていない。これは、大溝で用いる土器が土師器類のみであったことを示すものと考えられる。（伊藤裕作）

〔註〕

- ① 田辺昭二「陶邑古窯址群」I 平安学園考古学クラブ
1966年
- ② 赤坂次郎「最後の台付壺」『古代』86号 1988年

（2）木製遺物

今回の測定で出土した木製遺物は、掘立柱建物の柱根や井戸に伴うものを除くと、そのほとんどはここで報告する大溝から出土したものである。そのうち大部分の遺物はⅠ層からⅣ層まで、なかでもⅢ～Ⅳ層からの出土で、Ⅴ層から出土したのは杭類を中心である。製品のほか、枝打ちを施しただけの棒や自然木と思われるものも多い。報告にあたっては人工の加工を施したものうち、その形状がわかる

ものや加工痕の明瞭なものはできるだけ報告に努めた。杭の一部や棒状及び板状木製品は割愛したものも多いが、はば出土遺物の全体像はつかめるものと思う。

これらを、使用時の用途により以下のように分類整理した。

- 1 武具および武器形祭祀具 弓、刀形、劍形、小刀形、鎗形？、劍鞘、刀鞘
- 2 農具 橫柵、杵、臼
- 3 織織具 木鍤、編み台の目盛板、糸巻き、織機具
- 4 家具 案もしくは机状木製品、椅子
- 5 運搬具 天秤棒
- 6 工具 工具箱
- 7 建築部材 柱材、桁材、台輪、まぐさ材、垂木、壁板材、扉板
- 8 杭材
- 9 その他

このうち、5および6は、ほぼ確実なものとしては1器種1点のみの出土である。器種毎の出土状況の特徴は前述のとおりである。取り上げに際しては出土層位を押さえて取り上げたが、遺物のほとんどはⅢ層及びⅣ層の出土であり、当報告ではレイアウトと記述の煩雜さを避けるため、層位に掲らず、上記の分類に従い器種毎に個別に報告する。以下、個々の樹種や計画値、出土層位などは觀察表に譲り、器種毎の概略や特徴的な遺物について述べることとする。

1. 武具（鞘を含む）および武器形祭祀具

a. 弓(447～449) 3点出土しているが、うち1点(449)は飾り弓である。447と448はともに刃材を使用して作られている。弓頭は、向側面を削り落として突起を作り出したもので、池上遺跡分類のE類に相当するが、弦を巻いた痕跡はみられない。弓身外面は丸く削り出しているが、弓身内面は丁寧に半截されている。弯曲がほとんどなく、直弓と推定される。

449は、10cm程が遺存しただけであるが、糸を格子状に巻き付けた上に黒漆を施した非常に精巧な飾り弓である。文様は、一見すると線刻しているようにもみえるが、模様の一本一本が交差するとさの切

り合いが進むごとに右一左一右一左と交互になっていて、糸を格子状に巻いていたことを示している。弓身内面は浅い溝を施すが、ちょうどその部分が木芯である。

b. 刀形(450～458) 細板を用いて加工を施したものの中、片刃の刃身をもつ・先端(切先)が反り上がって終わる・切り込みなどによって刃身部と柄部が意識的に区別して作出されている、といった諸要素のいずれかに該当するものを、刀をかたちどった形代(刀形)と判断した。いずれの側体も銅の表現はない。基本的に、鞘に入れていない抜身の状態で表現されたものと思われるが、そうした場合には452などは刃身の部分が表現されておらず、刀形とするにはやや疑問が残るものであるかもしれない。453は刃身と柄の境を細く削ることによって両者を区別している程度であるが、457は刃側に明瞭な切り込みを入れて刃身部と柄部・柄頭を区別しており、さらに刃身のほぼ中央を走っている鎧の表現も明瞭で、より完成度が高い。458も柄部の作出方法は457と同様であるが、刃部の表現は明瞭でない。次に述べる劍形に比べると作りが全体に雑なものが多く、形態・大きさともに多様性がある。

c. 剣形(459～462) 刀形同様、細板を用いて加工を施したものであるが、細部の造作はより丁寧である。切先を山形に尖らせ、刃身は両刃としていることから刀形と容易に区別が可能である。460は、柄部が一見茎を思わせるほど細いものであるが、四角形の柄頭を作出した精巧な作りである。462は、刃身の大部分が焼けて欠損しているため鎧形のようにもみえるが、本来は460のような劍形であったのであろう。

d. 小刀形(463～464) 2点出したが、どちらも形態は類似する。即ち、柄部は大きさの割に太く柄頭もしっかりと作出しているのにに対し、刃身部は作りはやや粗く刃身の表現もあまり明瞭でないが、刃区の表現は明瞭でかなりデフォルメされている。

e. 鎗形?(465) 先端を尖らせた武器形であるが、形態からおそらく鎗を模したものであろう。袖先と茎が表現されている。

f. 剣鞘(466～467) 466と467がセットで一つの剣鞘を構成する。鞘口および鞘尻にソケット状の刀装具を嵌め込んで両者を固定したものと思われる。形代ではない実用の剣の鞘と思われ、そうした場合、内面に残されている刃身痕(剣を嵌めたときの安定のために当初から彫り込まれたもの)から、長さ約46cm、幅4cmの刃身が復元できる。

g. 刀鞘(468) 内面の刃身痕と左右非対称の形状から、刀鞘と判断される。上述の剣鞘とはほぼ同大であるが鞘口部を欠損する。鞘尻は剣鞘同様に凸部を作り出しているが、内面の刃身痕は剣鞘では切先が凸部まで及んでいないのに対し、刀鞘では凸部をいっぱいにまで及んでいる。嵌め込まれていた刀の形態は、刃身痕から、切先にむかって丸みをもちつつ細身となっていく直刀が想定される。

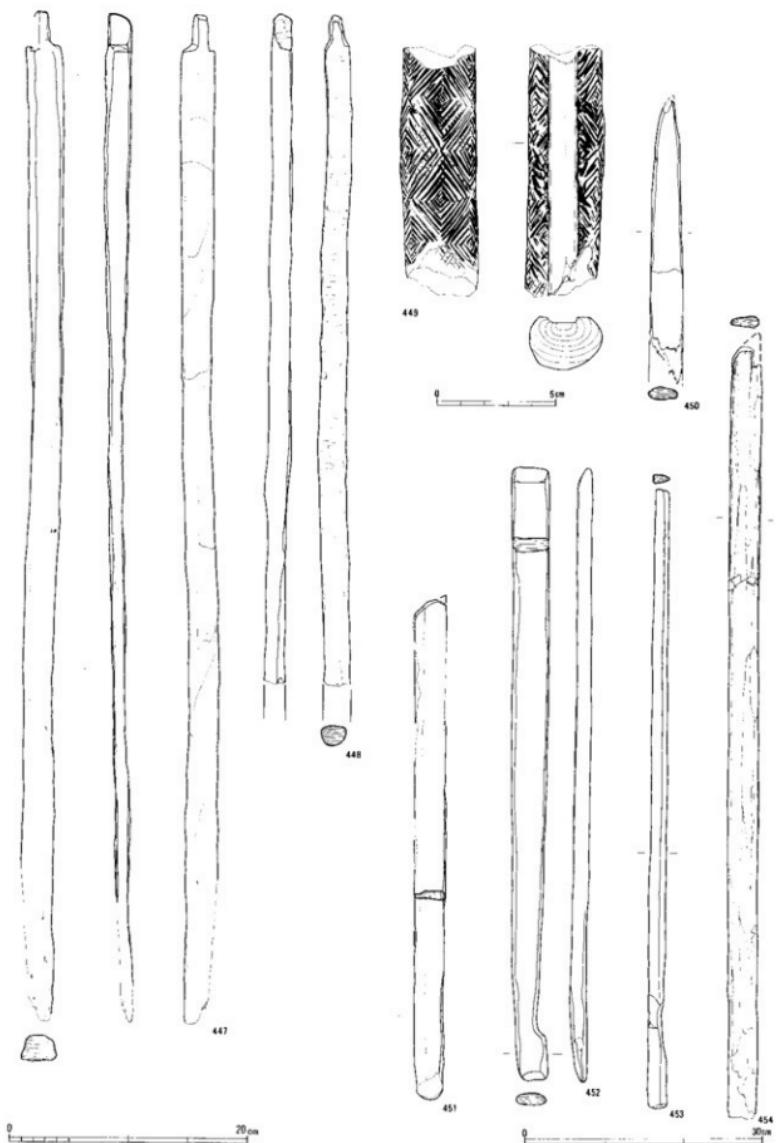
2. 農具

数多い大溝出土木製遺物のなかにあって、農具のなかでも鋤耕鏟といった耕作具は破片・未製品を含め一点も確認できなかった。農具として確認できたのは、脱穀具として使用された杵・臼および他目的にも使用されたであろう植穀のみである。

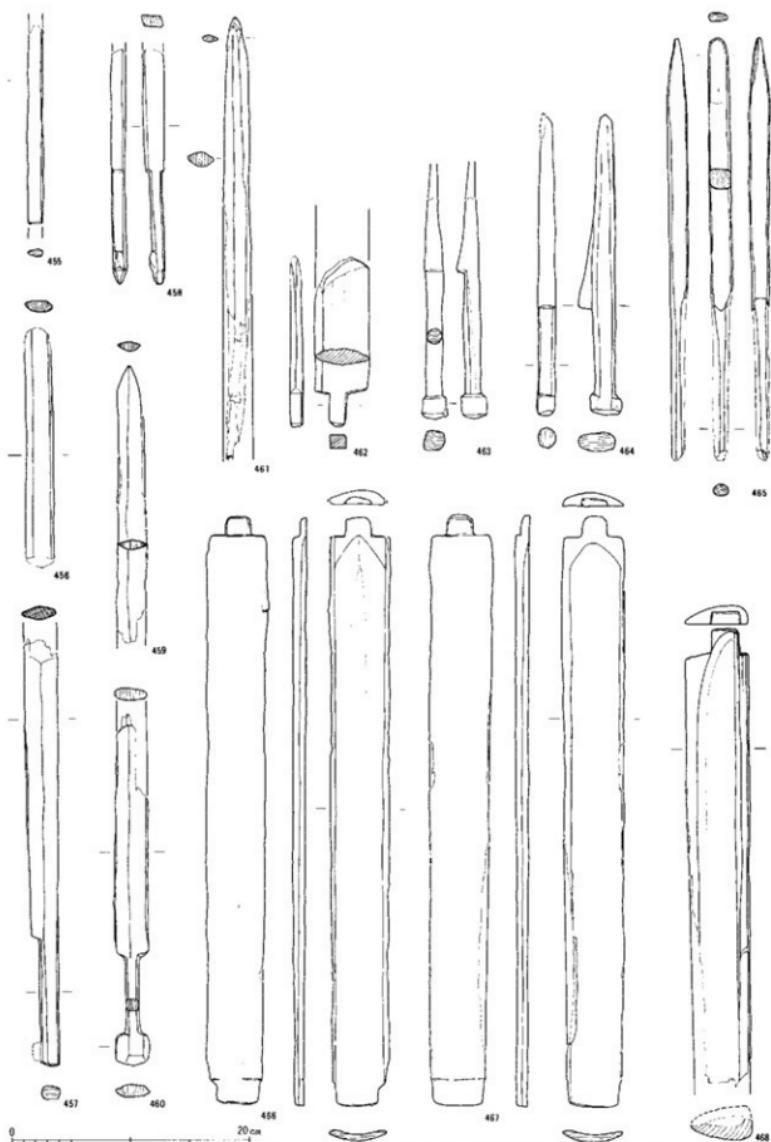
a. 横槌(469～471) いずれも柄部を欠損し、槌部のみが遺存したものである。遺存状況から判断すると、469と470は槌部が緩やかに先細りとなりつつ柄部に移行する形態であるのに対し、471は槌部と柄部の境界が明瞭に区別される形態である。469は先端面もなめらかで、杵としても利用されたことが見える。470は槌部先端面に二次加工をうけており転用された可能性が考えられる。

b. 杵(472) 捶部の一部のみが遺存しただけであり、全体の形状は不明である。撊部先端面は使用によって平坦化している。

c. 臼(473) 外面は、臼部と台部との境界が明瞭で、裾広がりの底からすばまりながら上がってきた台部が屈曲して外側へ広がる臼部に移行する。臼部内面は深く逆円錐状を呈し、外面では台部としている部分にまで及んでいる。臼部中央はさらに一段凹んでいるが、これが当初からのものか使用によって凹んだものかは確定できない。



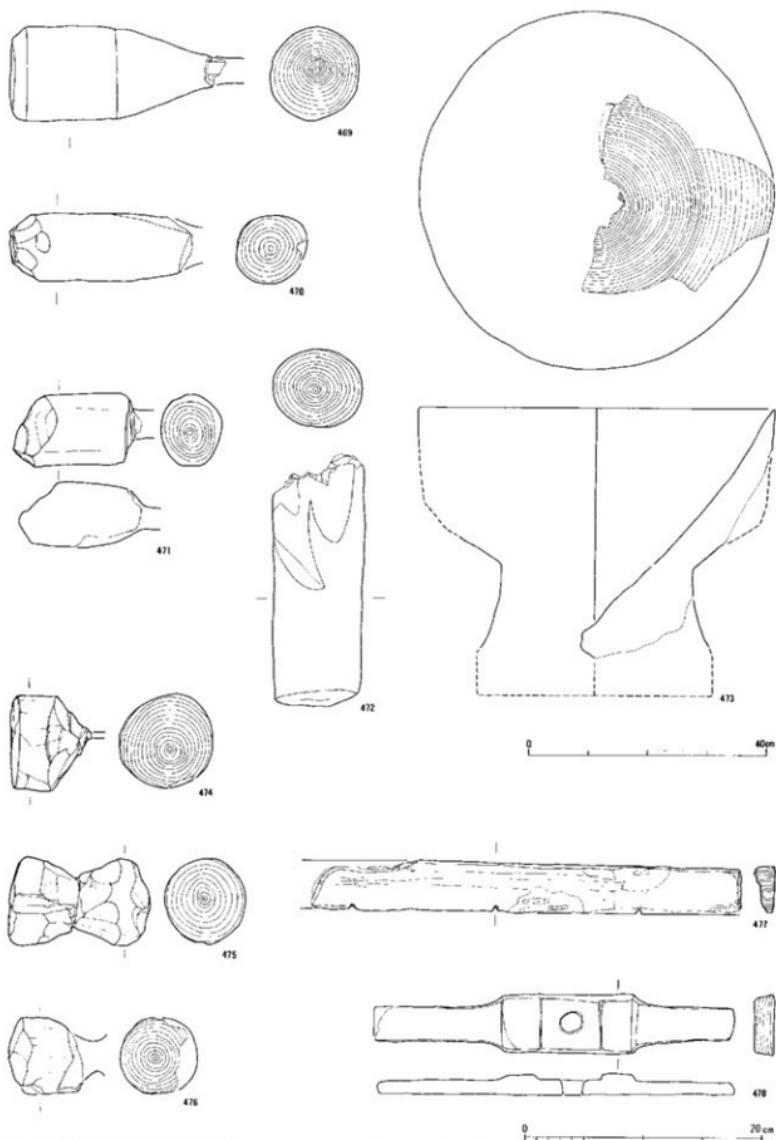
第39図 大溝出土木製遺物実測図 (447~448は1:4, 449は1:2, 450~454は1:6) 弓447~449 刀形450~454



第40図 大溝出土木製遺物実測図 (1 : 4)

刀形455~458 剣形459~462 小刀形463~464 銛形465

剣鞘466~467 刀鞘468



第41図 大湊出土木製遺物実測図 (473のみ1:8, その他は1:4) 横樋469~471 杖472 畠473 木鍤474~476 編台の目盛板447 糸巻478

3. 紡織具

織物と織機に係わる機材を一括した。

- a. 木鍤(474~476) 475は、短い丸太材の中央部を細く削り鼓状とした形態をなす。474・476も、片側が欠損しているが、同様の形態をもつものであろう。
- b. 編み台の目盛板(477) 長方形の板材の長辺部片側に約12.2cm間隔で刻み目を施したものである。刻み目の施された側は、対辺よりもやや薄く削られている。
- c. 糸巻(478) 「木器集成図録^①」のいう「A型式」糸巻にともなう横木。板の中央部を幅広く残し、その両端を低い台形状に削り出している。同様の2枚の板を「字形」にかみあわせるものであるが、出土したのは1点のみである。

- d. 織機具(479~488) 刈材の両端部から2~4cm内側に切り込みを入れ先付けをしたもの(479~485-a型式)と、半円状に削り出した棒状具の先端を丸く削り出したもの(486~488-b型式)の二形態が認められる。ともに糸の擦痕などはみられない。a型式は大きさに幅がある(35.7cm~72.4cm以上)。b型式は丁寧な調整が施され、布巻具か絹巻具の可能性がある。a型式の表面調整はやや粗く、布巻具か絹巻具以外に、開口具の中筒の可能性もある。

4. 家具

- a. 箱もしくは机状木製品(489~497) 脚部(489~491.497)と天台部(492~496)に分かれるが、組合わされた状態では出土していない。

天台部はいずれも完形品はないが、基本的にはば長方形状を呈するものと思われ、いずれも裏面の四側縁を中央部よりも薄く削っている。脚部との接合部は、断面がM字形をなすもの(492)と方形を呈するもの(493~496)がある。492~494.496は長辺部に対して直交する幅広の脚を2個もつと思われるのに対して、495は長辺部に平行して幅の狭い脚を4個もつものと思われる。

脚部489~491は、大きさの違いはあるが形状は同様で、長方形板の下部中央を台形に開けるものである。頂部はいずれも方形を呈する。

497は、拡広がりの立板の上部を厚く削り出し、

その部分にはぞ孔を設けたもので、小机の脚部と思われる。蒲鉾状に肥厚している部分は内側で、その部分は台を支える板を挿入するための板受けになると思われる。

- b. 椅子(498) やや外開きの台形状の脚と、台部とが一本で削り出されたものである。欠損部が多いが、本来的には安定度の高いものであろう。

5. 運搬具

天秤棒(499) 半分は欠損しているが、幅広の棒状具の両端部に繩を懸けるための刻みを施した天秤棒であろう。中央部が幅広にされ、肩に懸け易くなっている。ただし、現用の大秤棒にはカシ等の固い広葉樹が利用されるようであるが、本例はヒノキを使用しているんで若干の疑問も残る。

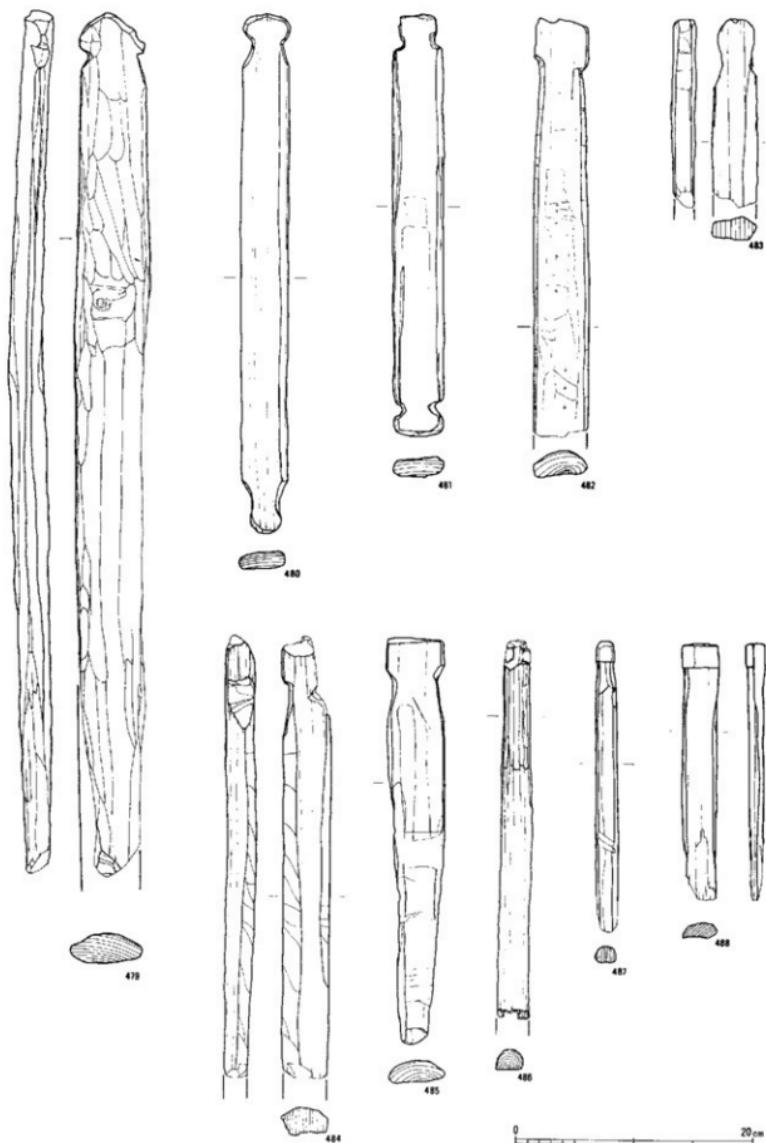
6. 工具

工具柄(500) 池上遺跡の工具部分名称でいう台部のみが遺存したもので、握部はほとんど遺存していないが、なんとか着柄角度は復元可能であり、ほぼ110°をはかる。おそらく手斧の柄であろう。

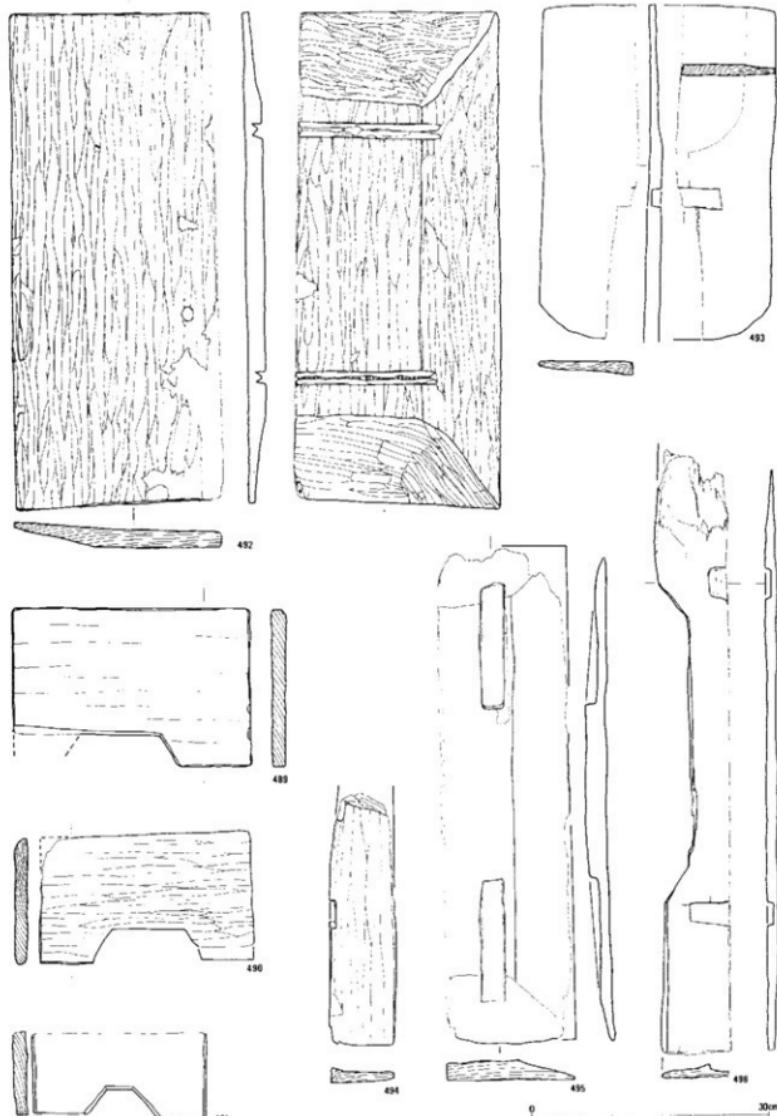
7. 建築部材

柱の一部を除き、ほとんどは掘立柱建物に伴うと考えられる部材である。また、性格不明の板状木製品や棒状木製品、杭の一部などのなかにも、元来は建築部材であったものが転用されている例や、本来の用途が建築部材であっても小片になったため性格不明となっている例も少なからず含まれているであろう。

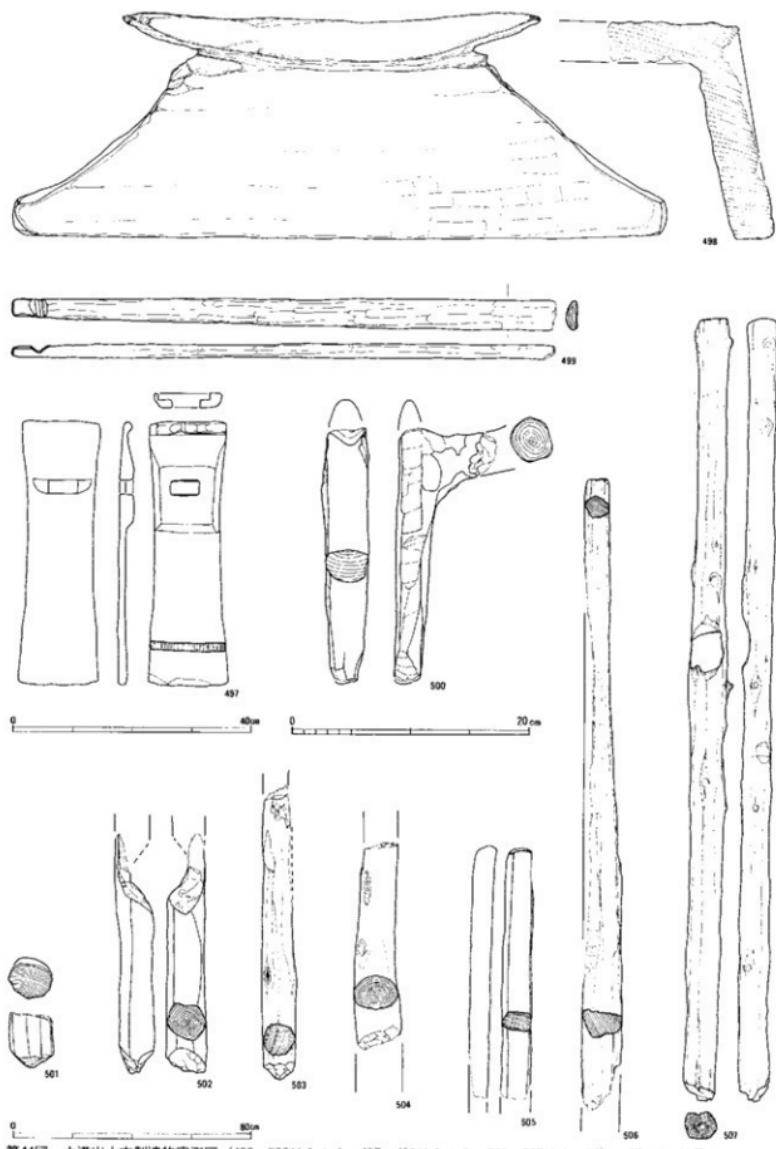
- a. 杆材(501~507) 多くの場合、下端は杭として再利用されている。503は掘立柱建物用の柱とするにはやや全体的に細く、堅穴住居用の柱材と思われる。502は、上端部に抉りが施されており、下端部を杭に転用されているものの柱の上部近くが残ったものであろう。504は断面方形を呈する柱材で、高床建物の鼠返しを通した柱上半部と思われる。507は、丸太材を二側縁削って断面を略方形としたもので、一応柱材の可能性がまず考えられるが、現状では本来的なものかどうかが不明ながら中央近くに抉りがみられ、これを本来的なものとみれば床桁の可能性、二次的なものとみれば棟木や合掌材である可能性も考えられる。



第42図 大溝出土木製遺物実測図 (1 : 4) 織機具



第43図 大溝出土木製遺物実測図 (1:6) 案もしくは机状木製品



第44図 大溝出土木製遺物実測図 (498・500は1:4, 497・499は1:8, 501~507は1:16) 腕497 椅子498
天秤棒499 工具500 柱材501~507

b. 柄材(508~509) 二次的な加工によって厚みを薄め板状になっているが、本米の柄材の特徴をよくとどめている。ほぼ一直線状に並ぶ小方孔は、垂木を縛って固定するためのいわゆる「棧孔」で、本米断面が二段に屈曲するものであるが、本例でもその特徴をよく残している。508の右側に開いている方形孔は柱を通すためのはぞ孔である。両材ともには中央部に方形孔が開いているが、前述の小方孔やはぞ孔に比べて仕事が粗く、両端部のカットと厚みの薄化と合わせ、転用時の二次加工であろう。

c. 台輪(510) 両端は欠損と転用のため本米の長さは残っていないが、材や中央に開いている長方孔の大きさから、柄の台輪の可能性が考えられる。長方孔は約16cm×8cmの大きさがあり、高床建物の柱上半部を通したものと思われる。

d. まぐさ材(511) 腐蝕欠損が著しいが、親口開きの扉口のまぐさ材と思われ、厚板を用いて材側面に突起を作り出している。この突起は建物内面側に接して造られたものと思われ、扉の振れ止めの機能をもつものである。

e. 垂木(512~515) 最も遺存状況のよい512で現長約142cmを計る。いずれも先端部を緩い円錐状に仕上げ、少し下がった位置に断面し字状の抉りを持つ。倒立して使用し、抉りは上面となって上面に載る軒先の茅負を支える為のものである。

f. 壁板(516~535) 転用されていたり、若干疑問の残るものもあるが、形状や厚さ、大きさなどから壁板と思われるものを一括した。516は厚みがやや薄いが、側縁部に抉りが一個みられ、扉はその可能性がある。すると、本来倍以上あった厚さが転用時の再加工で薄く削られたものと思われる。形状・大きさから柱間の狭い建物か人口に面した部分に使われた壁板の可能性が考えられる。517~532の長方形板や方形板も、本来は壁板として使用されたものであろう。523や524に開いている方孔は仕事が粗く二次加工時のものと思われるが、523は柄材509とはほど同大で、二次加工の方孔もほど同じ位置で開いており、転用時はともに同じ目的（もしくはセット）で使用された可能性がある。525は片側端部に突起が削り出されており、柱への取付け仕口とも思われるが、二次加工の可能性もある。

533~535は妻立壁板である。建物の屋根勾配に合わせて切削されたものと思われ、533は勾配が急な屋根、534と535は勾配が緩やかな屋根に用いられたものであろう。534と535の屋根勾配は同じで恐らく板屋根の同一建物に使用されたものと推定されるが、木取り方向には違いがみられる。535は下面が生きており、この下に梁材が通るのであろう。533や534は、図示してある前のほうが加工痕も明瞭で残りがよく、おそらく建物が建っていた当時は内側になっていたのであろう。

g. 扉板(536) 二次的な加工によって板材に転用されているが、その際、把手部分が削り取られ、全体も小さくなっているが、本米の状況を窺うことは可能である。すなわち、二個一对で親口開きの扉を構成する片方の扉材で、ほぼ中央に大きな把手をもち、そこに門穴を通して、さらにそのドには溝がくり抜かれている。表面の加工は槍鉋に依っているが、二次加工である把手を削って平坦化する仕事は手斧を使用しており、裏面の手斧痕も二次加工時の可能性がある。

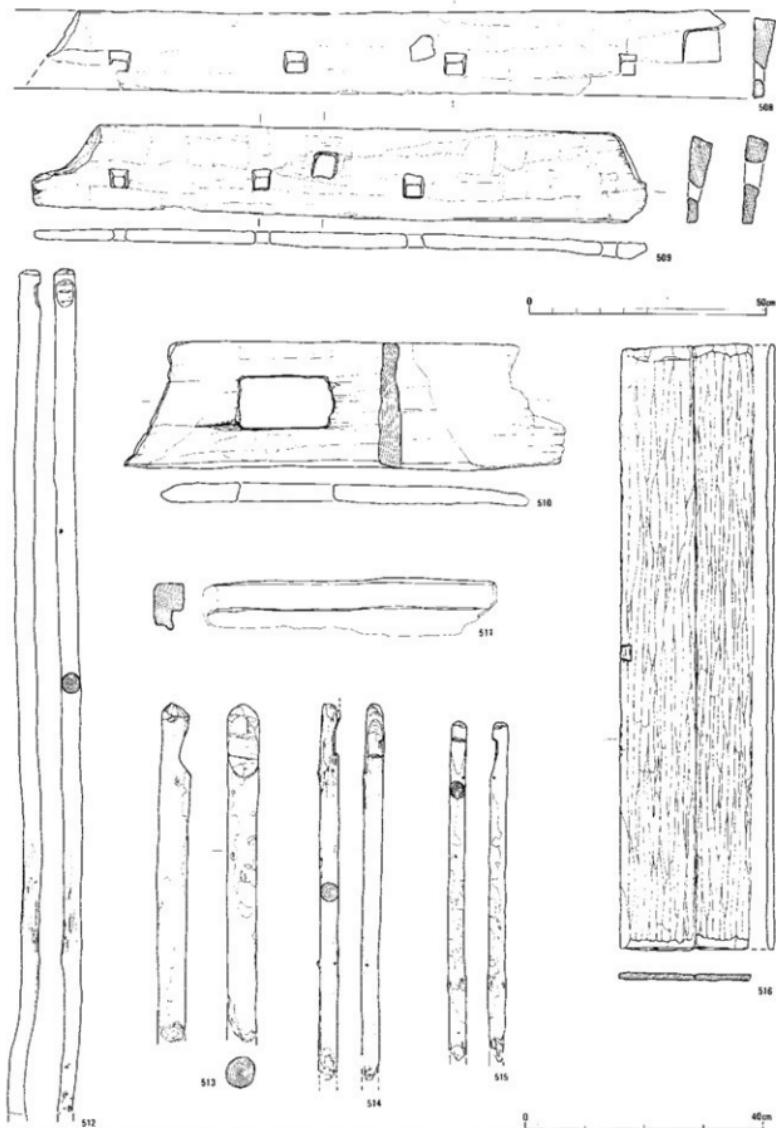
8. 杠

大溝出土杭のうち、537~542は打ち込まれた状態で出土した、いわゆる「生きている」杭で、537~539は井泉1の周り、540~542は井泉1前面（すぐ下流）の杭列から出土したものである。図示したもの以外にも、杭頭の出土は多いが、そのほとんどの543以下の例がそうであるように「寝た」状態で出土したものである。別の部材が杭に転用された転用杭と、自然木の先端を尖らせて当初から杭として作られた丸杭とがあるが、丸杭はさらに先端を数カットした杭と2カットしただけのより簡易な杭とに分かれる。

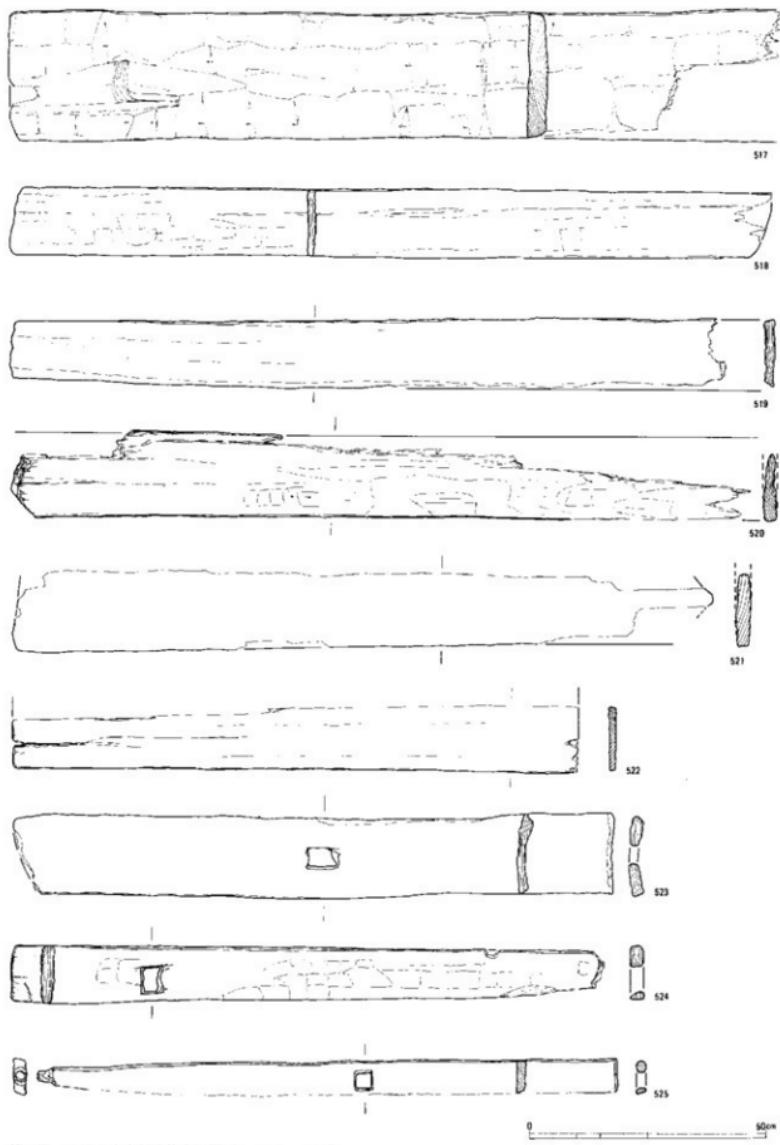
a. 打ち込まれた杭(537~542) 井泉1周辺に打ち込まれていた杭は、先端部のみが遺存したもので、転用杭か丸杭かは明確でない。杭列の杭は、いずれも小振りで樹皮を残し、先端の加工もコンパクトに行っている。

b. 打ち込まれた痕跡が明確でない杭(543~552)

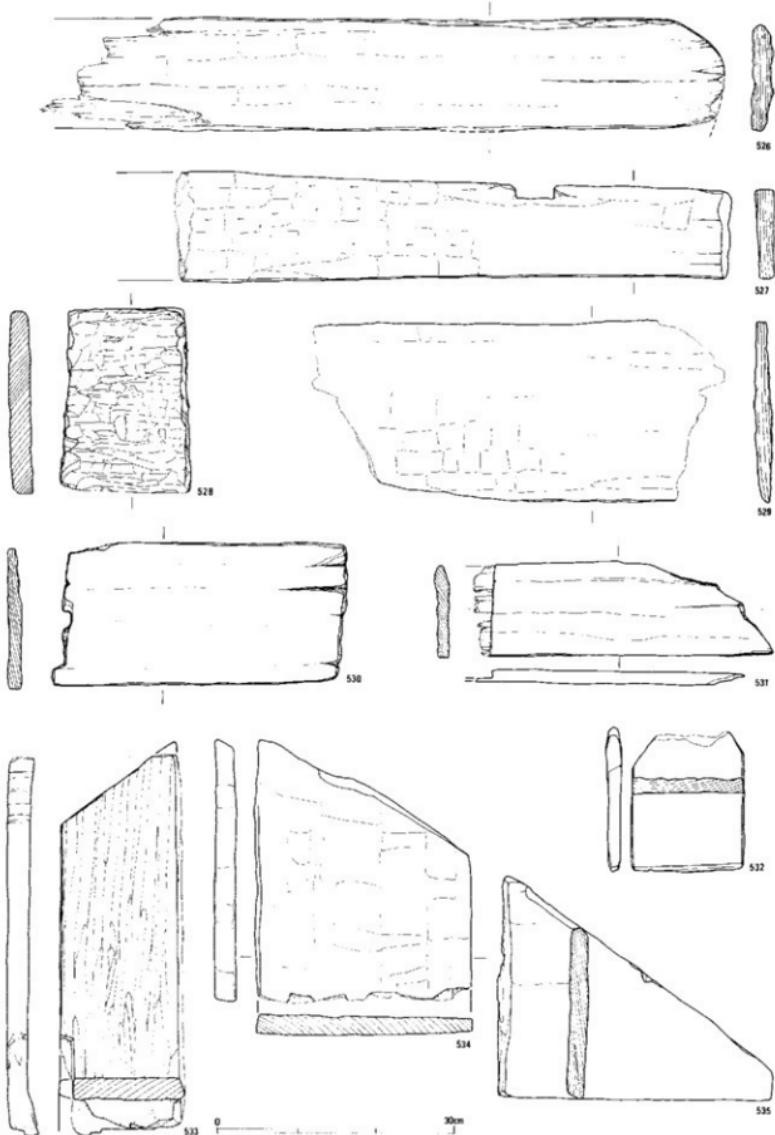
550は比較的細めの転用杭である。543は唯一全長が知れる杭で、約156cmを計る。545~558は大きさは異なるが、いずれも先端を2カットしただけの粗



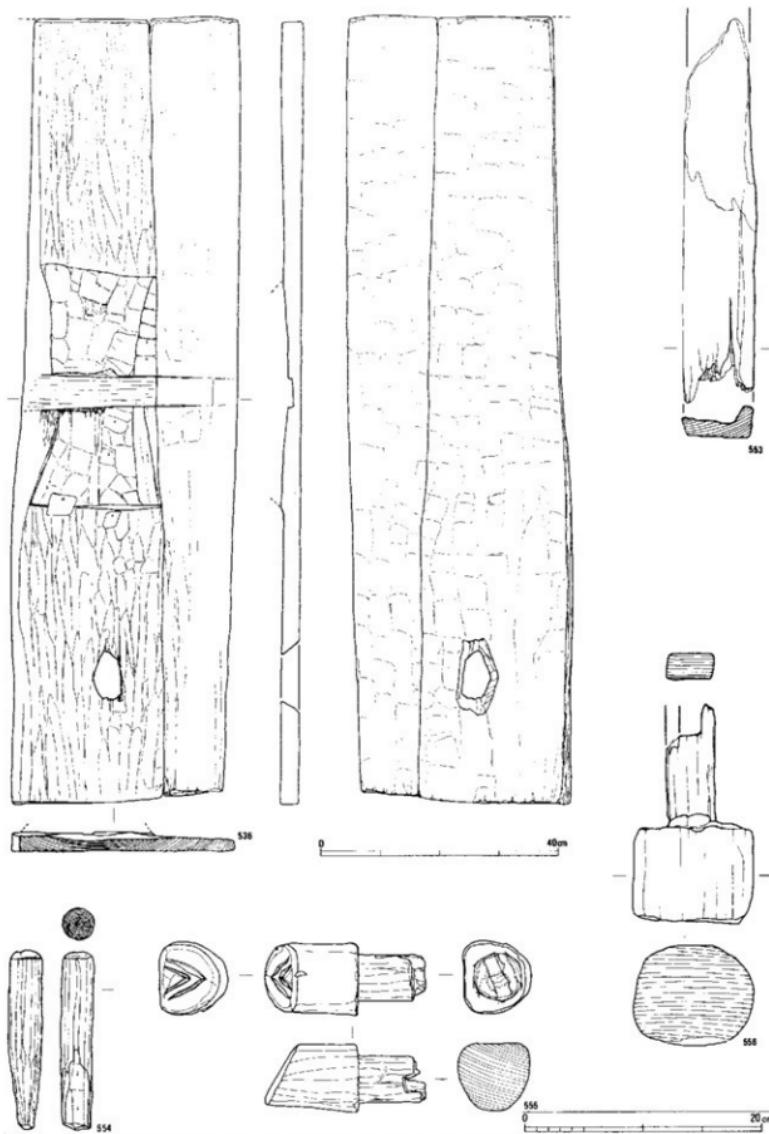
第45図 大溝出土木製遺物実測図 (508~509は1:10, 510~516は1:8) 柵材508~509 台輪510 まぐさ材511
垂木512~515 駒板516



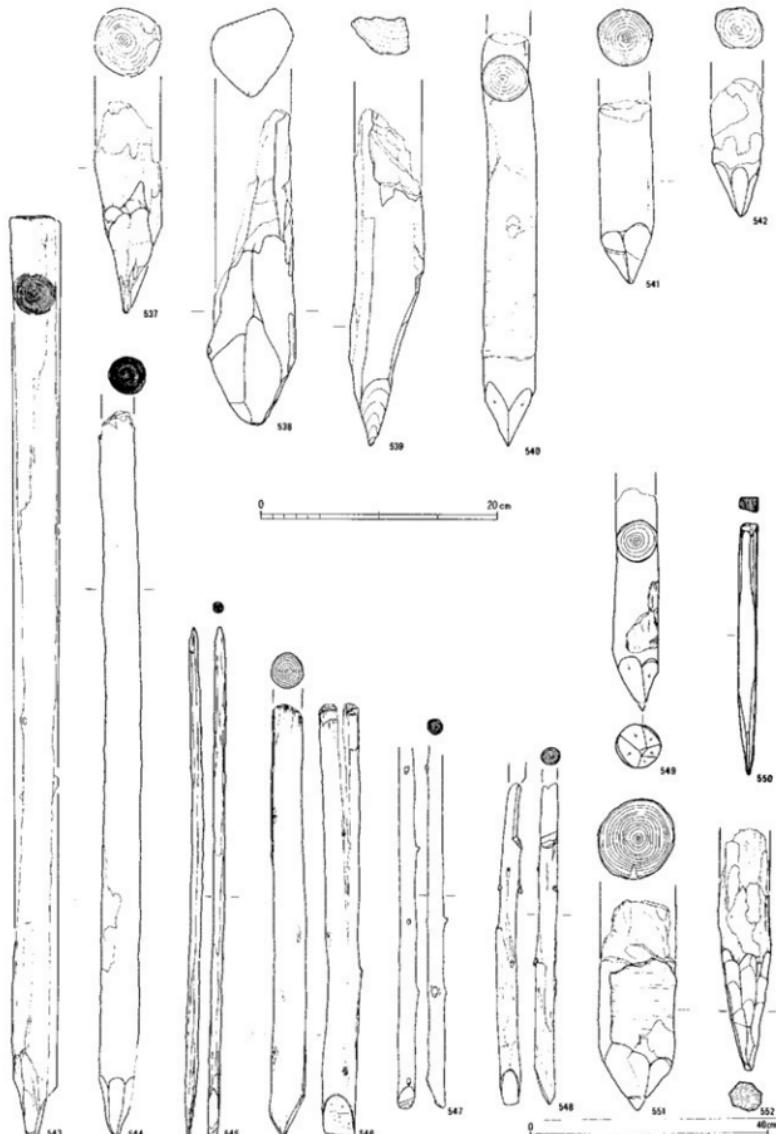
第46図 大溝出土木製造物実測図 (1 : 10) 豊板



第47図 大溝出土木製遺物実測図 (1 : 6) 壁板



第48図 大溝出土木製遺物実測図 (536・553は1:8, その他は1:4) 屏板536 積もしくは水盛り?553 桁?555 把手状木製品555~556



第49図 大湊出土木製遺物実測図 (537~542は1:4, 543~552は1:8) 杭

い作りの杭で、切り落とした枝の節が残るものも多い。

9. その他

別の部材と組合すことによって1個の製品を構成するが現況では「部材」としかいえないものとそれ単独で製品であると見做されるもの、ある程度用途の類推が可能なものと全く不明のもの、などの差異はあるが、明確な加工を受けながら、その性格を明らかにしえない小品を一括する。

a. 棚もしくは水盛り? (553) 残りは悪いが、側縁部がほぼ垂直に短く立ち上がるよう削り出している。おそらく両側が立ち上がっていたと思われ、用途としてその中に水を通したことが想定される。さすれば、水を流すための桶か、中に水を張って建物建設時に水平をみる道具である水盛りの可能性が考えられる。

b. 框? (554) 小さい円柱状の木の片端部を薄く削り込んだもので、そちらがわに差し込んだ痕跡があり、逆の円柱部分の先端には敲打痕がある。したがって、何らかの枠である可能性が考えられる。

c. 把手状木製品(555~556) 555は、太い部分の先端面に三角状の線刻が二重に施され、細い円柱状部分の先端にはソケット状の差し込みがみられる。したがって、何かに差し込んだ「飾り」の可能性も存在する。一見、家形埴輪の桟飾りにも似るがやや小さく、その関係は不明である。556は、断面円形の身部に断面長方形の柄部を作り出したもので、柄部には方形のぼぞがみられる。

d. 組物(557~562) 大きさや形状、製品時の性格は多様であるが、別の部材と組合わすことによって組合せ式の容器類や調度品類などになりそうなものを一括した。

557は長方形の板の側縁部に小孔が多数開いていて、おそらく釘状のものを打ち込んだ跡と思われ、箱状の容器の底板の可能性が考えられる。

558は、性格がいまひとつ不明であるが、円孔や方孔、抉りが施された長方形の板で、片側の先端がスケート板状に加工されている。抉りの両側の方孔は、抉りに噛み合わせた別材を縛るために縫を通した孔であろう。

559~562は、蒸籠組の組物の部材であろうと思わ

れる。562は先端が二次加工を受けており、矢板として転用されている。

e. 加工小厚板(563~571) いずれも明瞭な加工を施すが、用途の特定は困難である。

563は三角状に尖った部分の片側縁部に抉りをもっており、当初は別の部材であったものが転用され564と同じ形に二次加工されたものであろう。

565~567は樅材・櫻材の差はあるが、側縁を薄く削って尖らせたものである。

568も長方形板の一側縁を薄くし、さらに穿孔を施す。

569は、長方形板の長辺部片側を薄く削り込み、反対側の厚い部分に半円形の抉りを入れる。475のような編み台の目盛り板の可能性もあるが、小片のため確定できない。

f. 板状木製品(572~594) 形状や大きさ、用途や転用の有無などそれぞれ違いはあるが、上記以外の板状木製品を一括した。

574や575は、小方孔や方孔があつて建築部材の可能性もあるが小破片であり確定できない。

576は、先端部が尖っており、板材が矢板として転用されたものである。

577は、板の側縁部に沿って小円孔が穿たれている。何かの底板であろうか。

579~581は、いずれも用途不明であるが、片面に明瞭な加工痕を残す。木製品製作時に削ぎ落とされた削り屑の可能性もある。

582~583は、略平行四辺形の板で、583は薄板である。

584~585は、欠損しているものの長方形の板に小円孔を有する。

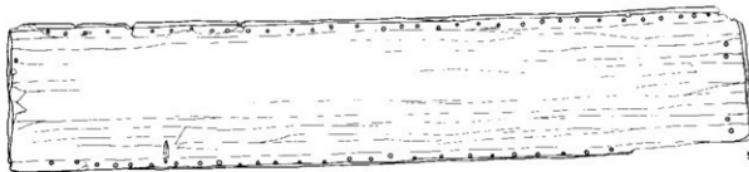
592は、大形の材で、両端部が張り出す。

593は、薄板が割れたものであるが、生きている両端部はやや弧を描くようである。

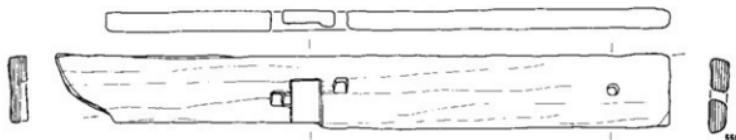
594は、円盤板の中央部に孔が穿たれている。

g. 両端尖り棒(595) 比較的大い丸棒の両端部を杭状に尖らせたものであるが、用途は不明である。

h. 有頭棒(596~597) ともに棒状木製品の片側端部(597は欠損のため片側は不明)を削り出して頭部を作り出したものであるが、形状は異なる。596は輪部が細く先端が杭状に尖ったものである。これ



557



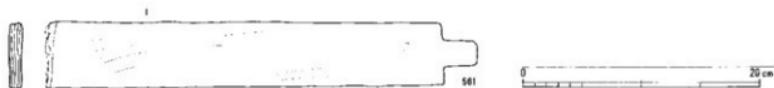
558



559



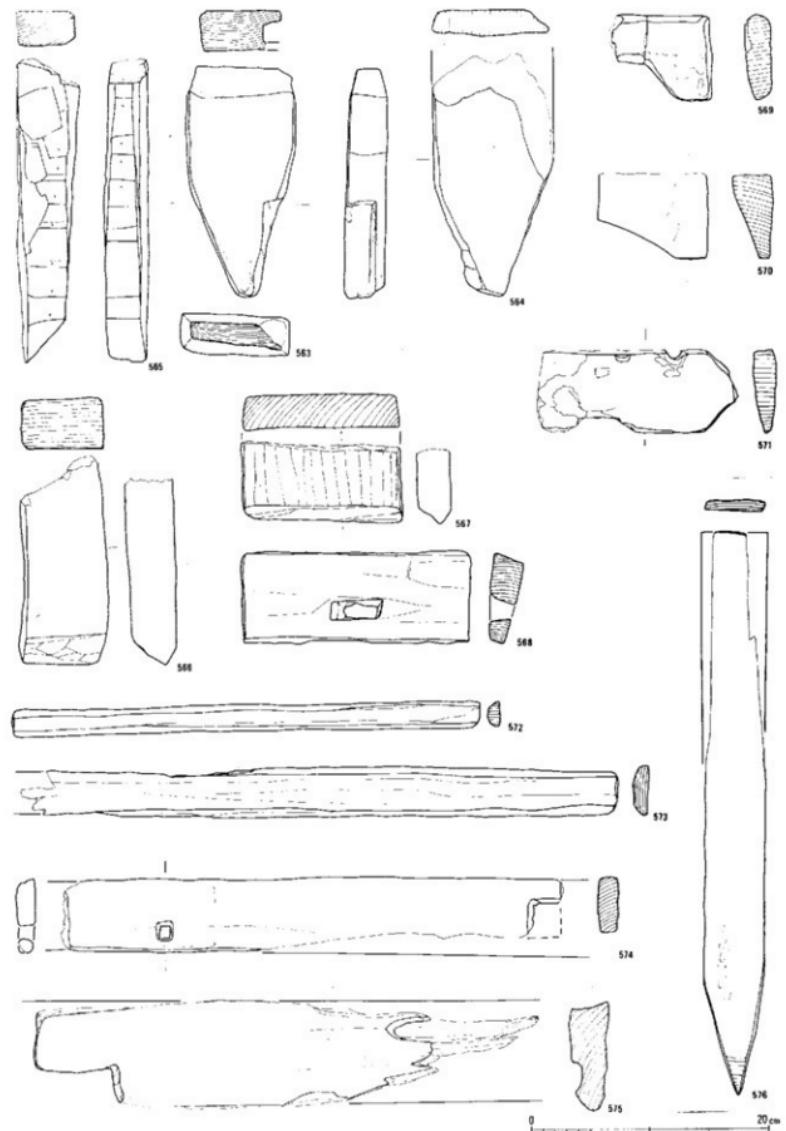
560



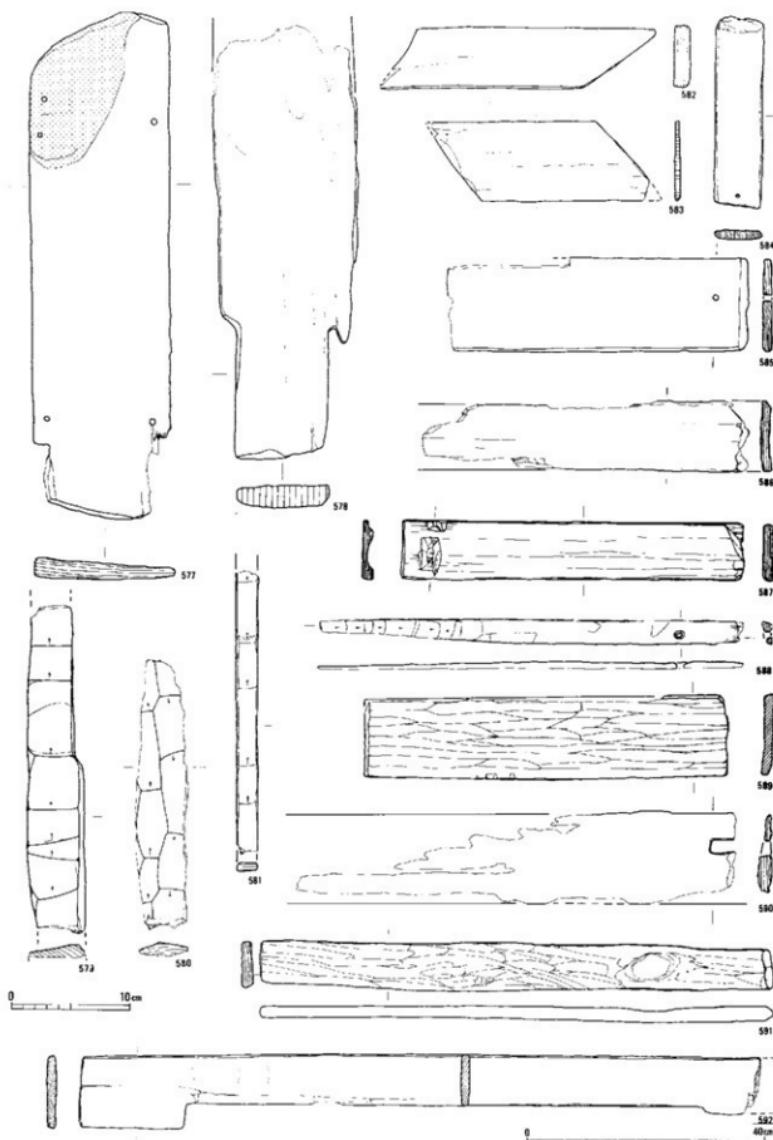
561



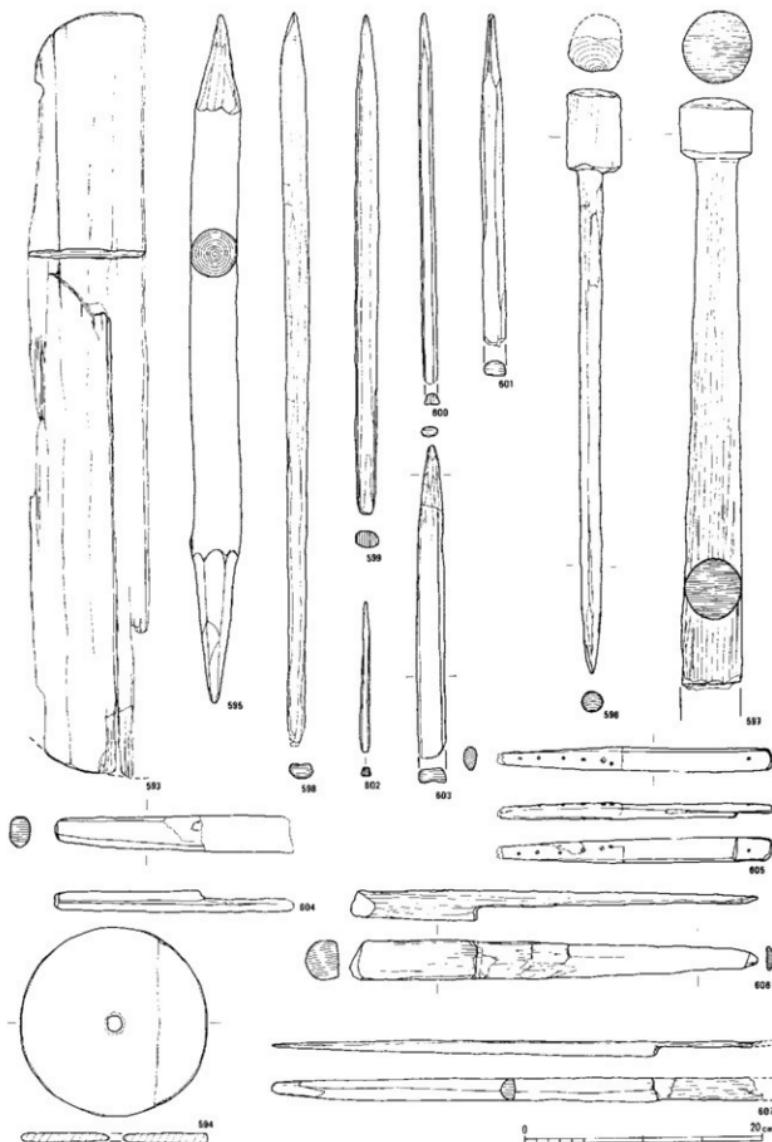
第50図 大溝出土木製遺物実測図 (1 : 4) 組物



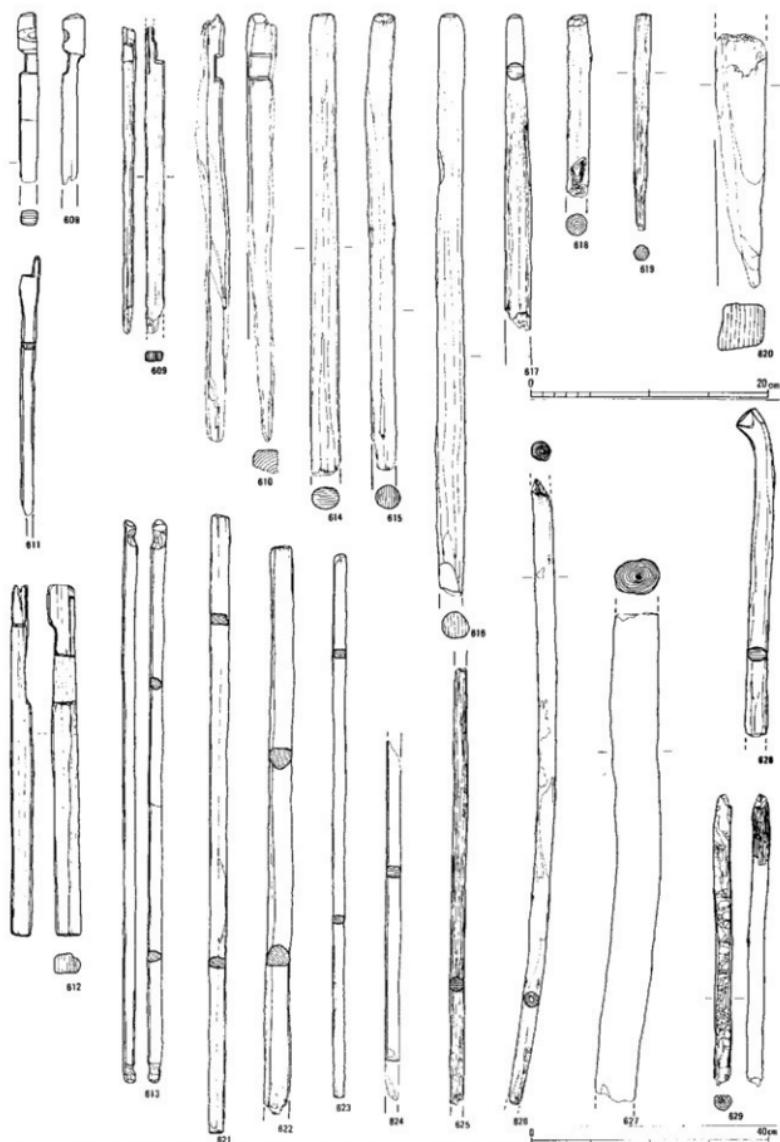
第51図 大溝出土木製遺物実測図 (1 : 4) 加工小厚板563～571 板状木製品572～576



第52図 大溝出土木製遺物実測図 (577~587は1:4, 588~592は1:8) 板状木製品



第53図 大溝出土木製遺物実測図 (1 : 4) 板状木製品593~594 両端尖り棒595 有頭棒596~597 先尖棒598~603
抉入棒604~607



第54図 大溝出土木製遺物実測図 (608~611・614~620が1:4, 612~613・621~629が1:8) 扱い棒608~613
棒状木製品614~629

に対し、597は野球のバットに似た形状で、頭部で一旦くびれそこから徐々にまた太くなっていく形状をなす。丁寧な加工である。

i. 先尖棒(598~603) 片側が欠損により不明のものも多いが、片側端部を尖らせてある棒状具を一括した。比較的丁寧な加工が施されており、武器形になるものもあるかもしれない。

j. 抜入棒(604~613) 形状は様々であるが、たんに棒状具として加工しただけでなく、大小の抉りなどを施したものの一括した。

653は非常に丁寧な加工を受けたもので、やや薄手に仕上げられている。抉り部分に1個、逆側に6個の小円孔を穿っている。

604~607は棒状具を途中から大きく半截気味に抉り取ったもので、その部分に別の部材を嵌め込んでいる可能性がある。

608~610.612は角棒の先端近くに抉りを施したものである。

611は小さいながらも非常に丁寧な作りで、片側先端部に抉りを入れてその部分を凸状に作り出している。

612は棒状具の両端に抉りを入れたものである。

499と同様の天秤棒の可能性もあるが、そうするにはやや短すぎるんで否定的である。

k. 棒状木製品(614~629) 上記g~j以外の棒状具を一括した。627~629が芯材であるほかはすべて辺材を用いている。丸棒状のものと角棒状のものがある。

614~618は片側端部周辺が削りなどによって丁寧に仕上げられており、何らかの柄である可能性がある。

629は丸棒を削いて平坦部を作り、丁寧な仕上げの加工が施されたもので、形状から弓の可能性も考えられる。

(總積裕昌)

(註)

- ① 金原正明氏の鑑定による。詳細は、本文V章金原報告書を参照。
- ② 小野久蔵、奥野都『池上遺跡 第4分層の2木器層』大蔵文化財センター、1978年
- ③ 京良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』1985年
- ④ 竹内嘉子『発生の布を織る』東京大学出版会、1989年
- ⑤ 宮本長二郎氏の御教示による。
- ⑥ 註②と同じ
- ⑦ 以上、建設部材については、宮本長二郎氏の御教示によるところが大きい。
- ⑧ 宮本長二郎氏の御教示による。
- ⑨ 山田益氏の御教示による。

(3) 微高地部分の遺構と遺物

先にも記したように、大溝の所在する部分は周辺の地形の中では最も低い位置にあり、それを取り戻むかたちとなっている微高地は、南東側の丘陵から尾根状に低く延びた部分である。この部分では、堅穴住居や掘立柱建物など古墳時代から中世に至る時期の遺構と遺物が確認されている。大溝との関連の有無については後述するが、ここは大溝の空間とはまた違った居住域の部分であると考えることができよう。

1. 遺構の概要

堅穴住居は、古墳時代前期に属するものは疎らながら調査区の全域で存在するのに対し、古墳時代後期から奈良時代に属するものは、全て上段で確認されている。細長い調査区であり、今後の調査によってさらなる進展が予想されるが、ある程度の傾向はいえるであろう。

掘立柱建物は、遺構の性格上時期不明のものも數

多いが、下段にあたる大溝西側の近鉄線のすぐ脇の部分では、トレンチの幅が狭いため明確な建物配置や建物数、規模は確認できないものの、比較的大きな柱掘形をもつ大形の建物群を確認した。

中段部分を中心として一部下段部分にもかかるベルト状の範囲では、大溝上流部の南側から西側を取り巻くかたちで、古墳時代に属すると思われる比較的小さい規模の掘立柱建物が集中して認められた。ここでは、桁行2間もしくは3間の倉庫と考えられる総柱建物が目立った。また、これら建物に混じって奈良時代以降の建物も存在する。

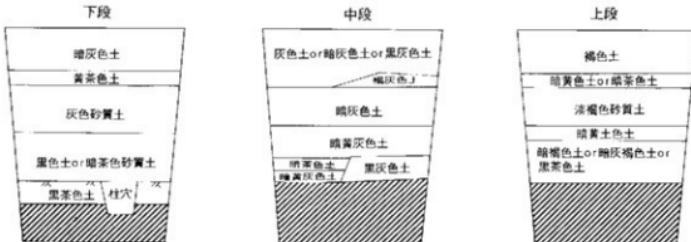
上段部分は、トレンチの幅が狭い部分が多く、単独の掘立柱建物や柱穴と思われるピットも数多く検出されたが、建物群としてまとまるには到らなかった。建物の時期も、奈良時代から中世に属するものが中心を占めるようである。ただ、古墳時代前期の比較的大形の堅穴住居は、この部分に存在する。

2. 基本層序

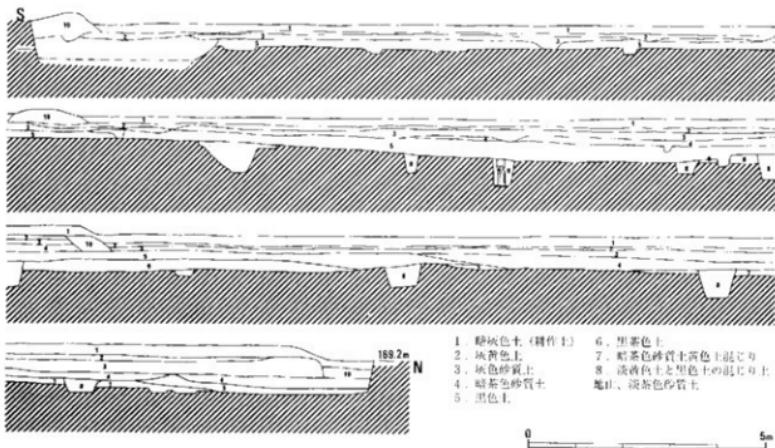
A地区は、前述のように尾根筋に沿った比較的傾斜のきつい地形であり、調査区の両端では現況で約3.5 mの比高差がある。こうしたことや、後世の水田化に伴う地形変更のため、場所による土質・色調の差異も大きいが、基本的には第1層が耕作土、第2層がその休土、第3層が旧耕作土、第4層は存在しない部位も多いがその休土、第5層が包含層、第6層上面が遺構検出面で、それぞれの層は、細分できるところも存在する。以上を基本としながらも、下段・中段・上段では個々の土質や色調、大別層内での細分などでは違いがあり、第3層によって包含

層が削られてほとんど残っていないか、痕跡程度にしか残っていない部分も存在する。以下、下段、中段、上段の順でその概要を述べよう。

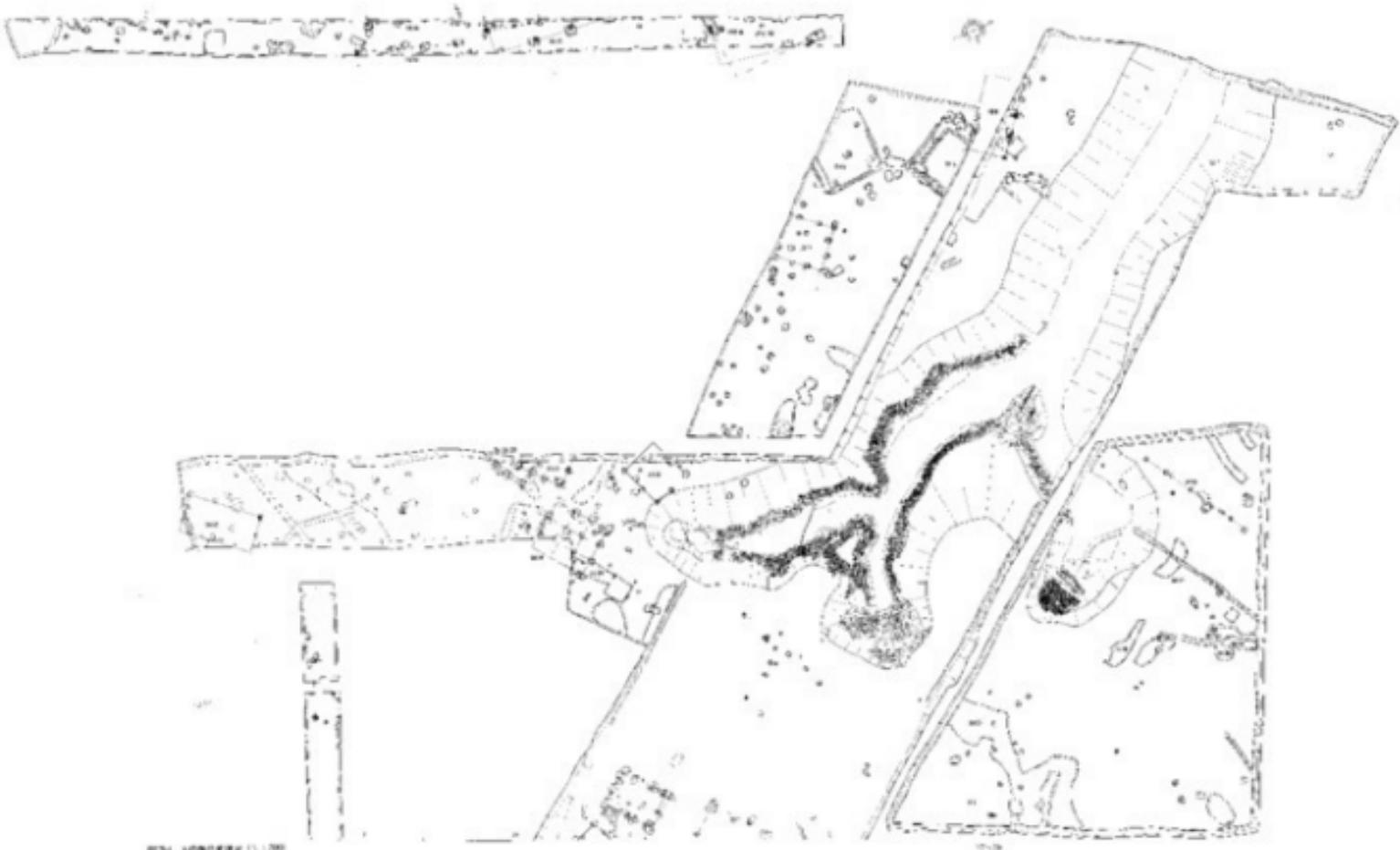
まず下段では、下段のなかでもより一段低い地形となっている大溝の部分では、旧耕作土とその床土である第3層と4層が存在せず、第2層の下に遺物包含層である暗黃灰色土がきてそれ以下には大溝の層位（大溝層位は概述）が続いている。また南側へ延びる細長いトレンチの部分（第53図参照）では、第4層が存在せず、第5層の包含層と地山に至るまでにもう1層暗茶色土が存在する。上層観察では遺構は暗茶色土上面から切り込んでいるのが確認され



第55図 A地区土層概念図



第56図 下段部分南北トレンチ西壁土層図 (1 : 100)



たが、実際に遺構検出を行ったのは地山である暗黄色砂質土であった。このトレンチでは、建物の柱掘形埋土が淡黄色土混じり黒褐色土である建物（SB 9~11・13・14）と、黒色砂質土の埋土をもつ建物（SB 12）及び淡茶色土をもつ建物（SB 15）に分かれるが、とくにSB 9~11・13~14の埋土である淡黄色土混じり黒褐色土は、城之越跡の柱掘形埋土としてはここだけの特徴的な理上であり、建物方位等の差異から多少の時期幅は考えられるものの、基本的にはよく似た時期の所産なのであろう。

中段でも4層は見られない。第5層の遺物包含層は安定しておらず、黒灰色土を基本的な土質とするものの、暗黄色土や淡灰色砂なども一定せずに存在している。遺構は第6層上面で検出できた。

上段は比較的安定した層序を示し、第1層から第6層まで部分的に土質や色調を変えながらも存在している。堅穴住居など多くの遺構は第6層上面から掘り込まれたものであるが、上層観察を行った時点で第5層から切り込んでいる新しい時期の柱穴も確認した。ただ、その面での遺構検出は行っておらず専ら遺構検出は第6層上面で行った。

3. 下段部分の遺構と遺物

下段部分を代表する遺構は大溝であるが、それについて先に述べたのでそれ以外のものについて記述する。

(1) 堅穴住居

SH 2・3 当初は1棟のみと思われたが、埋土を掘り下げ床面まで達した時点で堅穴住居に伴う周溝が二重に確認され、2棟の重複であることが判明した。ともに暗褐色の埋土で、上層観察ではいまひとつ明瞭でなかったが、SH 3に伴うと考えられるピットがSH 2の周溝を切っていたため、SH 2のほうが古いことが確認された。SH 2を拡張するかたちでSH 3に建て替えられたものであろう。

SH 2は、片側が未掘であるが、4×2.3m以上の規模をもつ。主柱穴は確認できず、床面で周溝のみの確認であるため所属遺物も明瞭でない。周溝は幅30cm程度で、コーナー部分が丸くなる。

SH 3は、6×5mの規模をもち、深さも15cm程度と比較的良好に遺存していた。建物の四隅は方形を呈する。建物の南半分で幅20cm程度の周溝が確認

された。主柱穴は確認できなかったが、東壁に接して幅95×60cm、深さ20cmの貯蔵穴風のピットが存在し、631が倒立状態で、641が正立状態で出土した。ほぼ床面に接していた高杯や壺のか、埋土からは比較的まとまつた土器の出土があった。

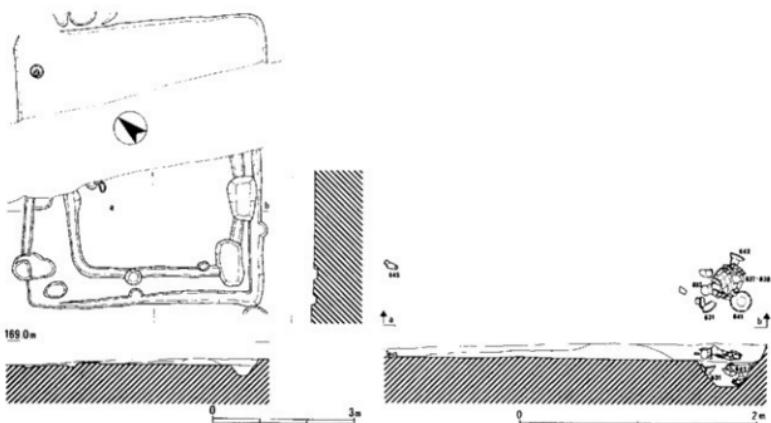
出土遺物 壺Ba(631)・Ca(630)・小形丸底壺A(632~634)・C(635)・壺Ab(637)・Ba(638~640)・高杯A(641~645)などが出土している。小形丸底壺はいずれも体部下半や底部外面をヘラケズリするもので、口径と体部径がほぼ等しい。638は、壺Baのなかでもより布留式の特徴を備えるもので、637のような口縁部がやや外反する無文のものと共に共存することは注意される。高杯Aは、脚柱部が膨らむ641~642は内面を指ナデするのに対し、比較的直線的な645は内面をヘラケズリする。以上の土器は、布留3期の前後に比定できるものであろう。SH 5・6 SH 2・3同様、床面まで検出した段階で二重の周溝が確認され、2棟の重複と判断された。検出面から床面までが5cmと浅く、埋土とともに暗褐色である。建物方位・建物の北側が全く共通し、周溝も一致することから、SH 6はSH 5の南側を60cm程度拡張したものと思われる。

SH 5は、4.7×4mの規模をもつ。主柱穴等は確認できなかった。北東隅に、貯蔵穴と考えられる1×1mの方形の穴が存在する。建物南側の遺存度は悪い。ほぼ中央部に60cm×40cmの焼土があり、炉が存在したものと思われる。

SH 6は、南西の遺存度が悪く、からうじて周溝の存在によってその規模が確認できた。SH 5の南側を拡張して、4.7×4.6mのほぼ正方形プランにしたものである。主柱穴は確認できていない。炉は先にみたSH 5で確認されたもの1基があるのみであり、SH 6でもそれが踏襲して使用されたものとも考えられる。埋土から出土した土器は古式土師器である。

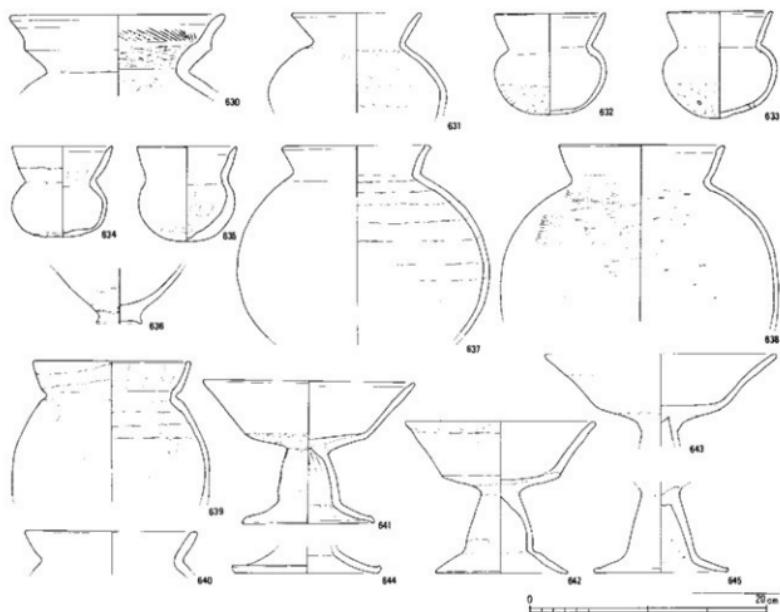
出土遺物 図示した壺Ba(646)や器台B(647)のほかに、小形丸底壺等も出土している。646は、内面のヘラケズリにより薄く仕上げられている。

SH 26 調査区の制約により、一部は検出していないが、3m×2.2m以上の規模をもつ小堅穴住居である。深さは検出面から約30cm程残っているが、1

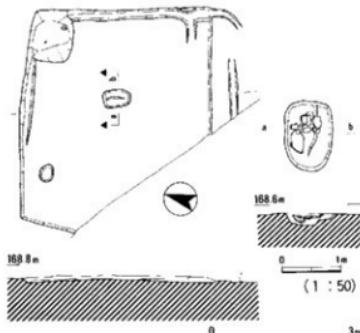


第58図 SH 2 + 3 実測図 (1 : 100)

第59図 SH 3 出土状況図 (1 : 40)



第60図 SH 3 出土遺物実測図 (1 : 4)



第61図 SH 5・6 実測図 (1 : 50)



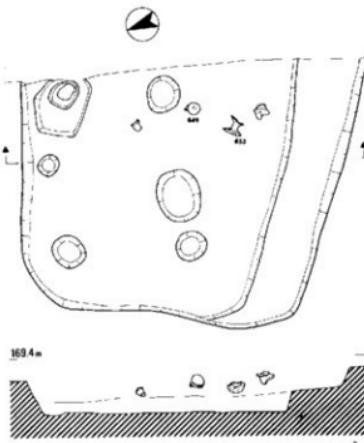
第62図 SH 5・6 出土遺物実測図 (1 : 4)

側縁部に沿ってテラス状の高まりがある。このテラスは検出面から15cmほどである。入口など何らかの施設として利用されたのか、あるいは住居の拡張があったのかもしれない。ただ、出土した遺物の多くはテラスの面より上位にあり、ここが生活上の床面であった可能性も残る。壁のやや内側で径25~30cmの柱穴が2本検出でき、この建物にともなう柱穴と考えられる。出土遺物から、古墳時代前期のものと考えられる。

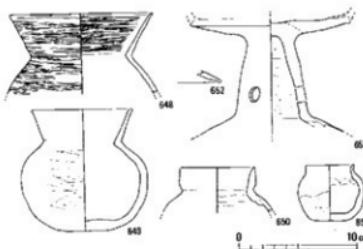
出土遺物 壺A a(648)・B a(649)・小型丸底壺D(650)・ミニチュア壺(651)・器台(651)・高杯A(653)を図示した。649は、外面をヘラケズリのまま仕上げた壺である。652は、脚部内部に布状の圧痕がみられる。653は、脚部内部をヘラケズリにより仕上げ、円孔を穿っている。

(2) 据立柱建物

S B 4 トレンチの土手をまたぐかたちで検出されたもので、全体形は知れないが、SH 2・3に重複した4間以上×2間(2.6m)の建物で、建物方位はN37° Eである。柱穴は径40cmの隅丸形もしく



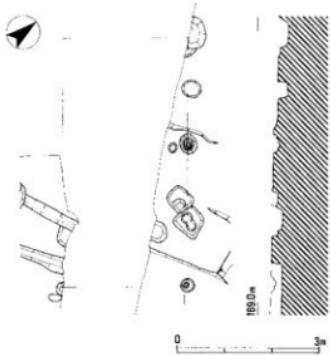
第63図 SH 26実測図 (1 : 40)



第64図 SH 26出土遺物実測図 (1 : 4)

は円形で、掘形埋土は炭混じりの灰褐色を呈し、暗褐色の柱痕跡が確認できた。柱間寸法は、桁行が1.2~1.6mと一定せず、梁行は1.3mの等間になるものと思われる。柱穴の検出面では、桁側柱列から1m外側の範囲まで土が強く固められており、部分的に焼土も存在した。当時の床面であろうか。柱穴から出土した遺物はいずれも土師器細片で、時期を限定できない。

S B 7 調査区隅の検出のため全体形はわからないが、3間以上×3間(3.1m)の建物で、建物方位はN40° Eである。柱穴は30~50cmの円形で、埋土は暗褐色粘質土である。柱間寸法は、梁行が1~

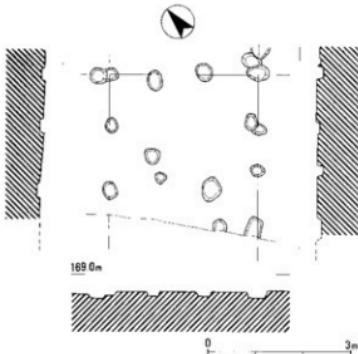


第65図 SB 4 実測図 (1 : 100)

1.1mのほぼ等間になるものと思われるが、桁行は両側柱列でややばらつきがある。

また、SB 7周辺で柱穴と思われるピットをいま少し検出しているが、何分調査区の端であるため、建物としてはまとめられなかった。

SB 9・10 同一地点で建て替えた2棟の掘立柱建物である。ともに柱穴は径50~70cmの方形を呈し、深さは50cm程残る。柱掘形の埋土は淡黄色土混じり黒褐色土である。柱穴の上層観察等に努めたが、SB 9とSB 10の前後関係はいまひとつ明瞭でない。調査区の制約により建物規模は確定できない。



第66図 SB 7 実測図 (1 : 100)

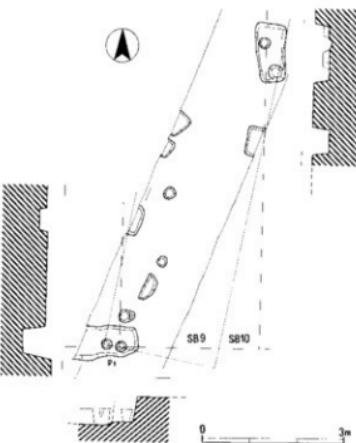
が、桁行3間以上×梁行2間以上になるものと思われる。

確認できた柱穴をもとに建物を復元すると、柱間寸法が桁行2.2m・梁行1.2mで建物方位がN 9° E前後になる建物（これをSB 9とする）と、桁行2.1m・梁行1.4~1.5mで建物方位がN 2° W前後に建物（これをSB 10とする）が想定される。ただし、少ない柱穴からの無理な復元なため、大きな偏差も予想される。

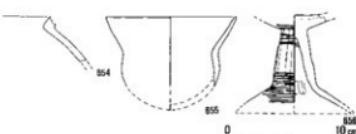
この場所には、SB 9・10とは異った黒色の埋土をもつピットも存在するが、これが建物の柱穴かどうかを含めてどのような性格をもつかは今後の隣接地の調査を待たざるを得ない。

柱穴からは、直接建物の築造時期を示すかどうかは不明ながら、掘形に混じるかたちで古式土師器が出土している。須恵器の出土はない。

出土遺物 654は壺、655は小型丸底壺Aの破片



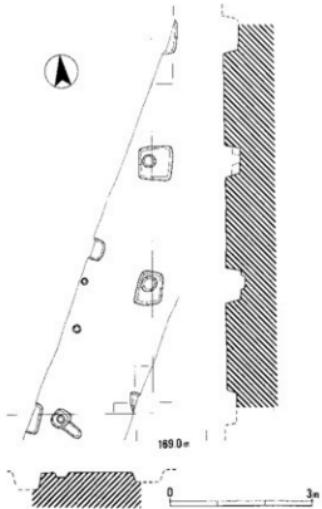
第67図 SB 9・10 実測図 (1 : 100)



第68図 SB 9・10出土遺物実測図 (1 : 4)

で、高杯A(656)は、脚部を横方向の細いヘラミガキによって仕上げている。

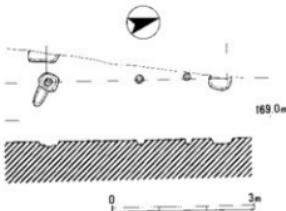
S B11 桁行3間以上×梁行1間以上の南北棟の建物と思われる、建物方位はN 5° Eである。桁行・梁行とも1間の柱間寸法は2.6~2.7m前後である。柱掘形は、1辺60cmから80cmの方形を呈し、深さは30~40cm程度である。柱掘形の埋土は、淡黄色土混じり黒褐色土である。柱穴から出土した土器は土師器細片のみで、須恵器は含まない。



第69図 S B11実測図(1:100)

S B12 2間分の柱穴が確認されただけであるが、それぞれしつかりとしており、西側へ続く掘立柱建物の東南隅にあたるものであろう。建物方位はN 12° 30' Eである。柱間寸法は1.8m等間である。柱穴は径40~50cmの方形である。掘形埋土は黒色砂質土で周辺の建物と異なっており、時期が異なるものと思われる。ただし、柱穴からの遺物は乏しく、時期を限定できないが、須恵器の出土はない。

S B13 柱間3間(6.7m)の柱列を確認した。これが桁行であるのか梁行であるのか、また東西の何方へ延びるかは不明であるが、掘立柱建物の側柱



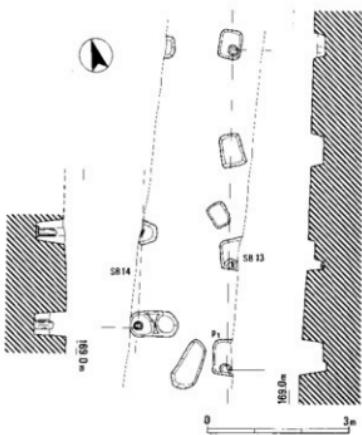
第70図 S B12実測図(1:100)

列になるものと思われる。建物方位はN 18° Eである。柱痕跡が残っており、それによると柱間寸法は2.2~2.25mである。柱掘形の埋土は、淡黄色土混じり黒褐色土である。柱穴からは、土師器細片が出土し、図示できた個体を下図に示した。周辺の建物と同様に須恵器の出土はない。

出土遺物 高杯の杯部破片(657)だけが図示された。口縁部はやや外側へ開き、内面にハケメ痕を残すものである。この土器自体は、古墳時代のものであろう。

S B14 わざかに1間分の柱列を確認しただけであるが、柱根が残存していたことや、柱掘形の埋土がS B10~13と共に通する淡黄色土混じり黒褐色土であること、その他の柱穴の遺存状況から、これも掘立柱建物として拾っておくことにした。その場合、建物の主要部分は西側のトレンチ外に存在するものと思われる。ただ、西側(現近鉄線の向こう側)は段となっており、建物をたてるスペースを考えると南北棟の建物が想定され、今回の調査ではその桁行東側柱列を当てているものと思われる。建物方位はN 19° E(推定)で、1間の柱間寸法は2mもしくは2.1mであろう。柱掘形は径50cm前後の方形で、約70cmの深さがある。P 1の柱根の下には、柱の沈み止めと考えられる礎板が存在した。礎板は長方形材で、柱根の下に据えられていたものであるが、柱根自体への切り込み等はない。出土した遺物は土師器細片のみで、須恵器の出土はない。

S B9・10・11・13・14は共に共通した埋土をもち、柱掘形も大形で、A地区の建物の中でも立派な一群である。時期を明確にはしないが、一応どの建物も須恵器は含んでおらず、土師器片のみの出土は注意される。

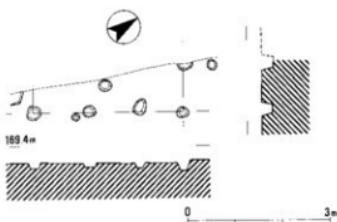


第71図 S B13・14実測図 (1 : 100)

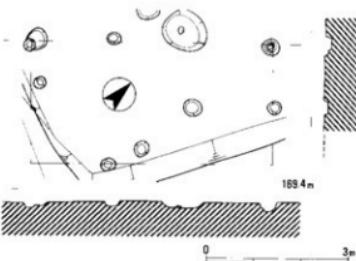


第72図 S B13出土遺物実測図 (1 : 4)

S B15 柱梁は不明だが、3間(3.1m)×1間以上で、さらに西側へ延びるようである。柱間1間が1mもしくは1.1mと小規模で、見た目にも貧弱な印象をうける建物である。建物方位は、N33°Eである。柱掘形は径30cmの円形で、埋土は淡茶色土である。柱穴から出土した遺物は土師器細片のみであり、明確な時期は限定できないが、掘形埋土が周辺の比較的新しいと思われる小溝等と類似していることから、あるいは中世にまで下ってくる建物の可能性も考えられる。



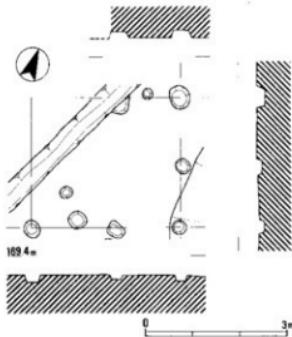
第73図 S B15実測図 (1 : 100)



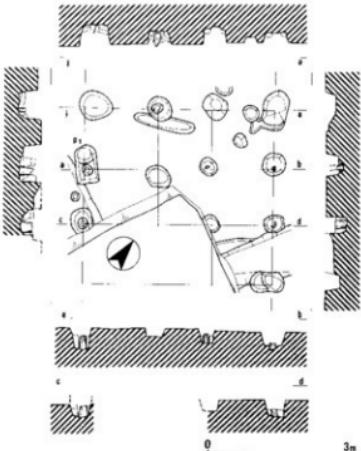
第74図 S B22実測図 (1 : 100)

S B22 調査区隅で確認された桁行3間以上×梁行2間(2.6m)の規模をもつ南北棟の建物で、棟方向はN40°Eである。柱間寸法は、桁行1.7m等間・梁行1.3m等間である。柱掘形は径30~40cmの円形で、埋土は淡褐色を呈する。出土遺物はなく、明確な時期は不明であるが、検出地点の包含層遺物や埋土の状況から、中世に属する可能性もある。

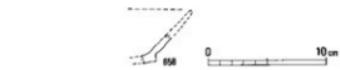
S B23 建物の片側は調査区外へ延びるが、桁行2間以上×梁行2間(2.6m)の建物で、棟方向はE23°Nである。柱間寸法は、桁行1.3+1.8mと不等間であるが、梁行は1.3m等間である。柱掘形は径30~40cmの楕円形もしくは円形で、埋土は暗褐色土である。出土遺物は、土師器細片のみで、時期を限定できない。南側柱列の東への延長部分に柱穴はなく、桁行もおそらく2間と思われ、比較的正方形に近い建物になるのであろう。



第75図 S B23実測図 (1 : 100)



第76図 S B25実測図 (1 : 100)

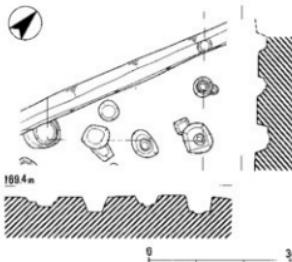


第77図 S B25出土遺物実測図 (1 : 4)

S B25 S H26に重複して建てられた3間(4m)×3間(4m)の総柱建物で、棟方向はE38° Nである。柱間寸法は1.4+1.2+1.4mである。建物の隅柱にあたる柱穴が径70cmの隅丸方形とやや大きいのに対し、その他の柱穴は径50cm程度の円形もしくは隅丸方形と若干小さい。掘埋土は、暗褐色土もしくは黒褐色土と黄灰色砂質土の互層を基本とし、径20cmの柱を据えている。埋土から出土した遺物は土器細片ばかりである。図示する個体は1点のみであったが、それが示す年代が建築時期かどうかはわからない。

出土遺物 高杯Bの破片(658)1点を図示できたのみである。土器自体は杯部屈曲部にアクセントをもつ5世紀代のものであろう。

S B27 調査区の制約により、一部は検出していないが、3間(3.6m)×2間以上の掘立柱建物を確認した。桁梁は不明であるが、棟方向はE42° Nである。建物の隅にくる柱穴のほうは柱掘形が大きく径70cmの隅丸方形を呈するのに対し、中央部にあた



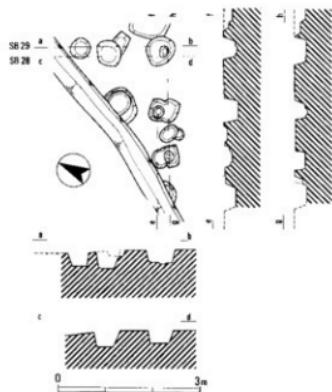
第78図 S B27実測図 (1 : 100)

る柱穴では柱掘形が径30~50cmの円形もしくは隅丸方形とやや小さい。柱間寸法は、3間確認したほうが1.2m等間、2間分確認できたほうでは1m等間である。出土した遺物は土器細片のみである。

S B28・29 ほぼ同一地点で重複しており、建て替えによるものと思われるが、調査時点ではその前後関係は明らかにしえていない。S B27とも一部重複する。ともに2間以上×1間以上の規模があり、内側の建物をS B28、外側の建物をS B29とする。

S B28は、仮に東西方向を桁行、南北方向を梁行としてみた場合、柱間寸法は桁行1.2m・梁行1.8mで、棟方向はE29° Nである。

同様に、S B29も仮に東西方向を桁行、南北方向



第79図 S B28・29実測図 (1 : 100)

を梁行として考えた場合、柱間寸法は桁行1.2m等間、梁行1mで、棟方向はE 30° 30' Nである。

重複のため詳しくは知れ得ないが、両建物とも隅にあたる柱穴がやや大きく径60cm程度あるのに対して、その他の柱穴は径40cm程度とやや小さい。純柱建物である可能性もある。また、出土遺物は土師器細片のみである。

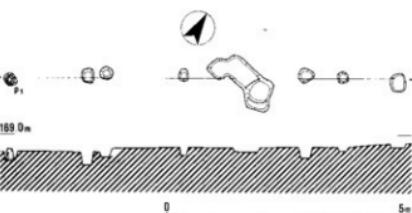
(3) 構・柱列

S A16 柱間はやや不等間であるが、柱が一列に並んでおり、柱列として拾えるであろう。主軸の方位はN 57° 30' Eである。柱握形は30~40cmの円形もしくは隅丸方形で、埋土は暗灰~黒灰色を呈する。最も西側の柱穴P 1では柱根が遺存していた。P 2からは高台をもつ土師器が出土しており、平安時代に属するものと思われる。

出土遺物 659は、土師器杯で、口縁端部がやや凹み、底部外面をヘラケズリする。660は、高台をもつ土師器杯である。これらは、平安時代初頭前後の年代を考えられるものであろう。

(4) 溝

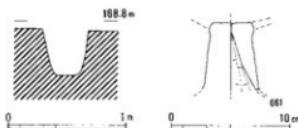
S D17 幅20~40cm、深さ30cm強の小さな溝である。直線的で、断面が方形を呈することから、人工によるものであろう。埋土は暗褐色土で、大溝との前後関係は明瞭でなかった。所属時期はいまひとつ明らかではないが、S A16とほぼ平行していることを考えるとそれと同時期の可能性があり、また埋土から古墳時代前期の高杯片が一点出土していることを重視すると古墳時代に遡ることも考えられる。



第80図 S A16実測図 (1 : 100)



第81図 S A16出土遺物実測図 (1 : 4)



第82図 SD17断面図 (1:40) 及び SD17出土遺物実測図 (1 : 4)

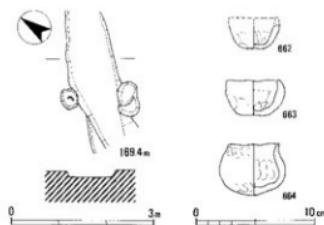
出土遺物 高杯の脚柱部の破片(661)が出土したにとまる。外面はほぼ立直し、内面をヘラケズリする。

S D21 幅1mから2mの自然流路。深さは5~8cmと浅く、溝というより複流水の通ったあとという感がある。流れの先端には、大溝の第2源流部があり、ここに集まつた水は自然とそこへ浸透していくのであろう。

S D24 調査区外へ延びるが、長さ3m以上・幅1m・深さ15cmの溝である。断面形は緩いU字状を呈する。埋土から出土した土器は手捏ね土器3点が出土しただけである。

出土遺物 いずれも(662~664)手捏ねによる小さな土器である。662と663は無頬、664のみ短い口縁部が付くが、どこまで意識されたかは疑わしい。

S D19 現状で幅60cm、深さ10cm弱の溝である。実際にはいま少し深いものであったのであろう。溝底部の断面形は大きく張を描いたようなカーブを呈する。片側(右岸部)の肩部に60~80cm間隔で径3~5cm・長さ40~60cmの細長い杭を打ち込み、それを



第83図 SD24実測図 (1:100) 第84図 SD24出土遺物実測図 (1 : 4)

押さえとして、長さ150cm・幅20cm程度の板材を溝の護岸として横に立て掛けであった。下流部は後世の削平のため途中で途切れていった。S E 20を壊して掘削されており、S E 20出土の須恵器片とS D 19出土の須恵器片（S E 19よりも下流部で出土）が接合しており、S E 20廃絶後の平安時代初頭を前後する時期に造られたものであろう。

出土遺物 須恵器杯(665~666)が出土した。666は、薄手で高台が底端部よりもかなり内側に付く。杯底部内面の器面は滑らかで、墨痕が認められ、硯に転用されたものと思われる。665内面も、墨痕こそないものの器面は滑らかである。

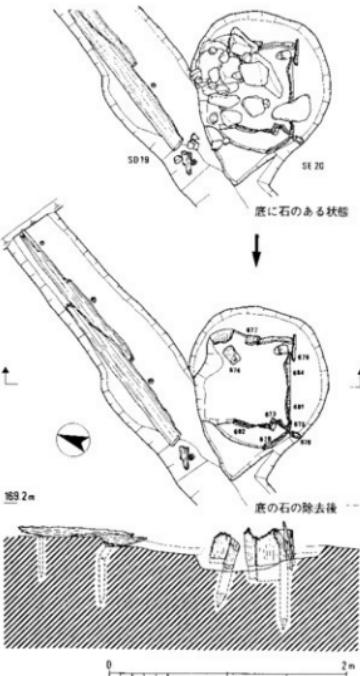
(5) 井戸

S E 20・S D 19によって一部壊されているが、径1.2mの円形の掘形をもち、内部に径75cmの方形の木枠をもつ。この木枠は、内側に径10cm・長さ60~80cm程度の頑丈な杭を地山の青灰色砂質土に30~60cm程打ち込み、それを支えとして、幅10~30cm・残存長40cmの長方形の板材を1辺につき4枚程度内外に若干の重なり部分をもたせながら立たせたものである。この板材自身もそれぞれ土と接する先端部は尖っていて10cm前後打ち込まれている。廃絶時には礫が放り込まれたようで、木枠を壊すかたちで多くの礫があり、これに混じって奈良時代後半の土器が出土した。

出土遺物 須恵器杯蓋(667~668)と杯身(669~672)、それに井戸本体の構造材として杭(673~676)と枠材(677~684)がある。杯蓋667は、内面に墨痕をもち、硯として転用されている可能性がある。杯身669は高台をもたないもので、杯部外面上に墨痕が付着している。杭は、芯材を利用して丸杭としたもの(674と676)と、辺材を利用して角杭としたもの(673と675)とがあり、角材の杭は転用されたものであろう。枠材はいずれも板目もしくは追程目の長方形板の短辺部先端を薄く仕上げたもので、それ自体打ち込まれることが可能となっている。

(6) 土坑

S K 8 長径2.4m以上×短径1.5m、深さ65cmの不定形の土坑である。埋土は黒褐色土で、粘性が少ない。遺物は出土していない。調査中、若干量の湧水があった。



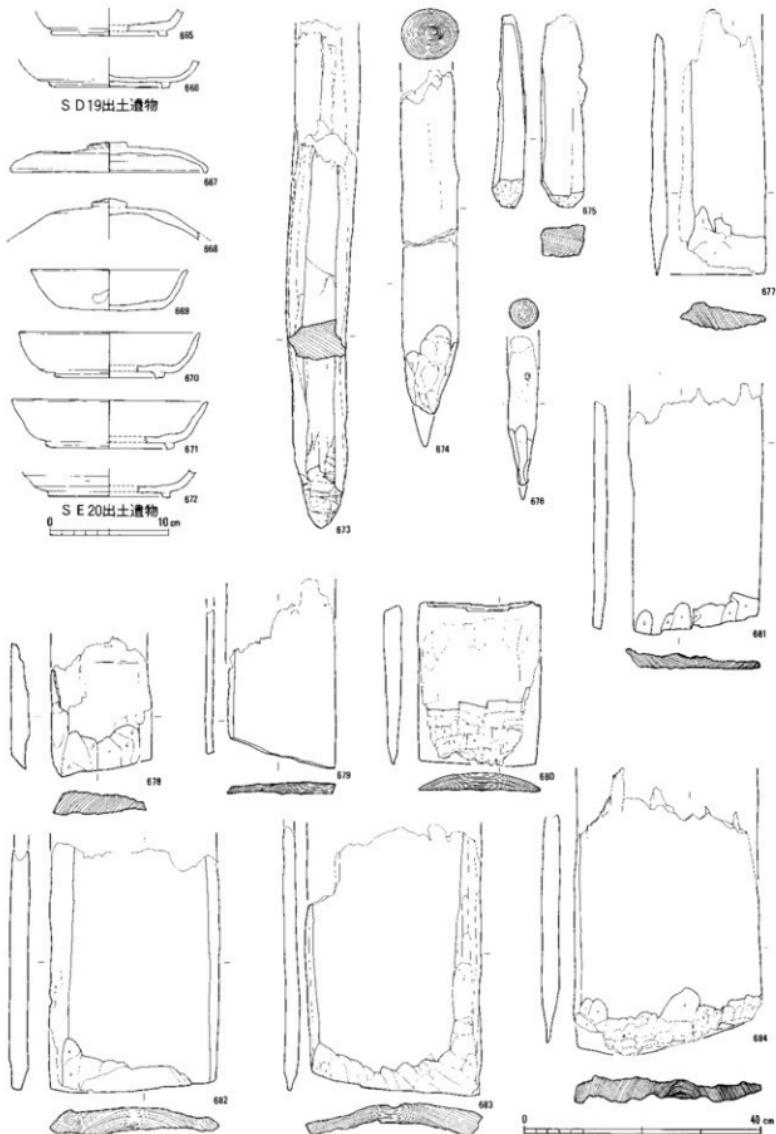
第86図 S D 19・S E 20実測図 (1:40)

S K 18 長径2.3m、短径0.7mのややいびつな長方形を呈する。削平のため遺存度が悪く、深さは5~9cm程残っていたのみである。須恵器杯片と側縁加工を施した木製遺物が出土した。遺構の具体的な性格は不明である。

出土遺物 須恵器杯片(685)は底部を残すもので高台は底端部よりやや内側に付き、わずかに外側へ開く。判読不明であるが、わずかに墨書きが残る。686は木製の梢円形小板で、側縁部を丁寧に削ぎ落としたものであるが、用途は明確でない。

(7) 包含層出土遺物

687は土器部の皿もしくは杯の底部であるが、内面に墨書きをもつ。「沖」もしくは「汎」と判読できる可能性がある。688は白磁碗片で、上部が微妙に



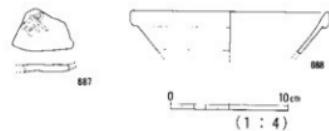
第87図 S D19・S E20出土遺物（土器は1：4、木製造物は1：8）、673～684はS E20の杭・枠材

内弯し、玉縁の口縁部をもつ。

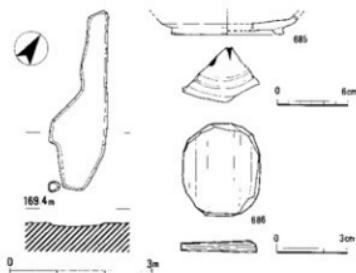
689と690は木製遺物で、出土箇所は多分に水氣の多い土壤であった。下段部分の遺物とはいえ出土地であるA-15は中段との境に近く、下段では付近に建物を確認していないことから中段に所在した建物に伴っていたものと考えられる。

689は梯子であるが、腐蝕・欠損が著しい。側縁部に2ヵ所程二次的な丸い切り込みらしいものがみられる。

690は、材の両端部と片側側縁部が欠損しており腐蝕も激しいが、一本を「凹」状に細長く削り込んだものと思われる。木の節の部分は腐っておらず当初の切断面を残しており、これをもとに復元すれば底面はかなり正確に水平に作出されていることが観察できる。大溝出土の木製品のなかでは553とその構造が類似しており、種もしくは建物建築時に高低を水準する「水盛り」の可能性がある。^②



第88図 SK 8 実測図 (1 : 100)



第89図 SK 18 実測図 (1 : 100) 第90図 SK 18 出土遺物実測図

第91図 下段包含層出土遺物実測図 (1 : 8)

4. 中段部分の遺構と遺物

(1) 穴穴住居

S H54・55 2棟の堅穴住居の建て替えによる重複と思われ、切り合い関係からS H54が古くS H55が新しい。

S H54は、 5.8×5 mの規模をもつ方形プランの堅穴住居で、建物のコーナーは隅丸になる。特に南側は削平のため遺存状態が悪く、良好なところでも5cm程がかろうじて残っている程度であった。北側部分はS H55に切られていで本来の床面がとばされているが、北東隅に存在する貯蔵穴らしき穴はS H54に伴うものであろう。建物の南東寄りのところで古式土師器が出土したことから、古墳時代前期に属するものと思われる。

出土遺物 壺体部(694)、壺Aa(691)、高杯A(693)、小形鉢A(692)が出土した。壺の口縁部はやや内窪気味になりつつも端部につまみ上げを残すもので、高杯は杯部が深く、脚部の屈曲も明瞭で、全面に丁寧なハラミガキを施したものである。また、鉢はいわゆる「有段鉢」である。これらの土器は、城之越遺跡全体のなかでも古く位置づけられるものといえる。布留1～2期に相当しよう。

S H55は、やや横長であるため堅穴住居とするには若干の疑問もあるが、一応長径6m×短径3.8mの長方形プランの堅穴住居であろうと思われる。住居のコーナーは、かなり方形に近くなる。こちらもあまり遺存状態はよくないが、北側には周溝が存在し、北西隅のコーナーから住居外へ抜け、SD44へとつながる。出土遺物はないが、S H54と同一地点に古地しておらず、S H54に連続する時期の住居と思われる。

(2) 挖立柱建物

S B30 調査区の幅に制約されているものの、柱穴の位置関係や埋土の共通性、柱根の遺存等より挖立柱建物と考えてよいであろう。建物の規模は明確ではないが、トレンチ間のアゼの部分にもいまひとつ柱穴を想定すると、桁行1間以上×梁行2間(4m)の南北棟の掘立柱建物になるものと思われる。そうした場合、柱間寸法は桁行1.7m前後・梁行2mで、建物方位はN21° 30' Eである。柱穴の掘形は径50cmの隅丸方形で、埋土は黒褐色土である。柱

穴からの出土遺物はない。

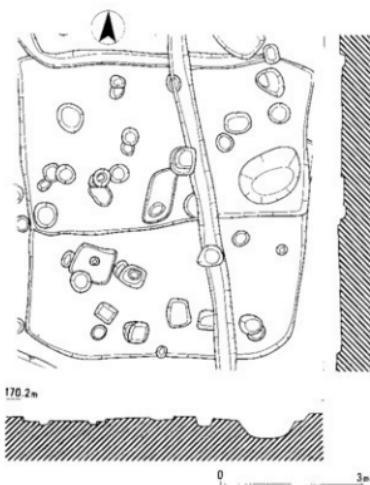
S B31 桁行3間(3.3m)×梁行2間(2.5m)の規模をもつ東西棟の建物で、棟方向はE36° 30' Nである。同一地点でS B32と重複するが、切り合い関係からS B31のほうが先行する。柱間寸法は桁行1.1m等間・梁行1.25m等間である。建物の隅柱である柱穴の柱掘形が径50～60cmの方形であるのに対し、それ以外の柱穴では径30～40cmの隅丸方形となる。埋土は黒褐色土もしくは黒色土である。柱穴からの出土遺物は、土師器片のみであり、時期比定は難しい。

S B32 S B31と重複しており、おそらくS B31を建て替えた建物と思われる。桁行3間(3.6m)×梁行2間(2.6m)の東西棟の建物で、S B31よりも僅かに大きい。棟方向はE40° Nで、S B31よりも東へ3° 30' 振っている。柱間寸法は、桁行1.2m等間・梁行1.3m等間である。柱掘形は、建物の隅柱である4本の柱穴が径50～60cmの方形もしくは隅丸方形であるが、そのあいだの柱穴は径30～40cmの方形もしくは隅丸方形である。隅柱のうちの3本は、建物主軸に対して45° 程振れたプランを呈している。埋土は黒褐色である。S B33と南側桁行の柱筋を備えている。出土遺物は、土師器縦片のみであり、それからは時期を限定出来ないが、同一建物群を構成すると思われるS B33からは須恵器片の出土もあり、古墳時代後期以降の遺物と思われる。

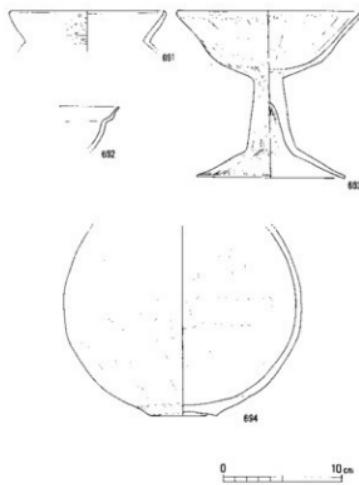
S B33 若干検出できなかった柱穴もあるものの、桁行3間(4m)×梁行3間(3.8m)の正方形に近い東西棟の建物で、棟方向はE39° Nである。梁行の東側から2番目の柱筋に束柱をもつ。柱間寸法は、桁行が東側から1.3 + 1.2 + 1.5mとやや不等間で、梁行が1.4 + 1 + 1.4mと中央間が狭い。桁行・梁行ともに柱筋はまっすぐ通らない。梁行の東側から3番目の柱筋には束柱は検出していないものの、建物の全体形は方形プランを呈しており、倉庫的な建物が考えられる。建物の隅柱となる柱穴は柱掘形が70～90cmの隅丸方形と大きいのに対し、その他の柱穴は径30～40cmの方形もしくは円形とかなり小さくなってしまっており、束柱と思われる。掘形埋土は褐色土もしくは黄褐色土で、灰色～黒色粘質土の柱痕跡をもつ。南側柱列は、S B32の南側柱列と柱筋を備え

282-23

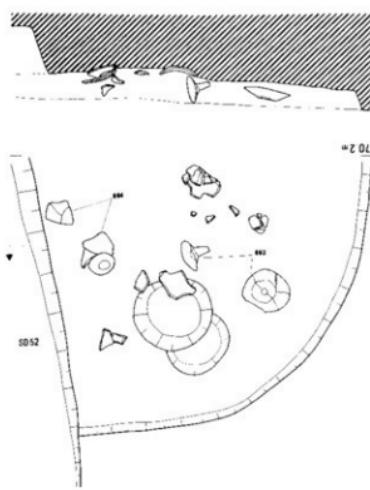




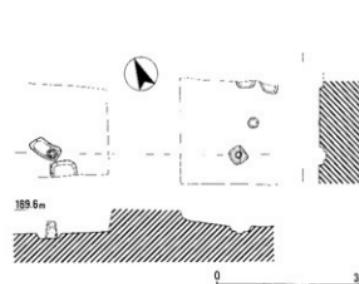
第93図 S H54・55実測図 (1 : 100)



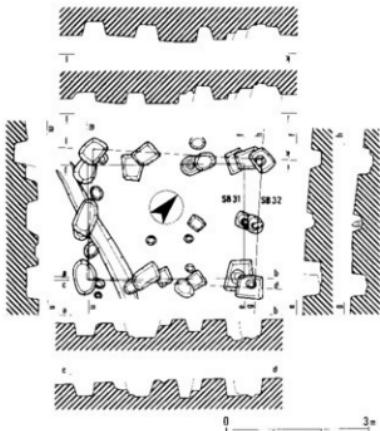
第95図 S H54出土遺物実測図 (1 : 4)



第94図 S H54出土状況図 (1 : 20)



第96図 S B 30実測図 (1 : 100)

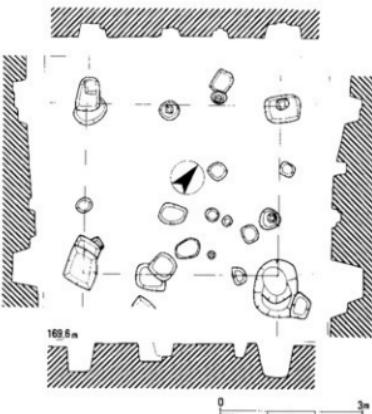


第97図 S B31・32実測図 (1 : 100) L=169.6m

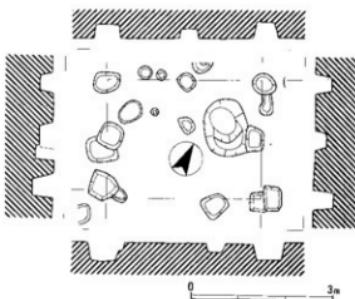
ており同一の建物群を構成するものであろう。柱穴からの出土遺物は土器片を中心とするが、東柱からは須恵器細片が1点出土しており、遅っても古墳時代後期以降の建物であろう。

S B34 桁行の南側柱列の中央柱が検出できなかつたが、桁行2間(3.5m)×梁行2間(2.4m)の東西棟の建物で、棟方向はE24°Nである。梁行の中央柱がともに両側の柱穴より小さく、やや内側へ入っている。柱間寸法は、桁行1.75m等間・梁行1.2m等間である。柱掘形は50~60cmの隅丸方形であるが、桁行の中央柱は径30cmの方形とやや小さい。掘形埋土は炭泥じりの暗褐色土である。S B36・37・42とは建物の振れを同じくし、同一の建物群を構成する可能性がある。S B33と一部重複し、切り合い関係からそれよりも新しく、古墳時代後期以降の建物であろう。ただし、この建物自体の柱穴からの出土遺物はない。

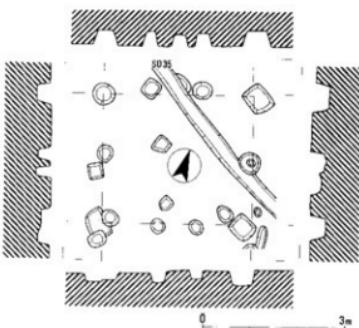
S B36 桁行3間(3m)×梁行2間(2.8m)の正方形に近い東西棟の建物で、棟方向はE22°Nである。柱間寸法は、梁行が1.4m等間であるが、桁行は南側柱列と北側柱列で異なり、南側柱列が東から1.1+0.8+1.1mと中央間がやや狭いのに対して、北側柱列では東から1+1.2+0.8mと中央間のは



第98図 S B33実測図 (1 : 100)



第99図 S B34実測図 (1 : 100)



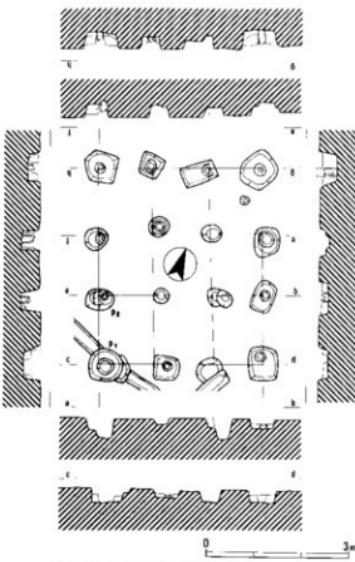
第100図 S B36実測図 (1 : 100) L=169.8m

うが広い。柱穴は、建物の隅柱である4本の柱の掘形が径50cmの隅丸方形と大いのに対し、間に入る柱穴は径30~40cmの方形もしくは隅丸方形と貧弱なものが多い。また、柱穴のプランも、隅柱は建物主軸に対して45°振れたものとなっている。掘形埋土は、黒色もしくは黒褐色土である。柱穴からの出土遺物は土師器片ばかりで、須恵器は存在しない。東隣のS B37とは建物方位も共通していてセットで存在している可能性が強く、S B34・42も建物の振れをほぼ同じくしている。

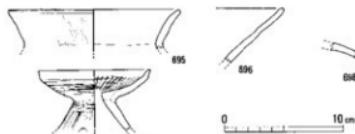
S B37 桁行3間(4.2m)×梁行3間(3.3m)の南北棟の純柱建物で、棟方向はN22°Wである。ほとんどの柱穴で柱根もしくは柱痕跡を検出することができた。それによると、若干の不揃いはあるものの柱間寸法は、桁行1.4+1+1.4m・梁行1.15+1+1.15mで、ともに中央間がやや狭い。柱穴の大きさには3種類認められる。まず、建物の隅柱である4柱穴がいちばん大きく径70~80cmの隅丸方形もしくは隅丸長方形、次にそれ以外の側柱8個が長径60cmの隅丸長方形、最後に東柱4個が最も小さく径40cm程度の円形もしくは方形である。掘形埋土は黒褐色土である。西隣のS B36と建物方向が同じでセットになるものと思われ、S B34・42も同一建物群になる可能性がある。柱穴掘形からの出土遺物は古式土師器を中心とする土師器片が中心であるが、6世紀代の須恵器杯蓋も含み、建物の築造時期はその時期以降と思われる。

出土遺物 須A(695)、高杯片(696)、器台(697)といった古式土師器のほか、須恵器杯蓋片(698)がある。697は、杯外部横方向に細ヘラミガキ、杯内部内面と脚部外面に縱方向の太ヘラミガキ後横方向の横ヘラミガキを施し、脚部と杯部は中空で、脚部中央に円形スカシをもつものである。698は、棱の部分が沈線化したもので、6世紀中葉から後葉にかけての所産であろう。

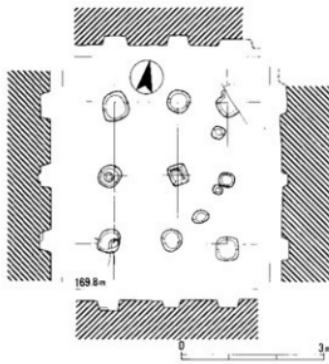
S B38 桁行2間(3m)×梁行2間(2.4m)の小さな南北棟の純柱建物で、棟方向はN8°Wである。柱間寸法は、桁行1.5m等間・梁行1.2m等間である。この建物でも、建物の隅柱の柱掘形が径50~60cmの方形もしくは隅丸方形であるのに対して、それ以外の柱穴では径40~50cmの円形もしくは隅丸方



第101図 S B37実測図(1:100)



第102図 S B37出土物実測図(1:4)



第103図 S B38実測図(1:100)

形と僅かに小さい。掘形埋土は、黒色もしくは黒褐色土である。出土遺物は、土師器片ばかりで、須恵器等の出土はない。

S B39 桁行3間（4m）×梁行3間（3.5m）の南北棟の総柱建物で、棟方向はN 3° Eである。柱間寸法は、桁行1.5+1.2+1.3m・梁行1.15+1.3+1.15mと不等間である。この建物については、とくに建物の構柱の掘形が大きいというわけではなく、側柱全体が径50~70cmの方形もしくは隅丸方形と大きいのに対し、東柱が径40cm程度の隅丸方形とやや小さい。掘形埋土は黒色もしくは黒褐色土である。柱穴からの出土遺物は土師器片のみであるが、柱穴と重複した土坑状のピットからは古式土師器が出土した。

出土遺物 図示したのはいずれも建物のはば中央にあった柱穴と重複する土坑状のピットからのものである。699は甕Cの口縁部片、700は器台で、調整は縦方向の比較的太いヘラミガキによる。

S B40 調査区の制約により一部分を検出しだけであるが、1間以上×2間以上の建物で、棟方向はE 2° 30' Nである。仮に東西方向を桁行として考えた場合、柱間寸法は桁行1.6m程度・梁行1.2+1.2mである。隅柱の柱掘形が径60cmの隅丸方形であるのに対して、その他の柱穴は径40cmの方形もしくは円形である。掘形埋土は黒色もしくは黒褐色土である。S D52と重複しており、切り合い関係からS B40のほうが新しい。側柱の掘形がしっかりしていることから、総柱建物である可能性もある。柱穴からの出土遺物は、土師器細片のみであるが、須恵器等の出土はない。

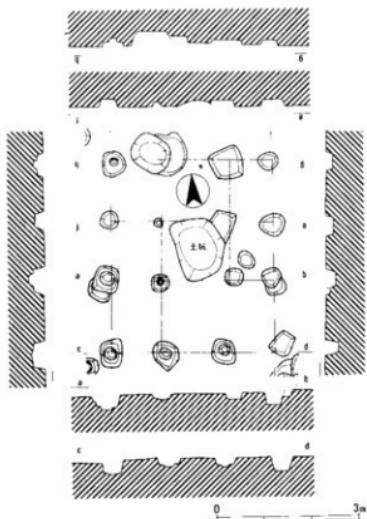
S B41 調査区の制約や、検出できなかった柱穴もあるが、一応桁行2間以上×梁行2間（3.3m）の東西棟の建物と思われ、棟方向はE 9° Nである。桁行東から2筋目の中央に東柱が配置されている。柱間寸法は、桁行2m・梁行1.65mである。隅柱列の柱穴は径40cmの隅丸方形もしくは円形であるが、東柱は径20cmと小さい。掘形埋土は、黒色もしくは黒褐色土である。出土遺物は、土師器細片のみであり、明確な時期比定は難しい。

S B42 調査区の制約により、3間（3.9m）×1間分が検出されたのみであり、建物の規模や向きは

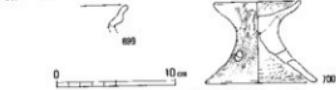
明確にはしない。建物の東側柱列が出ているが、最も南側の柱穴掘形は他に比べると小規模であり、そのことや柱間間隔を考慮すると、梁行2間の東西棟の身舎に南面庇をもつ建物である可能性を考えられる。そうした場合、柱間寸法は、桁行1.8mで、梁行は2.2m等間の身舎部分に1.5mの庇が南側へ延びた建物となる。ただし庇としての南への一間分は柱穴1個の存在のみで判断したものであり、そうならないかもしれない。棟方向はN 24° Wである。柱穴は、身舎部分が40~60cmの隅丸円形で、庇部分は径30cm弱の円形である。掘形埋土は、黒褐色土である。柱穴からの出土遺物は、土師器片のみであり時期を限定するには至らなかった。ただし、建物方向の共通するS B34・36・37をS B42と同じ建物群であるとみた場合、S B37柱穴からは須恵器片が存在することから、S B42もS B37と同じ古墳時代後期以降の建物ということになろう。

S B45 検出できなかった柱穴もあるが、桁行3間（4.5m）×梁行2間（2.8m）の南北棟の建物で棟方向はN 14° Wである。柱間寸法は、桁行1.5m等間・梁行1.4m等間である。建物の四隅にくる柱穴（うち2個は検出できなかった）が長径70cmの隅丸長方形になるのに対して、その他の柱穴では径40~50cmの隅丸方形となる。掘形埋土は暗褐色土である。S B46と一部重複するが、切り合い関係からS B45のほうが古い。出土遺物は、土師器細片のみである。

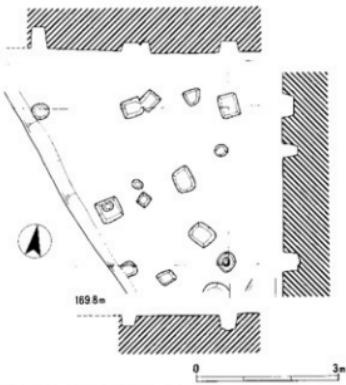
S B46 北西側の柱穴は検出面の状況が悪く検出できなかったが、桁行5間（9m）×梁行2間（4.5m）の東西棟の建物であるが、両側の妻1間分が庇であるため、身舎桁行は4間（7.5m）である。棟方向は、N 45° Wである。身舎内では、両妻側の中央柱から1.2m内側へ入ったところには径40cm程度の東柱が存在する。柱間寸法は、桁行が南側から1.5（庇）+1.5+2+2+2m・梁行2.2m等間である。柱穴は、径30cm~60cmの隅丸方形もしくは円形である。掘形埋土は褐色土もしくは灰褐色土のやや砂質がかったもので、周辺の掘立柱建物の柱掘形埋土とは異なっている。柱穴からの出土遺物は土師器片とともに須恵器片も存在しており、建物の上限を示しているが、柱穴や掘形埋土の特徴からさらに下ることも考えられる。



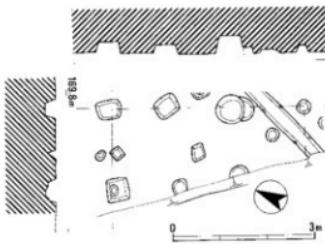
第104図 S B 39実測図 (1 : 100) L = 169.8m



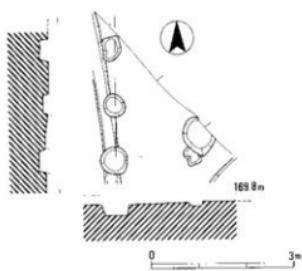
第105図 S B 39土坑出土遺物実測図 (1 : 4)



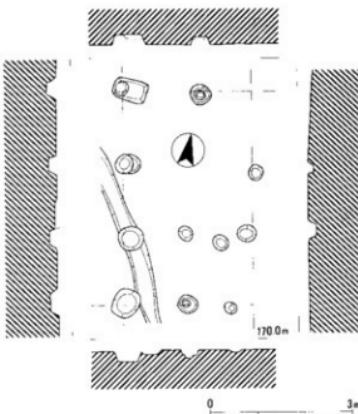
第107図 S B 41実測図 (1 : 100)



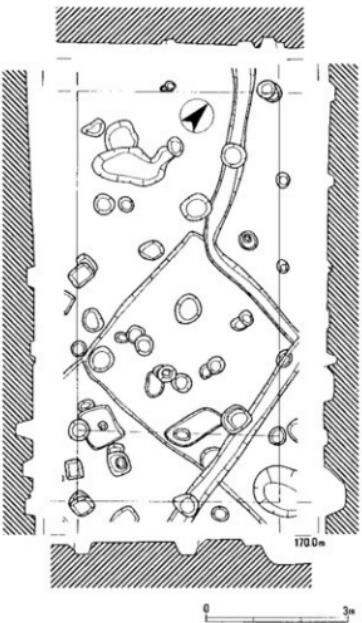
第108図 S B 42実測図 (1 : 100)



第106図 S B 40実測図 (1 : 100)

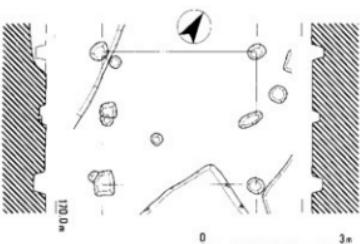


第109図 S B 45実測図 (1 : 100)

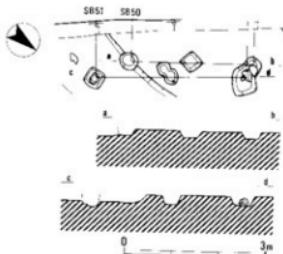


第110図 SB46実測図 (1 : 100)

SB47 桁行1間(3.3m)×梁行2間(3m)の小規模な建物で、棟方向はE34°Nである。ただし、現状では桁行の柱穴は1箇しか検出できなかったものの、削平や試掘による搅乱などを考慮すると、本来はSB53のように、小さい柱穴が間に2本入って3間の桁行であったのかもしれない。梁行の柱間寸



第111図 SB47実測図 (1 : 100)



第112図 SB50+51実測図 (1 : 100) L=170.0m

法は1.5m等間である。柱穴は30~40cmの円形で、埋土は褐黒色土である。切り合い関係から、SD49よりも新しいが、柱穴からの出土遺物は土師器細片のみである。

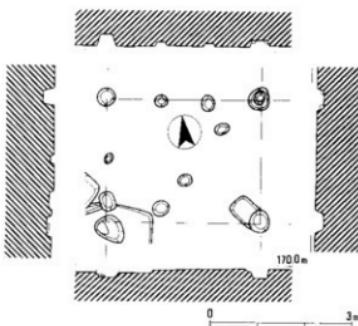
SB50+51 調査区の端に存在するため、ともに2間分の柱穴を検出しただけであるが、東西棟の掘立柱建物の北側柱列(梁行)であると思われる。

SB50は、長さ2.6mで、その軸線はE35°Nである。柱間寸法は1.3m等間である。柱穴は径40cmの円形で、北側の柱穴内には石が据えられていた。

SB51は、長さ3.3mで、その軸線はE37°Nである。柱間寸法は1.65m等間である。柱穴は、両側が径50cmの方形・中央が径25cmの方形で、北側の柱穴内には石が据えられていた。SB50よりも、柱間・柱穴ともに若干大きくなっている。

前後関係は明確でなかったが、SB50とSB51の北側の柱穴は重複しており、そこから黒色土器A類の楕の破片が出土している。従って、建物の時期は平安時代に属するものと思われる。

SB53 桁行3間(3.3m)×梁行2間(2.7m)の東西棟の建物で、棟方向はE8°Sである。柱間寸法は、桁行1.1m等間であるが、梁行は南から1.5+1.2mと不等間である。柱穴は、径40~60cmの方形もしくは隅丸方形であるが、検出できなかったものや柱痕跡だけを掘ってしまったものなども存在する。埋土は灰色もしくは灰白色土であり、中段部分に存在する多くの掘立柱建物の埋土の状況とは異なっている。埋土からは須恵器や土師器の破片とともに瓦器片も出土しており、建物は中世に属するものと思われるが、瓦器を含んでいた柱穴は重複のあるもの



第113図 S B53実測図 (1 : 100)

であるため混入の可能性もあり確定できないが、埋土からも中世としてよいものであろう。

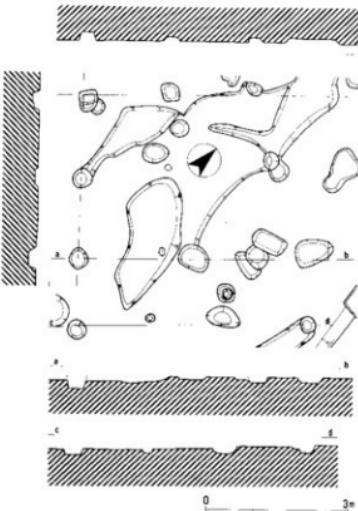
S B59 梁行3間(5.15m)×梁行2間(3.5m)の東西棟の建物で、棟方向はE43°Sである。柱間寸法は、梁行1.75m等間・梁行1.75m等間である。柱穴は、径30~40cmの円形で、埋土は褐色土もしくは茶褐色土である。埋土からは瓦器片が出土しており、中世に属するものと思われる。

(3) 桁・柱列

S A60 S B59の南桁間柱列の約1.5m外側に存在する3間分の柱列である。柱間寸法はややばらつきがあり、東から1.5+1.5+2mである。棟方向はN 41°30' EとS B59とはほぼ同じで、それに伴うものであろう。そうした場合、中世に属するものと考えられる。

(4) 溝

S D35 幅30cm、深さ20cmの小溝で、断面は逆台形を呈する。途中で途切れてはいるものの、S D44に連続する可能性も考えられる。切り合ひ関係から、



第114図 S B59-S A60実測図 (1 : 100) L=170.2m

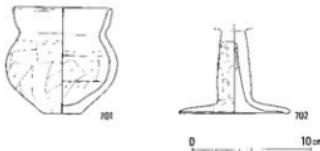
S B31・32・36・37よりも古い。出土遺物に須恵器は含んでおらず、出土した土師器から古墳時代前期に属するものと思われる。

出土遺物 壺Ba(701)と高杯A脚部(702)を図示した。701は胴部内外とともにヘラケズリ気味の板ナデ調整で、702は脚柱部と脚基部の屈曲が強い個体である。いずれも古墳時代前期の所産である。

S D43 幅40cm、深さ20~30cmの直線的な小溝である。埋土は灰色砂で、そこには小さな竹を束にして敷き詰めてあった。明確な出土遺物はないが、それらの特徴から近現代の農業用の暗渠であろう。

S D44 S H55から延びる溝で、おそらく堅穴住居の排水溝も兼ねていたのである。深さは削平のため現況では3~8cmと浅いが、幅40~50cm、延長約7m存在する。途中途切れているが、そのまま延長していくとS D35のほうへ向かっており、両者は本来は同一の溝であった可能性も考えられる。S H55と接続することや出土遺物から古墳時代前期に属するものであろう。

S D52 幅40cm、深さ15cmの溝で、約39mにわたって調査区をほぼ直線に縦断する。溝の主軸は、部分



第115図 S D35出土遺物実測図 (1 : 4)



第116図 SD58出土遺物実測図 (1 : 4)

的に若干振れるものの、ほぼN 4°～5°Wを前後するところにおさまる。

SD58 S B59付近から流れ出る幅1～1.5m・長さ20m以上の溝であるが、削平のため5cm程度の深さしか残っておらず、途中部分に途切れている。所々やや深い落ち込みがみられ、どちらかというと自然流路に近いものであろう。埋土からは須恵器・土師器・綠釉陶器・青磁・瓦器の破片が出上しており中世に埋まつたものであろう。

出土遺物 703は青磁碗底部、704は綠釉陶器碗底部である。704は須恵質地のうえに全体に釉がかかつたもので、東濃産の可能性がある。

SD49 幅0.6m～1.5m・深さ20cm程度で、埋土は淡灰褐色砂質土である。SD43と接する下流部では検出面の状況が悪く、あまり明確ではなかった。平安時代と思われるSB50～51に切られており、それ以前のものと思われるが、それ以上については出土遺物がなく、時期を特定できない。SE48と接しており、一連の施設であったと思われる。

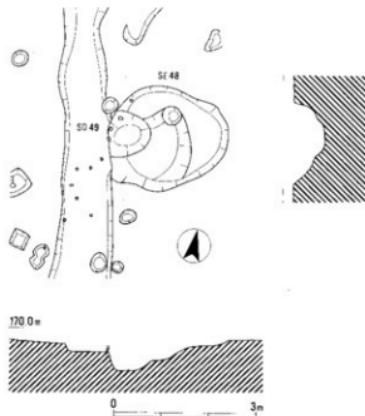
(5) 井戸

SE48 長径2.5×短径2.3m・深さ60cmの比較的浅い素掘りの井戸である。調査時点でもかなりの湧水があった。井戸の断面形は摺鉢状を呈している。SD49との境には細い杭が打ち込まれており、この造構がSD49と一連のもので、そこに水門的な施設があったものと思われる。この辺の地下水位はかなり高いらしく、この程度の深さでも充分水が得られたのだろう。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

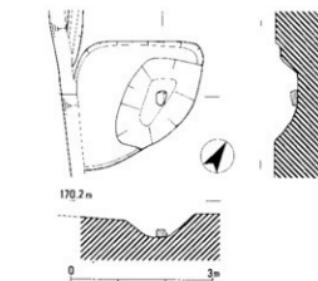
(6) 土坑

SK57 長径3m以上・短径2.5m・検出面からの深さ50cm弱の土坑である。出土遺物はなく所属時期は不明であるが、SD52のすぐ脇に存在しており、土坑としたが、SE48と同様の比較的浅い湧水を溜めるための井戸状の穴である可能性が考えられる。

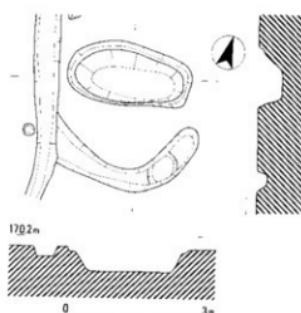
(7) 不明構



第117図 SE48・SD49実測図 (1 : 100)



第118図 SK57実測図 (1 : 100)



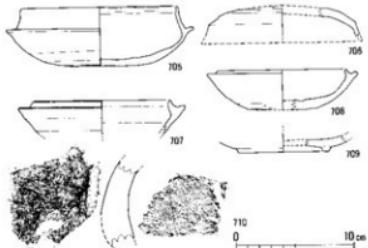
第119図 SZ56実測図 (1 : 100)

S Z56 長径2.6m・短径1.3m・深さ50cmの楕円形の土坑の外周側に、幅50~60cmのL字状の溝が廻る。土坑からは瓦器も出土しており、中世に属するものと思われるが、性格については明確でない。

(8) 包含層出土遺物

このうち須恵器杯身(705~708)は、建物との関連は不明ながら掘立柱建物検出時に出土したもので、705と708はS B41や42の周辺、706はS B36・37・41の周辺、707はS B34・38の周辺から出土した。いずれも古墳時代後期の土器である。

710は平瓦片で、凹面に布目をもつ。



第120図 中段部分包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

5. 上段部分の構造と遺物

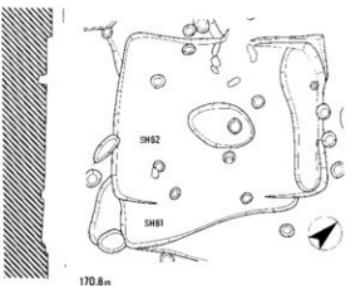
(1) 壁穴住居

S H61・62 2棟の壁穴住居の建て替えによる重複と思われる。切り合ひ関係からS H61が古く、S H62が新しい。

S H61は、S H62に切られており、その南側でわずかにその一部を検出したもので、規模など詳細についてはわからない。

S H62は、S H61を切って建てられたもので、長径4.4×短径3.5mの長方形プランの壁穴住居である。コーナー部分は、方形に近い。北壁のほぼ中央部に竈の痕跡がみられた。中央部に浅い摺鉢状の土坑があるが、それはS H61に伴っていたものかもしれない。主柱穴等は明確でない。竈をもつことや、埋土から6世紀代の須恵器が出土したことから、古墳時代後期の所産と思われる。

出土遺物 図示できる個体は、甕(711) 1点である。口縁部は外側へ直線的にのび、肩部が張り、内外面をハメ調整するものである。



第121図 S H61・62実測図 (1 : 100)

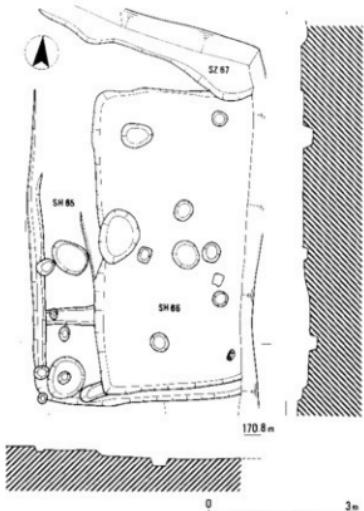


第122図 S H62出土遺物実測図 (1 : 4)

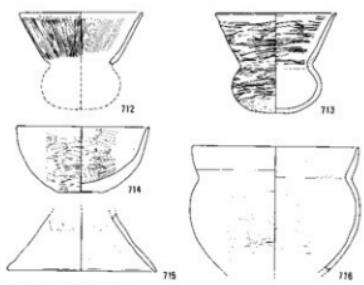
S H65~66 調査区の端で検出されたため全体形は不明であるが、新旧2時期の壁穴住居が重複して検出された。土層の堆積状況から、古い建物をS B65、新しい建物をS B66とするが、ともに東側は検出面の状況が悪く、いまひとつプランがはっきりしなかった。

S H65は、遺存状態が悪く、検出面から床面までは3~5cm程度しか遺存していないかったが、かろうじて住居の北面と西面の一部が検出された。規模は東西4m以上×南北3m以上であるが、大部分はS H66によって切られている。北壁に接して周溝が認められたが、住居跡に伴う柱穴や焼土等は明瞭でない。床面では、かろうじて小型丸底壺と小型器台が残存していた。

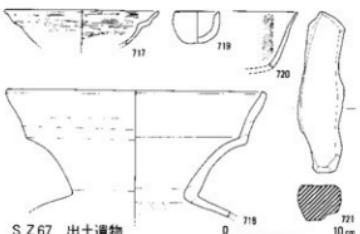
S H66は、S H65を切って建てられた東西6.6m×南北3.5m以上の住居跡で、検出面から床面までは10~20cmあった。コーナー部分のプランは隅丸方形を呈する。柱穴は、東西方向で2間あり、おそらく2×2間に相当するものと思われる。中央やや東寄りのところでは焼土が確認された。あまり時期を



第123図 SH65・66・SZ67実測図 (1:100)



SH65 出土遺物



第124図 SH65・SZ67出土遺物実測図 (1:4)

明示できる遺物は出土していないが、須恵器の出土もなく、SH65を建て替えたものとすれば古墳時代前期のものと考えてよいであろう。

出土遺物 いずれもSH65に伴う遺物である。小型丸底壺A(712・713)、小形鉢B(714)、同C(716)、高杯C(715)が出土した。小形丸底壺は、712が縦方向、713が横方向のヘラミガキを施すもので713は底部にヘラケズリを残す。714は全面にヘラミガキを施した丁寧な作りである。

SZ67 SH65-66の東側に存在する溝状の遺構であるが、調査区の端であることやこの周辺の検出面の状況が悪いことからあまり明瞭でなく、SH65-66に取り込まれるかその関連施設、あるいは全く別個のものであるかもいまひとつ不明であるが、時期的には併行している。一応、別の堅穴住居の一部が出ている可能性がまず考えられるが、SH65-66の関連施設である可能性も考えられる。規模は長さ5m以上×幅80cm以上で、検出面から最大25cmの深さがあり、埋土は淡褐色土である。埋土から二重口縁壺形土器片などが出土している。

出土遺物 壺C-a(718)、小形鉢A(717)、高杯部(720)、手捏ね土器(719)、砥石(721)がある。717は内外面とも細かい横方向のヘラミガキで仕上げられている。720は杯部の破片であるが、非常に薄く仕上げられた丁寧な作りで、細かいヘラミガキが施されている。718は頸部が外開きに立ち上がるものの、口縁端部はやや内側へ肥厚する。SH65出土遺物とはほぼ同時期の所産と思われ、城之越遺跡出土の古墳時代のものとしては最も古い一群で、布留期でも古い部分に相当しよう。

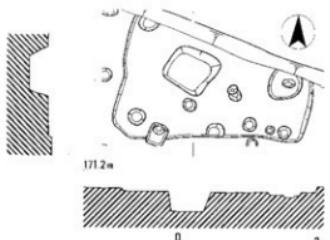
S H70 北半分は調査区外へのびるが、東西4m×南北2.5m以上の堅穴住居で、検出面から5~10cm程度の深さが遺存していた。住居のコーナー部分の平面形は隅丸を呈する。中央部よりもやや寄りの位置に径1.2×1.1m・深さ40cmの貯蔵穴風の穴が存在する。周溝は現況では確認できず、主柱穴等も明瞭でない。それはほど多くの出土遺物はなかったが奈良時代に属するものであろう。SH71とSH72がこの住居に重複している。

出土遺物 土師器壺(722・723)と須恵器杯蓋(724)を示した。土師器壺には二つのタイプが認められ

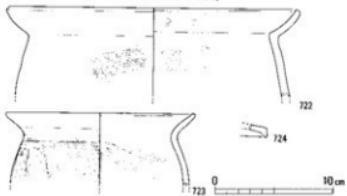
1

1

卷之三



第126図 SH70実測図（1:100）



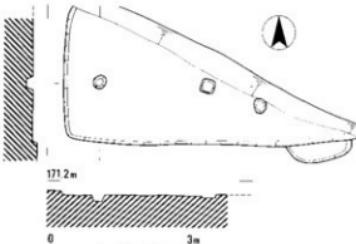
第127図 SH70出土遺物実測図（1:4）

る。先ず一つは、722のような口縁部が内弯しながら立ち上がり胴部内外面をハケメ調整するいわゆる「近江型」甕で、長胴になるものであろう。もう一つは、723のような722よりも小形で、口縁部がほぼ直線的に外側へ開き、胴部外面縱方向・内面横方向（ただし下半部は不明）のハケメ調整を施したものである。

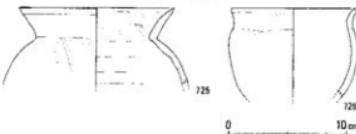
SH73 北側は調査区外へ延びるが、東西6.3m以上×南北2.3m以上の堅穴住居で、検出面から10cm程度遺存していた。住居のコーナー部分は方形を呈する。主柱穴の掘り込みは床面から13cmと浅く、周溝も認められなかった。埋土からは、土器甕や古墳時代の須恵器細片が出土しており、古墳時代後期の住居であろう。

出土遺物 甕(725)と小形鉢(726) が図示できる個体である。725は、「口縁部が薄くなりながら反気味に外側へ立ち上がり、端部外面に面をもつもので、胴上部は丸みをおびる。」

SH77 南側は調査区外へ延びる。残存状況はいまひとつ良くないが、北面は一辺5m以上を計り、検出面から10cm程度の深さが残っていた。プランがやや歪で、周溝や柱穴等も明瞭でないため、堅穴住居



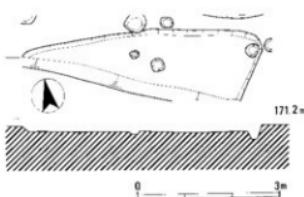
第128図 SH73実測図（1:100）



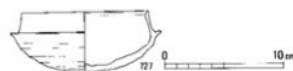
第129図 SH73出土遺物実測図（1:4）

とするにはやや疑問も残る。焼土等も認められなかつた。ほぼ床面に近いところで、5世紀末頃の須恵器杯が遺存していた。

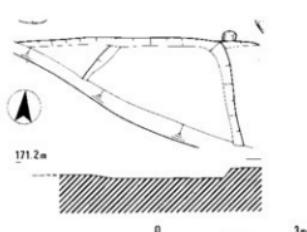
出土遺物 図示しうるのは、須恵器杯身(727)のみである。底部のヘラケズリはほぼ全面に及んでいるが器形がやや丸みをおびており、立ち上がりはやや内傾し、端部は内へ傾斜している。『陶邑古窯址群』編年のTK23型式からTK47型式にかけての時期に相当するものであろう。



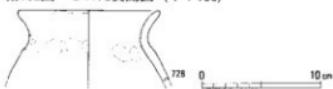
第130図 SH77実測図（1:100）



第131図 SH77出土遺物実測図（1:4）



第132図 SH78実測図 (1 : 100)

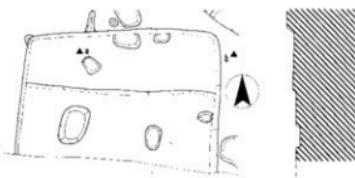


第133図 SH78出土遺物実測図 (1 : 4)

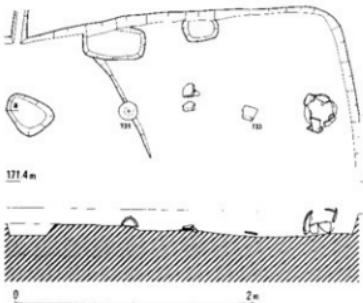
S H78 南側は調査区外へ延びるが、SH77の東側に存在する一辺4m以上・残存した深さ10~20cmの堅穴住居状遺構であるが、周溝や主柱穴は明瞭でなく、堅穴住居と断定するには若干の疑問も残るものである。内部には10cm程度の段が存在しており、検出時点ではわからなかったがふたつの遺構の重複ーたとえば堅穴住居と土坑の重複ーの可能性もある。埋土は褐色土である。土師器壺が出土しているが、時期を限定することは困難である。

出土遺物 出土した土師器壺(728)は、口縁部が外反し、全体に無文である。頸部にユビオサエ痕を残すものである。

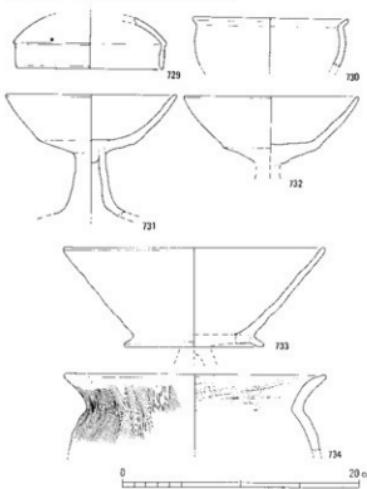
S H80 南側は調査区外へ延びるが、東西4.3m×南北3m以上の堅穴住居である。住居のコーナー部は方形に近い。周溝はなく、住居に伴う柱穴も明瞭でない。深さは検出面から20~25cm程度残っているが、北側は壁から幅1.3mにわたって10cm程度テラス状に高くなっている。比較的残りの良い土器(731と733)は、このテラスの床面に接して出土した(床面からは、これ以外に図示できなかったが壺脇部も存在する)。これらの土器は古墳時代中後期に比定できるもので、他の出土遺物の一部(734)と比べて古い所産と考えられ、そうした場合、土層では確認できなかつたがテラス部の段差というものは堅穴住居2棟の重複を示していた(その場合は深いほうが新しい、床面に近い部分から734が出土している)



第134図 SH80実測図 (1 : 100)



第135図 SH80出土状況図 (1 : 40)



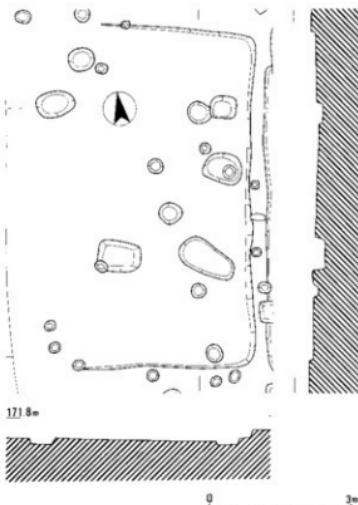
第136図 SH80出土遺物実測図 (1 : 4)

可能性も残る。

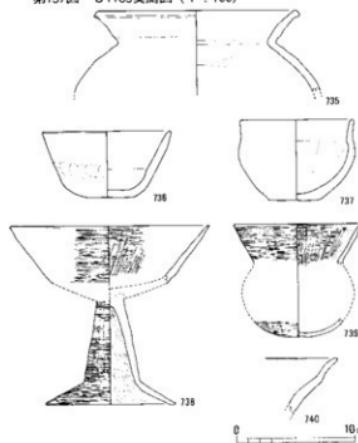
出土遺物 土師器高杯(731～733)は古く、土師器壺(734)は新しい一群である。須恵器杯蓋(729)と土師器鉢(730)は、テラス上面から出土している。729は須恵器としては焼成が甘く、風化が激しいものであるが、棱が鈍く、形態的には『陶邑古窯址群』編年のMT15型式頃に相当するものであろう。733は、杯屈折部に粘土を突帯状に付加した高杯で、当地域では須恵器一般化以降に伴う高杯である。734は、器壁が厚く口縁部が外反し、外面タテハケ・口縁内面にヨコハケを残すもので、奈良時代前後の所産であろうか。

S H83 検査区の制約のため、全体形を明らかにしえないが、東西5.5m以上×南北7.4mの比較的規模の大きい堅穴住居である。住居の東側では検出面から15cm程度の深さがあったが、西側は遺存度が悪かった。住居のコーナーは隅丸を呈する。周溝は確認できなかったが部分的に焼土が存在する。主柱穴は明瞭でない。埋土からは古式土師器が数多く出土しており、古墳時代前期のものと思われる。

出土遺物 壺Ca(740)・小型丸底壺A(739)・壺Ab(735)・小形鉢B(736)及びC(737)等がある。高杯A(738)は、杯部外面を横方向・内面を横方向後傾方向の細ヘラミガキを施し、脚部外表面は縱方向の太いミガキを施した後横方向の細ヘラミガキで仕上げた薄手で丁寧な作りである。小型丸底壺739も横方向の細ヘラミガキを全面に施した後、口縁部内面には縱方向の間隔の開いた細いヘラミガキを施している。また、735は、比較的丸くて寸胴な胴部を想起させる。ほぼ布留1期に相当しようか。SH84 SH83の東隣には、SH84からSH88の5棟の堅穴住居が重複して存在している。そのなかでも、SH84は時期的に最も古く、規模的に東西7m×東西6.6mと最も大きいものである。SH85以下の堅穴住居に切られているため南西隅と東北隅の一部しか残存しておらず、柱穴も明瞭でない。検出面からは、10cm程度の深さが残っており、埋土は褐灰色砂混じり土である。住居のコーナーは、隅丸を呈する。SH86の南東コーナーに存在する深さ0.8m・深さ40cmの土坑は、このSH84に伴う貯蔵穴と思われる。この土坑とその上面周辺を中心として、



第137図 S H83実測図 (1 : 100)



第138図 S H83出土遺物実測図 (1 : 4)

多くの古式土師器が出土しており、古墳時代前期の堅穴住居である。

このうち、794と753は、土坑内では正立状態で出土したのに対し、744は堅穴床面で倒立状態、750

は床面からやや浮いたところで倒立状態、747と748は床面で倒れた状態で出土した。その他の土器は、埋土中及び検出面上面（741・742）からの出土である。

出土遺物 壺Ba(744)及びCb(745)・小型丸底壺A(742)及びC(743)・甕Ba(747)及びAb(748～749)・高杯A(741、750～753)・器台A(746)などが出土した。壺745は、口縁部中頸が一度肥厚しており二重口縁を意識した作りとなっている。高杯はいずれも脚部が比較的太い形態のものであるが、脚柱部内面は750と751がケズリによるのに対し、その他の高杯ではナデ・オサエによっており、その結果いわゆる「エンタシス」形を呈する。甕は、747が口縁部が内弯して端部が内側へ肥厚して胴部外面ハケメ・内面ヘラケズリを施す布留式系のものであるのに対し、748と749は口縁部が外反して内外面の調整をナデ・オサエ及び板ナデによる比較的難な作りのものである。土坑内や床面から出土したものと、埋土上や上面から出土したものとの明確な型式差は認めがたく、ほぼ大溝Ⅲ層の頃、布留3～4期併行期のものに相当しよう。

S H85 S H86とS H87に切られており、住居の南西隅しか検出しておらず、規模等は不明である。その南西隅の平面形は、隅丸方形である。遺物もほとんど出土していないが、切り合い関係から古墳時代前期のS H84より新しく、後期のS H86よりは古いものである。

出土遺物 上師器杯(754)が1点出土しただけである。ナデ調整による口径の小さいものである。

S H86 一部がS H87とS H88によって切られているが、やや歪みながら長径5.6m×短径4mの長方形プランを有する竪穴住居である。住居の四隅の平面形はほぼ方形である。検出面から10～20cmの深さが残っており、埋土は黒褐色土である。南西隅や北東隅近くで炭混じりの土が存在したが、甕は確認できなかった。周溝はなく、柱穴も明瞭でない。住居床面や埋土から、7世紀前葉頃の土器が出土しており古墳時代後期のものと思われる。

出土遺物 土師器杯(755)・甕(756)・須恵器杯蓋(757)・杯身(758～759)・甕(760)・薄板状の鉄

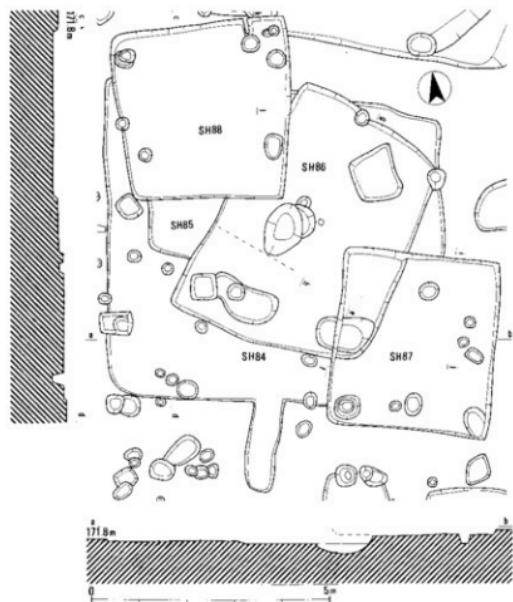
器片(761)がある。上師器杯は、外面を横・内面を縦のミガキを施したものである。須恵器杯は、蓋が返りが逆転したものであるが、身は返しの付くいわゆる「古墳時代型」のものと、返しの付かないいわゆる「歴史時代型」の両者が出土している。鉄器片は小片のため詳細は不明であるが、おそらく鉄鎌の破片であろうと思われる。

S H87 S H84とS H86を切って建てられた東西3.4m×東西3.7mのはば正方形プランの竪穴住居である。住居の四隅の平面形は方形を呈する。柱穴等は明瞭でない。埋土は褐色土で、検出面から約10cmの深さが残っていたが、出土した土器は767が埋土中から出土した以外すべて床面から約2～3cm浮いた状態で検出されており、この高さが生活上の床面と思われる。竪穴住居構築時に地山を彫り込んだ後に若干の土をおいて整地したものであろう。そこから766は正立状態で、762～764は伏せられた状態で出土した。出土遺物から、奈良時代の住居と判断される。

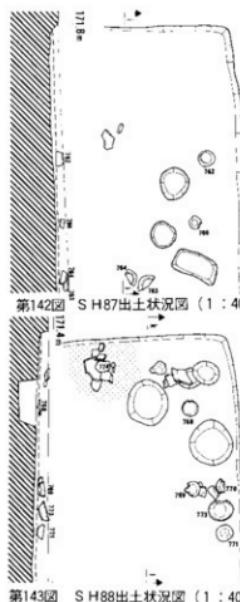
出土遺物 須恵器杯身(762～766)と土師器皿(767)が出土している。杯身は口縁部がやや外反して高台が底部端に付く763～764と、口縁部が直線的で口縁部が底部端よりやや内側に付く762と766(765もか)に分かれる。皿767は、口縁部が内弯しつつ立ち上がる。

S H88 S H84～S H86それにS H89を切って建てられた東西3.7×南北3.8mの正方形プランの竪穴住居である。住居の四隅の平面形は方形を呈する。埋土はS H87と同じ褐色土であり、検出面から20cm程残っていた。住居北壁に竈様の焼上がり、そこから774の甕が出土した。S H87同様、一度地山を掘り込んだ後に整地して床面としており、そこから須恵器杯碗類が正立状態で出土した。出土遺物から奈良時代の住居と思われる。

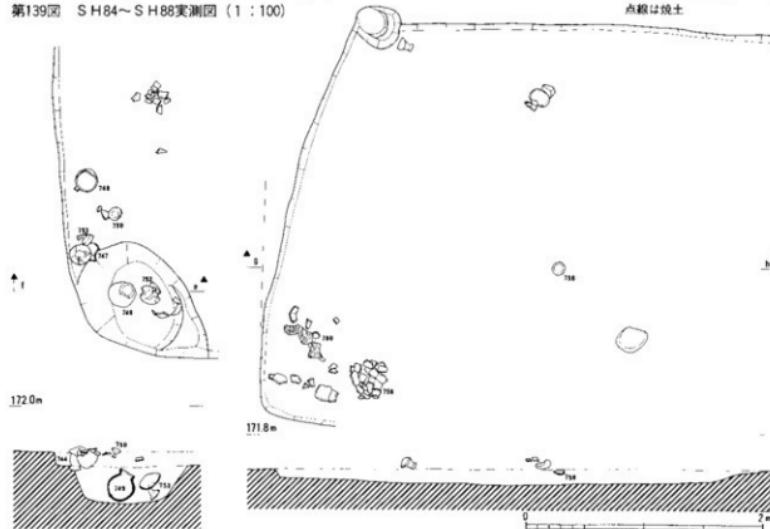
出土遺物 須恵器杯蓋(768)・杯身(769～772)・椀(773)・土師器壺(774)が出土している。杯身は高台が付くものと付かないものがある。773は胴下部が張り、口縁部が外反するものである。774は長胴壺で、口縁部が内弯しながら立ち上がり、胴部はハケ調整後下半部をヘラケズリするものである。



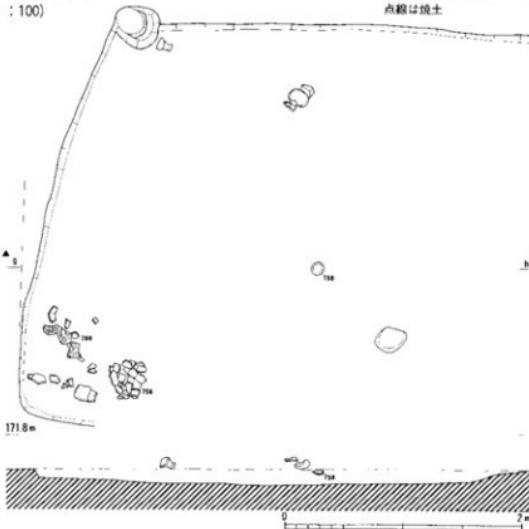
第139図 S H84～S H88実測図 (1 : 100)



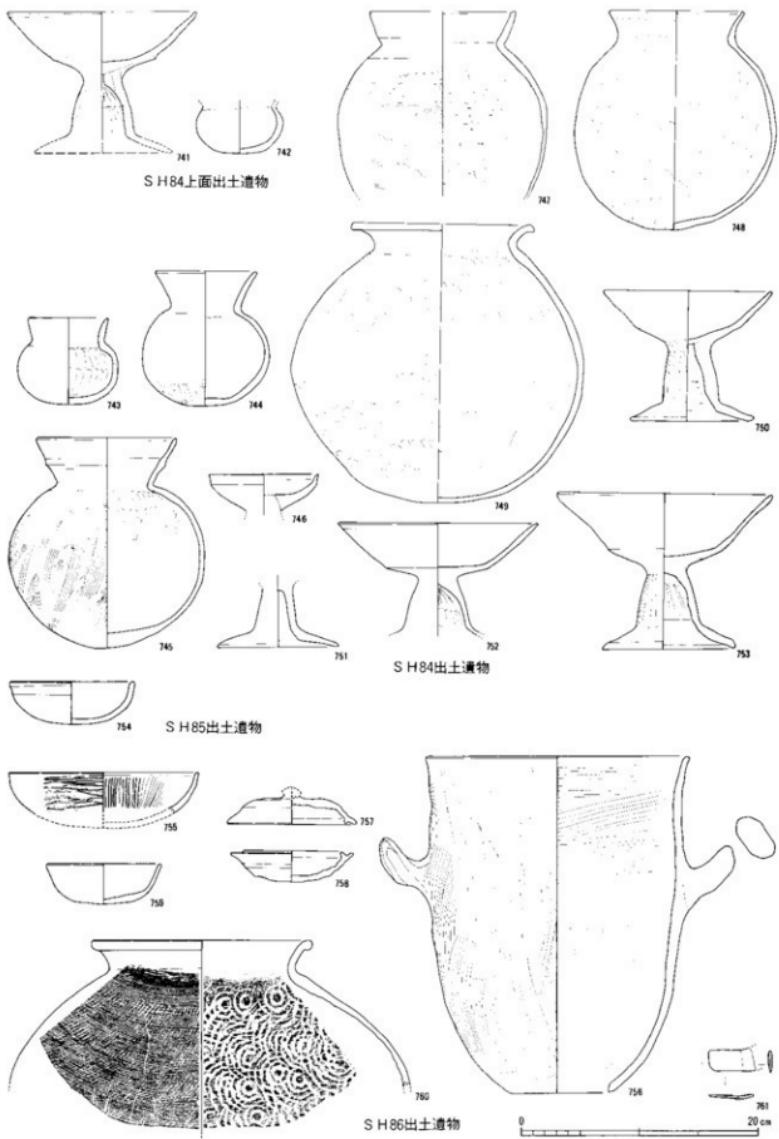
第142図 S H87出土状況図 (1 : 40)
第143図 S H88出土状況図 (1 : 40)
点線は出土



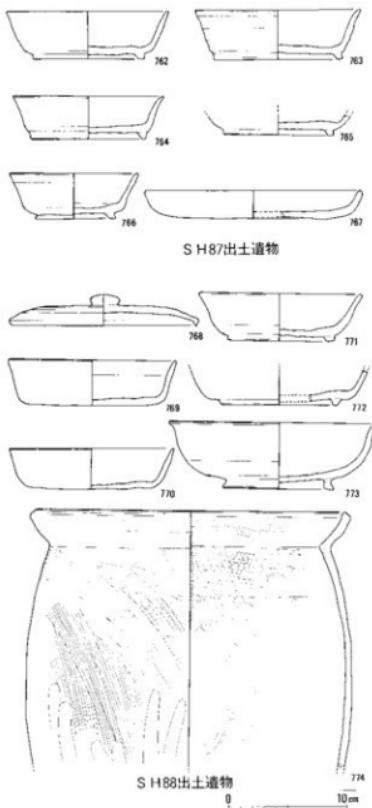
第140図 S H84出土状況図 (1 : 40)



第141図 S H86出土状況図 (1 : 40)



第144図 S H83～S H86 出土遺物実測図 (1 : 4)



第145図 S H87・S H88出土遺物実測図 (1 : 4)

S H89 北側が調査区外へ延びるため全体の形は不明であるが、東西7.4m×南北7.3m以上で、城之越遺跡では大型の堅穴住居である。S H88により、南壁の一部が切られている。比較的残りがよく、検出面から約30cm程度の深さが残っていたが、焼土等は認められなかった。主柱穴は、床面から約50cm程度の深さを有する。東側では、S H89東壁の外側にもう一つテラス状の部分があり、あるいはS H89の存在以前にもう1棟の堅穴住居が存在していた可能性がある。

出土遺物 土師器壺(775～778)、須恵器杯身(779)
が出土した代表的な土器であるが、砥石が3点(780～782)も出土したことは注目される。

このうち、土師器壺776～778は先にみたS H88出土の774となんら変わらない奈良時代の所産と思われるものに対し、須恵器杯身や口縁部が外反する壺775は古墳時代後期の所産と思われ、遺物からも遺構が二時期あってそれを一緒にしてしまったことが窺えるが、図示したもの以外も含めると量的主体は奈良時代のものであり、古墳時代の遺物は混入的である。ただし、残念ながら、砥石がどちらの一群に伴うかは不明である。また、腐蝕が著しく図示できなかつたが、少量の鉄製品も出土しており、住居規模の大きさや砥石の多さとあわせ、やや他の住居と性格を異なるようである。

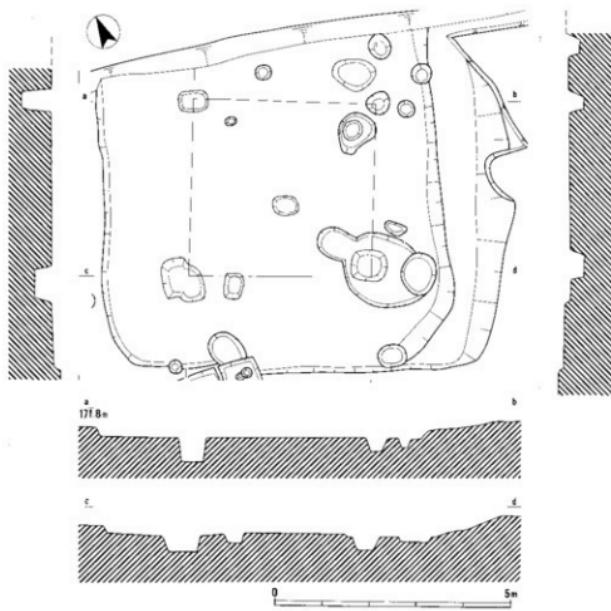
S H94・95 東側が調査区外へ延びるが、2棟の堅穴住居が重複したものである。埋土はともに褐色土である。土層観察では切り合いで確認できなかつたが、埋土が類似していることや南側の壁が共通していることから、建て替えによるものであろう。小さい建物をS H94、大きい建物をS H95とする。

S H94は、東西1.7m以上×南北3.2mの規模をもち、住居のコーナー部分は隅丸を呈する。この住居に伴うと思われる柱穴が2個確認できており、径35cm、床面からの深さ15～20cmである。

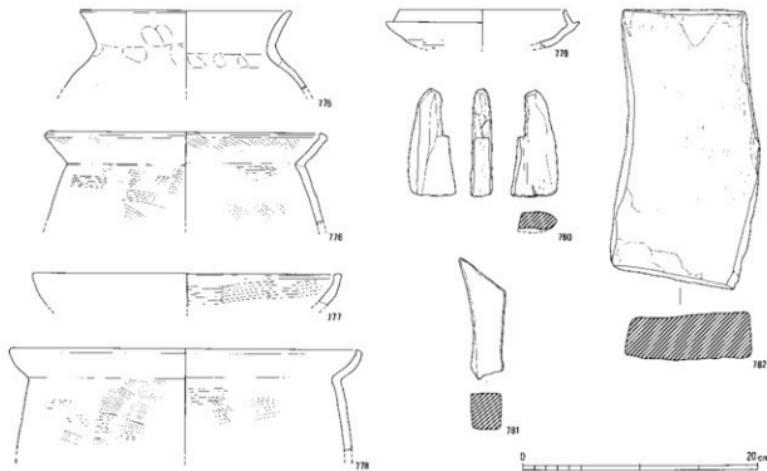
S H95は、東西2m以上×南北3.8mとS H94よりもやや大きい。住居のコーナーは隅丸を呈する。床面はS H94よりも5cm程度高い。柱穴等は確認されていない。

出土遺物 S H95の床面から須恵器杯身(783)が出土したのみである。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、高台は底盤部の少し内側に付くものである。

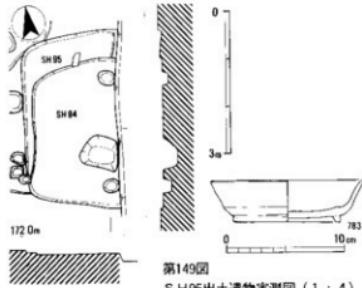
S H96 東西2.9m×南北3mのプランをもつ堅穴住居で、遺存状況は悪く検出面から5cm程度残っていたのみである。西側はやや正なプランであるが、これは遺存状況の悪さと別遺構の重複によるものであり本来的には直線になるものと思われる。柱穴は大きさにばらつきがあるが3個確認でき（小さい柱穴は柱痕跡のみを掘ったものと思われる）、深さはいずれも床面から10～13cm程度である。



第146図 SH89実測図 (1 : 100)

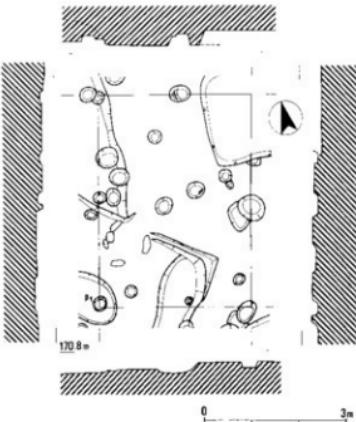


第147図 SH89出土遺物実測図 (1 : 4)

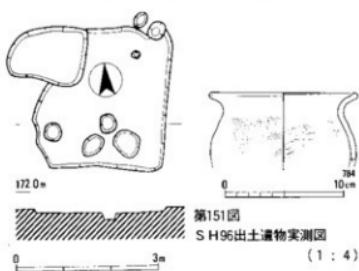


第148図 SH94・95実測図 (1 : 100)

第149図 SH95出土遺物実測図 (1 : 4)



第152図 SB64実測図 (1 : 100)



第150図 SH96実測図 (1 : 100)



第153図 SB64出土遺物実測図 (1 : 4)

へ屈曲して縫部は巻き込むように丸く肥厚し、鈎はやや下向きに付く。

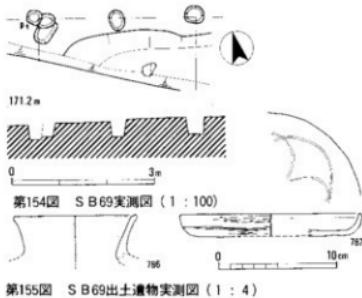
S B64 調査区の幅が狭く、2間の柱列 (3.5m) を確認しただけであるが、柱穴自体が検出面からの深さが30~50cmと比較的しっかりしており、南北棟の掘立柱建物の北側柱列 (梁行) である可能性が強い。そうした場合、棟方向はE 8° Sで、柱間寸法は、1.75m等間である。柱穴は径40cm程度の円形もしくは隅丸方形で、埋土は暗褐色土である。柱穴に7世紀代の須恵器壺の口縁部破片が混じっていることや古墳時代後期の溝であるS D75をまたぐかたちで存在することから、飛鳥時代以降の建物である可能性が考えられる。

出土遺物 須恵器壺(786)と土師器皿(787)がある。須恵器壺は、口縁部がやや外開きとなり、縫部外面が僅かに肥厚する。土師器皿は、口縁部が内寄して立ち上がり、内面にラセン状の暗文をもつ。

(2) 掘立柱建物

S B64 S H62を切って建てられた、桁行3間 (5m) × 梁行2間 (3m) の南北棟の建物で、棟方向はN 15° Eである。柱間寸法は、桁行が1.5+2+1.5mと中央間がやや広い。梁行は1.5m等間である。桁行の中央間にはあいだにもう1個の柱穴がみられるが、これがこの建物に伴うかどうかはわからない。柱穴は、30~50cmの円形である。柱穴から瓦器や土製羽釜の出土があり、中世の建物であろう。

出土遺物 羽釜(785)を図示した。口縁部は外側

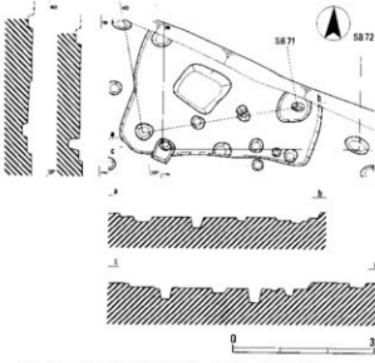


第154図 SB 69出土遺物実測図 (1 : 100)

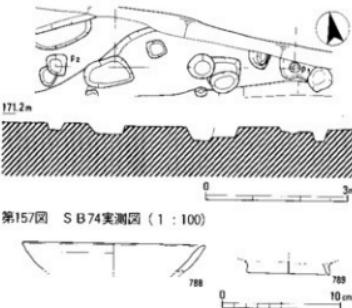
第155図 SB 69出土遺物実測図 (1 : 4)

S B71 調査区の制約で、建物の規模や向きは明確でないが、3間以上×1間以上が確認できた。仮に東西方向を桁行と考えた場合、棟方向はE 14° Nで柱間寸法は桁行1.2m等間・梁行2.4mである。柱穴は、径30~40cmの円形である。

S B72 S B71と同様、建物の規模や棟方向は明確でないが、3間以上×1間以上を確認した。仮に東西方向を桁行と考えた場合、棟方向はE $3^{\circ} 30'$ Nで、柱間寸法は桁行が東から1.5+1.5+1m・梁行2.4mである。柱穴は、径40cm程度の円形もしくは隅丸方形である。柱間寸法にやや違いはあるものの、プラン的にはS B71と似通った建物である。柱穴から黒色土器A類が出土しており、平安時代に属するものと思われる。S B71・72ともに、華奢な印象をうける建物である。



第156図 SB 71-72出土遺物実測図 (1 : 100) L=171.2m



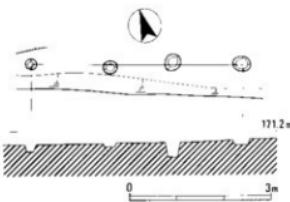
第157図 SB 74出土遺物実測図 (1 : 100)

第158図 SB 74出土遺物実測図 (1 : 4)

S B74 調査区の制約のため、3間分の柱列を確認しただけであるが、おそらく掘立柱建物の南側柱列を検出しているものと思われる。そうした場合、桁梁は明確ではないが、棟方向はE 8° Sで、柱間寸法は東から2.1+2.1+1mである。最も西側の柱穴は他に比べてやや小さく、柱間も狭いことから、西側1間分は庇になるものと思われる。古墳時代後期の溝S D75を切って建てられており、柱穴からは高台付の土器片も出土していることから、奈良～平安時代のものと考えられる。

出土遺物 土器杯器(788)と椀底部の高台部分(789)がある。788はとくに残りが悪く、口径や器形はいまひとつ不明な部分も多いが、調整はナデ調整によるものであろう。

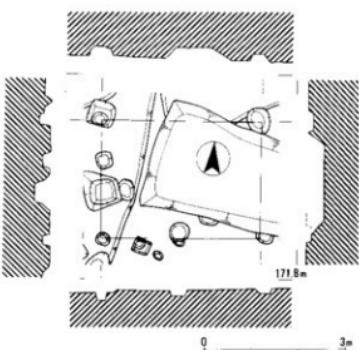
S B76 調査区の制約のため、柱間3間の柱列を確認しただけであるが、掘立柱建物の北側柱列を検出しているものと思われる。そうした場合、桁梁は明瞭でないが、棟方向はE 16° Sで、柱間寸法はほぼ



第159図 SB 76出土遺物実測図 (1 : 100)

1.5m等間である。柱穴は、径30~40cmの円形で、埋土は暗茶色土である。比較的小さな建物になるのであろう。時期を判断しうる程の出土遺物はないものの、柱間寸法が一尺30cmで完数値を得られることから、消極的ではあるが律令期以降の建物であることを想起させる。

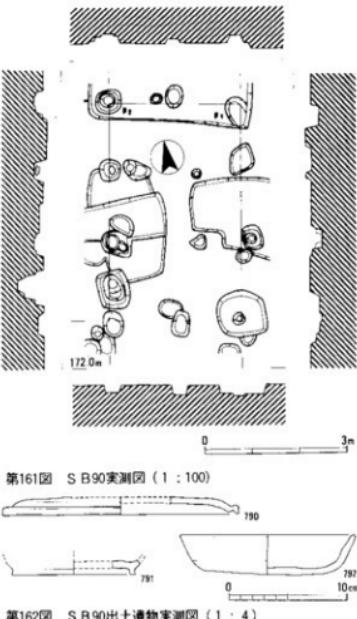
S B81 やや攪乱をうけているが、桁行2間(3.4m)×梁行1間(2.5m)の非常に小規模な東西棟の建物で、棟方向は、E 6° 30' Nである。柱間寸法は桁行1.7m等間・梁行2.5mである。柱穴は、径30~50cmの円形もしくは隅丸方形で、埋土は暗褐色土もしくは黒褐色土である。柱穴からの出土遺物はない。



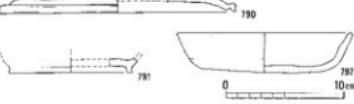
第160図 S B81実測図(1:100)

S B90 桁行3間(4.8m)×梁行2間(2.9m)の南北棟の建物で、棟方向はN10° Eである。柱間寸法は、桁行が北から1.5+1.5+1.8mと南側1間分の柱間がやや長いものの梁行は1.45m等間である。柱穴は、径40~50cmの隅丸方形を基本とし、埋土は黒褐色土もしくは灰褐色土である。北側柱列はS H87の南側に重複して存在する。柱穴から奈良時代の土器が出土しており、S H87廃絶後あまり時をおかないと建てられたものであろう。

出土遺物 須恵器杯蓋身(790・791)と土師器杯(792)があり790と791は同一柱穴からの出土である。杯身は、高台の付くものと付かないものがある。



第161図 S B90実測図(1:100)

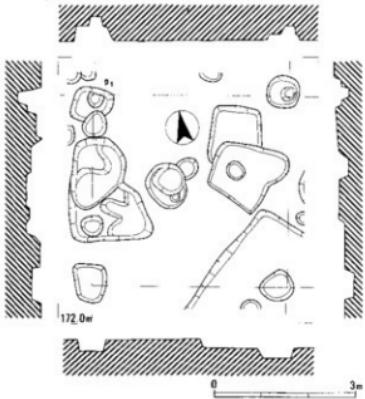


第162図 S B90出土遺物実測図(1:4)

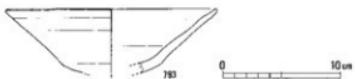
S B91 1間(4m)×1間(4m)分の柱を確認した。一庇、棟方向がN11° Eの正方形プランの建物として拾っておいたが、検出面が安定してなかつたためプランは確認できなかったものの、堅穴住居の主柱穴のみを確認した可能性も残る。柱穴は、径70~80cmの隅丸方形で、埋土は灰褐色土である。柱穴自体の切り合ひ関係から、S B92よりも先行する建物である。柱穴からは土師器片が出土しているものの、須恵器の出土はなく、明確な時期は限定できないが、古墳時代の可能性があろう。

出土遺物 図示可能なものは、土師器高杯(793)1点である。杯部をナデ調整するもので、布留期でも比較的新しい所産であろう。

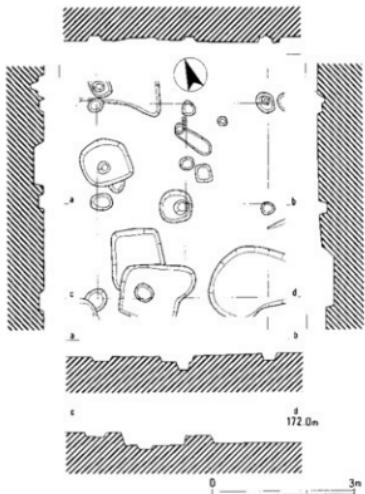
S B92 桁行2間(4.2m)×梁行2間(3.6m)の南北棟の純柱建物で、棟方向はN19° 30' Eである。柱間寸法は、桁行は2.1m等間であるが、梁行は東から1.7+1.9mとやや不等間である。柱掘形は、徑



第163図 SB 91実測図（1:100）



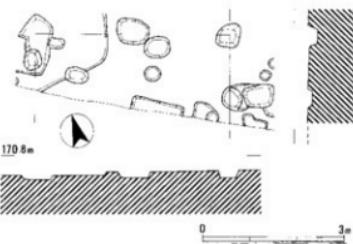
第164図 SB 91出土遺物実測図（1:4）



第165図 SB 92実測図（1:100）

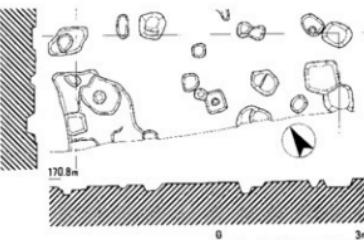
40~50cmの方形もしくは円形で、埋土は暗灰色土である。下段や中段に多く存在していた縦柱建物と比べると、建物全体の大きさの割には柱穴がやや華奢な印象を受ける。柱穴からの遺物は土師器細片のみであり、時期は比定は難しい。

S B 99 トレンチの中央部に2間分(4.2m)の柱穴を確認しただけであり、全体形は不明である。トレンチのすぐ西側の地形は1m以上落ちているためこれ以上建物が延びることは考えにくく、東西棟の掘立柱建物の梁部分を検出したものであろう。そうした場合、棟方向はE 17° S、柱間寸法は2m等間である。柱掘形は径40~65cmの隅丸方形で、埋土は黒褐色土である。

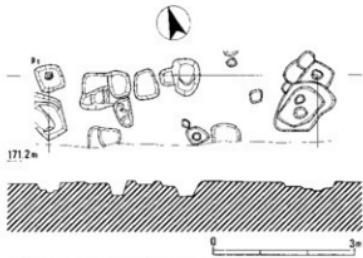


第166図 SB 99実測図（1:100）

S B 100 調査区の制約のため、1間以上×2間(4.1m)しか確認できなかったが、東西棟の掘立柱建物の一部分を検出しているものと思われる。棟方向は、E 34° Sである。柱掘形は、径40~70cmの方形もしくは円形とややばらつきがある。埋土は黒褐色から暗褐色土である。



第167図 SB 100実測図（1:100）



第168図 SB 101実測図 (1 : 100)

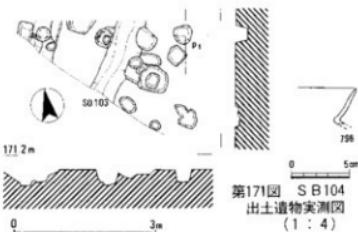


第169図 SB 101出土遺物実測図 (1 : 4)

S B 101 トレンチに平行して 2 間分 (5.7m) の柱穴が確認されただけであるが、東西棟の掘立柱建物の梁行部分を検出しているものと思われる。そうした場合、棟方向は E 23° S である。柱間寸法は、2.85m 等間とやや長い。柱掘形は、径60cm程度の方形を基本とし、埋土は褐色砂質土である。3個の柱穴のうち 2 個で柱痕跡が確認された。柱掘形から 7世紀前業の須恵器片が出土しており、建築年代はそれ以降の年代であろう。

出土遺物 須恵器杯身 2 点 (794~795) を図示した。794は短いながらも立ち上がりが身に付くもので、795は身から立ち上がりが消失したもので、ともに『陶邑古窯址群』TK217型式に併行するものであろう。

S B 104 調査区の制約のため、全体の形や建物方向は明確にしえないが、2 間以上×1 間以上の掘立

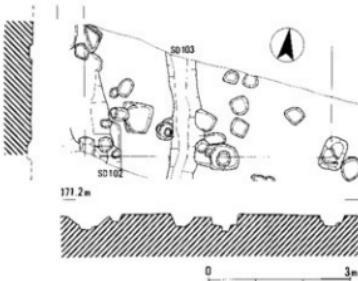


第170図 SB 104実測図 (1 : 100)

柱建物である。仮に東西棟の建物と考えた場合、棟方向は E 10° S、柱間寸法は桁梁とともに 1.7m 等間である。柱掘形は径40cmの円形で、埋土は黒褐色土である。埋土からの出土遺物は、土師器細片ばかりであり、時期を限定できない。

出土遺物 須恵器口縁部破片 (796) のみが図示可能である。頸部を強くヨコナデし、口縁部が薄く直線的に外側へ開く。

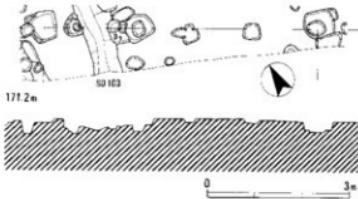
S B 105 調査区の制約のため全体の形は不明であるが、桁行 1 間以上×梁行 2 間 (5 m) の東西棟の掘立柱建物と思われ、棟方向は E 10° N である。柱間寸法は、桁行 2 m・梁行 2.5 m である。柱掘形は径70cm程度の方形で、埋土は黄灰色混じり暗灰褐色土である。切り合い関係から S D 102 よりは古いものである。



第172図 SB 105実測図 (1 : 100)

S B 106 4 間分 (6 m) の柱穴が確認され、おそらく東西棟建物の桁行北側柱列を検出しているものと思われ、棟方向は E 31° S である。柱間寸法は、1.5m 等間である。柱掘形は、建物の隅柱である両端の柱穴が径70cmの方形になるのに対し、それ以外の掘形では径40cm程度のやや歪な方形と小さいものである。埋土は S B 105 と同じ黄灰色混じり暗灰褐色土であり、切り合い関係は不明だが時期的には近接するものであろう。柱掘形には 7世紀初頭前後の須恵器が含まれており、それ以降の建物であり、また柱間寸法が一尺30cmで実数値を得られることも建物の時期を推定させるものである。

出土遺物 図示しうるものは須恵器杯身 (797) 1



第173図 S B106実測図 (1 : 100)

第174図 S B106出土遺物実測図 (1 : 4)

点のみである。身に返しが付くものとしてはかなり新しいもので、口縁部の立ち上がりは僅かである。『陶邑古窯址群』編年のTK217型式に併行するものであろう。

大形のピット トレチが細いため詳細不明で建物としては拾えなかったが、S B104～S B106の南側で径80cmの大形のピット(第125図参照、P 1)が確認された。南隣のトレチは検出面の状況が悪かったため明確にはしめていないが、ほぼ同規模のピット状遺構もあり、あるいは南へ延びるかとも推定される。いずれにせよ、今後の隣接地の確認調査が待たれる。

(3) 溝

S D63 幅1m程度の自然流路である。埋土は灰色砂である。出土遺物はみられない。

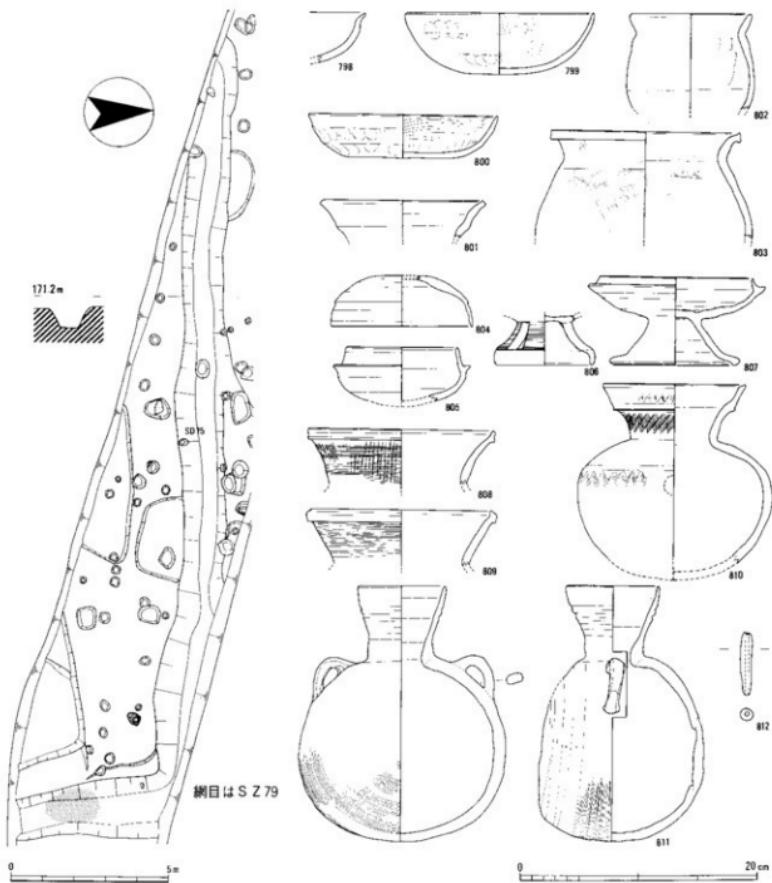
S D75 幅の狭い調査区を縦断するかたちで、幅1.3～2.5m・深さ50cmの溝が総延長約30mにわたってL字状に検出された。調査区壁と接続する溝の西側では、ちょうど溝が屈曲しかけており、そのまま直線に延びた場合の延長部分には溝が出ていないことから、おそらくここで屈曲するものと思われる。そうした場合、溝全体のプランはコの字あるいは方形を呈することが予想され、確認できる一辺の長さは約26mになる。建物を取り囲む環濠・堀的な様相をもつ。溝断面は逆台形状を呈している。埋土は暗褐色土で、6世紀を中心とする古墳時代後期の土器が数多く出土した。このうち、810の須恵器は、溝の最底部を一段掘り窪めたピット状の落ち込みから出土したものである。

出土遺物 土師器杯(798～800)・壺C a(801)・壺(802～803)、須恵器杯蓋(804)・杯身(805)・高杯(806～807)・壺(808～809)・(810)・提瓶(811)・土鍤(812)などが出土した。出土遺物のなかで古く位置づけられるものは、801の二重口縁壺がまずあり、ついで810の大形壺がある。これは、残存部分に円孔は認められることから壺として使用された可能性も残るが、おそらく欠損部分に円孔が存在していたのであろう。体部に比べて口縁部の比率が小さく、頭部の波状文は明瞭であるが体部のものは不明瞭で、口縁部にいたっては痕跡的に見える程度である。『陶邑古窯址群』編年のTK208型式に相当するものであろう。これに対して807などは新しく、TK209型式あたりに相当し、7世紀初頭前後の時期が与えられそうなもので、この溝の存続期間の終末を示すものであろう。また、この遺構は奈良時代の遺構や平安時代の掘立柱建物など新しい時期の遺構とも切りあっており、その時期の遺物が若干量混入している可能性もある。5～7世紀の土師器杯の当地における型式変化の実体が不明な現在断定はできないが、800の土師器杯などは時期的な位置づけにやや困難を伴うもので、新しい流入品の可能性も残る。

S D82 長さ8m・幅0.8～1.3m・深さ10cmの溝である。埋土は黒褐色土で、やや炭が混じる。図示するほどのものではないが、比較的新しそうな土師器片が混じっており、平安期以降の所産であることが考えられる。

S D97 北側は調査区外へ延びるが、長さ5.5mにわたって検出された、幅1～2m・深さ4～5cm程度の浅い溝状の遺構である。性格はいまひとつ明瞭でないが、埋土から奈良時代の遺物が出土した。

出土遺物 須恵器杯身(813)と性格不明の土製品(814)がある。813は、高台こそないが、奈良時代のものと思われる。814は特異な形態で、類例を知らない。上下関係も不明で、天地逆の可能性もあるが、調整の粗いものを内側にくくると考へ、図のように提示した。仮に現在図示した上下を正しいものと考えた場合、口縁直下に一定間隔で円孔が巡り、底部が大きな溝状となって、何らかの液体を溜めていたことも考えられる。しかし、天地逆を考えた場合



第175図 SD 75実測図 (1 : 100)

第176図 SD 75出土物実測図 (1 : 4)

には、現在欠損している跳ね上がり部分がさらに延びてくることも考えられる。

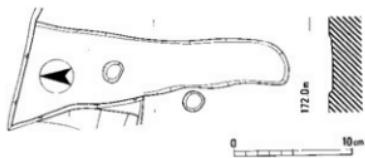
S D 102 調査区に直交して検出された長さ3m以上・幅1m・深さ約40cmの溝で、断面はU字状を呈する。埋土は黒褐色土で、埋土から奈良時代の土器が出土している。

出土遺物 須恵器杯身(815)で、高台は底端部よ

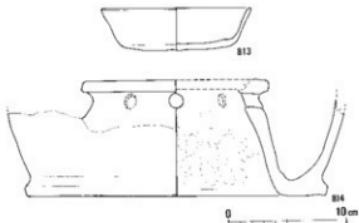
りも少し内側に付き、口縁部は直線的に開く。

S D 103 S D 102 の東側に存在する長さ3m以上・幅60~70cm・深さ約30cmの溝で、断面はU字状である。埋土は淡黒褐色土である。

出土遺物 須恵器杯身(816)で、高台は底端部よりもやや内側に付く。



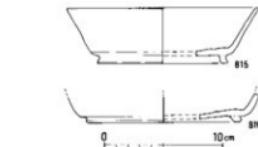
第177図 S D 77実測図（1：100）



第178図 S D 97出土遺物実測図（1：4）

(4) 土坑

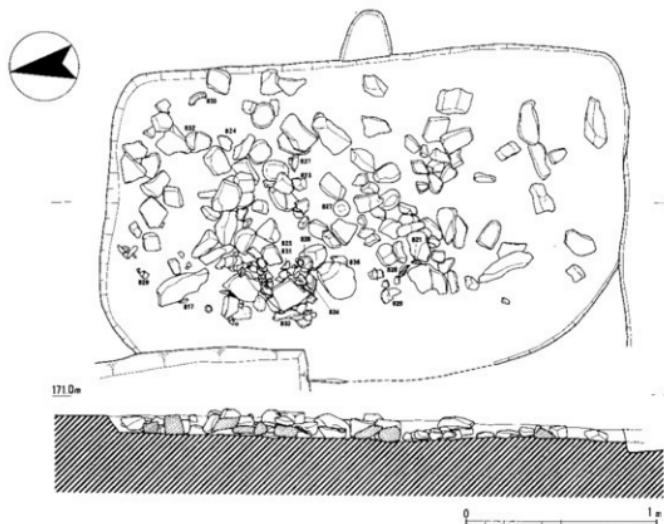
S K 68 長径4.4×短径2.25mの長方形プランを有する土坑である。検出時点ですでに礫がたまつて



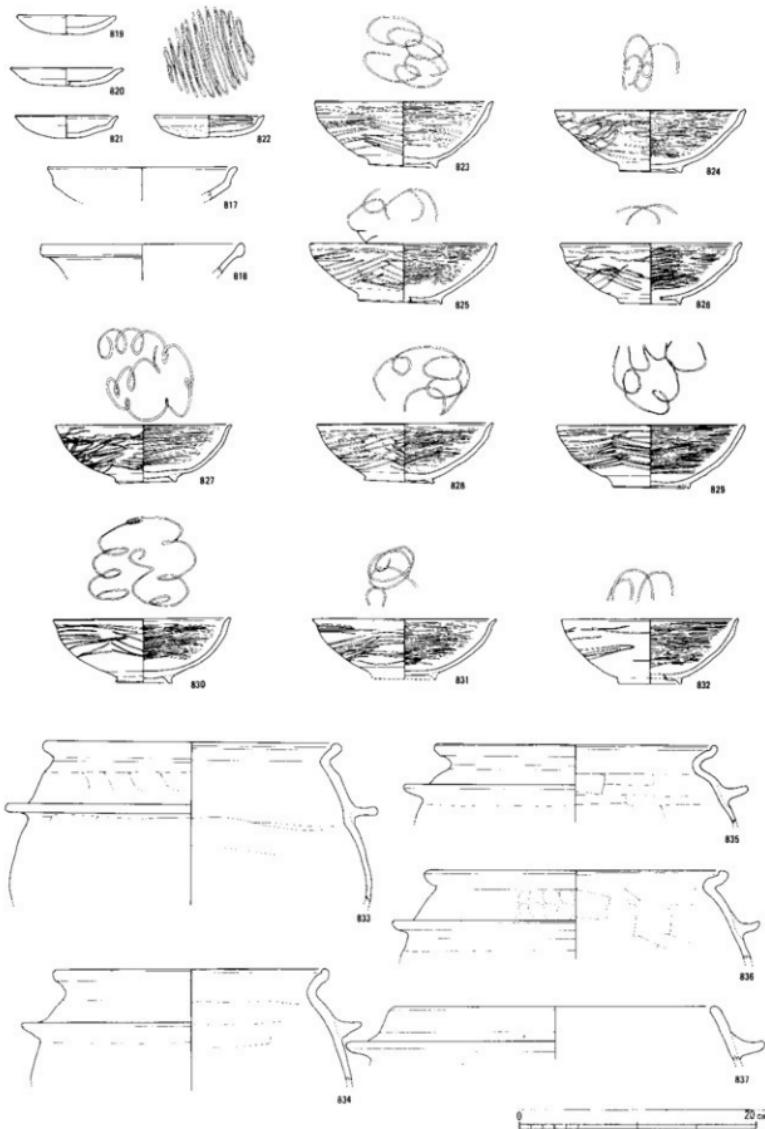
第179図 S D 102・103出土遺物実測図（1：4）

存在していることがわかつていたが、結局検出面からは10cm程度の深さで、そこに拳大から人頭大くらいの礫がほぼ全面に存在していることが判明した。礫に混じって、瓦器柄や土製羽釜が相当数存在していた。また、小皿は土師器皿が多く、瓦器皿は図示したものなど極めて少數である。土器類と礫との関係は、とくに何方が上ということもなく全くの混在といつてよいものであった。

出土遺物 数多い出土遺物のうち、土師器皿(819～821)・白磁碗(818)・瓦器皿(822)・瓦器椀(823～832)・土製羽釜(833～837)を図示したが、これで出土した一通りの器種は揃っている。土師皿は、口縁部が内湾気味に立ち上がる817・瓦器皿同様に上



第180図 S K 68実測図（1：20）

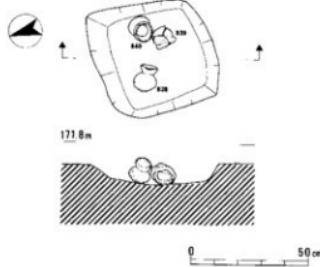


第181図 S K 68 出土遺物実測図 (1 : 4)

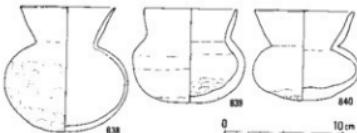
端部に面をもつ818・強くヨコナデする819などバリエーションがある。瓦器碗は、底部内面のヘラミガキが連結輪状文となるもので、口縁部はヨコナデによって外反するものが主体であるが、なかにはそのまま内弯気味に立ち上がる個体(825や829)も存在する。土製羽釜は、口縁部が大きく外側へ外反するもの(833~836)が主体を占めるが、そのまま外反せずに終わる個体(837)も存在する。

S K93 長径80cm×短径60cm・検出面からの深さ6cmの方形プランの土坑で、土師器の小型丸底壺と小形壺(壺Ba)がほぼ完形で3個出土し、うち2個は正立状態である。単独で存在する遺構であり、土器を埋置することを念頭においたものであろう。出土状況からは別器種間の使われ方の違いというものは認められなかった。土坑のプランは掘立柱建物の柱穴に類似しているが、深さも浅く、特に建物に伴うものではない。

出土遺物 壺Ba(838)・小型丸底壺AもしくはC(839~840)の3点である。このうち、小型丸底壺2点は比較的雑な作りであったが、838は胴部オサエ調整ながら薄手で焼成の良い土器である。



第182図 S K93出土状況図 (1 : 20)



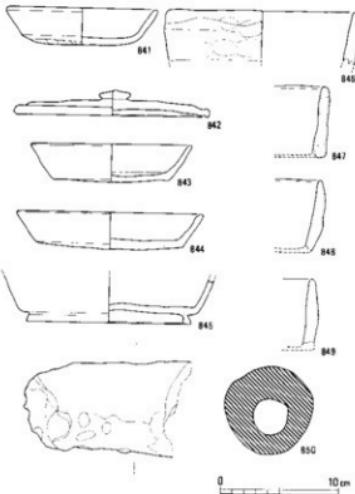
第183図 S K93出土遺物実測図 (1 : 4)

(5) 不明遺構

本来はS Z67もここに含めるべきであるが、それについてはS H65~66といっしょに既述したので、それ以外の不明遺構について述べる。

S Z79 S D75が埋没した後、その上に造られたもので、明確なプランや掘り込みは認められなかったが、長径1m×短径40cmにわたって楕円形に焼土がみられた。土質は暗赤褐色砂質土である。そこからは、土師器・須恵器とともに、製塙土器片とふいご状土製品が出土した。

出土遺物 土師器杯(841)・須恵器杯蓋(842)・杯身(843~845)・製塙土器(846~849)・ふいご羽口(850)がある。土師器杯は、底部をヘラケズリし、口縁部は比較的直線的に外側へ延びる。須恵器杯身は高台の付くものと付かないものがあり、高台の付く845は高台が底端部のやや内側に付き、身部が直線的に立ち上がる。製塙土器は細片が多いが、粘土の積み上げ痕は明瞭で、底部は薄い平底である。これらは、奈良時代後半に位置づけられようか。



第184図 S Z79出土遺物実測図 (1 : 4)

S Z 98 ほとんどが調査区外に存在するため、落ち込み状の遺構という以外、その性格は不明であるが古墳時代に属する土器がまとめて出土した。

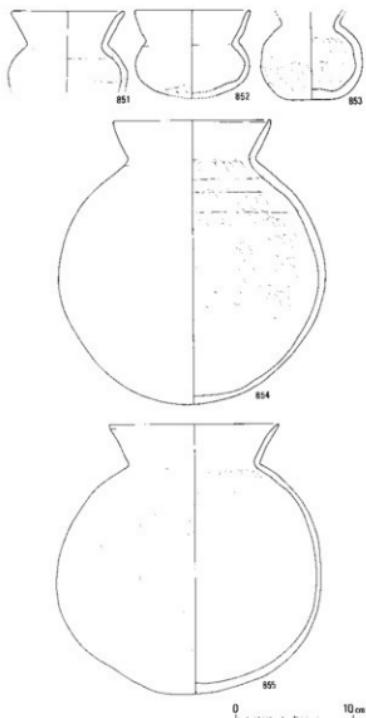
出土遺物 小形丸底壺A(851・852)及びC(853)・壺A(854・855)がある。小型丸底壺Aは、ナデ調整と底部付近のケズリ調整によっており、おなじくCは、ナデ・オサエ調整による比較的難な作りのものである。壺は、いずれも胴部が球形を呈するもので、854は口縁部がやや内凹気味で縁部が微妙につまみ上げ風になり胴部をナデ調整するのに対し、855は口縁部が外反し胴部を板ナデ調整するものである。胴部が球形であることは布留式との関連がうかがえ

るが、調整がナデや板ナデ、オサエによっており、在地的な色彩が強いものといえようか。布留3期以降に併行してくるものであろう。

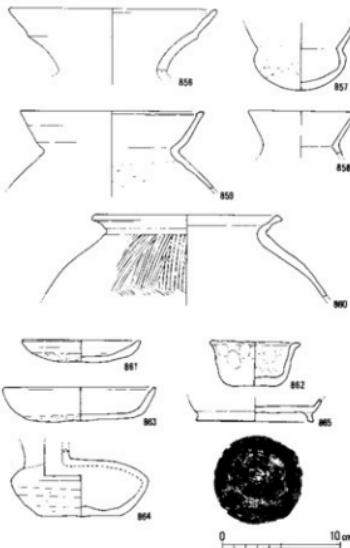
(6) 包含層出土遺物

856~860は、S H84の北隣の遺構検出の過程で出土した土器である。この部分の土質は、やや汚れた遺構埋土様の土であり、発掘時点では明確に検出できなかったものの、ここにも本来はその時期の遺構(竪穴住居)が存在していた可能性がある。

その他の土器は、大きく古墳時代から中世までの土器と捉えることのできるものである。須恵器杯身(865)の底部外面にはヘラ描きがみられる。



第185図 S Z 98出土遺物実測図 (1 : 4)



第186図 上段部分包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

6. 立会い調査部分の遺構

この部分は、は場整備事業による排水路部分を発掘したもので、幅が狭く（基本的に幅2m）、そのため遺構の性格もはっきりしないものもあるが、A地区での北側への遺構の広がりを押さえるというてんではそれなりに意義のあるものとなった。全体として遺構密度は粗らであり、出土遺物も細片を中心として多くなかった。前述のA地区の地形区分でいう中段部分と下段部分に相当する部分であるが、立会い調査部分として一括して報告する。

(1) 壁穴住居

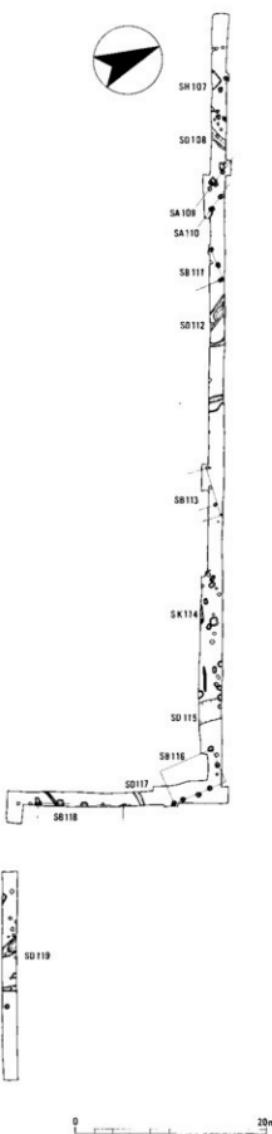
S H107 調査区の制約のため、壁穴住居の北東隅のみ確認したるものと思われ、全体の形・規模は不明である。住居のコーナー部分はほぼ方形である。埋土からの出土遺物は土師器片がごく少量出土しただけで、時期は不明である。

(2) 挖立柱建物

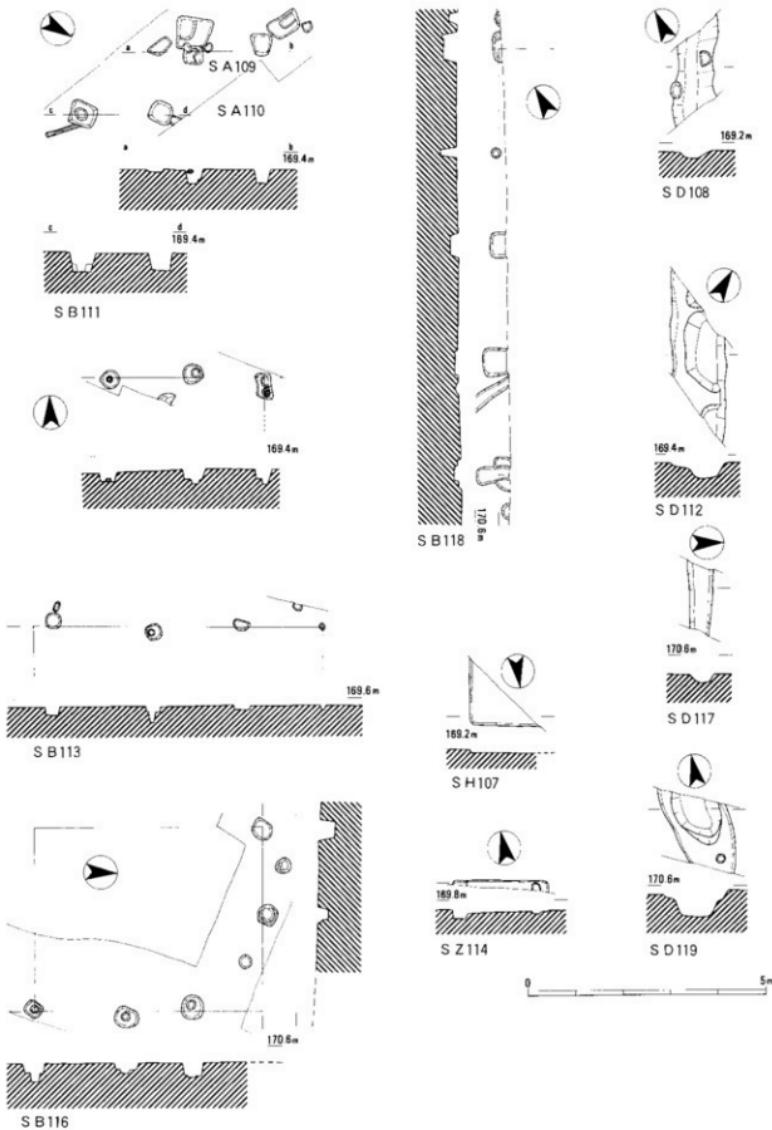
S B111 2間分（3.3m）の柱列が確認できただけであるが、いずれの柱穴も柱根が遺存していたり柱痕跡が明瞭であったりするなど安定しており、規模や棟方向はわからないが、掘立柱建物の一部分と思われる。仮に南北棟とするとN4°Eである。柱間寸法は、東から1.5m+1.8mと不等間であり、おそらく西側へいまし延びているものと思われる。柱掘形は40~60cmの方形もしくは隅丸方形であり、埋土は暗褐色土である。柱穴から奈良時代の須恵器片が出土している。

S B113 調査区の制約のため、3間分（5.7m）の柱列が確認されただけであるが、おそらく掘立柱建物になるものであろう。棟方向はN11°Eであるが、桁行・梁行とも不明である。柱間寸法は、東から1.8+1.8+2.1mである。柱穴は、径40cmの円形であるが、東側の1個のみは径10cmと小さく、庇になるものと思われる。掘形埋土は暗灰褐色土である。柱穴からの出土遺物はなく、明確な所属時期は不明であるが、一尺30cmで定数値を得られることから、律令期以降の建物であることが推定される。

S B116 検出できなかった柱穴もあるが、おそらく桁行3間（5.1m）×梁行2間（3.6m）の南北棟の建物で、棟方向はN4°Eである。柱間寸法は桁行が北から1.8+1.5+1.8m・梁行は1.8m等間であ



第187図 立会い調査部分実測図（1:500）



第188図 立会い調査部分各構造実測図 (1 : 100)

る。柱掘形は、径50cm程度の隅丸方形で、埋土は黒灰色土である。柱穴から、奈良～平安時代と思われるような土器片が出土しており、柱間も一尺30cmで完数値を得られることから、奈良時代以降の建物であろう。

S B118 4間分(9.3m)の柱列が確認されただけであるが掘立柱建物の可能性がある。トレンチ西側は一段下がっており、東側へ建物が延びるとすれば南北棟建物の西側柱列になるものと思われる。棟方向は、N26°Eである。柱間寸法は、北から2.4+2.1+2.4+2.4mである。柱掘形は径70cm程度の方形になるものと思われる。出土遺物はないが、この建物も一尺30cmで完数値を得られることから、律令期以降のものであろう。

(3) 構・柱列

S A109・S A110 調査区が狭いため全体形が明確でないが、比較的しっかりした方形の柱穴が4個検出できた。掘立柱建物とするには柱通りがやや悪く、また2列間の間隔が狭い(1.5m)ことから、それぞれ独立した柱列と考えたが、掘立柱建物(数は不明)の柱穴である可能性もある。主軸方向は、N30°Wである。柱掘形は、径50～80cmの方形で、検出面からの深さが50cm程度残っている。埋土は、暗褐色土である。S A109の柱穴からは須恵器片も出土している。

今後の調査の進展によって、より明瞭な造構の性格が明らかになるものと思われる。

(4) 溝

S D108 長さ2m以上・幅0.9m・深さ13cmの溝で、断面は緩い逆U字形を呈する。埋土は暗褐色土である。出土遺物に乏しく、明確な所属時期は不明である。

S D112 長さ2m以上・幅1.2m・深さ30cmの溝で、断面形は緩いU字形を呈する。部分的に上坑状に落ち込むところがみられる。埋土は暗褐色土である。出土遺物に乏しく、明確な所属時期は不明である。

S D115 長さは不明であるが、幅2.2mの自然流路である。埋土は黄灰色砂質土である。出土遺物はない。

S D117 長さは不明であるが、幅50cm・深さ15cmの小さな溝で、断面形は逆台形を呈する。S B116の築行方向にはほぼ平行している。出土遺物はないもののS B116と同時存在したものと思われる。

S D119 調査区の制約で、長さは明確にしえないが、幅1.1～1.3m・深さ20cmの溝である。一部土坑状に55cmの深さになる部分がある。出土遺物はなく、時期不明である。

(5) 不明遺構

S Z114 調査区の制約のため、全体の形、規模ともに不明であるが、遺構の北東側がほぼ直線的に2.1m検出された。堅穴住居である可能性もある。検出面からは、25cmの深さがあった。

(地盤沿岸)

(註)

- ① 以下、古式土器類の分類は、大溝での伊藤分類に従い、年代観は、安達厚三・木下正史「飛鳥遺跡出土の古式土器類」【考古学雑誌】第60巻第2号 1974年による。
- ② 宮本長二郎氏の御教示による。
- ③ 田辺昭一「陶色古窯址群」I 平安学園考古学クラブ 1966年。以下、古墳時代須恵器の年代観は同書による。
- ④ 上野市森屋遺跡や高賀遺跡、高瀬遺跡では溝資料ではあるが、6世紀初頭前後の須恵器との共伴が認められ、当地域で安定した存在の器種である。大溝田村に当例の典型的が認められないことは注意されよう。
- ⑤ この調査区からは、図示しうる程の遺物は出土しなかった。

IV B 地点の調査成果

(1) 立地と概要

1. 立地

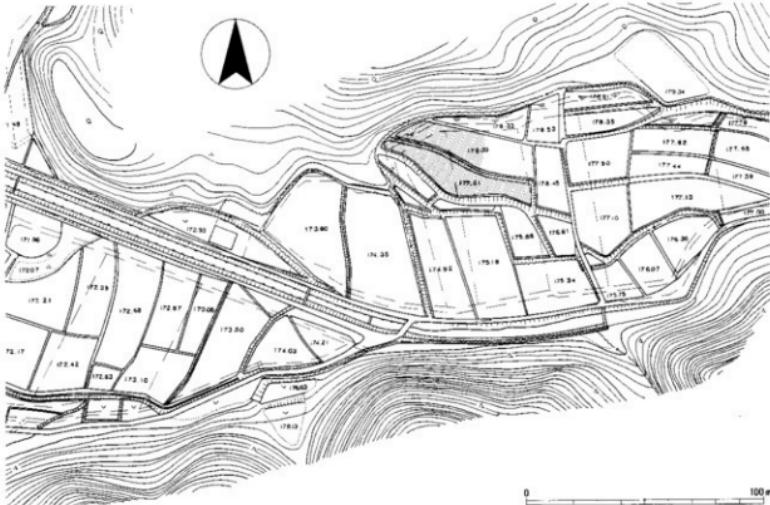
B 地点は、A 地点とは丘陵をはさんで東側へ500m 程入ったところに所在しており、丘陵が障害物となつて A 地点を直接視認することはできない。ここは、南北を丘陵に挟まれた細い谷筋で、東方より谷に沿つて流れてきた小河川「北川」が、もうすぐ盆地部へ流れ出ようとするところの右岸にある。調査前の現況は水田であったが、比高差のある典型的な谷水田で、北側丘陵の南斜面の一部と理解することができる。

地形的にも非常に制約された場所であり、分布調査では若干の遺物の散布が認められたものの全体的に稀薄で、試掘調査でも明確な遺構は発見できず、取り合えず調査は行うことになったが、後述のような貴重な成果を得ることになるとは当初は予想だにしなかつた。

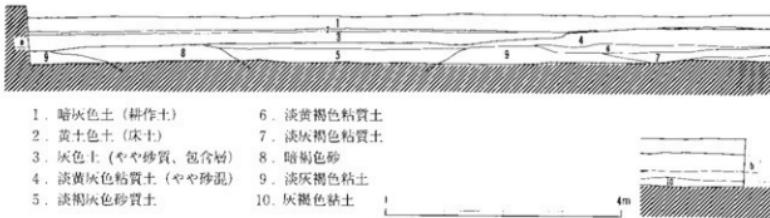
2. 基本層序

前述のように、B 地区は丘陵の緩い南斜面に立地しているため、土層は全体的にわずかに南側へ傾斜したものとなっている。遺構は、基本的には淡黄灰色粘質土上面で検出できるが、その部分は北側の一部のみで、大部分は旧耕作土と思われる灰色土の削平を受けており、南側では淡黄灰色粘質土が存在せず、その下の土層で検出を行つた部分も存在する。全体に淡黄灰色粘質土よりも下の土層は安定していないが、淡灰褐色粘土と灰褐色粘土がいわゆる地山として認識できるものである。

後世の耕地化のためか明確な包含層は存在していなかったが、灰色土より上位に若干の遺物が混じる他、部分的に検出面である淡黄灰色粘質土の上面に貼り付くかたちでも遺物が出土した。



第189図 B 地区調査区位置図 (1 : 2,000)



第190図 B地区土層図 (1 : 80) L=179.6m

3. 全体の遺構配置

約700m²の調査範囲のなかで、古墳時代と考えられる大型掘立柱建物2棟が南面を揃えて検出されたほか、堅穴住居2棟と土坑1基が発見された。全容が明らかになったものは掘立柱建物2棟のみで、その他の遺構はすべて調査区の端で確認されたもので

ある。SH2については、規模確認のため南側調査区外へ細長いトレンチを延ばしてみたが、水田化したときに受けたと思われる削平（調査区の南側は、水田面としては一段低い）をうけており、規模を明確にしえなかった。

(2) 遺構と遺物

1. 掘立柱建物

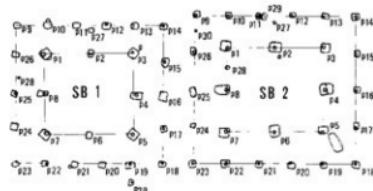
SB1 2棟並んだ掘立柱建物のうち、西側に位置する建物で、東側に建つSB2に比べて若干小さいものの、四面に庇が付く大型建物である。身舎部分は2×2間(7.5×6.8m)、庇部分は5×4間(12.5×11.6m)で、棟方向はN4°Eである。

柱間寸法は若干不揃いで、身舎では桁行北側が西から4+3.5m・南側が3.75m等間、梁行が北から3.5+3.3m、庇部分では桁行が2.5m前後のほぼ等間(P12とP13間が若干短くなる可能性あり)、梁行は東側が北から3.1+2.9+2.7+2.9m、西側が北から2.5+3.3+2.8+3.0mとなる。

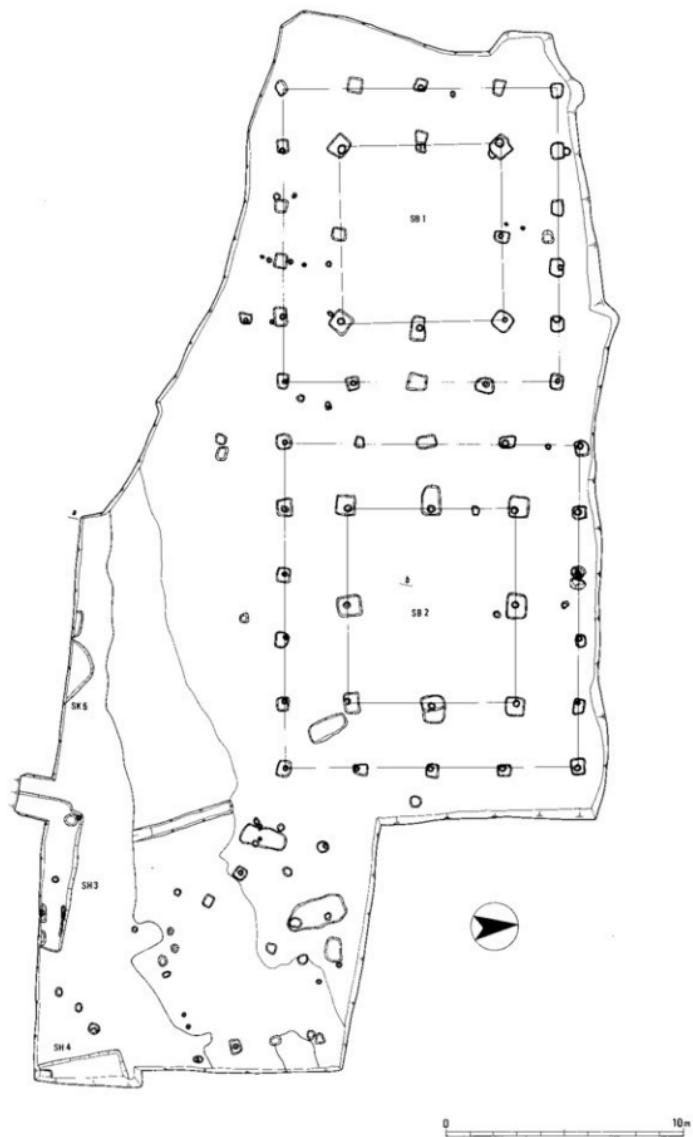
建物柱穴をみてみると、身舎部分の隅柱にあたる

柱穴(P1・3・5・7)の掘形が他の柱穴よりも大きくて深く、しかも45°向きが振っていること、身舎部分梁行の中央柱穴(P4・8)の掘形が細長いことなどがその特徴としてあげられよう。東側のSB2と比べた場合、身舎桁行の中央柱(P2・6)が他の身舎柱穴と比べて規模、深さのてんでやや小さいことも注意される。掘形断面の土層は、大きく見た場合には、砂質土と粘質土の互層を基本とする。また、P27は礫を多く含んだピットであったが埋土が他の柱穴と全く異なっており、直接SB1に伴うかどうかは疑問が残る。

出土遺物 P3の掘形埋土からは、口縁部を欠損した小型丸底壺が2個出土した(7~8)。P4の掘形埋土からは、いまひとつよくわからない土器であるが底部が開いている鉢形？土器片(9)が出土した。また、検出面上に含まれるかたちで、須恵器毫片が出土した。口縁部片は2個体分(10~11)あるが、いずれも口縁部直下に突窓がめぐるものである。また、体部片(12~13)は、格子叩きをもち、内面をナデ消している。土器の断面は、セピア色を呈している。これらの土器は、5世紀代を示しており、建物もほほこの時期であろう。



第191図 SB1・SB2柱穴番号図 (1 : 400)



第192図 B地区構造図 (1:200)

S B 2 S B 1 の東隣に並立する大型建物で、これも四面に庇をもつ。身舎部分は 2×2 間 (8.2×7.1 m) 、庇部分は 5×4 間 (13.7×12.5 m) で、庇部分の梁行長は、S B 1 の庇部分の桁行長と同じである。棟方向は、S B 1 と同様、N 4° E である。

S B 1 に比べ柱痕跡の遺存が良好で、ほぼ全ての柱穴で確認でき、柱根自体が遺存した柱穴も多い。柱間寸法は、身舎では桁行が西から $4 + 4.2$ m、梁行が 3.55 m 等間、庇部分では桁行北側が西から $2.75 + 2.5 + 2.8 + 2.8 + 2.75$ m、南側はほぼ 2.75 m 等間、梁行は西側が北から $3.2 + 3.3 + 2.8 + 3.2$ m・東側が $3.3 + 3 + 3.2 + 3.1$ m である。全体的に若干不揃いであるものの、S B 1 よりは誤差が少ないようである。

建物柱穴をみてみると、身舎部分では S B 1 でみられたように隅柱がとくに大きいということもなく、桁梁の中央柱穴も隅柱になんら差色のない大きさ（径 $70 \sim 130$ cm）や深さ（ほぼ 1 m）を有する。ただし、妻側の中央柱穴（P 4・8）の形状は S B 1 同様長方形を呈する。庇部分の柱穴は、径 $40 \sim 80$ cm と身舎部分よりもかなり小さい。掘削断面の土層は、S B 1 同様、砂質土と粘質土の互層を基本とする。

また、身舎妻側の P 1 と P 8 間と、庇妻側の P 9 と P 26 間にそれぞれ柱穴が一個ずつ検出されたが（P 28 と P 30）、これらはいずれも柱筋に通っており、柱穴埋土上も身舎や庇の柱穴と同様であることから、建物に伴うと考えてよからう。これに対し、P 27 や P 29 は確を多く含み他の柱穴と埋土も異なることから直接遺物には伴わないものと思われる。ただ、P 27 は、S B 1 でも同様の位置にピットが存在しており、注意される。

出土遺物 P 19 の掘形埋土からは、二重口縁壺の口縁部破片（14）、P 1 と P 10 の掘形埋土からは高杯杯底部片（15・16）が出土した。このうち 15 は台部の屈曲部に粘土を突帯状に貼付したものである。

また、建物自体を構成していたものとして、柱の柱根部分が比較的よく遺存していた。材質は全てヒノキで、いずれも底部は丁寧に削られている。身舎部分の柱は現存最大幅で約 25 cm、庇部分の柱は 17 cm 程度であるが、腐蝕によって若干は細くなっているものと思われる。
(穂裕昌)

2. 穴住居

S H 3 調査区南端において東西の一辺が約 6 m の堅穴住居の一部を検出した。他の長さについては西側の拡張部において南に延びることを確認したが、南側では落ち込んでいるため遺構は存在しない。検出面から $10 \sim 15$ cm 程の深さで床面を検出。床面上に柱穴、ピット、溝状遺構を確認したが、窓等の痕跡は検出されなかった。北西隅で検出した直徑 50 cm の大きめのピットからは土師器高杯が、埋土からは土師器甕が出土した。

出土遺物 土師器高杯（17）は、径 17 cm、器高 12.5 cm で器面の調整等は磨耗著しいため不明である。直線的に外反する長い口縁部を有し、体部と口縁部の接合接線をもつ。内面のくびれは不明瞭である。脚部は直線的に広がり脚部で屈曲する。脚部と体部との接合は底部に粘土を埋め込み脚部を接合させたと考えられる。時期は布留 2 期の段階におさまるものと思われる。ただし、この 1 個体をもって堅穴住居の時期を定めるには無理があるかもしれない。

（18）は土師器甕である。口径 15.8 cm、口縁部から頸部にかけて残存する。

S H 4 調査区東端南側で規格不明の堅穴住居の一角を検出した。検出面から床までの深さは北側で約 20 cm、南側で約 10 cm の残りになっている。また、南北間に方形状になる土坑の一部を検出した。この住居埋土より土師器甕の体部片が出土した。

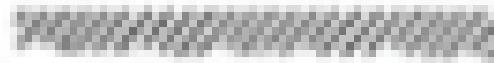
出土遺物 土師器甕（19）口縁部から体部にかけわずかに残るのみで、全体に崩滅している。

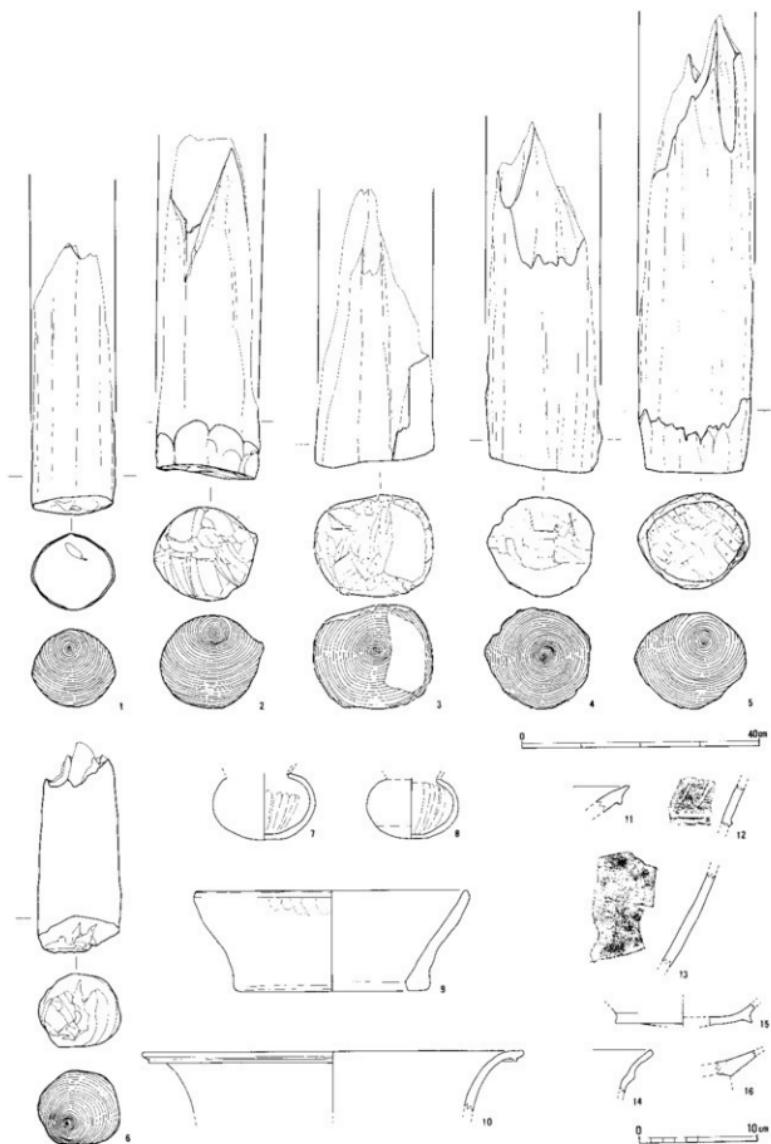
3. 溝

S D 6 調査区東側を東西に横に横切る暗褐色砂土の層である。この層は南側で淡灰褐色粘土層を切っており北側で淡褐灰色砂質土の下に潜りこんでいる。また、他の層位との関連で見れば、層位は一様ではなく各所で交錯がみられ複雑な層位を形成している。そのため当初自然流路としたが、地層形成途上にできたものと理解し地山の一部と解する方が妥当と思われる。

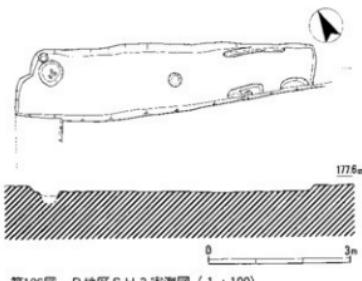
4. 土坑

S K 5 調査区南端際で直徑 2.5 m の不定形な土坑の一端を検出した。深さ約 10 cm 強の比較的浅い土坑である。埋土からは、須恵器杯身及び土師器片が出

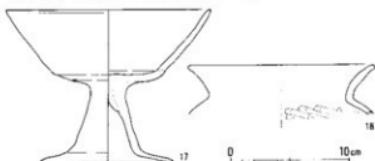




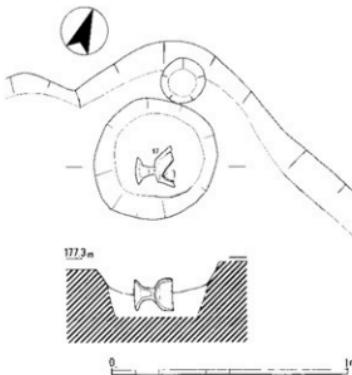
第195図 B地区SB2柱根及びSB1・2出土遺物実測図（柱は1：8、土器は1：4）



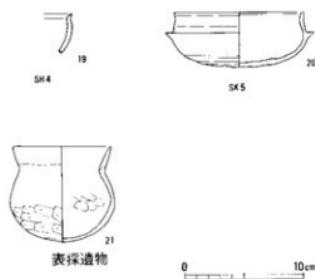
第196図 B地区 SH 3実測図 (1 : 100)



第198図 B地区 SH 3出土遺物実測図 (1 : 4)



第197図 B地区 SH 3出土状況図 (1 : 20)



第199図 B地区出土遺物実測図 (1 : 4)

土したが、図示しるのは須恵器のみである。

出土遺物 須恵器杯身(20)で、口径10.9cm、器高4.1cmを計る。底部から体部にかけ外面底部にヘラケズリを1/3程度施し、受け部は短く外反して取りつく。高い立ち上がりを有し口縁内面に明瞭な段をもつ。時期的に陶邑古窯址群編年の中K23型式(5世紀末)に併行するものと思われる。

5. 表様の遺物

土師器小型丸底壺(21) 口径8.2cm、器高8.0cmで

口縁部は器高の1/4の位置につき体部の口径は口縁部径を凌ぐ。体部外面下半にヘラヘズリを施し、上半より口縁部にかけナデるが口縁下段に粘土接合痕を残す。内面には強い指ナデ痕が見られ、全体に粗製なものとなる。時期的に布留2期の新しい段階に入るとと思われる。

(吉澤 貞)

(註)

- ① 須恵器は、TK73型式～TK216型式に相当するものであろう。
(田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年)
- ② 安達厚三・木下正史『飛鳥墳域出土の古式土師器』『考古学雑誌』第60巻第2号 1974年
- ③ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年

V 木製遺物の樹種および植生復原

天理大学附属天理参考館 金原正明
大阪千代田短期大学 粉川昭平
環境文化研究所 金原正子

1.はじめに

城之越遺跡からは約200点にも達する古墳時代の木製遺物が出土している。そのほとんどを網羅するように樹種同定を行った。つごう187点、190試料の同定を行い、その傾向を調べた。

木製品のほとんどは大溝から出土したものであり、板材、棒材が主である。また、鞘や武器形の製品と建築材が含まれ、特徴的といえる。数種が多く、出土した木製遺物のほとんどを含んでいるため、遺跡における木製遺物の用材を考えるうえでよい資料になると考えられる。

城之越遺跡の大溝には、泥炭質の堆積物が埋積しており、花粉などの植物遺体の分析に適している。ここでは花粉分析を主に遺跡の植生や景観の復原を試みる。植物遺体を扱う場合、その種類や部位により生産性が異なり、埋積までの移動性、そして、埋積後の保存性も異なる。花粉分析のみとか單一の分析からは具体的な空間的植生復原はかなり困難となる。ここでは採集された種実と枝材も考慮してできるかぎりの復原を試みた。

なお、大型植物遺体の同定は一部大阪千代田短期大学の粉川昭平先生による。花粉分析は環境文化研究所の金原正子氏に分析を一部担当して頂いた。本報告はそれらを総合的に金原正明がまとめた。あやまちがあれば金原正明の責であることはいうまでもない。

2.木製遺物の樹種

a. 試料と方法

木製品から、カミソリを用いて木材の横断面・放射断面・接線断面の切片を作った。一部は破片で採取した。木製品であるため極力最小の採取に努めた。また、試料によっては横断面の採取できないものも

あった。作成した切片を光学顕微鏡によって観察し、現生標本との対比によって同定を行った。なお、試料番号は炭素番号を用いた。

b. 結果

結果は表1・23~28に一覧する。木材試料の多くは、木材構造の保存が良く、分野壁孔の明瞭に観察できるもの多かった。同定の結果、針葉樹7、広葉樹11の18の分類群が認められた。これらは各同定分類レベルにおいて種名・中属名・属名・科名によって表した。また、主要なものは顕微鏡写真を示した。以下に主要なものの形質と特徴を示す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.

イナイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかで、均質緻密である。仮道管には、らせん肥厚があり、たいがい2本対になる。分野壁孔はヒノキ型で1分野に普通4個存在する。放射組織は単列同性で、数細胞高いものが多い。材は堅硬・緻密・弹性が強く、水湿に良く耐える。

モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞のみから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はややゆるやかで、晩材部の幅は狭い。分野壁孔は小さなスギ型で1分野に1~4個存在する。傷害樹脂道のあるものがある。放射柔細胞の接線膜が著しく結節状を示す。放射組織は単列同性である。材は保存性が低く、輕軟である。属までの同定しかできないが、温帯下部にはモミ *A. firma* Sieb. et Zucc. が分布するのみであり、本遺跡出土のものはモミとみられる。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.

マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直・水

平樹脂道をとりかこむエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急で、早材部の幅も広く、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内こう面には著しい鋸歯状肥厚がある。放射組織は水平樹脂道を含む單列同性である。材はやや重硬な良材で水温によく耐え、建築、土木など用途が広い。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科
仮道管・輪方向柔細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。また年輪の外半分には輪方向柔細胞が散在する。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に普通2個存在する。放射組織は単列で、多くは10細胞高以下である。材は、軽軟であるが強靭で、建築など日本の材中最も用途が広い。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl.

ヒノキ科

仮道管・輪方向柔細胞・放射柔細胞からなる針葉樹材である。早材から晩材への移行はきわめてゆるやかで均質微密である。分野壁孔は典型的なヒノキ型で通常1分野2個存在する。放射組織は単列同性である。分野壁孔は、試料によっては同一試料内で典型的なヒノキ型と腐朽によって小型のスギ型を呈する部分とが認められた。また、試料によっては典型的なヒノキ型の確認できないものがあったが、仮道管・樹脂細胞・放射柔細胞からなり、春材から夏材への移行がゆるやかで、分野壁孔が通常1分野2個存在することが確認できた試料もヒノキとした。比較的保存の良い試料が多い。材は強靭で耐朽性および耐湿性が強い。

ヒノキ科 *Cupressaceae*

ヒノキと同様の特徴をもつものの、分野壁孔が腐朽のため数々確認できないものをこの分類群に区分した。ただし、ヒノキである可能性が高い。

針葉樹 conifer

針葉樹材で切片不良のため樹種の同定が困難なもののが針葉樹とした。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科
楕円形で大きな道管が4・5列で配列する環孔材で、道管はほとんど単独である。道管の穿孔は單一

で、放射組織は平伏細胞のみからなる。放射組織は單列同性で平等に分布する。

材は、耐朽・保存性が極めて高く特に水温によく耐える。

スタジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima

ブナ科

年輪の初めに、中型から大型の道管が集団となりつつ環孔状に配列し、道管径を減しながら放射方向に火炎状に配列する。道管の單穿孔である。放射組織は單列同性である。肌目が粗く、耐朽保存性は低い。

コナラ属アカガシ亜属

Quercus subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科
中型から大型の道管が単独であるが帯状に放射方向に配列する。道管は單穿孔である。放射組織は、同性で單列放射組織と広放射組織および複合型のものがある。肌目は粗いが重硬で水温に強い。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科

中型の道管が年輪のはじめに2~3列でならび、晩材部ではやや丸みをもちらながら數個複合して接線方向に配列する環孔材である。道管は單穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1・2細胞が直立細胞からなる異性で1から数細胞幅である。從曲性のある材で耐朽保存性がある。

シロダモ *Neolitsea sericea* (Bl.) Koidz.

クヌキ科

小型の道管がまばらに散在する散孔材である。道管の穿孔は單穿孔と階段からなる多孔穿孔が認められる。放射組織はや上下端のみが直立細胞からなる異性で2列幅である。やや柔らかい材である。

ノリウツギ *Hydrangea paniculata*

Sieb. et Zucc. アジサイ科

小型の道管が単独に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段からなる多孔穿孔である。放射組織は異性で2列幅である。材はやや硬く重たい。

モチノキ属 *Hedysarum* モチノキ科

小型の道管が年輪のはじめに1列に配列し、他は放射方向に複合しながら散在する。道管の穿孔は階段からなる多孔穿孔で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は數細胞幅の異性で、單列のものは直立細胞のみからなる。強さ硬さ中庸の材である。

ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科

小形の道管が単独で散在する散孔である。道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は單列向性である。材はやや重く硬い。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

小型の道管がほぼ均等に散在する散孔材である。道管の穿孔は、微細な階段穿孔で、ときには100を超えることもある。放射組織は異性で基本的に1列である。強韌・堅硬な材である。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科

単独の小さな道管が平等に散在する散孔材である。道管の穿孔は、狭く100以上に達するものもある階段穿孔板をもつ多孔穿孔である。放射組織には平伏細胞と直立細胞があり、異性放射組織型である。放射組織は、1～3細胞幅で、やや高い。材はサカキに似るがややとおる。

ヒイラギ *Osmanthus heterophyllus*

(G.Don) P.S. Green モクセイ科
小型の道管が放射方向に斜めにジグザグに配列する散孔材である。道管の穿孔は单穿孔である。放射組織は高さが低く、上下端のみが直立細胞となる異性である。材は強韌かつ堅硬である。

c. 所見

木製遺物の樹種は、遺跡として統計するとヒノキ材が若しく多く、102点(53.7%)にも達する。モミ材が29点(15.3%)、スギ材16点(9.0%)、コナラ属アカガシ亜属材11点(5.8%)と続くもののヒノキ材とは大きな差がある。本遺跡の用材は、ヒノキ材を中心としたもので、アカガシ亜属などの広葉樹材が少しは使われているものの、ヒノキを主に針葉樹材で構成される。また、コウヤマキ材が使われないもの大きな特徴といえる。木製遺物の種類においては板材と棒材が多い。他に鞘などの刀剣装具と建築材が多いのも特徴である。前者にはヒノキ材が多く、スギも使われる。後者にはヒノキ・モミ属・クリ材が使われる。杭・矢板には様々な樹種が用いられる特徴がある。

周辺地域の量的にまとまり遺跡の全容のわかる用材データはないが、奈良盆地の布留遺跡や和爾遺跡などでは同様の古墳時代の木製遺物の調査が行われ

ている。そこではヒノキ材が多用され、アカガシ亜属・モミ属・スギの材と統いて使われ、本遺跡の傾向とほぼ一致する(図200)。ただし、木製造物の種類において、本遺跡は農耕具が皆無といってよいほど少なく、他よりアカガシ亜属が少ない原因になっている。城之越遺跡にみられるヒノキ材の多用は周辺地域の古墳時代の普遍的な用材傾向としてとらえることができよう。これは弥生時代にはみられない傾向であり、横生からみてさほど多く分布しないヒノキ材を多量に供給できる製材の専業集団のような機構が当時存在していたことを示唆するものと考えられる。

▼ 城之越遺跡					アカガシ亜属	
ヒノキ	モミ属	スギ	その他			
0	1	1	1	1	1	1
100%						
▲ 布留遺跡						
ヒノキ	アカガシ亜属	モミ属	スギ	その他		
0	1	1	1	1	1	1
100%						

第200図 木製造物樹種組成図

3. 大溝堆積土の分析による植生の復原

a. 試料について

試料は遺跡の北壁と西壁の大溝を含む豊面から採取した。北壁と西壁ではほぼ同じ層序を示しているので一括して記載する。大溝内の堆積物はほぼ上・中・下の3相を呈する。下層は泥炭質の砂で、植物遺体片に富む。中層は泥炭質粘土で多くの植物遺体片を含む。上層は黒泥質のシルトで分解による黑泥化がみられる。中層はさらに2層ないし3層に細分される。下層の泥炭質の砂の上面以外は明白な層界面とはならず、漸移して変化する。このことはさほど堆積環境に急激な変動がなかったことを示す。また、大溝の堆積物が泥炭質であることより、湿った環境が予想される。なお、大溝の上位には柱状構造の観察される水田作土の累積とみなされる堆積層が複数、現地表面にいたる。試料は層界にかからないようにほぼ10cmごとにブロック状に採取した。北壁では15試料、西壁では16試料の計31試料であった。

種実は発掘時に取り上げられたものと水洗で選別

した試料である。枝材は水洗の際に選びだした試料を用いた。

b. 花粉分析の方法

分析は持ち帰ったブロック試料の内部の新鮮な部分を用いて行った。分析は以下の方法で行った。

- 1) 試料を遠沈管に取り、5%水酸化カリウム溶液を加えかき混ぜ、15分間湯煎する。
 - 2) 0.5mmの篩で大きな粒子を取り除く。
 - 3) 水洗し、25%フッ化水素酸溶液を加えて湯煎した後、30分放置する。
 - 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理を施す。
 - 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
 - 6) 残液に石炭酸フクシンを加え染色を行い、再び水洗する。
 - 7) 過量のグリセリンゼリーを加え暖めて、プレパラートを作製する。
- 以上の操作で、水洗は水を加え搅拌し1500rpmで2分速心分離し上澄を捨てる。これを3・4回繰り返す。
- 8) 作成したプレパラートを200倍から900倍で鏡検する。計数は、花粉粒が200~300個以上になるまで行った。

c. 花粉分析結果

花粉遺体は保存性がよく各試料から検出された。花粉出現数は表2・3に示し、その結果から花粉総数を基本数とする百分率を算定し、花粉組成図(図202・203)を作製した。以下に花粉遺体の出現状況を下位から記載する。花粉遺体は北壁も西壁もほぼ同じ出現傾向を示し、下位より4段階(I~IV)に区分され変遷する。

I : (北壁15、西壁14~16)

樹木花粉の占める割合が極めて高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優占し、クリーシイ属一マテバシイ属とコナラ属コナラ亜属が伴われる。他は低率である。草本花粉は非常に少ない。

II : (北壁9~14、西壁8~13)

樹木花粉の占める割合は上同様極めて高い。Iで優占していたコナラ属アカガシ亜属が減少し、クリー

シイ属一マテバシイ属が優占する。他にコナラ属アカガシ亜属とコナラ属コナラ亜属が伴われる以外は非常に低率である。

III : (北壁5~8、西壁5~7)

全体としては樹木花粉が減少傾向を示し、草本花粉が増加する。樹木花粉ではIIで優占していたクリーシイ属一マテバシイ属が激減する。スギ・イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科の針葉樹が少し増加する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が急増する。それにともなってカヤツリグサ科ヨモギ属もやや増加する。他に水田雑草であるオモダカ属も出現するようになり、栽培植物であるソバ属も試料によってはみられる。

IV : (北壁1~4、西壁1~4)

樹木花粉の減少傾向がほぼとまり、やや草木花粉が優占した状態で安定する。樹木花粉ではマツ属複維管束亞属(ニヨウマツ類)・スギの針葉樹とコナラ属アカガシ亜属・コナラ属コナラ亜属の広葉樹が主に出現する。草木花粉ではイネ属型を含むイネ属型が優占する。

以上のIからIVの変化は地層の区分と一致する。植生とその変遷は以下の種実もまじえて、最期に行う。

d. 種実同定

種実は大溝とその周辺より出土し取り上げられたもの18、他に大溝下層から水洗したもの1の計19であった。試料は各試料(群)ごとに、分類し同定を行った。同定は、肉眼・ルーペ・実体顕微鏡を用いて行った。試料は以下のとおりである。S-13のみ水洗試料で他は発掘時の取り上げ試料である。

試料No	出土層位・位置	
S-1	大溝 III層	D-1
S-2	大溝 III層	D-6
S-3	大溝 III層	D-8
S-4	大溝 III層	F-8
S-5	大溝 III層	F-9
S-6	大溝 IV a層	D-3
S-7	大溝 IV a層	D-5
S-8	大溝 IV a層	F-9

S-9	大溝 IV層	I-10	911023
S-10	大溝（黒灰粘）B-7		910522
S-11	大溝（黒灰粘）C-6		910520
S-12	大溝暗灰砂	B-10・11	910528
S-13	大溝下層	D-6	910712
S-14	大溝（黒黄粘）B・C-8・9		
S-15	大溝		
S-16	大溝 IV層	C-10	910605
S-17	大溝 IV層	C-11	910605
S-18	「井泉1」出土		
S-19	記載なし		

結果は、表4に一覧する。同定の結果、11の分類群が認められ、それぞれの同定レベルによって種名・属名・亜属名・科名で表記した。ほとんどの種類は、写真に示した。以下に出上種実とその分類群を記す。

なお、大きさは写真を参考にされたい。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight)

K.Koch 植子

倒卵形で、やや偏平、表面に微細な縦がある。

クリ *Castanea crenata* Sieb.et Zucc. 果実

大きなものが多くほぼ平坦な破碎で基部のつき跡と内面に渋皮がある。大きなもので長さcm幅cm。

シイ属 *Castanopsis* 果実

小形の堅果である。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen.

Cyclobalanopsis 果実

競斗のついでいるもの、はなれたものがある。形態よりアカガシに似るものとイチイガシに似るものがある。アカガシ亜属での同定はかなり難しい。

モクレン属 *Magnolia* 植子

偏平で一面の中央に太い溝がある。

シキミ *Illicium anisatum* L. 植子

特有の光沢をもつ茶褐色で橢円形を呈し、一端に溝がある。

クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) Presl 植

球形を呈し、一端の稜線がはしりその中央が突起する。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect.*Pseudocerasus* 植

橢円形で、一側面の中央に細い溝のある隆起があり、基部に溝がある。側面には数本の降起がある。

モモ *Prunus persica* (Linn.) Batsch. 核完全なもの、縫合線上を食害により丸く欠くものがある。

エゴノキ *Styphax japonica* Sieb.et Zucc. 核一端の尖る橢円形で、もう一端は欠状となり、3条の明瞭な溝がある。

ヒヨウタン類 *Lagenaria siceraria* Stand. 果実・種子

種子と果皮片がある。種子は、淡褐色で、上端に縫と発芽孔があり、下端が波うつ切形となる偏平な橢円形をする。表面には、幅広く低い筋が2本ある。

他に、大溝C-6 黒灰粘～黒黄粘910522土器の中に入った繊維と大溝D-12 II b層910621の昆虫羽根がある。前者は後に入り込んだ草本の根とみられる。

種実のなかでモモとヒヨウタン類は明かな栽培植物である。モモ核は金原・鶴川が分類したA類にあたり、最も古くから存在するタイプである。クリは優良な食用となり、他の堅果類も食べることができる。いずれも温帯に生育する樹木であり特殊なものはない。

⑨. 枝材の樹種

大溝下層堆積土の水洗の際、同定可能な太さの枝材を選びだした。計7点であった。

同定の結果、4種類が認められた。以下に結果と記載を示す。

コナラ属アカガシ亜属 2点

Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*

シキミ 1点

Illicium religiosum Sieb. et Zucc.

小型の道管が散在する散孔材である。道管は縦かに数の多い階段状の多孔隙である。放射組織は異性で3細胞幅ぐらいいまである。平伏細胞断面形が不整形で縫に長いものがある。

サクラン属 *Prunus* 3点

小型の道管がやや環孔状に配列する部分のある散孔材である。道管は單穿孔で内壁にラセン肥厚がある。道管の内部にはゴム状の物質が存在する。放射

組織は1~3列幅の異性である。

フジ 1点

Wisteria floribunda (Willd.) DC.

大型の道管がほぼ単独で1・2で配列する環孔材である。道管は單穿孔で、晚材部の小道管の内壁にラセン肥厚がある。放射組織は同性で1~8細胞幅で、細胞幅の多いものは高さが高い。

f. 植生とその変遷

花粉の変化の区分にそって植生の復原を行う。

I (大溝下層)ではコナラ属アカガシ亜属を主とするカシ林が周囲に分布していたとみられる。種実と枝材からみるとコナラ属アカガシ亜属・モクレン属・シキミ・サクラ属サクラ節・エゴノキ・フジも、大溝に近接して生育していた可能性がみられる。特に各植物遺体で検出されているコナラ属アカガシ亜属(カシ類)は多く生育したと考えられる。同地域の同時期の花粉分析は北堀池遺跡の報告のなかに安田(1992)によってまとめられているが、コナラ属アカガシ亜属の花粉が多く、カシ林の多い植生が示されている。本遺跡のものは、堆積も泥炭質で現地性が高く、より局地的な植生が反映したものとみられる。また、大溝がつくられた当時の城之越遺跡はコナラ属アカガシ亜属の林に覆われていたとみなされる。開けた景観を示す人里の草木花粉がほとんど出現しないか極めて少ないため、周囲は樹木で覆われていたと推定される。また、水の停滯する水湿地植物の花粉が検出されないため、大溝に水が停滯していたとはみなせない。大溝は常に水が動くような状況であったとみなされる。

II (大溝中層)では、コナラ属アカガシ亜属が減少し、クリーイ属マテバシイ属が増加する。クリーイ属マテバシイ属の花粉は小さな型であり、クリの可能性が高い。クリの果実が検出されており、ここではクリと考えるのが妥当と考える。この時期には大溝の周囲にはカシ林に変わりクリ林が分布する。周囲の景観は前時期と同様に開けた景観は想定できない。大溝の状況も変わらず、水が停滯せず常に動くような状態であったとみなされる。

III (大溝上層)になると、イネ属型を含むイネ科花粉が急増するため、周辺が急速に水田化される。

大溝自体も埋没が進んでおり水田化されていた可能性がある。この変化とともにクリ林が急減する。オモダカ属などの水田雜草や停滯した水湿地を好むカヤツリグサが増加する。

IV (上位層)ではイネ属型を含むイネ科花粉が安定して高率を示し、周囲に水田が広がっていたとみなされる。

以上の変化の中で大溝が使用されていたと考えられるI (大溝下層)とII (大溝中層)の時期では、樹木要素がコナラ属アカガシ亜属(カシ類)とクリとで大きく異なる。クリは栽培であるかどうかが問題となるが、土地改変に伴って増加するような草木がみられないため、推定しにくい。核の出土しているモモは花粉では現れにくい。モモ核は古墳時代の遺跡から普遍的に出土する。また、人里の草木花粉があまりにも少なく、通常の集落遺跡とは性格を異にするように思われる。ただし、堆積の状況からみて從来花粉分析で考えられているよりかなり狭い範囲の植生を強く反映している可能性もある。

	IV	水田	水田雜草
上位			
	III	水田化	水田雜草の出現 クリ林の減少
大溝			
	II	クリ林	クリ・モモ
下位			
	I	カシ林	アカガシ亜属・モクレン属 シキミ・サクラ節 エゴノキ・フジ

第201図 推定される植生変遷

(参考文献)

三重県教育委員会『北堀池遺跡発掘調査報告 第二分冊』1992年
奈良県教育委員会『奈良・森木遺跡』1938年

鶴谷巳三郎・金原正明『布留遺跡研究中間報告3 土器水器の

樹種と木取り』 大阪大学附属天理考古学分室編 1981年

金原正明・粉川昭平『モモ核を中心とする古代の悠揚植物の変遷』

学名	和名	分類群						大 属						属						種								
		1	15	II	III	IV	V	W	b	W	a	V	W	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	
<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	トガヤ	1	1																								1	
<i>Abies</i>	モミ属			5	3	3	2		5	1																	10	
<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.	アカマツ	1																										
<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ		1	10	2	2	1																				1	
<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ	3	44	8	9	12																					1	
Cupressaceae		1		1	1	1																				2		
conifer			1																								2	
<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1					?	1																				
<i>Castanopsis sieboldii</i> Matsum.	クヌギ																											1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	ヤカシモ属	3	1	5	1	1																						
<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマグリ	1																										
<i>Neolitsea sericea</i> (Bl.) Koidz.	シロダセ																											
<i>Hydrangea paniculata</i> Sieb. et Zucc. var. <i>virginiana</i>	モチノキ属	-																										
<i>Hex</i>																												
<i>Euonymus</i>	ニシキギ属	-																										
<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	1																									1	
<i>Eurya japonica</i> Thunb.	ミヤナギ	2																									2	
<i>Osmunda heterophylla</i> (G.Don) P.S. Green et Iwats.	イモリ	1																									1	

第1表 本州植物の属種一覧

分類群			1	2	3	4
学名	和名					
Arboreal pollen	樹木花粉					
Podocarpus	マキ属				1	
Abies	モミ属	4		8		3
Tsuga	ツガ属		3	2		5
Pinus subgen. Diploxyylon	マツ属 ダツ属 ツガ属	10	12	22	11	
Sciadopitys	コウヤマキ	3	5	8	1	
Cryptomeria	スギ	26	28	52	37	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科 イヌガヤ科 ヒノキ科	18	25	20	14	
Myrica	ヤマモモ属		1	1		
Juglans	クルミ属					1
Pterocarya	サワグルミ属	1				
Betula	カバノキ属	1				
Corylus	ハシバミ属			4		
Carpinus-Ostrya	クマシデ属 アサダ	3	1		1	
Castanea-Castanopsis-Passania	クリーシイ属 マテバシイ属	20	14	32	51	
Fagus	ブナ属			1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属 コナラ属 コナラ属	25	15	26	9	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	アガシ属	48	47	64	49	
Ulmus-Zelkova	ニレ属 ケヤキ			2	1	
Celtis-Aphananthe	エノキ属 ムクノキ	5	5	12	4	
Zanthoxylum	ナンショウ属					
Mallotus	アカメガシワ	2	1	2		1
Ilex	モチノキ属					
Aesculus	トチノキ		2			
Cleyera	サカキ				1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属 ガマズミ属				1	
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木-草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科 イクラクサ科					3
Leguminosae	マメ科					
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Spartanium	ガマ属 ミクリ属	1				
Sagittaria	オモダカ属	6	3	2	3	
Gramineae	イネ科	71	63	55	51	
Oryza type	イネ属	57	70	58	50	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	46	21	42	19	
Polygonum sect. Persicaria	タデ属 ナエタデ属	1	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザズ科 ヒユ科	1	2	2		
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1			19
Impatiens	ツリフネソウ属					
Ampelopsis	ノブドウ					
Epilobium-Ludwigia	アカバナ属 ミズユキノシタ属					
Haloragis-Myrrophyllum	アリノトウガサ属 フサモ属					1
Umbelliferae	セリ科	1	1	1		2
Solanaceae	ナス科					
Lactucoideae	タンボボ科	6	9	3	1	
Asteroideae	キク科	2	6	7	7	
Artemisia	ヨモギ属	22	8	22	11	
Fern spore	シダ植物孢子					
Monolete type spore	単条溝孢子	2	1	11	13	
Trilete type spore	三条溝孢子		1	3	4	
Arboreal pollen	樹木花粉	168	161	255	188	
Arboreal+Nonarboreal pollen	樹木-草本花粉	0	0	0	3	
Nonarboreal pollen	草本花粉	214	185	192	174	
Total pollen	花粉總數	382	346	447	365	
Unknown pollen	未同定花粉	1	1	4	2	
Fern spore	シダ植物孢子	2	2	14	17	

第2表 大溝西壁 花粉遺体一覧

試料											
5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
13	1	7	1		2		1				7
1		1	1	1	1				2		
13	10	5	3	1	1		2		1	2	
	1	3	1	1			1		3	1	
20	31	20	8	3	6	3	5	4	18	11	3
19	17	11	7	3	2	7	2		17	4	3
2											
2			2				1		1	2	
3	4	2	1	1	1	1	1			5	1
1	1	1	1	1							
98	107	130	320	325	282	345	305	340	44	82	24
				2	2						
17	7	2	12	8	9	5	5	3	18	3	10
44	52	53	34	28	23	52	48	37	187	286	290
1						1		1			
6	1	11	2	1	2			5	2		2
		1									
12	13	6	2	4					1		
								1			
2	3	3	1	1	1	2	3	1	5	1	3
5	1	5							1		
4	5		1								
37	37	24	3	6	7	5	2	4	21	8	2
23	24	26	15	17	18	5	3	1	14	3	2
11	12	3		1							
1		1									
1		5			1	1		1			
	1										
1		1			2	1	1		1		
1	3	4	2	2	1	2	1			2	
	1			2		2			5		1
2	2	1	1				1		3		
18	15	27	8	5	7	3	3	5	1	2	1
5	3	1	3	3	2	8	3	4	235	29	6
8	2	4	4	2	3	2	2	1	11	2	3
254	248	256	398	380	330	416	374	391	300	397	343
5	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
100	100	94	30	35	37	19	16	11	45	15	6
359	349	355	428	415	367	435	384	402	345	413	349
2	2	1	3	1	1	1	1	1	2	1	
13	5	5	7	5	5	10	5	5	246	31	9

分類群						
学名	和名	1	2	3	4	
Arboreal pollen ²	樹木花粉					
Abies	モミ属	2	2	11		
Tsuga	ツガ属		1	1		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複管束亞属	16	15	22	34	
Sciadopitys	コウヤマキ		2	1	1	
Cryptomeria	スギ	18	17	27	20	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4	12	19	20	
Myrica	ヤマモモ属		1	1		
Juglans	クルミ属					
Iterocarya	サワグルミ属		1			
Alnus	ハンノキ属	2	3	2		
Betula	カバノキ属					1
Corylus	ハシバミ属	3				
Carpinus-Ostrya	クマシデ属-アサダ	1	2	3	3	
Castanea-Castanopsis-Pasania	クリーイ属-マテバシイ属	7	12	25	13	
Fagus	ブナ属			1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	27	19	26	21	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	31	30	50	37	
Ulmus-Zelkova	ニレ属-ケヤキ		1	3	1	
Celtis-Aphananthe	エノキ属-ムクノキ	10	4	17	10	
Zanthoxylum	サンショウ属	1				
Mallotus	アカメガシワ		3	5	3	
Ilex	モチノキ属					
Aesculus	トチノキ					
Cornus	ミズキ属					1
Ericaceae	ツツジ科					
Acer	カエデ属					
Sambucus-Viburnum	ガマズミ属		2	3		
Arboreal+Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		2		1	
Rosaceae	バラ科	1	1			
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属					
Sagittaria	オモダカ属	2	5	3	7	
Gramineae	イネ科	80	75	55	65	
Oryza type	イネ属型	89	91	68	64	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	21	45	41	26	
Fagopyrum	ソバ属	1	1		1	
Polygonum sect. Persicaria	タデ属ナエタデ節			1	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザ科-ヒユ科	2		1	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	1	1	2	
Cruciferae	アブラナ科	1				
Impatiens	ツリフネソウ属					
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウクサ属-フサモ属	1			1	
Umbelliferae	セリ科	1		1		
Solanaceae	ナス科					
Lactucoideae	タンボボ科	3	1		3	
Asteroidae	キク亜科	1		3	3	
Artemesia	ヨモギ属	30	24	25	6	
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolete type spore	單柔溝胞子	8	3	3	3	
Trilete type spore	三柔溝胞子	4	3		5	
Arboreal pollen	樹木花粉	124	122	209	176	
Arboreal+Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	3	0	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉	234	244	198	181	
Total pollen	花粉總數	359	369	407	358	
Unknown pollen	未同定花粉	2	1	3	1	
Fern spore	シダ植物胞子	12	6	3	8	

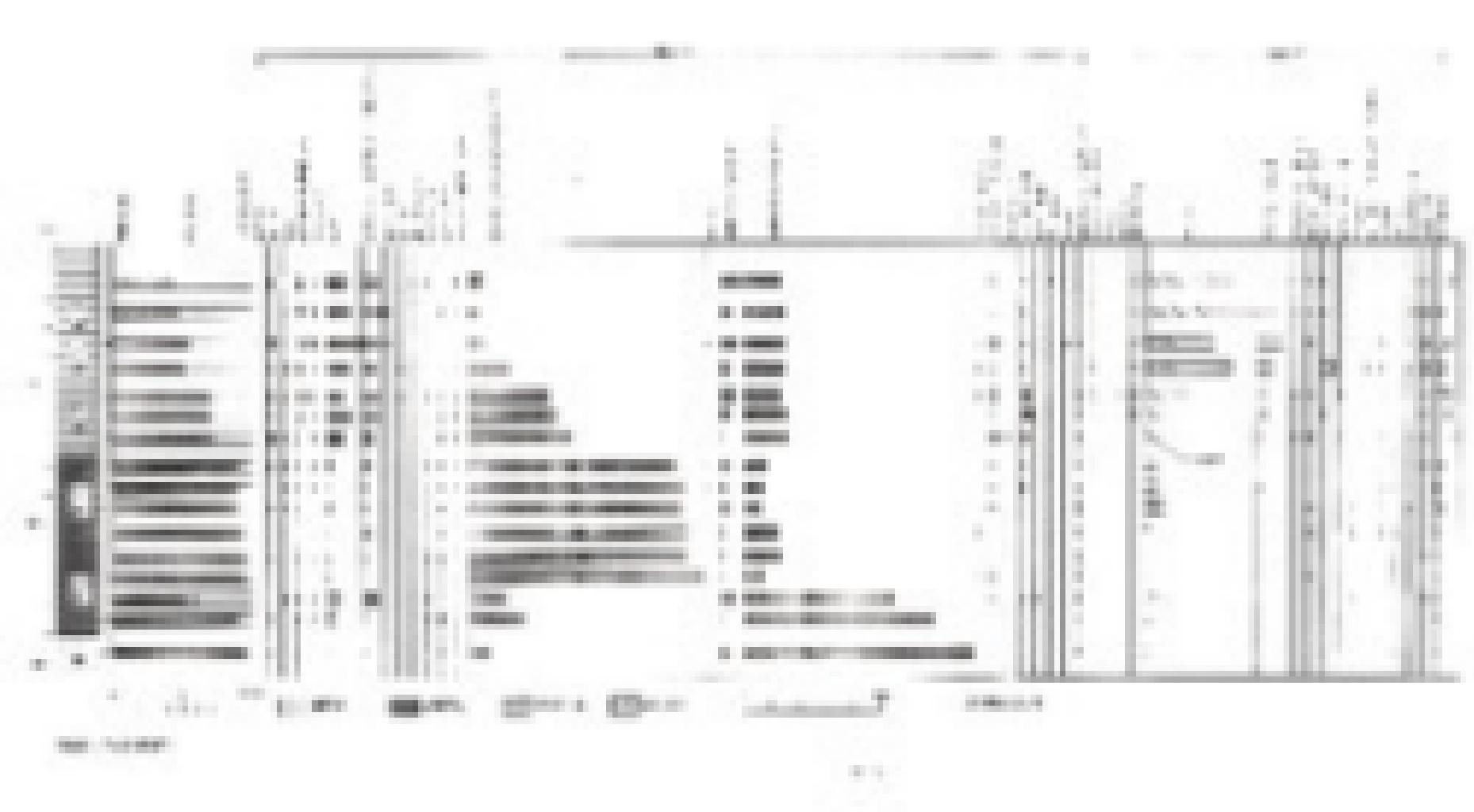
第3表 大溝北壁 花粉遺体-観

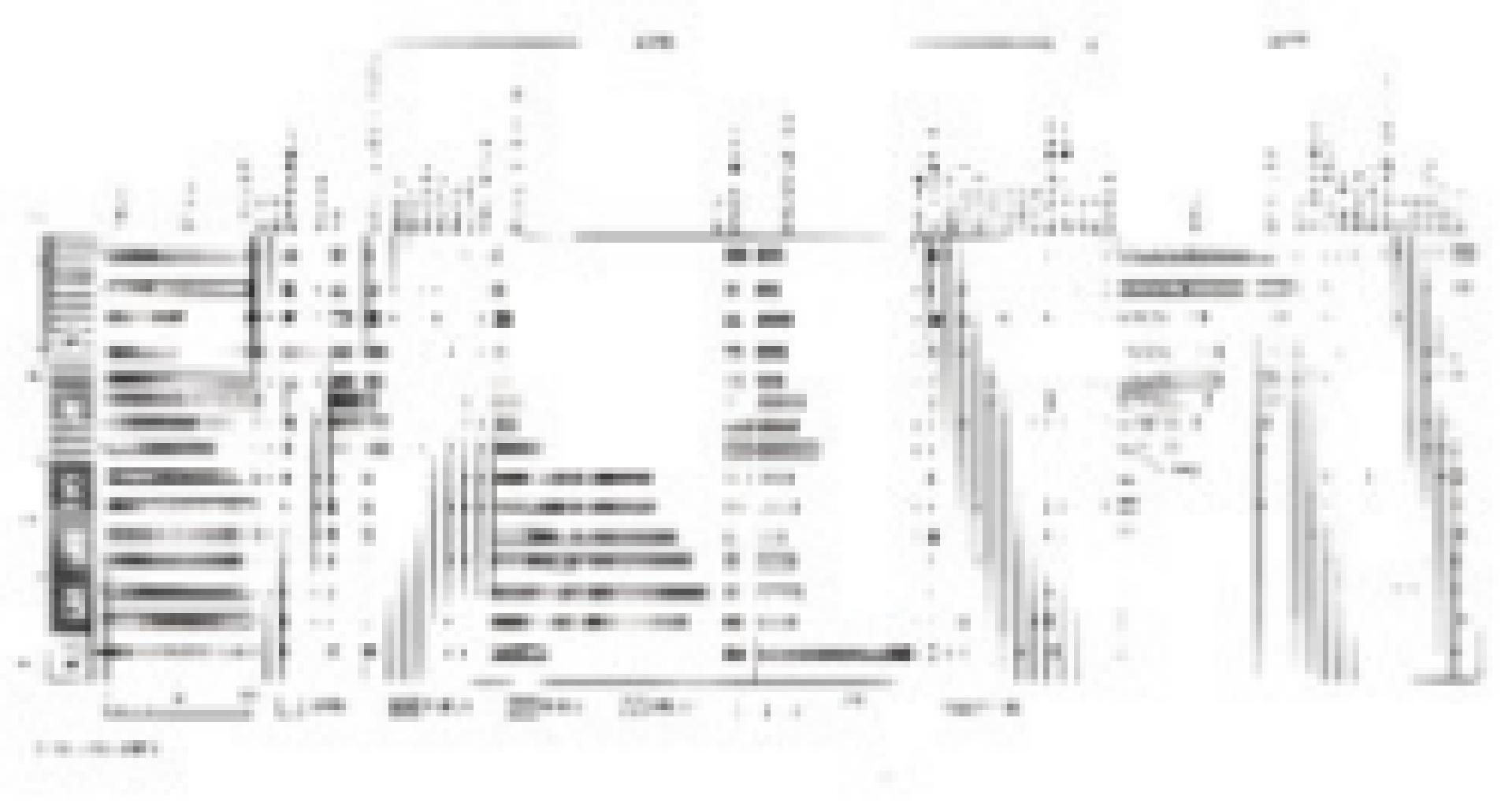
試料											
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
5	2	7	1	5	4	7	2	2	2	2	3
1		1	3	1		1	1	1			
18	2	15	10	8	1	5	1	2	4	4	
2		1		1	1	1	1	2	1	3	
28	12	41	34	12	11	11	7	5	3	15	
21	4	28	29	6	8	7	4	2	4	9	
			1								
			1								
				3	2	1		1		1	1
1		1			1	1		1		1	2
		2	2			1			1		
20	9	29	67	190	221	285	248	317	280	66	
25	4	37	36	31	30	19	16	17	24	23	
30	16	48	80	38	53	39	46	61	54	192	
1		1	1		1	1			1	1	
9	2	3	2	5	3	11	1	1	1	6	
				1					6	1	
1	1					1	1				
			1								1
3	3		1			5	4		1	1	9
			1								
2			2		2	1	1				
1						1	1				
4			5			1					
65	17	60	50	5	16	11	8	1	5	3	
63	15	39	35	10	7	7	1		1	4	
26	7	9	1		1						
1						1	1				
4		1			1	1	4	1			
1							4				
							1				
					1			2	1	1	3
3			3	1		1	1	1			
5	2	7	3	2							
15	2	10	10	10	7	13	5	3	10	3	
10	7	16	8	1	2	3	2	2	3	4	
5	1	2	2	3	3	3	2	2	4	4	
-	164	56	217	270	300	342	391	330	412	388	337
2	0	2	0	2	1	1	0	0	0	0	0
188	43	134	100	29	35	42	18	7	17	13	
354	99	353	370	331	378	434	348	419	405	350	
1	2	2	1	5	5	2	3	1	2	3	
15	8	18	10	4	5	6	4	4	7	8	

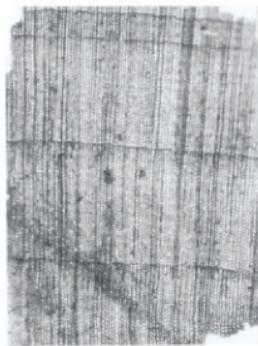
学名	和名	試験																		
		S-1	S-2	S-3	S-4	S-5	S-6	S-7	S-8	S-9	S-10	S-11	S-12	S-13	S-14	S-15	S-16	S-17	S-18	S-19
<i>Cephalotaxus harringtonia</i> (Knight) K. Koch	イヌガヤ 榧子	1																		
<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ 栗	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	4
<i>Castanopsis</i>	シイ属 栗属																			
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コブシ属 槲属																			
<i>Magnolia</i>	モクレン属 桂																			
<i>Ilicium anisatum</i> L.	シキミ 榧子																			
<i>Cinnamomum camphora</i> (L.) Presl	クスノキ 桃																			
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>	サクラ属 桃																			
<i>Prunus persica</i> (Lian.) Batsch.	モモ 桃	1	1	4	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	
<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.	エゴノキ ヒヨウタン属																	2		
<i>Lagenaria siceraria</i> Stand.	木実 榧子																			

—個体分

第4表 大株出土壤実 観



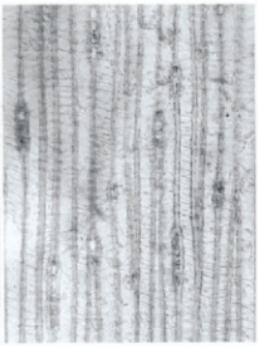




106-1 カヤ (横断面) ×30



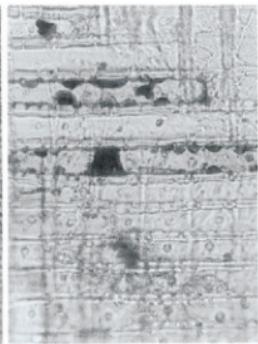
同左 (放射断面) ×150



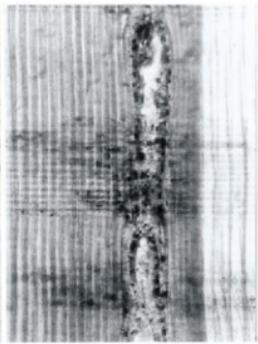
同左 (接線断面) ×150



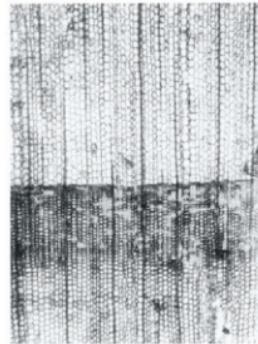
6-1 カヤ (横断面) ×150



3-1 モミ属 (放射断面) ×300



57-1 モミ属 (接線断面) ×75



7-1 モミ属 (横断面) ×30



同左 (放射断面) ×150



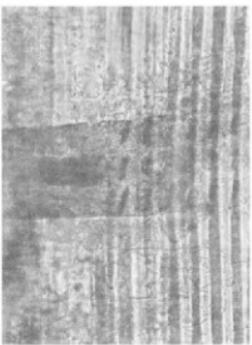
同左 (接線断面) ×75



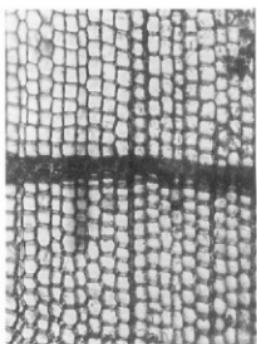
58-1 モミ属（横断面）×300



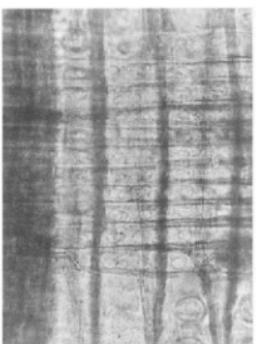
59-3 モミ属（放射断面）×300



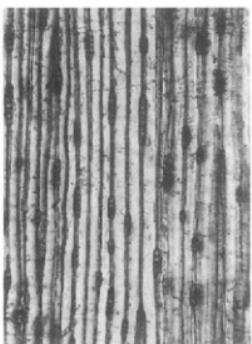
36-2 アカマツ（径断面）×300



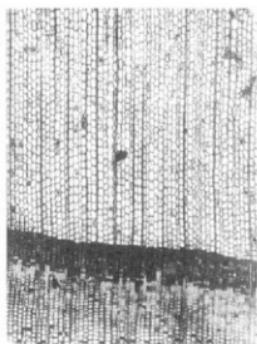
24-1 スギ（横断面）×75



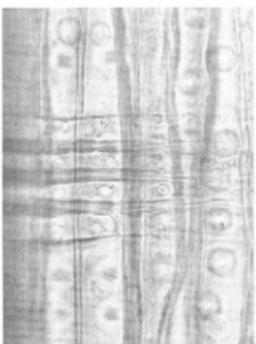
同左（放射断面）×300



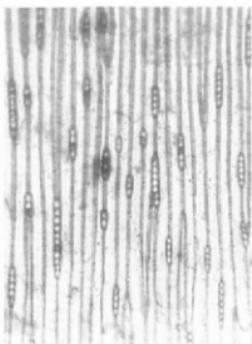
同左（接線断面）×75



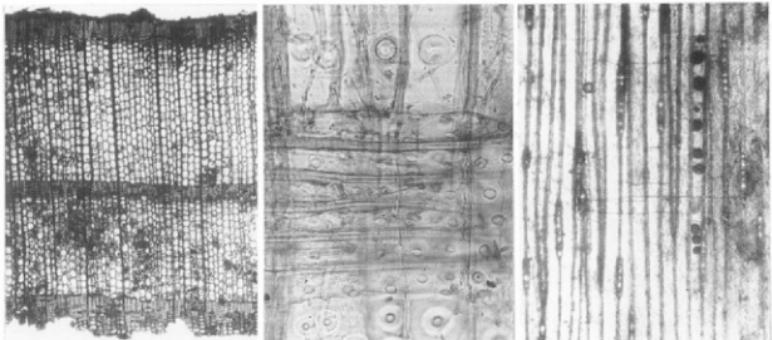
45-2 スギ（横断面）×300



同左（放射断面）×300



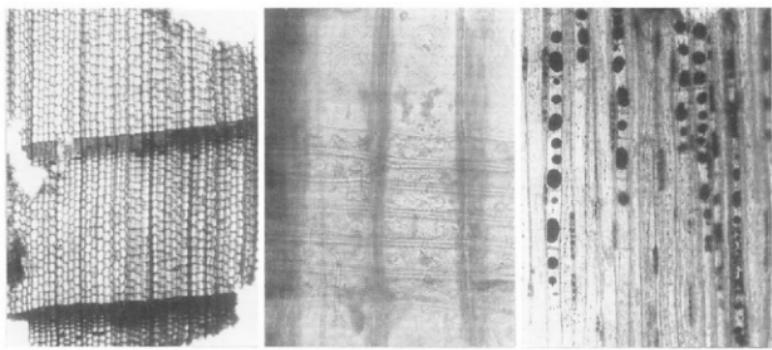
同左（接線断面）×75



72-3 スギ (横断面) ×30

同左 (放射断面) ×300

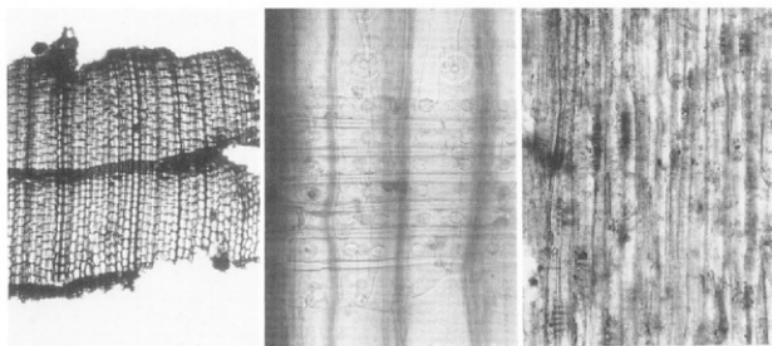
同左 (接線断面) ×75



59-2 スギ (横断面) ×30

同左 (放射断面) ×300

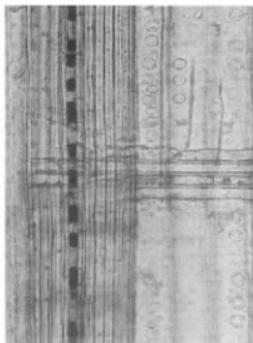
同左 (接線断面) ×75



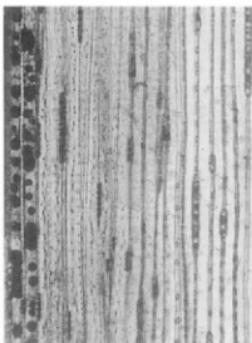
59-1 スギ (横断面) ×30

同左 (放射断面) ×300

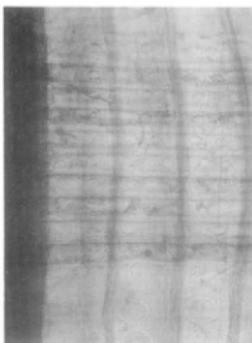
同左 (接線断面) ×75



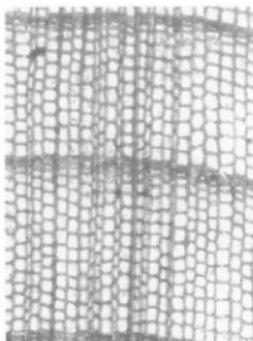
27-1 スギ (横断面) ×150



同左 (接線断面) ×75



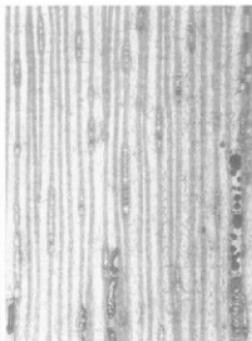
63-1 スギ (放射断面) ×300



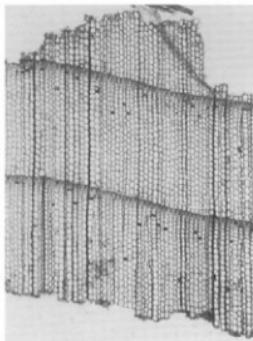
5-1 ヒノキ (横断面) ×75



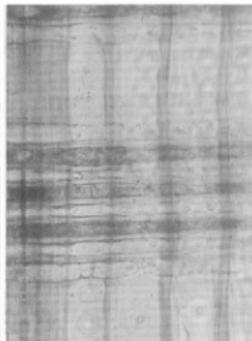
同左 (放射断面) ×300



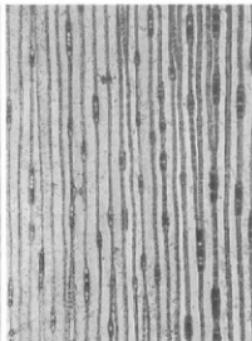
同左 (接線断面) ×75



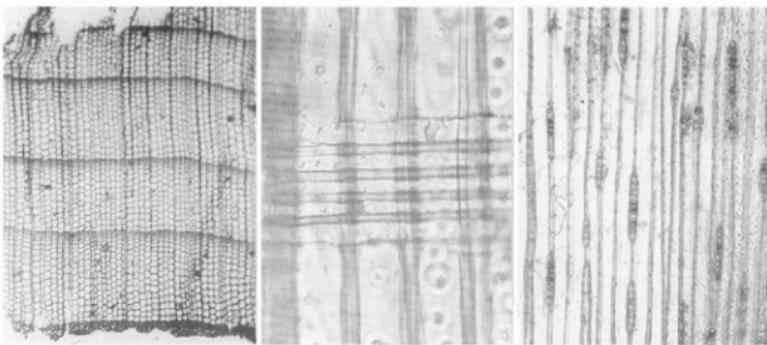
35-2 ヒノキ (横断面) ×30



同左 (放射断面) ×300



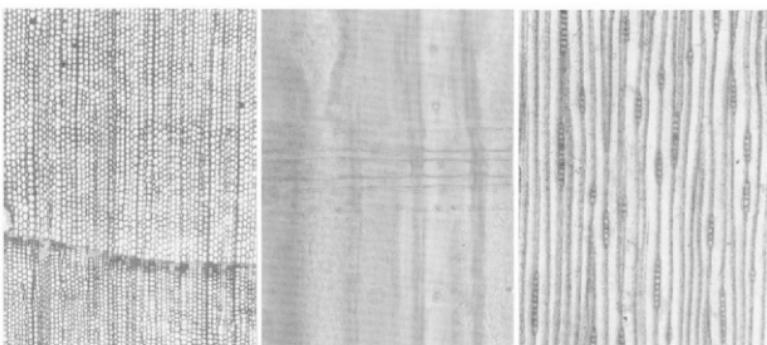
同左 (接線断面) ×75



64-1 ヒノキ (横断面) ×30

同左 (放射断面) ×300

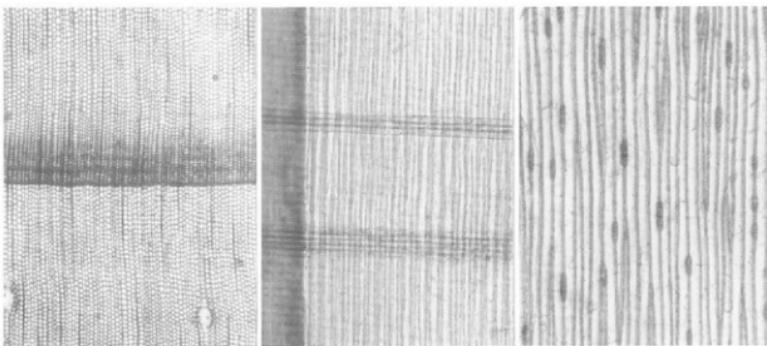
同左 (接線断面) ×75



67-2 ヒノキ (横断面) ×30

同左 (放射断面) ×300

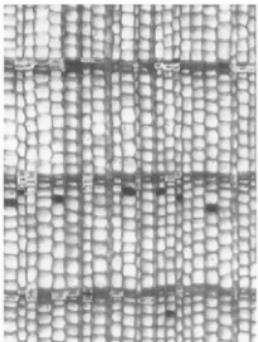
同左 (接線断面) ×150



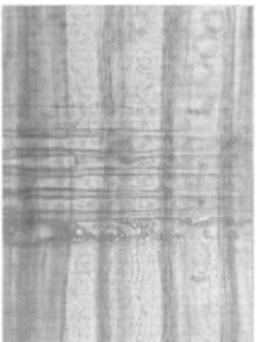
67-1 ヒノキ (横断面) ×30

同左 (放射断面) ×75

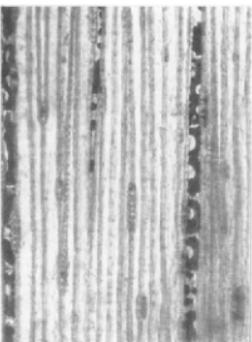
同左 (接線断面) ×75



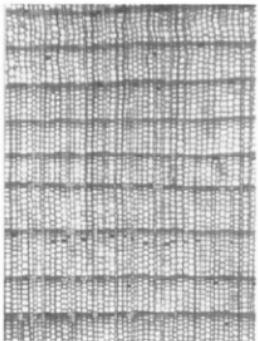
58-3 ヒノキ (横断面) $\times 75$



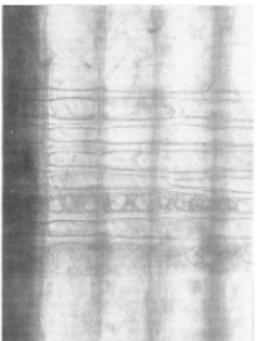
同左 (放射断面) $\times 300$



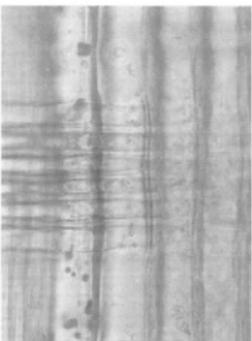
同左 (接線断面) $\times 75$



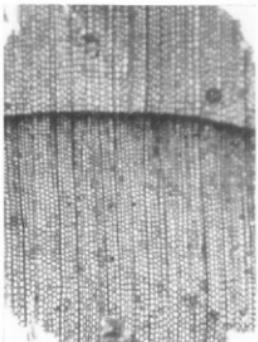
58-3 ヒノキ (横断面) $\times 75$



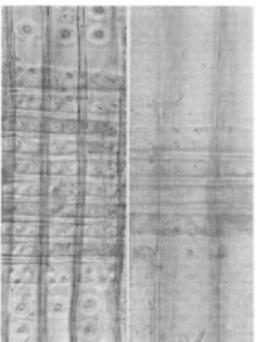
7-3 ヒノキ (放射断面) $\times 300$



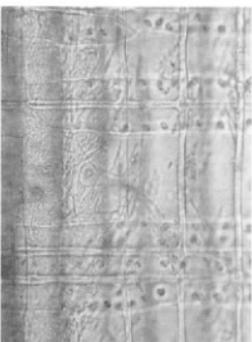
72-1 ヒノキ (径断面) $\times 300$



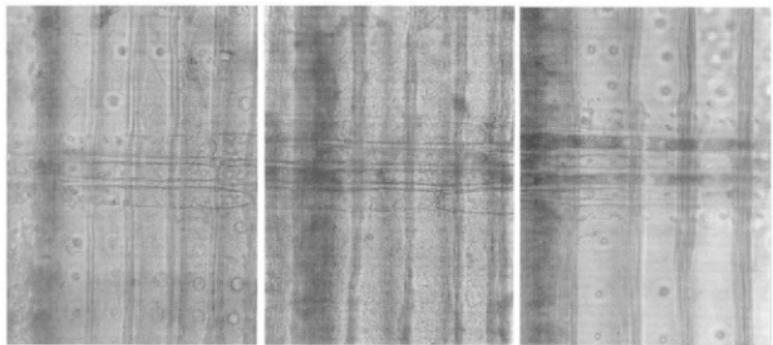
91-1 ヒノキ (横断面) $\times 30$



36-1・82-2 (放射断面) ヒノキ $\times 300$



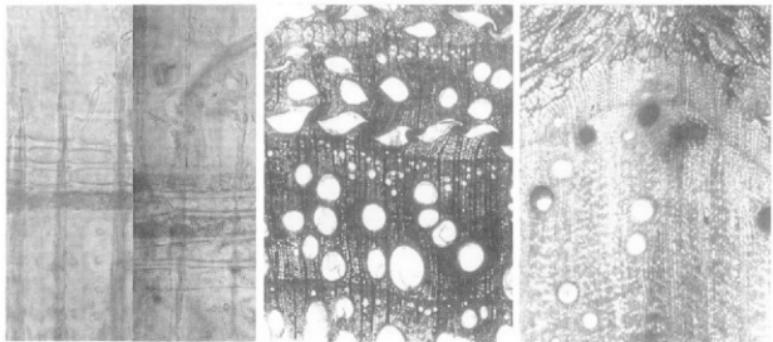
82-3 ヒノキ (放射断面) $\times 300$



30-4 ヒノキ (放射断面) ×300

同左×300

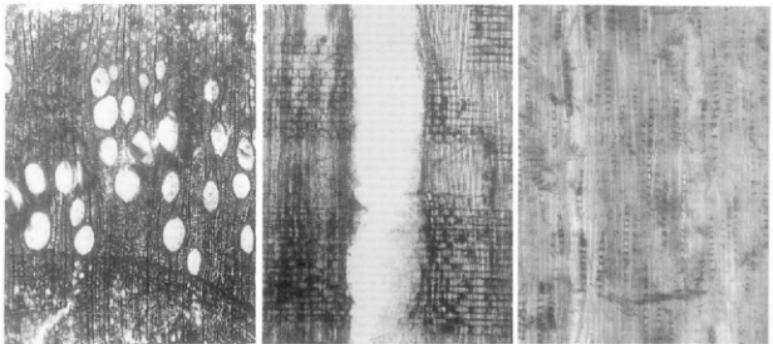
2-2 ヒノキ (径断面) ×300



21-1 ヒノキ (放射断面) ×300

7-2 クリ (横断面) ×30

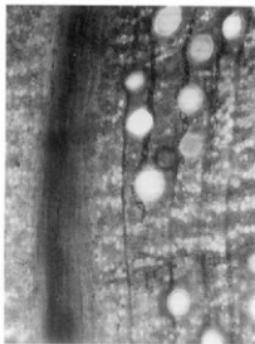
55-1 アカガシ亜属 (横断面) ×30



108-1 スダジイ (横断面) ×30

同左 (放射断面) ×75

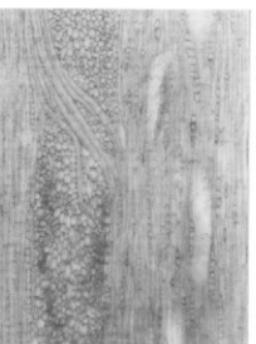
同左 (接線断面) ×75



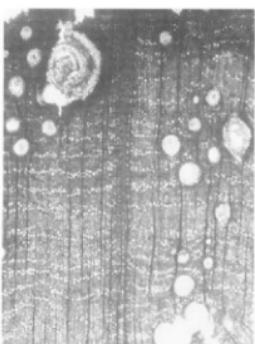
30-3 アカガシ亜属 (横断面) $\times 75$



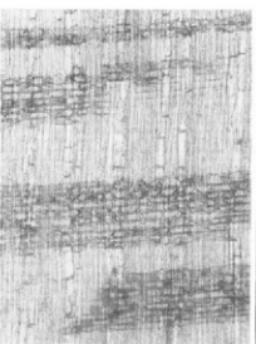
同左 (放射断面) $\times 75$



同左 (接線断面) $\times 75$



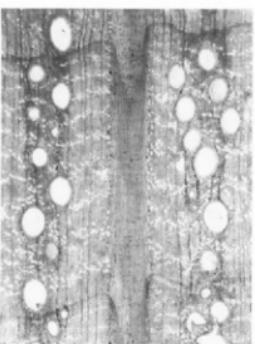
58-2 アカガシ亜属 (横断面) $\times 30$



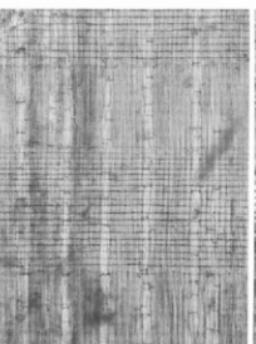
同左 (放射断面) $\times 75$



同左 (接線断面) $\times 75$



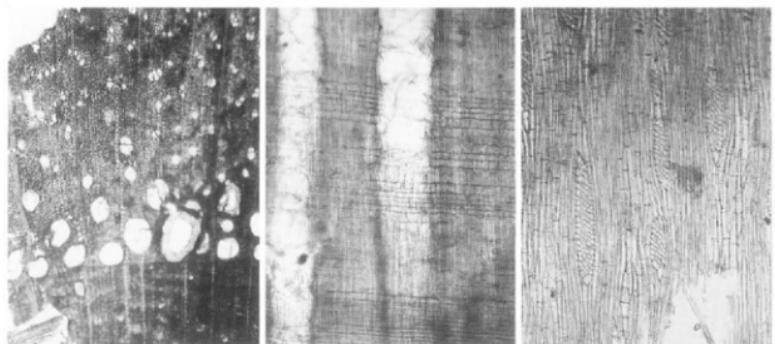
73-3 アカガシ亜属 (横断面) $\times 30$



同左 (放射断面) $\times 75$



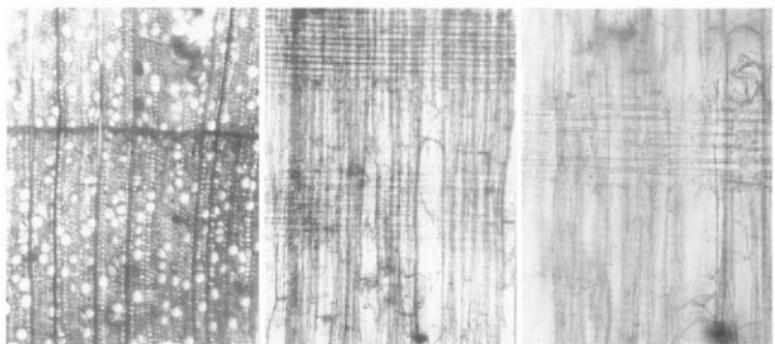
同左 (接線断面) $\times 75$



46-6 ヤマグワ (横断面) $\times 30$

同左 (放射断面) $\times 75$

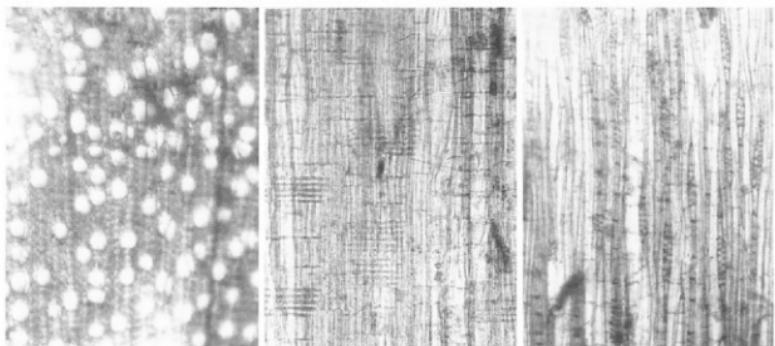
同左 (接縫断面) $\times 75$



39-2 シロダモ (横断面) $\times 75$

同左 (放射断面) $\times 75$

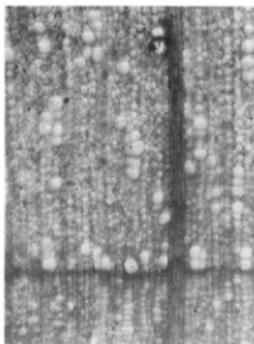
同左 (接縫断面) $\times 150$



77-1 ノリウツギ (横断面) $\times 75$

同左 (放射断面) $\times 75$

同左 (接縫断面) $\times 75$



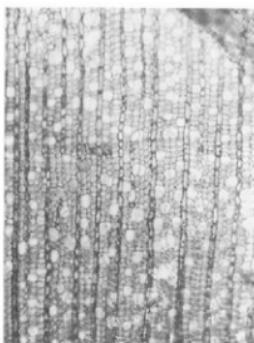
25-1 モチノキ属 (横断面) ×10



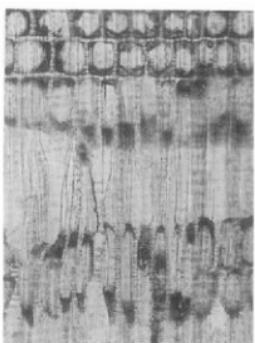
同左 (放射断面) ×20



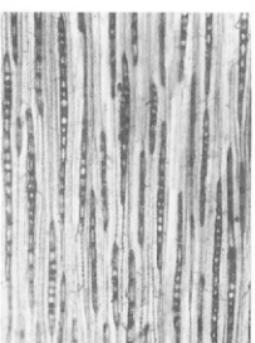
同左 (接線断面) ×10



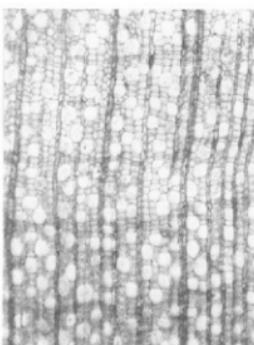
11-1 サカキ (横断面) ×75



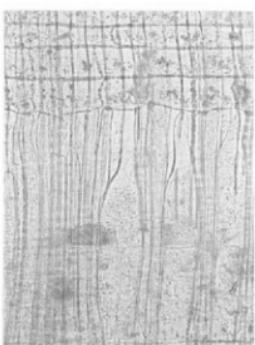
同左 (放射断面) ×150



同左 (接線断面) ×150



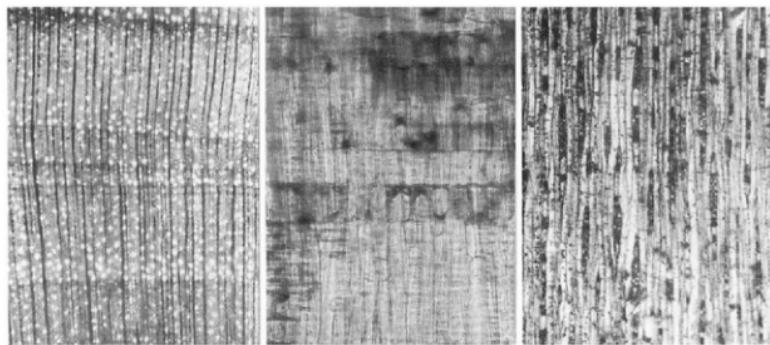
42-1 サカキ (横断面) ×75



同左 (放射断面) ×150



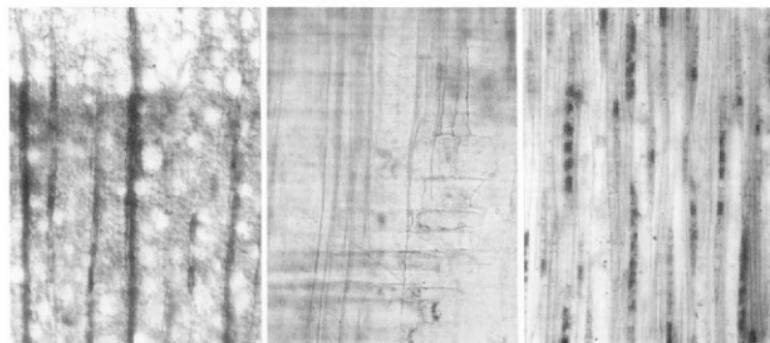
同左 (接線断面) ×150



49-1 ヒサカキ (横断面) ×30

同左 (放射断面) ×150

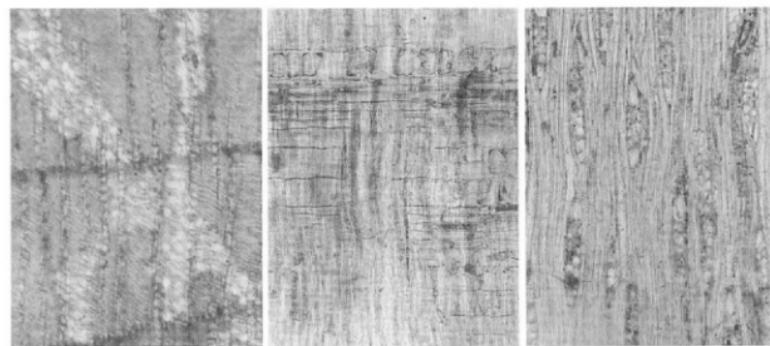
同左 (接線断面) ×75



40-1 ヒサカキ (横断面) ×75

同左 (放射断面) ×150

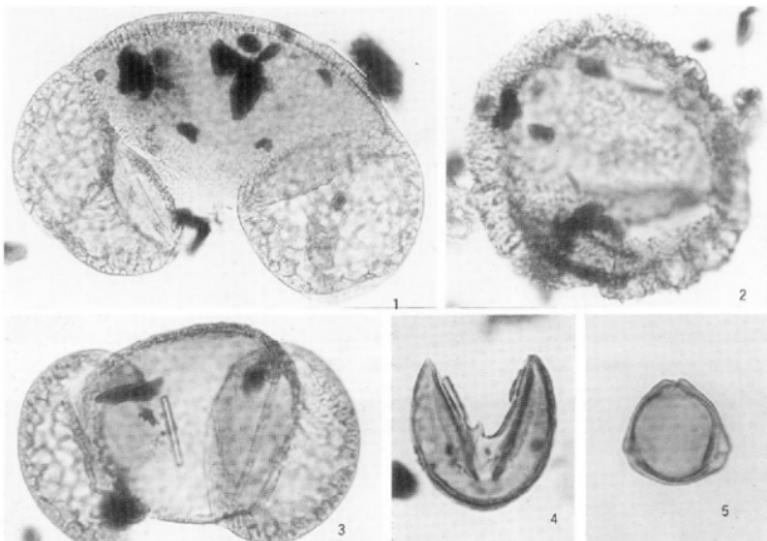
同左 (接線断面) ×75



29-1 ヒイラギ (横断面) ×75

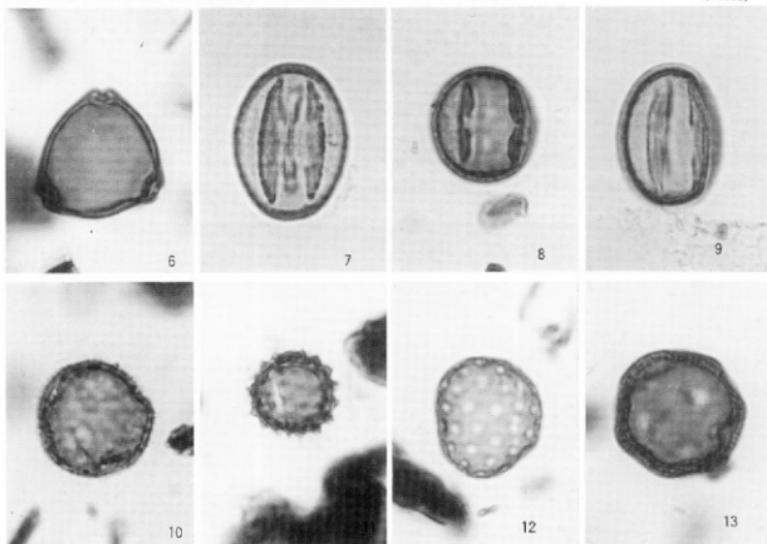
同左 (放射断面) ×150

同左 (接線断面) ×150



1. モミ属 2. ツガ属 3. マツ属複雄管束亞属 4. スギ 5. ヤマモモ属

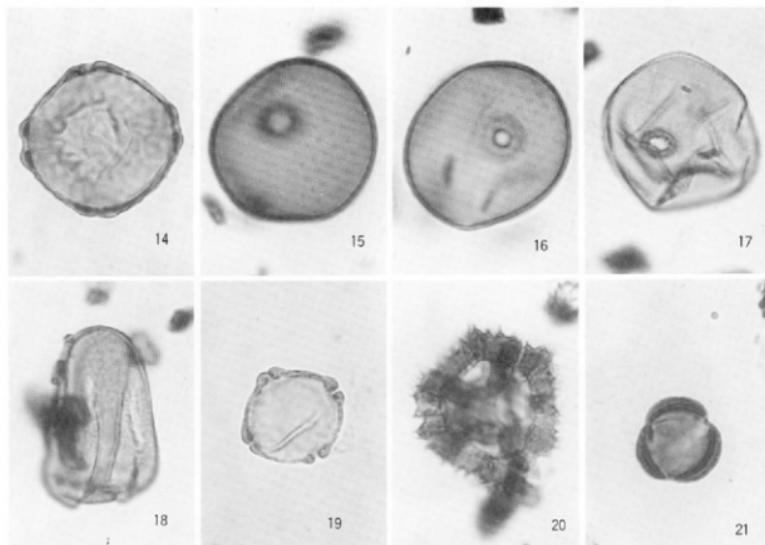
($\times 800$)



6. カバノキ属 7. コナラ属コナラ亜属 8・9. コナラ属アカガシ亜属 10. オモダカ属 11. キク亜科

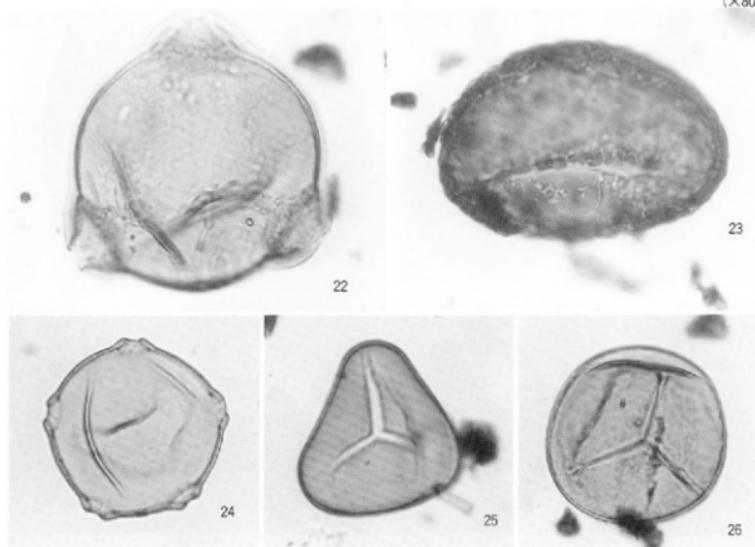
12. アカザ科—ヒュ科 13. ナデシコ科

($\times 1,000$)



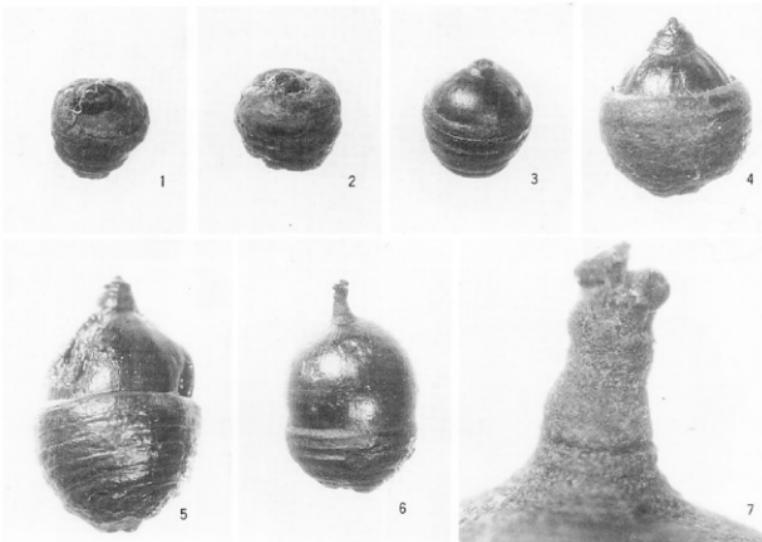
14. ニレ属—ケヤキ 15・16. イネ属型 17. イネ科 18. カヤツリグサ科 19. フサモ属
20. タンボボ亜科 21. ヨモギ属

($\times 800$)

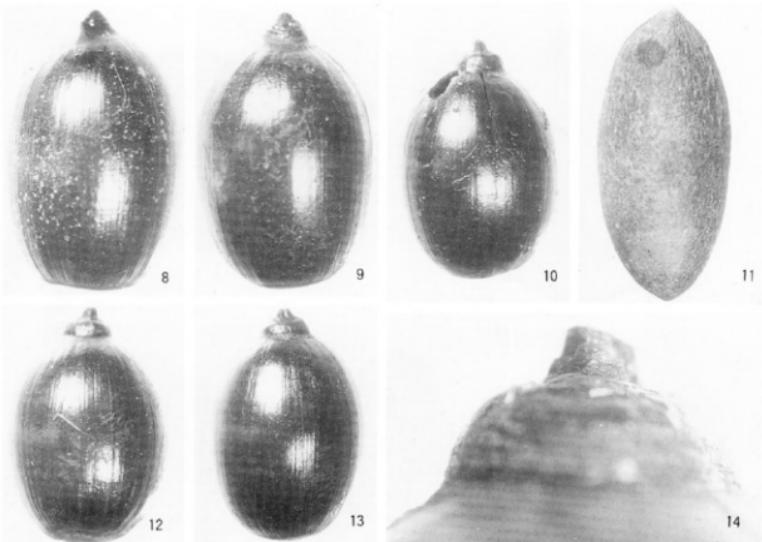


22. アカバナ属—ミズユキノシタ属 23. シダ植物单条溝胞子 24. クマシデ属—アサダ

25・26 シダ植物三条溝胞子



1・2 コナラ属アカガシ亜属果実、S-14 3～7 コナラ属アカガシ亜属果実、S-15 (1～6;×3、7×18)



8～14 コナラ属アカガシ亜属 (アカガシ近似)

(8～13;×3、14;×18)



15



16



17



18



19



20

15. クリ果実、S-3 16・18. クリ果実、S-5 17. クリ果実、S-2 19. クリ果実、S-6

20. クリ果実、S-10

(X1.5)



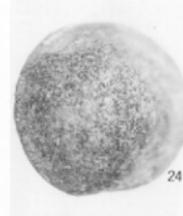
21



22



23



24



25



26



27

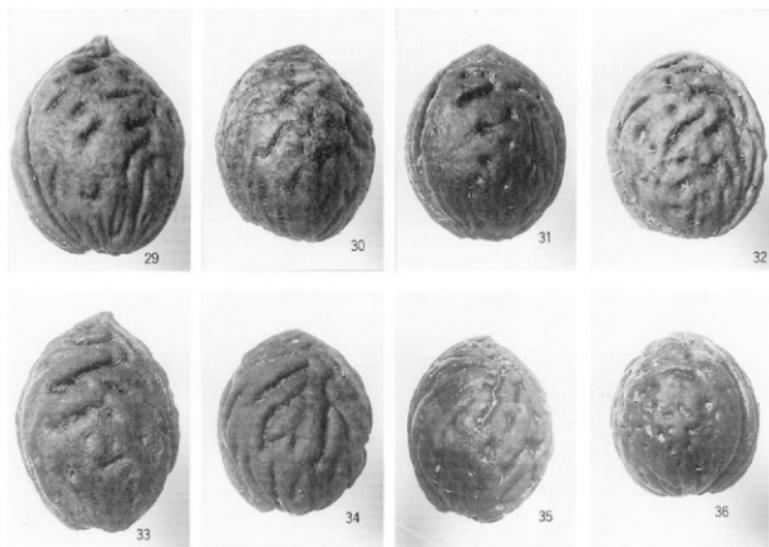


28

21~23. モクレン属種子、S-13 24. サクラ属サクラ節核、S-13 25~27. エゴノキ核、S-13

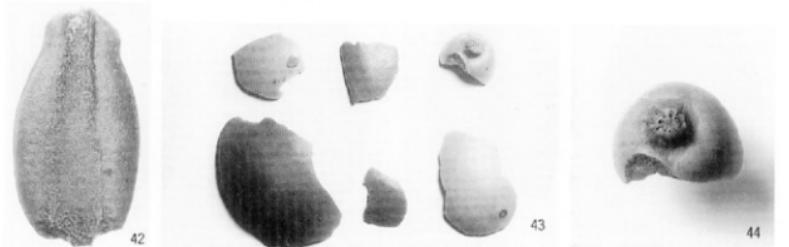
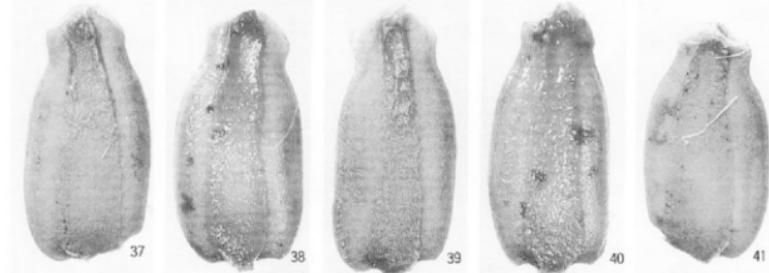
28. シキミ種子、S-13

(X 5)



29. 毛モ核、S-1 30. 毛モ核、S-7 31. 毛モ核、S-8 32. 毛モ核、S-9 33. 毛モ核、S-11
34. 毛モ核、S-12 35. 毛モ核、S-14 36. 毛モ核、S-16

($\times 1.8$)



37~42. ヒヨウタン類種子、S-18 43·44. ヒヨウタン類果実、S-18

(37~42; $\times 4$, 43; $\times 0.5$, 44; $\times 1.3$)

VI 遺構・遺物のまとめと考察

(1) 遺構の変遷と画期

1. はじめに

城之越遺跡の調査では、下段部分で発見された貼石や立石をもつ大溝をはじめ、多数の堅穴住居や掘立柱建物の存在が確認され、調査区外にその存在が予想されるものも含めると非常に大規模な遺跡であることが明瞭となった。

大溝は、最上流部に自ら水源となる井泉を有し、上流部方面に貼石をもち、要所に突出部や立石を配した特異なもので、後述のように貼石をもつ上流部は祭祀を執行した空間であったと考えられる。

今回の調査で確認した堅穴住居は、同一地点での重複もそれぞれを1棟ずつとしてカウントすると、総数29棟を数えるが、さらに敷地で重複の可能性が考えられるものもあり、実数はいま少し多いであろう。その内訳は、下段部分5棟（古墳時代前期）、中段部分2棟（古墳時代前期）、上段部分19棟（古墳時代前期4棟・中期1棟・中後期1棟・後期5棟・奈良時代6棟・不明2棟）、立会い調査部分1棟（下段に相当する部分・時期不明）、B地区2棟（古墳時代前期）で、前期のものは後述のように大きくは、大溝貼石造営前に存在したものと、大溝Ⅲ崩壊を中心とする溝が埋没しつつある時期の2時期に分かれるようである。

掘立柱建物は、推定のものも含め、総数56棟を数える。この内訳は、下段部分15棟・中段部分19棟・上段部分16棟・立会い調査部分4棟・B地区2棟である。

遺跡の性格を正しく理解するには各遺構の時期を明らかにし、同時に存在のものがどれとどれであるかを把握しなければならない。しかし、実際には、特に掘立柱建物の場合、柱穴から出土する土器が網片であることが多く、時期決定には困難を伴う。城之越遺跡の場合、例えば柱掘形から明らかに古墳時代前期とわかる土器が出土している建物があつても、同様の埋土をもつ別の建物からは古式土器とともに須恵器片も混じて出てくる場合もあり、たまたま

ま須恵器の出土を見なかったからといって古墳時代前期の建物とするには躊躇せざるを得ない。逆に、古墳時代の掘立柱建物が無いかというとそうでもなく、大溝の古墳時代前期に相当する層からも掘立柱建物の建築部材の出土がある以上、この時期の建物の存在自体は疑えない。先の事実報告の部分では、掘立柱建物の時期についてはかなり明瞭に時期を特定もしくは推定できるものを除き、とくに柱穴から土器のみしか出土しなかった建物については時期決定を保留したものが多い。

とはいって、遺跡の全体像を把握するためにはそのまま不明のままにしておくわけにもいかず、先の報告で時期を明示しなかった掘立柱建物についても、現状の資料・認識から最も妥当と思われる時期比定を仮説的に示し、今後の調査にその是非を委ねることとしよう。

その上で、古墳時代から奈良時代まで存続する大溝の変遷を基軸に掘え、堅穴住居や掘立柱建物といった主要遺構を中心に城之越遺跡の消長をみていくこととする。

2. A地区掘立柱建物の時期

(1) 城之越遺跡掘立柱建物の時期決定の指針

- 掘立柱建物の年代を決定するにあたって、その基準となるものを一般的理解に従って列挙すると、
 - ① 柱穴（この場合、厳密には埋土は柱掘形・柱痕跡・柱痕跡確認以前に掘った部分の3つに分かれが）からの出土遺物
 - ② 建物床面の出土遺物（ただし、床面を押さえられることはまれで、実際には柱穴検出時の出土遺物であることが多い）
 - ③ 他遺構との切り合い関係
 - ④ 他遺構との方位の共通性
 - ⑤ 建物を掘り込んだ層の年代及び柱穴を削平している層の年代
 - ⑥ 建物の平面形の特徴
 - ⑦ 柱間寸法

が主なものとして挙げられる。

①では、柱抜き取り後に埋納されたような特殊な事例を除き、多くの場合は掘形出土遺物と柱痕跡出土遺物からの時期比定で、掘形出土遺物からは建物の上段の時期をおさえることができるが、柱痕跡出土遺物ではいろんな時期の遺物の混入の可能性があつて掘形出土遺物ほど時期比定には向かない。

②では、床面の認定が難しく、床面自体が削半のためとばされていることが多い。

③～④は、当然のことながら対比すべき遺構の時期が判明していることが前提となる。

⑤は、時期決定には非常に有効であろうが、層位的事例に恵まれない場合も多い。城之越遺跡の場合も、基本的に古墳時代から中世の遺構が同一面で検出されるため、有効とはなりえない。

⑥では、建物自体の特徴から時期を求めるものである。よほど特徴的な建物でないかぎり、これだけでは特定の時期にまで年代を絞り込むことは難しいが、大まかな年代を知るには有用であろう。

⑦も、古墳時代か否かというような大まかな年代を知るには有用で、律令期以降若干の変動を経ながらほぼ一尺26.6～30.3cmの唐尺が建物の基準尺として用いられ、伊賀地域では中世にいたってもその規格がある程度厳密に使用されていたことが判明している。

城之越遺跡の場合、掘立柱建物の時期を検討している過程で、とくに下段部分と中段部分では柱穴(掘形) 埋土の差異がある程度それぞれの時期毎の特徴として抽出できるのではないかという見通しを得た。これは、大多数の柱穴が土師器細片のみの出土であるなかで、少数の例ではあるが、埋土の特徴が異なる柱穴からは他時期の遺物が出土する、ということによる。この視点を基軸とし、建物方位や建物相互の位置関係、それらを媒介とした切り合い関係、建物自体の平面プランの特徴と柱間寸法などを合わせ、建物の時期を考えていくことが適当かと思われる。この具体的な検討として最もまとまって掘立柱建物が確認された中段部分からみていく。

(2) 中段部分の掘立柱建物の時期

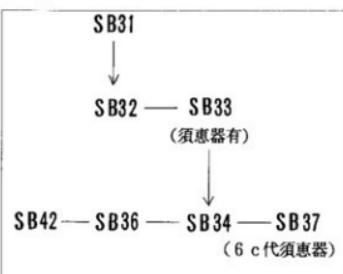
中段部分に所在する総数19棟の掘立柱建物の埋土とその出土遺物をみてみると、S B30～S B34・S

B36～S B42・S B45の13棟が、いずれも黒褐色系の埋土をもつ。このうち、S B31・S B32・S B36・S B37の4棟が、切り合い関係から古墳時代前期の小溝であるS D35よりも新しく、またS B45も古墳時代前期の小溝であるS D44よりも新しい。それぞれの建物からの柱穴出土遺物は多くの場合、古式土師器を含む土師器細片のみという場合が多いが、少數ながらS B33・S B37・S B39の3棟で6世紀代までの須恵器細片を含んでいることは注意されよう。ただし、それ以降の遺物は含まない。さらに、建物相互の切り合い関係や建物方位の共通性をみてみると、

①、切り合い関係からS B31よりもS B32のはうが新しく、

②、S B32と須恵器細片も含む建物であるS B33は建物方位をほぼ同じくし、なつかず南側柱列の柱筋を揃えることから同一の建物群を構成すると思われ、

③、切り合い関係からS B33よりも新しいS B34とS B36・S B42・6世紀代の須恵器細片の出土したS B37の4棟が建物方位をほぼ同じくし、同一の建物群を構成すると思われる、
という相互関係が想定される。須恵器を含んでいない建物であっても、建物の時期が必ずしも古墳時代前期とはならないことは上記の例をみて明らかであろう。



建物の平面プランをみた場合、S B37やS B38・S B39は純柱建物で、S B32も検出できなかった柱穴もあるものの平面形が正方形に近く、隅柱がしっかりしていることから純柱建物であったと考えてよいものである。これらは機能的には倉庫と思われ、

ここでは倉庫と側柱のみで構成される比較的小規模な建物がセットで存在していた状況が窺える。総柱構造をもつ倉庫は、一般的には5世紀を画期として増加することが指摘されている。¹⁹⁾

建物の柱間寸法は、一尺30cmで換算した場合、完数値を得られないものがほとんどであり、いわゆる唐尺の使用以前の建物であろうと思われる。

以上のような認識をもとに中段部分の黒褐色系の埋土をもつ建物の時期を考えると、これらは基本的に6世紀を中心としてその前後を含む古墳時代後期の所産であった可能性が高い。

ところで、これら黒褐色系の埋土をもつ建物のなかで、建物の隅柱掘形が建物にたいして45°振れたかたちで配置されている例（例えばS B32・S B36など）が認められる。こうした手法は、すでに群馬県境町三ツ木遺跡の調査で発掘された奈良時代の掘立柱建物が、その特徴を有するものとして注意されており、奈良時代のものとして捉えられてきた。しかし、同じ群馬県の伊勢崎市原之城遺跡（豪族居館）の中心建物（6世紀）でも同様の手法が認められることから奈良時代の手法として限定できず、さらには今回発掘した城之越遺跡B地区S B1（5世紀と推定）の身舎の隅柱もその手法である。従って、少なくとも5世紀代あたりまではその手法の存在を辿ることができ、先の建物の年代推定とも矛盾しない。

これに対し、同じ中段部分でも、やや淡色系の埋土をもつS B53やS B59では瓦器の出土があり、中世の所産であると思われる。柱穴に石を敷いていたS B50やS B51からは黒色土器の出土があり、平安時代の年代が与えられる。S B47はどちらかといふと黒褐色系の埋土に近いものであるが、それらとは微妙に異なっており、むしろ、S B50と様方向がほぼ共通し、柱筋も揃えることから同時期のものと考えられる。S B46は灰褐色系のやや砂混じりの埋土をもつもので、土師器・須恵器の断片を含む。黒褐色系の埋土をもつ建物よりは新しいものと思われるが、その時期推定は難しい。

(3) 下段部分の掘立柱建物の時期

次に同様の視点で下段部分についてみてみよう。下段部分でも、S B23・S B25・S B27～S B29の5棟は中段の多くの建物と同様、黒褐色系の埋土を

有する建物であり、S B12もその可能性がある。柱穴からの出土遺物は土師器ばかりで須恵器の出土はないが、S B25からは5世紀代に比定できる高杯片が出土している。建物の平面プランも、S B25の総柱建物をはじめ、S B27～S B29の隅柱が大きい特徴も中段部分のS B33等と共通する内容であり、大きく5～6世紀の所産と捉えてよいものであろうと思われる。おそらく、5～6世紀に、中段から下段にかけてのベルト状の範囲で、埋没が進んでいた人溝の源流部を取り囲むかたちとなる微高地に上小規模な側柱構成の建物と総柱建物が数多く建てられていたのである。

これに対し、S B15とS B22は淡色系の埋土をもつ建物で、柱穴自体からは時期を明示できる出土遺物はないが、周辺の状況からは中世へ下ることも考えられ、このことは中段部分でみた淡色系の埋土をもつ建物の時期比定とも矛盾しない。

掘立柱建物ではないが、柱列S A16は灰色系の埋土をもつもので、出土遺物から平安時代の年代が考えられるものである。

S B7については、撮影埋土がやや淡いもののさきにみた黒褐色系の埋土に近く、建物の平面プランも正方形に近いと推定され、黒褐色系の埋土をもつ建物と近い時期が想定される。S B4は、切り合い関係から古墳時代前期の堅穴住居（SH 2～3）よりも新しいといふ以外に時期決定の決め手を欠いているが、柱間寸法は一定していない。

下段部分で位置づけが困難な一群は、淡黄色土混じり黒褐色土の共通した埋土をもつS B9～S B11・S B13・S B14の5棟の建物である。この建物群は、いずれも下段でも西南部に位置し、柱掘形も大きく、いずれもA地区ではもっとも大形の建物である。トレンチが狭くどの建物もその一部を確認しただけであるが、事実報告でも記したように出土遺物は須恵器を含まず土師器片のみである（時期のわかる土師器は古式土師器のみ）。柱間寸法は、一尺30cmではや端数が出そうであるが、割り切れないともいえない。しかし、上段部分や立会い調査部分の掘立柱建物のところで後述するように、柱間寸法が唐尺を使用していると考えられる場合、城之越遺跡でもほぼ完全な完数値を得られるようである。こうした状

況を考えると、この埋土を共通してもつ一群の建物は、現在のところ大溝Ⅲ層併行の古墳時代前期末から中期に遡る可能性のある一群といえよう。

(4) 上段部分の掘立柱建物の時期

上段部分の掘立柱建物は、調査区の面積的制約のため全体プランを確認していないものが多く、かなり推定に依っている部分も大きい。また、中段部分との比高差も大きく、検出面の状況等にも差があり、埋土を媒介とした時期決定は中下段には有効ではないものと思われる。これに対し、上段部分の柱穴は、比較的「土師器細片のみ」という以上に時期決定の資料に恵まれているものが多い。即ち、S B64では瓦器や土製羽釜の出土があって中世、S B69では7世紀代の須恵器を含んでおり飛鳥以降、S B72では黒色土器A類の出土があって平安時代以降、S B74は古墳時代後期の溝を切ることと高台付きの杯の出土から奈良時代以降、S B90からは完全形に近い奈良時代の須恵器杯身・杯蓋の出土から奈良時代、S B101からは7世紀代の須恵器杯身の存在からそれ以降の年代が推定できる。

柱間寸法をみた場合、上段で確認した16棟の建物のうち6棟の建物（S B71・72・76・90・101・106）の柱間寸法が一尺30cmで完数値を得られるものであり、さらに3棟（S B64・74・92）もそれに近い数値が得られる。ただし、この場合、調査区端にある建物は2間分くらいしか確認できないものも多く、測点の位置によってはどのようにもとれ、誤差の偏差も大きい（同様的理由で、仮に完数値となっているものであっても、本当は違っている場合もあり得る）。ただ、さきにみた出土遺物から7世紀以降中世までの年代を考えた建物はS B69を除きいずれも完数値を得られる建物の一群に入ってしまい、新しい時期の建物が一尺30cmで建てられたらしいことが窺える。逆に考えると、S B69に専用の使用がみられないのは、建物の時期が上器が示す建物時期の上限とあまり変わらない時期の所産と捉えることができよう。また、S B76は掘形埋土が暗茶色土で、中下段部分の所見からは一応中世の特徴を示している。

これに対し、柱間寸法がうまく一尺30cmで完数値にならない建物をみると（S B69は概述）、S B81

は梁間1間ということや黒褐色土といった中下段と共に通する埋土を重視すると古墳時代の建物であることが考えられる。S B91も梁間1間の正方形プランを呈する建物で、古式土師器も出土していることから古墳時代の建物と思われる。S B92は、総柱建物であるが、中下段部分に存在した総柱建物と比べると柱掘形が奢華であるという差異があるが、時期決定は難しい。S B99・100・104の3棟も時期決定資料に欠けるが、埋土は黒褐色土で、中下段部分の所見から古墳時代後期の可能性もある。S B105は上器の出土こそないが、切り合い関係から奈良時代のS D103よりも古く、S B106と埋土が共通して飛鳥時代の年代が推定される。

以上をまとめると、古墳時代と推定されるものはS B81・91・99・100・104の5棟、飛鳥時代がS B101・105・106の3棟、奈良時代以降がS B69・74・90の3棟（奈良時代とほぼ確定できるものはS B90の1棟）、平安時代がS B71・72の2棟、中世がS B64・76の2棟、不明（おそらく古墳時代ではない）がS B92の1棟、ということになる。

(5) 立会い調査部分の掘立柱建物の時期

この部分では4棟の掘立柱建物を確認したが、いずれの建物も柱間寸法が一尺を30cmで換算して完数値を得られるものである。このうち、S B111からは奈良時代の須恵器片が、S B116からは奈良時代から平安時代と思われる土師器片が出土しており、基本的にはどの建物も奈良～平安時代の律令期の建物とおもわれる。掘形埋土に灰色系の埋土が多いこともこれと矛盾しない。

以上、事実報告ではあまり触れられなかった掘立柱建物の時期についての一応の所見を仮説的に示した。認識不足や資料的制約等による間違いも多々あろうと思われるが、現時点の資料によるかぎり上記のような結果が今後のところ妥当かと思われる。今後の調査・研究によって、その当否が明らかにされ、より精緻な実態が解明されることに期待したい。

3. 遺跡の変遷

A地区掘立柱建物の時期検討の結果を踏まえ、城之内遺跡全体での遺構の変遷を素描する。

第1期 カシ等の広葉樹林を切り開き、SH5・6・

65～66・54～55・83の堅穴住居が造られる。同地点に集中せず、広く散在しており、SB83以外の住居では建て替えが認められる。大溝はこの時期の前後に原形が形成されたと思われるが、貼石は施されていない。

第2期 大溝上流域法面に貼石・立石が施される。この時点では大溝以外に顯著な遺構は認められず独立した祭祀の場として存在している。やや後れて井泉1・井泉2にも貼石が施され、階段状施設も敷設される。ほぼ大溝Ⅳ層の時期に相当する。

第3期 大溝での祭祀は依然継続しているが、溝は埋没しつつある。大溝の周囲にもSH2・3・26の堅穴住居が造られるようになる。大溝下流域西側の大形掘立柱建物であるSB9～11・13～14もこの時期に建てられた可能性がある。上段部分ではSH84も造られる。ほぼ大溝Ⅲ層に相当するが一部Ⅳ-a層の時期まで遡るかもしれない。

第4期 大溝としての機能はあるが、貼石や立石は完全に埋没する。祭祀の存在もわからなくなる。大溝を取り囲むように、微高地部分である中段から下段のベルト状の範囲で絶柱建物と側柱構造の掘立柱建物が多く建てられ、B地区では大型掘立柱建物2棟（B地区SB1・2）が建てられる。堅穴住居も上段部分を中心に造られる。一部大溝Ⅲ層の時期も含みつつ、大溝I・II層のうちの古墳時代後期の部分が相当する。曇年代では6世紀頃を中心とするその前後の時期。

第5期 大溝は完全に埋没する。遺跡全体で掘立柱建物が建てられ、上段を中心に堅穴住居も造られる。下段ではSE20が造られる。大溝に「建」の墨書きをもつ土器が入る。大溝I・II層のうちの奈良時代の部分が相当する。

第6期 遺構が散発的になる平安時代から中世の時期。

城之越遺跡としての盛期である第2期から第4期を通観すると、当初（第2期）祭祀空間のみであつた部分に堅穴住居や掘立柱建物が建てられるようになる（第3期）。祭祀空間であった大溝の埋没にしたがって、祭祀の存在自体は追えなくなるが、かわってその「聖地」を取り廻むようにして掘立柱建物が建てらるるようになり、奥まったB地点には大型の掘立柱建物が建てられる（第4期）、という大きな流れが追えるであろう。その場合、大溝の成立と貼石の造営、祭祀行為の開始に第一の画期があり、その後の大溝の埋没に伴うB地区も含めた掘立柱建物群の広汎な出現に第二の画期が求められる。ただし両者の間に大きな絶続ではなく、極めて連続的に変化が推移していくと思われる。

（徳積裕昌）

（註）

- ① 例えば、同じ上野町の北堀池遺跡や高賀遺跡の掘立柱建物で中世での凡の使用が想定されている。このうち、多数の掘立柱建物を検出した北堀池遺跡では、道路の性格について、一般的な農村集落と規定されている。
山田猛也『三重県上野町北堀池遺跡発掘調査報告 第2分冊』三重県教育委員会 1992年
- ② 植木裕昌他『3. 高賀遺跡』『平成2年度農業基盤整備地域埋蔵文化財発掘調査報告 第3分冊』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991年
- ③ 植木久『高床食庫の変遷』、【クラと古代土槽】ミネルヴァ古房 1991年
- ④ 鹿児島県教育委員会『西今井遺跡 三ヶ木遺跡』『早川河川改修区域内埋蔵文化財発掘調査報告書』1977年
- ⑤ 小澤貞治『堅之城遺跡発掘調査報告書』伊勢崎市教育委員会 1987年
- ⑥ 金原正明氏による分析結果。本書第V章参照

(2) 城之越遺跡の古式土師器

城之越遺跡の古式土師器については、遺物の項目で触れたとおり、広義のいわゆる「布留式」の範疇で捉えられるものである。したがって、大きくは畿内地域と同様な土器様相を呈しているといえる。しかし、畿内地域における典型的なものと比較すると、いくつかの異なった特徴を有していることも事実である。ここでは、城之越遺跡において見られた古式土師器の諸特徴を観察するとともに、伊賀地域としての古式土師器のあり方についても若干言及しておくこととする。

古式土師器の編年的研究については、大和地域では木下正史氏^①・関川尚功氏^②・藤井利章氏^③・寺沢薰氏^④によるものなどがあるものの、伊賀地域においては未だまとまった研究はなされていない。したがって隣接する大和地域の土器編年を参考として伊賀地域を考えていく方法をとる。

いわゆる布留式土器に関しては、木下氏が既報⁴4つの具体相を紹介している。関川氏の研究は、庄内期については明確であるものの、布留期については櫛向遺跡調査時点の資料的制約から、それ全体を概観したものではない。藤井氏の研究は、特にその前半部分にある資料に恵まれていない。寺沢氏の研究は「布留式」をその初現期にあてているものの、それ以降は木下氏の1～4式をほぼ踏襲したかたちとなっている。このようにみると、大和地域の布留期の土器編年は、大きくは木下氏の編年観を基準として成り立っているものと理解されるのである。

このように、大和地域の古式土師器の編年研究は、庄内期から布留期初頭の編年位置づけこそ各氏によって若干の異同があるものの、布留期に関しては、ほぼ木下正史氏の提示したものが基準となっていることを窺うことができる。しかし、木下氏の研究に何の問題もないわけではない。例えば、小型丸底壺の系列を純粹に精製品→非精製品へと移り変わるものを把握している点や、上ノ井手遺跡井戸S E030下層と上層との区別がいまひとつ判然としない点である。

木下氏は、研究論文のなかでは「期」ないしは「式」の設定を行っておらず、氏自身、あくまでも

土器相の変遷を提示したものに止めていると理解される。したがって、当然のことながら今後は細分と厳密な小期設定の必要がある。これらの問題は、解決せねばならないことではあるが、小文はそれを目的としている。そのため、この木下氏の変遷觀をも含めて以下のような流れが布留期に存在するものと見なしたうえで、検討していこう。

<布留1期>

櫛向遺跡Ⅳ上層4下層併行期を古段階、櫛向遺跡Ⅳ上層4下層・平城宮下層SD6030下層併行期を新段階とする。

<布留2期>

上ノ井手遺跡溝SD031併行期を古段階、藤原宮下層溝SD912・SD914併行期を新段階とする。

<布留3期>

上ノ井手遺跡井戸SE030下層併行期とする。

<布留4期>

上ノ井手遺跡井戸SE030上層併行期とする。なお、人坂府船橋遺跡O I地区の資料も当該時期併行と見なす。

1. 時期について

城之越遺跡で認められたいわゆる古式土師器は、布留1期から4期にかけてのものが認められる見なし得る。最も出土量の多い大溝資料を中心に観察していく。

布留1期併行期

布留1期の範疇に含まれるものとしては、堅穴住居SH54・SH67・SH83出土の土器が相当する。大溝ではIV b層のものに当該時期と考えられるものが含まれているが、1期の古段階に相当するものは含まれていない。そのため、堅穴住居のいくつかが大溝に先行して営まれていた可能性が高いと考えられる。

大溝資料では、小型丸底壺Aが、総じて内弯する口縁部を有していることに注意する必要がある。このような特徴はIV b層より上の層から出土した土器類には顕著に認めることができない。

高杯では、杯部外面に比較的明瞭な棱を有し、脚部の柱部と掘部との境が強く屈曲する点が特徴であ

る。

壺では、いくつかの特徴的な要素をみることができる。壺Aでは庄内系壺の直接的な影響を受けていると考えられるもの(40)が存在している。壺Bでは、典型的な布留系壺の形態を呈するものが多い。壺Bの体部上半に施される棒状工具による刺突も、当該期の特徴と考えられよう。壺Cではやや屈曲の弱い口縁部を持つもの(39)がある。赤塚次郎氏による分類³⁰に当てはめればC類後半と考えられるが、伊賀地域に隣接する伊勢地域の「S字状口縁付壺」は尾張地域のそれと必ずしも同じ展開を辿るものとはできないようであり、単純に尾張地域の縄年に当たるはめるのは妥当ではないといえる。

壺では、布留系壺の成形・調整手法と同一の要素をもつもの(49)がある。また、内外面にヘラミガキを施した壺C a（二重口縁壺）も見られる(47)。

布留2期併行期

大溝では、IV b層およびIV b層上の資料にこの時期の土器類が含まれている。また、S Z 1の資料中にもこの段階に含まれるものを見ることができる。

小型丸底壺Aでは、口縁部の内凹傾向がなくなり直線的に開く形態となる。そして体部が口縁部に比較して小さくなる傾向が認められる。また現象的には小型丸底壺Aの相対的な量が減少し、C・Dが増加する傾向にあるようである。また、罐形態を呈する小形壺(56)もあり、この形態をなすものが布留2期併行期まで遡る可能性が存在している。

高杯では、脚柱と脚櫛との屈曲が若干滑らかになっている。杯部は外反気味に開くものが量的に増加している。口縁部が直線的に開き、端部が若干突出し、脚柱部にシボリメが認められるもの(115)は、より新しい段階のものである可能性がある。

壺では壺A a系統のものがまだ存在している(146)。壺Bでは典型的な布留系壺の形態のもの(147・148・150・151)が主流のようである。S H 3では壺B bが認められる。壺Cでは、赤塚分類のC類に相当すると思われるもの(143)があるが、D類に相当するもの(142・144)もある。IV b層上の57はやはりD類に相当するものである。

壺では、小形直口壺の系統のもの(131)が残っている。

布留3・4期併行期

大溝Ⅲの資料は当該遺跡中で最も量的に多いものであるが、布留3期併行のものと4期併行のものが混在している状況にある。そのため、具体的にそれぞれを識別することは困難である。これは恐らく大溝本來の機能がこの時期に至って変化していることと大きく関わっているものと考えられる。堅穴住居ではS H 3が3期併行があるいは2期の新しいところにまで若干遡るかである。I・II層およびS Z 1の資料も、この段階に含まれるものがある。他の遺構では、SK93・SK98が布留3期に相当するものと考えられる。

小型丸底壺ではA系統のものがかなり減少し、C・D系統のもののが圧倒的に多くなっている。A系統のものには頭部がよく締まり、あまり開かない直線的な口縁部をもつものがある(163)。これが恐らく布留3期併行期のものの特徴かと思われる。また、罐形態をなすもの(162・182・184)が多く存在するのもこの時期の特徴かと考えられる。

高杯Aでは、杯部外面の棱が不明瞭なもの(229・230)や、杯部内部が脚柱の付設によって突出するもの(226・227・233)がある。また、杯部外面の棱が突出する形態のもの(239・241・234)もある。これらは大きくは布留4期併行期のものと見なされる。これらに含まれない一群を見ると、2期併行期のものと比べて杯部が短く直線的であることを特徴としているようである。また、脚柱部から脚櫛部にかけて緩やかに開くのも特徴のようである。

壺ではIV a層以下と比較して、幾つかの特徴を挙げることができる。壺Aでは、口縁部を突出させる要素を保持するものは存在する(280・282～284)ものの、体部外面に丁寧な調整を施さず、内面にもヘラケツリを施さないものが多数を占めるようになる。壺Bでは、典型的な布留系壺の量が相対的に減少し、在地的な要素の強い壺B bが増加する。壺A・Bを通じて認められる現象は、体部外面調整にハケメを用いないものが増えることである。壺Cでは、赤塚分類のD類、安達分類のIV A～B類に相当するもの(270～273)、赤塚分類の「宇多型」、安達分類のV A類に相当するもの(274・275)がある。I・II層出土の資料ではあるが、壺Cの外面調整手法と

類似した恐らく在地産の壺(345)もある。また、この段階で韓式系土器(269・325)も含まれるようになる。

壺では、壺C(S字状口縁台付壺)に見られる外向調整手法と類似したもの(267)がある。

以上、大溝出土の土器を中心に大和地域と比較することによって当該遺跡の編年の位置づけについて検討してきた。しかし、これはあくまで大和地域との比較に止まっている。したがって、当遺跡の資料のなかから独自の要素を抽出しておく必要がある。次にこの点について検討していく。

2. 城之越遺跡における古式土師器の特徴

城之越遺跡の古式土師器を他地域との比較によって検討し、その結果から伊賀地域の特徴を抽出する作業を行う。ただし、現在までのところ伊賀地域における布留期のまとまった土器資料の報告は城之越遺跡ぐらいであり、結果的には城之越遺跡の古式土師器の特徴を抽出するに過ぎないことをあらかじめ断っておきたい。

布留1期併行期の資料が認められる大溝IV b層の時期では、上述のように大きさは畿内地域と類似した状況にあると見なされる。このなかで城之越遺跡における特徴を抽出するならば、伊勢地域との関連と考えられる成形手法を持つ壺(50)が存在することが挙げられる。また、小型鉢や小型器台の系統があり顕著でないことも特徴のひとつであり、これは時期的に布留1期の資料が少ないと、遺跡の性格に関わるものであること、の2点の理由を考えることができる。

布留1期併行期と考えられる他の遺跡を見ると、名張市上東野遺跡S B11^aや同市城星敷遺跡S B6^bでは布留系壺とともに平底を持つと考えられるタタキメを有した壺の存在が認められる。布留系壺と庄内系壺ないしは平底のタタキメ壺がある時期に併存することはすでに周知のことである⁵⁰が、同様な状況が伊賀地域においても認められることが指摘できる。

布留2期併行期、すなわち大溝IV b～IV a層の時期における最も目立った特徴は、東海地域を中心とするS字状口縁台付壺(壺C)が多く出土するようになることである。S字状口縁台付壺は布留1式併

行期にも明らかに存在するものであるが、それが多くなるのは城之越遺跡においてはこの時期であると考えられる。しかし、これ以外の特徴は、現状では明かにできない。

布留3～4期併行期、すなわち大溝Ⅴ層を中心とした時期では、いくつかの特徴を抽出することができる。

壺では布留2期併行期と同様、S字状口縁台付壺が多いことと、典型的な布留系壺ないしは庄内系壺が激減することが指摘できる。布留系壺は、その形態を模倣したと考えられるもの(壺B b)が多くなる。庄内系壺の系統と考えられるものにも、口縁部に面を有したり口縁部を「く」の字形に折り曲げるのみのものが存在している。

高杯では杯下部が輪状を呈するもの(310)はこれまでの系統を追うことができず、この時期に至って新たな形態として出現するものと考えられる。また杯部外面の屈曲部が突帯状となるもの(241)もおそらくこの時期以降に出現するものと考えられる。

このように見ると、城之越遺跡の古式土師器を通じて見た伊賀地域の特徴は、畿内地域と東海地域の接点的状況を示すものといえ、やはり畿内地域の「土器文化圏」に含まれていると見なされよう。また、畿内地域に含まれながらも伊賀地域が独自の展開を見せるのは布留3期併行期以降であることもおぼろげながら確認できそうである。

なお、古式土師器の編年の研究に際して最も型式変化を辿り易い苦の高杯が、城之越遺跡の資料においてはあまり有効なものと成りえなかったことを付け加えておく。伊賀地域の高杯の形態は、大和地域とはかなり異なったものであるのかも知れない。

3. 小型丸底壺A非精製系統に見る型式変化

城之越遺跡の古式土師器のなかで、最も型式変化を辿り易いのが小型丸底壺Aの非精製系統である。最後にこの小型丸底壺A非精製系統の型式について触れておこう。

小型丸底壺は、個別説明の段階で触れたように、大きさはA～Dの形態に分類することができる。この中で小型丸底壺Aとしたものには、いわゆる精製品とされるものとそうでないものがある。前者は特に「小型丸底壺」と呼称されているものである。こ

の2者は型式的に変化するものであり、精製品が時間的变化して非精製品となるものであるという理解が一般になされている。

しかし、城之越遺跡の大溝出土資料からは、精製品と非精製品とが共存して存在するものである可能性も想定できなくなはない。実際、名張市上東野遺跡豎穴住居S-B11⁹からは布留1期併行期と見なされる資料が出上しているが、そこからは非精製品の小型丸底壺が出土している。また、平城宮下層溝SD6030下層からも非精製品の小型丸底壺が出土している。

このように、非精製の小型丸底壺が精製の小型丸底壺と併存して存在するものであることはおそらく間違いない。なお、当報告では精製品も非精製品も含めて「小形丸底壺A」とした。実際にそれでよいかどうかは今後さらに検討しなければならないが、大和地域の基本的な輪設定の役割を果たしている木下正史氏による4期区分においては、精製品→非精製品という流れを示している以上、両者が別系譜のものという理解にはないことが推察されるのである。本来は小型丸底壺の用途論および発生論についても検討した上でその変遷について述べねばならないところではあるが、現状の緊急課題である土器編年作成のためのものとして、型式変化をみておこう。

<a型式>

城之越遺跡大溝IV b層出土の資料である。体部の高さが口縁部の高さを凌ぎ、口縁部が若干内弯する形態である。体部最大径はほぼ中央にあり、口縁部径と体部最大径がほぼ等しいものである。

<b型式>

城之越遺跡大溝IV b層出土の資料である。口縁部高と体部高がほぼ同じとなるが、口縁部には未だ内弯傾向が認められる。体部最大径がa型式よりも下降し、体部の形態はやや潰れたものである。体部最大径は口縁部径よりも小さいが、差はあまり認められない。

<c型式>

城之越遺跡大溝IV a層出土の資料である。口縁部は直線的に開き、体部最大径が口縁部径よりも下まわる。口縁部径の縮小傾向が認められる。体部の形態は、b型式のように潰したものではなく、より丸

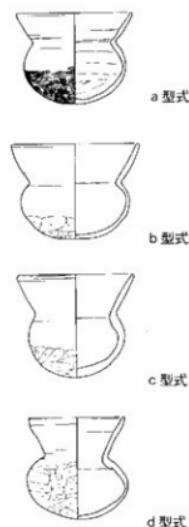
みを帯びている。

<d型式>

城之越遺跡大溝III層出土の資料である。口縁部の開きはc型式よりもさらに狭くなる。体部に丸みが認められ、口縁部径と体部最大径が極めて近い値か逆に体部最大径の方が大きくなる。頸部のくびれが強い。

小型丸底壺Aの非精製品は、おおよそこのような型式変化を迫るものと考えられる。時期的には、a型式が布留1期の範囲、b型式が布留1期から2期にかけて、c型式が布留3期、d型式が布留4期に、それぞれ相当しよう。

なお、須恵器が出現した後にも小形の壺が存在していることは明かな事実であるが、これが果たして小型丸底壺の系統かどうかの議論は未だ成されていない状況にある。もし須恵器出現以降に認められる小形壺が、その意義こそ異なれ小型丸底壺の形態的な後続と見なされるのであれば、小型丸底壺・小形壺系統上器が古墳時代における土器編年のひとつ



第204図 小型丸底壺A非精製品の型式変化 (1 : 4)

の基準になるものであることは充分考えられる。

(伊藤裕作)

(註)

- ① ここでいう「典型的なもの」とは、畿内地域のなかでも大和・河内地域において認められる資料を念頭に置いている。
- ② 安達厚二・木下正史『飛鳥施城出土の古式土器』『考古学雑誌』第60巻第2号 1974年
- ③ 關川尚功『圓向遺跡の古式土器一圓向1~4式の設定』『圓向』桜井市教育委員会 1976年
- ④ 藤井利章『奈良院遺跡の布留式土器とその編年試案』『奈良院遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1980年
- ⑤ 寺澤薰『畿内古式土器群の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986年
- ⑥ 畿内第V期式俳行廟から庄内式俳行廟の編年案については門田了三氏による仕事がある。門田了三『前山遺跡群における弥生式土器から土器器の「考察」』『名張市遺跡調査概要』Ⅲ 名張市遺跡調査会 1980年
- ⑦ 布留1~4期の基準とする資料は、註②(3) 文獻および以下の文献も挙げた。
- 井上和人・須藤隆ほか『平城宮発掘調査報告』X 奈良国立文化財研究所 1981年
原口正三・山田昭三ほか『船橋遺跡の遺物の研究』Ⅱ 平安学園考古学クラブ 1982年
- ⑧ 山中勝氏によって設定された庄内式の型は、現在「庄内式」、「庄内型」、「庄内型式」など各種の呼称がなされ、現在もなお決定された呼称はされない。しかし常に全ての呼称方法においても「庄内」の文字は用いられている。これはすなわちこの形態としての独立性ないしは特徴は大体において認められており、その概念規定のみに問題が残っていることを示していると考えられる。ここではこの概念規定に関する諸論の検討は省略するが、筆者が「庄内系型」と呼称する意味は述べておく。「庄内系型」はいわゆる「庄内式」においてのみ認められるものではなく、「奈良式」俳行廟においても存在していることは明白である(一瀬和夫「久宝寺・加美遺跡の古式土器」『八尾市文化財紀要』3 八尾市教育委員会文化財室 1988年)。したがって、「様式」を示すような「式」は妥当でないと考える。同様に「布留系型」についても須藤器出現以降にも存在している。これらの型の出自が地域的に確定できれば本来的には「庄内」・「布留」の呼称はその時点での解消されるべきものではあるが、学史的名目としての有効性はその時点になってしまつて失われるべきものではないと考える。したがって、やや過然とした用語ながら学史的意義も踏まえて「庄内系型」「布留系型」と呼称しておくのである。
- ⑨ この類型は、大和・蘇我遺跡庄内様4下野の資料や河内・久宝寺遺跡南地区トレンチ陶器SK45など、布留1式概念の範疇に含まれるものの中でも比較的古頃のものにみることができる。(桜井市教育委員会『圓向』 1976年・『財』 大阪文化財センター『久宝寺跡(その2)』 1987年)
- ⑩ 赤坂次郎『S字彌生鏡』85』『年報・昭和60年度』『財』兼知理遺跡調査センター 1986年
- ⑪ 赤坂次郎『最後の古付鏡』『古代』86号 1988年
- ⑫ 註⑪ 文獻
- ⑬ 伊藤裕作『古墳時代前期における土器製作技法の検討—伊勢地域の事例を通して—』『天王山古墳』志町・猪野町遺跡調査会
- ⑭ 中村佑信ほか『名張市赤日町・辻川内遺跡・上東野遺跡』『昭和57年度奈良県整備事業施設地域性文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983年
- ⑮ 門田了三『城原遺跡』名張市教育委員会 1985年
- ⑯ 註⑪・論文など
- ⑰ 註⑪ 文獻
- ⑲ 註⑪ 井上和人・須藤隆ほか文献の38・39の資料。なお、この文献ではこれを小型丸底窓の範疇に含めず「曲下」とし、も併系窓の影響下にあるという表現をしている。
- ⑳ 清水真一・土器器・長須寺・長須寺に関する「考察」『橿原考古学研究所論集』第九 1988年

(3) 城之越遺跡出土高杯の接合法

本遺跡では、大溝を中心に多量の高杯が出土した。

ここでは、特に高杯の杯部と脚部の接合痕に着目しその接合法について考察を試みたい。

まず、杯部と脚部の剥離状況からうかがえる外見上の特徴として、次のようなことが指摘できる。

脚部では、上端が閉じて、中身となっているものと開いているものがある。また閉じているものの中には、上面に窪みを持ったものや、開いているものの中には、上部に杯部から突起上の粘土が残っているものがみられ、突起状粘土がゆるやかな球面状になるものと、長く突出しているものと認められる。

杯部では、中央に小円の開いたものと開いていないものに分かれる。開いてないものでは底部外面中央が突起状に膨らんでいるものと底部外面中央附近が剥落しているものがある。

これまでの報告では以下の様に分類されている。紫出雲遺跡では円盤充填方法と組み合わせ成形法に分けており⁹。六条山遺跡と矢部遺跡では、組み合わせ成形法を接合法と挿入加付法に分けている。四ツ池遺跡では円盤充填方法を杯部・脚部の成形が連続か分割かで分け、他を、分割接合法、杯部巻き上げ付加成形手法、挿入接合法、突起接合法、粘土付加接合法に分類している¹⁰。また、白浜遺跡では、円盤充填方法、杯部と脚部を個別に作ったあと接合する方法、脚部を作つて杯部を作り足す方法に分類している¹¹。

本遺跡の接合技法を大別すると、A技法：杯部に脚部を接合し底から粘土付加を行う方法と、B技法：脚部を先に作った後、杯を作りだし最後に粘土充填・付加を行う方法が見られる。さらにこれら二つの技法は、脚部上端の作りが閉じているものと開いているものとで技法にも若干の差異が見られる。

A 1 A技法で脚部上端が閉じている場合脚部上端を杯部に押し当て、下から粘土を付加し接合する。この時、杯底部内面中央がやや盛り上がることがある。脚部の成形が杯部の成形に比べ先に行われているものと考えられる。

A 2 A技法で脚部上端が開いている場合杯底部外面の形状によって、大きく三つに細分できる。

A 2-i A 1と同じ技法で脚部上端を杯部に押し当て、下から粘土を付加し接合する方法である。杯底部外面中央部に棒状工具を押し当てたとみられる小さな丸い痕が見られる。

A 2-ii 杯底部外面中央に球面状の突起を作り出し脚部と接合する。突起はそれほど突出せず、なめらかな面を持っている。ナデの痕跡の残るものや中心部にA 2-iと同じ小孔が見られるものもある。

A 2-iii A 2-iiの突起が長くなった場合である。杯底部外面に突起をつまみ出した痕跡がうかがえる。この場合、脚の粘土状態はある程度柔らかく接合部で脚を絞るようにして接合したと考えられる。また、杯底部外面に脚部上端の粘土を引き伸ばすようにして接合しているため、脚部上端が外反していることがある。土器No.343の例では、突起を脚内側面に接合しようと指で押さえた痕跡がある。このことから考えると、突起の粘土状態は指で押さえられる程度であり、杯部と脚部の成形の時間差はあまりないものとも考えられる。

B 1 B技法で脚部上端が閉じている場合

脚部成形後、脚上端の側面に杯部を作り足して成形する。杯底部内面に薄く粘土を付加し、調整を行うことが多い。中心に小円が開いている杯部は、その小円の断面が連続していることから、この技法によるための接合面であると考える。

B 2 B技法で脚部上端が開いている場合

B 1と同じ方法であるが、中空の部分に粘土を充填する方法である。充填した粘土が脚上部内面に突起状に出る。この突起に調整を加え、杯部と脚部の接合を補強している場合がある。この時の調整には指で押さえ脚上部内壁面に全体に撫で付けているもの、一回指で押さえ撫で付けているもの、細い工具を用い脚内壁面に押さえつけようとしていると思われるものが見られる。また、充填した粘土が杯底部内面全体に薄く広がっている。最後に充填されるためこの粘土は最も柔らかいと考えられる。

以上のように高杯の杯部と脚部の接合について見てきたが、本遺跡では、すべて杯部と脚部を分割成形している。中でも、A 2-iii・B 2のように突起

状に粘土が脚内面に出ているものが多い。A 2-iii・B 2では外見上、区別がつきにくく、また、B 2の中にも、外見上 A 2-iii のように充填されているものもあると考えられ、課題も多く残る。

今回は、杯部と脚部の接合方法についてのみ考察

を加えてきたが、杯底部が円盤状に剥離し、擬口縁を持つもの、即ち脚部と杯底部のみを先に接合し、その後、杯部口縁を作り足して成形したと考えられる高杯も多く見られ、今後、高杯全体の成形方法についても検討を要するところである。

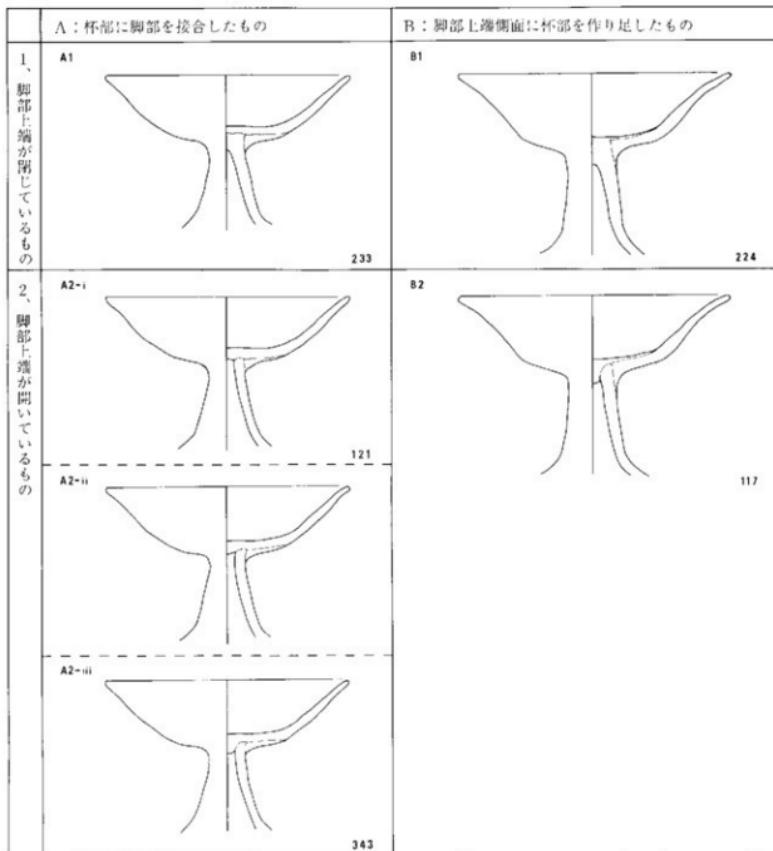
(中浦基之)

(註)

- (1) 小林行雄、佐原真『黒雲出』説明書教育委員会 1964年
- (2) 寺沢義『六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1980年
- (3) 寺沢義『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986年

- (4) 橋口吉文は『四ツ池遺跡』堺市教育委員会 1984年

- (5) 山本雅和ほか『白浜遺跡発掘調査報告』本浜遺跡群調査委員会 1990年



第205図 城之越遺跡出土高杯分類概念図 (1:4、番号は報告図版に対応)

(4) 体部穿孔小形土器の成立とその性格

城之越遺跡の大溝からは、体部に一個の穿孔をもつ小形の土器が少量ながら認められた。穿孔が施された土器の多くは、小型丸底壺と小形壺である。こうした土器は、他の遺跡をみても数は少ないものであるが類例がないわけではない。そこで、こうした土器の城之越遺跡でのあり方と、他遺跡での類例を若干検討しつつ、関連する問題について検討してみたい。なお、ここで扱う「体部穿孔小形土器」とは体部に穿孔を持つ小形壺と小型丸底壺とを総称したものである。小型丸底壺には、いわゆる精製系のものは存在せず、粗製化したものばかりである。なかにはとても「丸底」と呼べないものや鉢形とすべきものも存在するが、いわゆる「小型丸底壺」の系譜上にあるものもないものも含め、形態面から広い意味で、小型丸底壺として扱った。

(1) 問題の所在

一般的に体部穿孔の小型丸底壺は、從米から漠然と、須恵器の影響ないしは模倣として捉えられてきたものであり、あるひとつの一括資料の中に須恵器がなくとも、龜形小形丸底壺の存在をもってその背後に須恵器の出現を見る見解も存在した。⁹このことは、いわゆる精製系の小型丸底壺にはこうした体部穿孔土器が存在せず、体部穿孔の小型丸底壺が粗製系の小型丸底壺に存在して、形態的にも早くとも布留3期以降に出現するらしいことと関係する。

研究史的には、「竹などで作った管を円孔に挿入して、注器として使用するものと推定されている」ものである。このことは、古墳時代のものについても大阪府吹田市五反島遺跡で、初期須恵器の穿孔部に栓をした状態で出土したことから、本質的な用途のひとつに注器としての存在があることがある程度是認される。¹⁰

また、小型丸底壺については、古く小林行謙氏はそれが布留式で定型化する「小型精製3器種」のひとつとして存在し、祭祀に用わるものとして捉えられたものであるが、現在問題としているものは、小林氏が問題とした「精製系」のものとは異なっており、同じ小型丸底壺といつてもその性格について精製系のものと同一であるかどうかは疑わしい。

体部穿孔をもつ小型丸底壺や小形壺は、量は少ないとしながらもしばしば見られるものではある。多くの場合、一つの遺跡であまり多く出土することはないが、なかには城之越遺跡のようにその出土が印象的にやや多いと思われる遺跡・遺構もあるし、全く出土しない遺跡も存在する。つまり、遺跡（遺構）によって出土が目立つ遺跡と全く目立たない遺跡があるわけである。

ここでは、体部穿孔小形土器の編年的位置づけや土器自体に対する型式学的な検討を加え、漠然と影響の有無が想定されている須恵器との関係を整理し、遺跡でのあり方や出土遺構の具体的な状況を概観したうえで、その出現の背景や性格について考えてみたい。

(2) 個別検討

こではまず、比較的まとまった資料を出土した遺跡の体部穿孔小形土器の具体的な状況を遺構にそろして見ていただきたい。

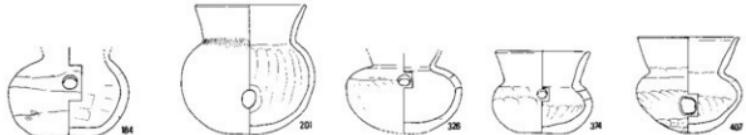
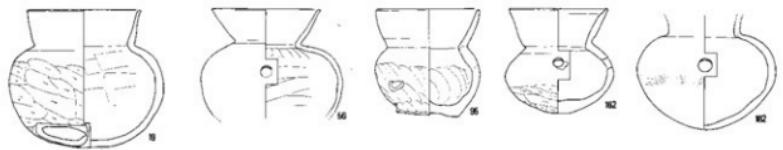
①城之越遺跡 当遺跡では、底部近くへの穿孔事例も含めると、15点の体部穿孔小形土器を確認している。いずれも大溝からの出土である（数字は報告での土器番号）。

IV-b層からは、小型丸底壺には21があり、また壺B-b類と分類された小形壺19にも穿孔がある。いずれも焼成後穿孔で、穿孔部位は胴下部の底部に近い部分である。これらは穿孔部位が底部近くであり、須恵器の影響ではなく、前代から続く穿孔（打ち欠き）を施した土器の系譜上にあるものと考えてよからう。

IV-b層上（IV-b層とIV-a層との貯入層）では、小型丸底壺としての例はないが、壺B-aと分類された小形壺56がある。いわゆる焼成前穿孔で、穿孔部位はほぼ体部中央の直上である。口縁部はやや内窓気味に直線的に外方へ延び、肩部が張るものである。

IV-a層では、95がある。体部中央よりやや下がった部位に、焼成後穿孔がされている。

III層では類例が多く、162,182,184,201があり、201が体部中央よりやや下がった位置にある焼成後焼成であるに対し、その他の例では体部中央の直



城之越遺跡

19

56

95

162・182・184・201

326・374・407～409

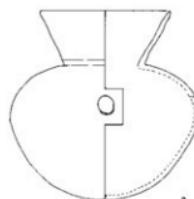
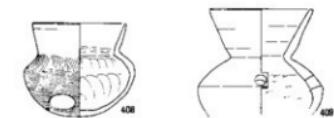
大満IV-b層

大満IV-b層上

大満IV-a層

大満IV層

大満内その他

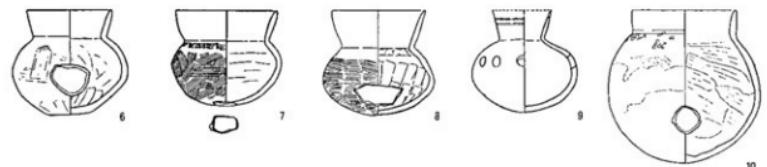


高瀬遺跡

1 SD 1 最下層

2～3 SD 1 下層

4～5 SD 1 中層



発志院遺跡

6～9 SD 50下層

10 SD 50中層

11 SD 50上層

12・13 SK 15中層

0 10 cm

第206図 体部穿孔小形土器関連資料 (1:4)

上への焼成前穿孔である。182は口縁部が欠損しているが、頭部に縦を持ち、底部が尖り気味となっており、須恵器甌との形態的な共通性が認められる。

確実に層位が明らかなものとしては以上であるがそれ以外でも、326(貼石部出土)・374(暗灰砂)・407~409(黒灰砂、ここではこれ以外にも破片で焼成前穿孔例を2点確認できる)の例がある。このうち、409は、体部中央の屈曲と、その直上に焼成前穿孔があるという器形上の特徴から、須恵器甌との形態的共通性がみられるものである。

③高瀬遺跡 城之越遺跡より約1.5km南西に位置する古墳時代の遺跡で、集落を囲む大溝から多量の土器が出土した。体部に穿孔をもつ例として、小形壺2個と小型丸底壺3個がある。

土器が出土する層としては最も下部から出土した1は、小形壺で、焼成後の体部穿孔が見られる。

下層出土の2と3はいずれも焼成前穿孔で、このうちの3は、口縁部が直線的に外側へ開くもので、須恵器大形甌に類似しており、模倣したものと思われる。

中層出土の4と5は、小型丸底壺の焼成前の体部穿孔例であるが、口縁部が短く、頭部が極めて細く窄まるやや珍しい器形である。頭部の特徴は、須恵器甌との形態的共通性も想定できる。

下層からは、須恵器把手付台付壺と、陶邑古窯址群TK23号窯に類似があるという⁹高杯が出土している。また、初期須恵器を模倣したと思われる土師器把手付碗も存在しており、先の須恵器模倣の3とともに、須恵器模倣の土師器が確実に存在する遺跡である。これらの下層出土例は、共伴の初期須恵器から5世紀前~中葉の年代が推定されるが、中層のものはやや異なるであろう。

④発志院遺跡¹⁰ 奈良県人和郡市に所在する遺跡であり、溝や上坑から良好な古墳時代の土器群が出土している。報告書では、焼成前・後を含めて5点の体部穿孔小型丸底壺が示され、これ以外に底部穿孔小型丸底壺1点と体部穿孔の小形壺2点が認められる。

S D50からは、下層から4点の穿孔土器があり、このうちの3点は体部もしくは底部への焼成後穿孔であるが、9だけは体部中央への焼成前穿孔を施し

ている。この土器は、頭部がやや細く、薄く直線的に外方へ延びる口縁部に2条の沈線が入るもので、ほかの小型丸底壺とはやや異なった器形である。穿孔部の横にも、平行して同大の竹苞文が刻まれている。

中層では、焼成後穿孔の小形壺がある。

陶邑古窯址群TK208号窯出土品と類似するとされる須恵器杯蓋も出土した上層からは、焼成前焼成の体部穿孔の小型丸底壺1点がある。薄手で口縁部が尖り、やや尖り底となる。やはり須恵器甌との形態的共通性が指摘できようか。

S K15中層からは体部への焼成前穿孔の小型丸底壺1点と焼成後穿孔の小形壺が出土している。12は体部中央位に縦を持ち、この直上に穿孔が見られる事から、須恵器甌の模倣と理解されよう。

S K15は、出土状況や出土土器の組成、焼木の存在から祭祀用の遺構と考えられている。S D50も、焼木などの出土遺物から祭祀の存在が想定されている構造であり、体部穿孔の土器も祭祀に係わるものとの位置づけがされている。

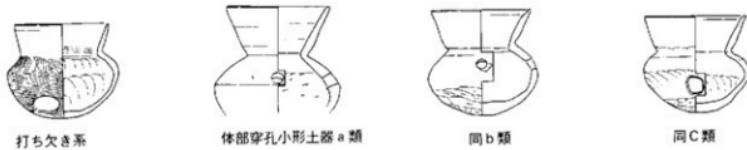
以上の例以外にも、三重県内では姫野町下之庄東方遺跡(焼成前穿孔)や津市宮ノ前遺跡(焼成後穿孔)等で類例があり、県外でもしばしば類例は散見される。

城之越遺跡と高瀬遺跡は同じ上野市比土地内の遺跡である。両遺跡の大溝の時期は、城之越遺跡のほうは古墳時代前期に遡るもので、高瀬遺跡のほうは古墳時代中期にその初現を求めるものである。発心院遺跡は、報告書ではS D50下層やS K15中層は布留1式期に比定されているが、全体にやや占く位置づけられているようである。寺沢薫氏は当該土器を氏のいう布留3式に位置づけ、さらに口縁部に沈線の入った9に陶質土器の影響をみる。このように当該土器自体は、現実的には報文よりもかなり新しい時期の所産と思われ、陶質土器との関連は重要な問題である。

(3) 体部穿孔小形土器の類別

全体を見通した場合、体部穿孔をする時期に焼成前と焼成後のものが存在する。

焼成前穿孔のものについて見てみると、形態面か



第207図 体部穿孔小形土器の諸類 (1 : 4)

ら、小型丸底壺の体部に穿孔を施した「体部穿孔小型丸底壺」と、より須恵器甕との形態的な共通性が大きく、それをある程度意識して模倣したと思われる「土師器甕」とでも呼ぶべきものと見られる。体部穿孔小型丸底壺の場合でも、全体的な器形は小型丸底壺のものを踏襲しているが、穿孔位置はいずれも体部最大径となる屈曲部直上にあることは注目され、須恵器甕との共通性として注目される。こうしてみてみると、総じて焼成前穿孔の個体は、多かれ少なかれ背後に須恵器との関連が考えられるものであろう。

これに対して、焼成後穿孔のものは、体部最大径よりも上位に穿孔されている個体ではなく、せいぜい体部最大径の部位か、中心はむしろそれよりも下位である。これらの中には、直接須恵器との形態的な共通性を物語るものは存在せず、ただ穿孔するという行為のみが共通するものである。

こうした焼成後穿孔の小形土器については、前代以来から供獻土器等にみられた「儀器化」した土器の流れで捉えられるのか、あるいは「胴部穿孔」という行為自体を須恵器甕などから取り入れて小型丸底壺に施したものかは判然としないが、少なくとも城之越遺跡の19・21・95・408、発志院遺跡の7の土器のように、底部や底部近くに焼成後穿孔が施されている事例は、前代以来の「打ち欠き」の系譜で考えても良いものと思われる。

体部中央付近に焼成後穿孔が施されているものについてみてみると、少なくとも小型丸底壺という器種に限定した場合、その初期の精製系のものには穿孔例がなく、その穿孔の系譜が前代に遡ると考えた場合には系譜的に断続が認められる。したがって、やはり須恵器甕が穿孔化の契機になっている可能性は高いであろう。ただし、穿孔範囲の大きい発志院遺跡の13などは何ともいえない。小形壺への穿孔は

系譜的にも前代に追るものであり、それが小型丸底壺が粗製化した時に小型丸底壺にも及んだと考えることも可能であり、これについては今しばらく類例の増加を待ちたい。

以上をまとめると、

① 打ち欠き系の体部穿孔小形土器

土器に穿孔を施すということが供獻土器等を中心認められ、小形壺にもこの例のものが見られる。底部付近あるいは体部中央よりも下位の焼成後穿孔である。前代からの系譜を引き、甕とは直接關係ないであろう。

② 須恵器甕を模倣した焼成前穿孔の土師器（体部穿孔小形土器A類）

器形は土師器小型丸底壺を踏襲するが、焼成前の穿孔が体部中央直上へ施された、須恵器甕影響の体部穿孔小型丸底壺（同b類）

③ 焼成後穿孔が胴部付近に施された小形壺や小型丸底壺（同c類）

の4類型が認められる。②～④（体部穿孔小形土器a～c類）は、須恵器（あるいは陶質土器）甕の影響を受けたものであるが、それぞれ模倣や影響を受けた程度が異なっているものと理解されよう。そして、その3類は、ともに同時存在していたようである。ただ②の場合でも、口縁部が二段に屈曲する甕の特徴まで模倣しているものはほとんどなく、口縁形態には当該土器としての独自性が認められる。

体部穿孔小形土器の存続期間は極めて短く、須恵器甕の絶対量が少ないわゆる初期須恵器の存続時期がその中心と思われ、須恵器甕の一般的な定着とともに消滅していったものと理解される。これに対して須恵器甕は、器種組成のうえでも確固たる位置を占めていく。

（4）体部穿孔小形土器出土遺構の性格

上器の用途を考える上でひとつの手掛かりとなる

ものは、その出土状況や出土遺構の性格である。ここでは、当該土器の性格を考える上で重要と思われる出土遺構からみていく。

縦向遺跡では、小型丸底壺としての類例は紹介されていないが、寺やミニチュアの壺に穿孔が施されたものが矢塚古墳周溝や辻土塚2等から出土している。このことを積極的に考えれば、矢塚古墳周溝のものは葬送に関するもの、辻土塚2のものは祭祀に関係するもの、という考え方ができる。このように穿孔行為自体は古くから系譜の追えるものであり焼成後穿孔の小形土器の一部もこの系譜にあるものも存在すると思われる。

奈良県天理市和爾・森本遺跡で発掘された5世紀の井戸であるF地区S E 3では、廃絶時に何らかの祭祀の存在が推定されているが、それに伴って初期須恵器や布留式上器、木製品、獸骨とともに体部中央へ焼成後穿孔の施された壺と小形壺が出土した。

発志院遺跡では、当該土器が出土したSK15は、祭祀に伴って使用されたと想定されているものである。

城之越遺跡においても、当該土器の出土した遺構である貼石の大溝は、源流域の井泉から延びる屈曲した溝の貼石や立石の存在といった特異な状況から水に係わる祭祀の場であった可能性が考えられるものである。

(5) 体部穿孔小形土器の性格

このように、体部穿孔小形土器が祭祀的性格の遺構から出土しているのに対し、近畿地方及び三重を

含めたその周辺部では、通常の堅穴住居等からこうした土器が出土したということはあまり聞かず、その出土は専ら溝や土坑などが中心である。例えば、三重県名張市壇・柏原遺跡では、当該期の堅穴住居が多数確認されているにも係わらず、当該土器の出土はない。こうした穿孔をもつ土器は、概して珍しいために破片であっても報告書で触れられることが多いと思われる。それでいてあまり類例を聞かないのは、おそらく当該土器に「非常日」的な性格があつたためと思われる。当該土器を出土した遺構として溝が多いが、これにしても溝での祭祀の存在を示すか、別の場所で祭祀に使用したものを見出せば、祭祀終了後溝へ投げ捨てたためと考えることができよう。

いずれにせよ、焼成前体部穿孔をもつ小型丸底壺は、土器自体の用途としては注器としての機能をもつものであるが、出土遺構の性格から、状況証拠的ではあるが、祭祀に係わる「非常日」な土器という想定ができるものであり、これが次第に器種組成上に占める割合が増加していくにしたがって定型化していくものと思われる。

須恵器類は、朝鮮半島の陶質土器にも共通する器種があり、日本での出現のあり方も含め不明なことが多いが、おそらく須恵器の性格のひとつにも「祭祀」と係わるものがあったのであろうと推測される。静岡県御殿が平古墳群6号出土の人物埴輪(巫女)は、手に注ぐための筒を挿入した状態の冠を持っているものであるが、巫女がもつことにこそそのもつ性格の一端を示しているといえよう。
(穂積裕昌)

(註)

- ① 例えば、こうした見解を代表して、以下の文献をあげる。
坂口一「土器型式変化的裏面―群馬県における出現期の須恵器模倣土器器の様相」『研究紀要-8-』財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991年
- ② 水野清一・小林行雄編『群馬考古学辞典』東京新闻社 1959年
- ③ 原田真・西本安秀「大阪府五反島遺跡」『日本考古学年報39』日本考古学協会 1988年
- ④ 小林行雄「小型丸底土器小考」『考古学』第6巻第1号 1935年
⑤ 当報告参照
- ⑥ 腹部旁人「二重環・高腰遺跡」『考古学ジャーナル』N.289 1988年
なお、遺物の出土状況について、腹部旁人氏より御教示を得た。
- ⑦ 前掲註⑥ 文献

⑧ 穂积裕昌編『発志院遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1979年

- ⑨ 佐久間「畿内古式土器類の盛年と二、三の問題」『矢張遺跡-国鉄24号線横浜バイパス建設に伴う遺跡調査報告(Ⅱ)』奈良県立橿原考古学研究所 1986年
- ⑩ 石野博信・闘川忠功編『灘山』板井市教育委員会 1977年
- ⑪ 松田直一編『和爾・森本遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所 1989年
- ⑫ 前掲註⑥ 文献
- ⑬ 田代仁「名張市赤目町 墓・柏原遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地帯歴史文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1984年
ただし伊賀地方の場合、良好な当該時期の堅穴住居を検出した遺跡の多くが未報告か不十分なものであり、今後の課題となるている。
- ⑭ 静岡県『静岡史 資料編3 考古三』1992年

(5) 城之越遺跡の木製品

城之越遺跡から出土した木製遺物は、井戸の枠材と掘立柱建物の柱根を除けば、そのほとんどが大溝からの出土である（大溝以外では、SK8と下段部分の包含層に微量存在する）。大部分を占める大溝出土のものについていえば、それらが使用された後に廃棄されたものか、祭祀等の何らかの行為に伴って投入されたものかは明確にはできないが、出土状況や器種別の出土地点の差異などは、特定器種についての一括投入（廃棄）、あるいは固定化した投入（廃棄）地点の存在といったものが窺える。具体的には、Ⅲ—(2)—2の「大溝の遺物出土状況」の部分でみたとおりである。ここでは、大溝から出土した木製品について、まず全体的な特徴を概観したうえでその組成上の特質を他遺跡とも比較検討して遺跡全体での木製品の位置づけを図るとともに、個々の木製品のうちのいくつかを取り上げ、個別に若干の検討を試みる。

1. 大溝出土木製品の特徴

大溝から出土した多量の木製品のうち、今回開示したものは182点を数える。杭類や性格不明の板材・棒状木製品については割愛したものもあるが、用途が明らかなるものや加工が明瞭なものは破片であってもば網羅できたと思う。そこで、まず出土木製品の全体的特徴について列記してみると以下のようになろう。

- (1) 木製品に加工された材の樹種として、全体を通して好んでヒノキが用いられ、しかも固くて加工の難しい辺材が多い。
- (2) 鋤歎類の耕作用農具の出土が現状では全くみられない。
- (3) 棒をはじめとする容器類の出土もみられない。
- (4) 刃形や刀形といった武器形祭祀具の出土が顕著である。
- (5) 漆塗りの飾弓や刀剣の鞘など技術的に高度な遺物が存在する。
- (6) いわゆる布巻き具もしくは絆巻き具とされる遺物の出土が顕著である。
- (7) 案もしくは机状木製品の出土が顕著である。
- (8) 掘立柱建物の存在を暗示する建築部材の出土。

(9) 未製品の存在は認められない。

(10)一方、転用材は存在する。

(11)火災による焦痕のあるものが認められる。

(1)は(5)とも関連して、いわゆる「良質の製品」が城之越遺跡で用いられたことを示すとともに、(4)とも合わせ、それらを使用する必要性があり、また使用することのできた集団の社会的地位の高さを暗示するものともいえよう。(9)は、城之越遺跡へ製品自体が持ち込まれたとみることができる。

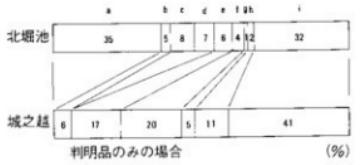
2. 大溝出土木製品の組成上の特質

先に示した大溝出土木製品の諸特徴のうち、(2)～(8)は木製品の組成に係わる内容である。いずれも重要なものであるが、そのなかでも特に城之越遺跡を考えるうえで重要と思われるものは、まず(4)と(2)であり、次いで(3)が挙げられよう。というのも、特にこの点に城之越遺跡大溝出土木製品の組成上の特質が集約されていると考えられるからである。

城之越遺跡大溝出土の木製品が、通常の集落遺跡から出土する木製品の組成と比べてやや特異なあり方を示すことは、別の遺跡の木製品組成と比べることによってより明瞭となる。ここではまず、発掘調査によって通常の集落遺跡であることが示された同じ木津川水系の遺跡である上野市北堀池遺跡から出土した木製品の組成と比べてみることとする。

北堀池遺跡は、上野市大内に所在する遺跡で、古墳時代の水田跡と古墳時代前期初頭から後期に及ぶ総数54棟もの堅穴住居が発掘された。大溝と旧河道からは弥生時代後期から古墳時代にいたる多量の木製品が出土した。掘立柱建物の建築部材は出土しているものの建物自体は確認されていない。特に豪族等の有力者の居住を物語るような痕跡は認められておらず、水田の存在と合わせ、規模は大きいがごく一般的な集落遺跡と捉えることができよう。

第1が示すとおり、建築部材が多いことは共通するが、それ以外では北堀池遺跡と城之越遺跡との組成上の差異は明白である。すなわち、北堀池遺跡では耕作用農具や棒などの生活用具などが目立つに對し、城之越遺跡では武器形等の祭祀関係遺物や武



第208図 北堀池遺跡と城之越遺跡の木製品組成比較

具、案の出土が目立つ。もちろん城之越遺跡でも大溝全体を完掘したわけではないので、当然未発掘部分にそうした農具等の遺物が存在している可能性はあるが、少なくとも源流部をはじめとするかなりの面積を発掘したうえでの結果であり、もし存在していたとしても、その割合は全体からみると低いものであろう。

通常の集落遺跡から出土する木製品の組成において、北堀池遺跡のように農具や生活用具の占める割合が多いことは、他地域の木製品を出土した遺跡からも窺えることである。例えば、滋賀県米原町入江内湖遺跡行司谷地区から出土した木製品の場合、立地場所の特色上アカトリなど湖に係わる遺物も多いが、性格が判明している木製品のうち農具の占める割合は、耕作用農具（ただし柄・把手類も含む）が25%、収穫・脱穀用農具も含めると37%という高率になり、容器類も19%を占める。不明木製品とされるもののなかには明らかに建築部材等もあり、農具の場合は破片であっても性格の判明率が高いことを

考慮すると、その割合は本来的にはやや下がったものになろうが、それでも木製品組成全体に占める農具の割合は高いものといえるであろう。

一方、城之越遺跡に比較的近い組成のものとして丹後半島に所在する京都府峰山町古殿遺跡をあげることができよう。この遺跡では、祭祀具としての形代が多いことや農具が少ないと、食器具が多いこと（この点は城之越と異なる）、機械具が多いことなどが指摘されており、生産の場ではなく祭祀色の強い使用の場としての位置づけがなされるとともに木製品の加工技術の高さが指摘されている。

北堀池遺跡の場合、木製品の組成に占める祭祀関係遺物の割合が少ないが、だからといって祭祀が行われていなかった訳ではない。入江内湖遺跡行司谷地区の場合には、祭祀関係遺物の出土は10%弱と北堀池遺跡よりも高率である。しかし、先にもみたように、同時に農耕具・狩猟具・運搬具・容器・織織具などの集落遺跡の木製品組成として一般的なものや、その遺跡の特質としての湖の生活に係わる遺物も数多く出土しているのであって、入江内湖遺跡出土の祭祀遺物は報告者が指摘するとおり、「祭祀遺跡と呼びうるものではなく、一般集落における祭祀のあり方をしめすもの」なのである。つまり、祭祀関係遺物の存在それ自体は当時の集落にとってごく普遍的なものであったと思われ、重要な点は、それが全体の組成のなかでどのように位置づけられるかという点と、それがどのような状況のもとで出土しているか、なのである。他遺跡と違ったやり方をすれば、出土した祭祀関係遺物の具体的な内容もさることながら、上記のような全体でのあり方の相違となって現れるはずである。北堀池遺跡や入江内湖遺跡の場合は、出土量の多寡はともかく、通常の集落遺跡における祭祀の存在という観点からの祭祀関係遺物の位置づけができるものであろう。古殿遺跡の場合はまだ遺跡の全体像が明瞭ではなく、それが通常集落における祭祀の枠内に捉えられるのか、また若干違った意味をもつのかは現状では判然としない。

これに対し、城之越遺跡の組成からは、農具や容器類の欠落など「一般集落における木製品の組成」というには程遠く、組成上にしめる祭祀関係遺物の

突出した比率が逆に目立つ結果となっている。それとともに、出土遺構である大溝の貼石で覆われた特異な状況を考えてみれば、城之越遺跡のあり方は、「一般集落における祭祀」という枠を超えていることが理解されるであろう。

さて、城之越遺跡の調査で認識できた祭祀関係遺物とは、武器形や実際の武器類（刀など、鞘の存在から実物の刀剣類の存在も推定される）を中心としたものである。しかし、特別祭祀用に作られたものでもない日常用具が葬送儀礼や何らかの祭祀行為に使用されたであろうことは、纏向右塙古墳周濠から出土した農具の位置づけや、纏向遺跡で提唱された土器や脱穀具・機織具といった日常生活品も用いた土坑祭祀である「纏向型祭祀」^⑨で指摘されているとおりである。石野博信氏は、祭祀専門具を使用せず日常用具を使用して「かみまつり」を行うことも通常のこととして行われていたと考えておられる。こういった場合、本来の用途はともかく、これらは日常品であっても祭祀に係わった遺物であるということができる、その限りにおいては「祭祀遺物」であったといえる。人溝の貼石や立て石のある上流側の突出部や広場、方形壇を祭祀空間と捉えた場合、いわゆる「祭祀関係遺物」以外の遺物を積極的に祭祀と係わりをもたらし、あえて空想的に考えれば、案は神饌を供した台、機織具もまた祭祀に使用された道具のひとつとして捉えられるのはなかろうか。

3. 個別遺物の若干の検討

近年、隣接府県においてもそうであるが、良好な木製品を出土する遺跡の発掘例が増加している。三重県下においても、まとまったものとしては、旧伊賀国では今回の城之越遺跡や先にも検討した上野市北塙池遺跡をはじめ、城之越遺跡とはほぼ同時期で距離的にも北西に2kmしか離れていない高賀遺跡、森脇遺跡、神部遺跡^⑩といずれも木津川水系の諸遺跡があり、旧伊勢国では津市納所遺跡、太田遺跡、横垣内遺跡がある。他の遺跡での断片的な出土もあってそろそろ相手の比較検討も必要な時期がきているものと思われる。そこで、ここでは、城之越遺跡大溝出土木製品のうちのいくつかを個別に取り上げて比較検討を進める。

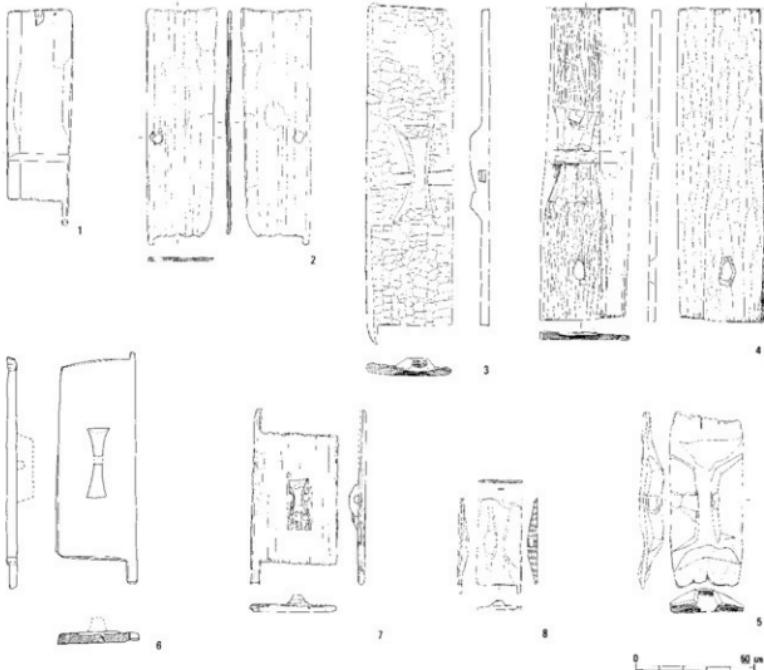
(1) 扉材

全国的にも近年の出土例の増加が特に目覚ましいもののひとつで、三重県下の遺跡でも城之越遺跡の他に、納所遺跡・北塙池遺跡・高賀遺跡・森脇遺跡に類例があり、扉材とセットになるまぐさ材か鐵放しを出土した遺跡も納所遺跡・北塙池遺跡・太田遺跡それに松阪市前冲遺跡と杉垣内遺跡がある。

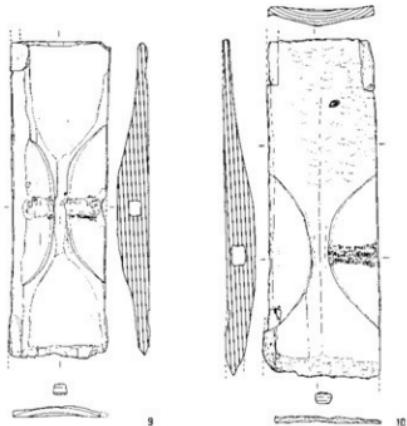
県内各遺跡の扉板の形状は、以下のとおりである(第204図参照)。

- ①、納所遺跡のものは、残りも悪いが、長方形板の一隅に軸部がみられるのみのものであり、把手の有無などは窺い知れない。
- ②、北塙池遺跡の場合も、全体の形状は納所遺跡例によく似たものである。軸部側の側縁部に円孔がみられるが、扉開閉の回転軸側となる部分に把手の存在は考えがたく、二次的な加工であろう。
- ③、高賀遺跡のものは、軸部を除く板材部分の全長が134cmを測る大きなもので、すべて一本から作り出されたものである。投影をした把手の中央部には門穴があり、さらにその下には溝がくり抜かれている。全体に、手斧によるはつり痕がみられる。
- ④、城之越遺跡のものも、基本的な形状は、高賀遺跡例と全く同じである。二次転用によって、把手や軸部は無くなっているが、現状でも132cmを測り、ほぼ高賀遺跡例と同大である。
- ⑤、森脇遺跡のものは、火熱等による欠損部も大きいか、扉板の表面積全体に占める把手の割合が大きく、両側縁から盛り上がってくるような形状をなす。把手中央に門穴があり、その下に溝がくり抜かれているのは高賀・城之越例と同じである。以上の諸例のうち、③から⑤は、2個一対の観音開きとなる扉板であろう。

他府県での出土例をみると、井戸の枠材等への二次的転用として扉材が出土することも多いが、三重県下の諸例ではいずれも自然流水路もしくは大溝からの出土である。このうち、城之越・高賀・森脇の3例では、ほぼ出土層位と遺物から所属した年代を知ることができる。高賀遺跡例は大溝最下層からの出土で庄内式併行期の古墳時代前期初頭、城之越遺跡例は出土層位は大溝Ⅲ層であるが、これは把手部分をはつりとて板材として使用された後の廃棄



- 1 三重県 納所遺跡
 2 ◇ 北堀治遺跡
 3 ◇ 高質遺跡
 4 ◇ 城之越遺跡
 5 ◇ 森路遺跡
 6~8 奈良県 和爾・森本遺跡
 9~10 大阪府 諏良郡栗里遺跡



第209図 紙板関連資料 (1 : 20)

であることから、扉材としての使用期はおそらくIV層併行位には遡ると考えられ、古墳時代前期のものといえる。これに対し、森脇遺跡例では初期須恵器と共に伴していることから5世紀前～中葉の古墳時代中期の年代が与えられる。

古墳時代前期の城之越・高賀遺跡例と、中期の森脇例では、大きさの相違はともかく、把手の作出方法に大きな違いがある。森脇遺跡例のような、把手が比較的低いかわりに両側縁部から盛り上がるようになる扉は、井戸内で5世紀代の須恵器と共に伴した奈良県天理市和爾・森木遺跡出土の扉や、6世紀代と考えられる大阪府寝屋川市讃良郡条里遺跡出土の扉と共に、この形が5～6世紀を通して使用されたことが窺える。門の下にくり抜かれた溝は、4世紀の城之越・高賀遺跡例から6世紀の讃良郡条里遺跡例まで広く存在しており、今のところとくに時間的な目安となるものではなかろう。

島根県下の空古墳横穴や伊賀見1号墳などの石室閉塞石に線刻された觀音開き扉の起源が、城之越遺跡や高賀遺跡の例が示すように、少なくとも4世紀代に遡ることは特筆してよいであろう。

(2) 椅子（腰掛け）と案

498は破片ながら椅子を考えることができるもので、これとはば同形のものが、伊賀地方と隣接する大和国宇陀地方の奈良県橿原町谷遺跡で出土している。いずれも、器壁は厚く、かなりの重量にも耐えられると思われるものである。

これに対し、第41図に示した部材を、案（机状木製品）であるとした。これは、調整が非常に丁寧なことや、椅子（腰掛け）と考えた場合、大台部（受部）や脚部の器壁が薄く、人間を想定した場合の重量に耐えられないと思われたことによる。

古墳時代の案には、京都府古殿遺跡でみられる例のように、比較的細い脚が4脚あって、その先端を出ホゾにして天台部に装着するもの（仮にA形態とする）と、2個の幅広の脚を天台部下面に抉り込んだ2条の溝に挿入するもの（仮にB形態とする）の2形態を基本とする。

城之越遺跡の案は基本的にB形態で、近くの高賀遺跡の例も同様であるが、なかには第41図の495のようにやや幅広の脚材4脚を抉った溝に挿入したら

しい例（A形態であるが天台部と脚部の接合部は古殿例とは異なり、むしろ城之越遺跡や高賀遺跡のB形態の諸例に近い）も存在する。

城之越遺跡や高賀遺跡の案は、4～5世紀のもので、いずれも天台部下面の4側縁部が削り込まれて薄くなったり形となってしまっており、下面の溝の存在とともに破片で出土した場合に当該器種であることを知るひとつの目印となっている。脚部を通過するに抉り込まれた溝は、城之越遺跡では断面が円形をしたものとM字形をしたものがあり、高賀遺跡ではM字形のものは出土していないが、四角のものといわゆる「アリ溝」を呈するもののが存在する。ただ、これに接合すると思われる脚部は、今のところ四角のものに対応するものが出土しているだけである。

脚材は、城之越遺跡では長方形板の長辺部一辺に台形状の抉りを入れた比較的単純な形であるが、高賀遺跡ではそれとともに、台形状の板材の長辺部（下辺）に二重半円の透かし状の抉りを入れたやや複雑なものも存在し、これとよく似たものが先にみた谷遺跡からも出土している。

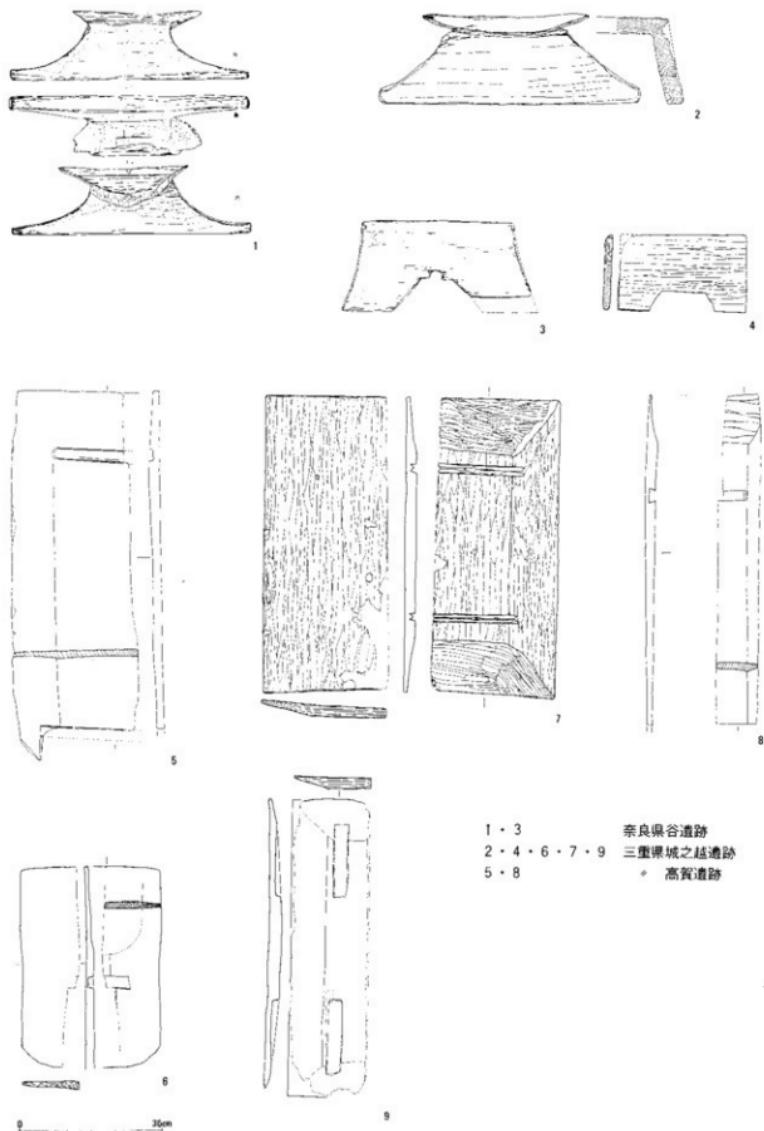
案の用途は、形態から当然物を乗せる供膳具としての機能が考えられ、日常用具としても使用されたであろうが、伊勢神宮などでは神に捧げる神饌を乗せる台として現在も使われており（神宮では脚の細長いA形態の案を使用）、祭事で使用された事例を示しており興味深い。

(3) 鰐弓

城之越遺跡出土の木製品の中でも、糸巻きによって文様を描いた後に漆を塗った精巧な作りのものである。破片資料のため全面にわたって施されていたかどうかは不明だが、一見すると、多重の菱形が連続しているような文様となっている。これが線刻によるものでないことは、文様単位の一本一本に切り合ひ関係があることからも明瞭である。こうした文様を作出するには幾通りかの方法が存在するが、ここではその前提となる事実確認の整理を中心に述べてみたい。

文様の復元にあたって関係すると思われる確認事項を列挙すると次のとおりである。

①弓身内面の溝の部分には糸を引っ掛けたような痕跡は認められず、当初は糸巻きを全面に施してい



第210図 椅子・案 関連資料 (1:10)

らしいこと。そうした場合、溝の部分に糸巻きがない理由として、一度漆を塗布して文様を固定した後、溝の部分のみ糸を切ったことが考えられる。

②. 菱形を1単位とみた場合、中心部から外周部までは6重ないしは7重の菱形となる。

③. 菱形の頂点となる交差部分は必ず切り合い関係となっており、その部分も一定の法則がみられる。

④. 菱形の外周に近づくにつれ切り合いを重ねて文様は盛り上がり、そこに漆を塗布するから切り合いの下になった糸の部分は結果的に隠れて見えなくなる（文様の外へ行くごとに直交する糸を飛び越えていく本数が増える）。

⑤. 従って、④と関連するが、菱形の中心部に表れている糸が次に表れるところは、隣接する単位の中心である。

⑥. 二次的な剥離部分の有無はともかく、漆を塗布した後で糸を抜いているような痕跡はみられない。

以上のような事実から、文様の作出にあたっては当初から最終的に「菱形」になることを意識していたかどうかはともかく、6～7重の菱形を菱形として1単位ずつ作出来ていたのではなく、糸を格子状に連続して巻いていった結果が、見かけ上は「菱形」に見えるようになったものと理解される。具体的な製作技術の復元についてはまだ不明な点が多く、今後の検討に委ねる部分が大きい。

また、この文様は、城之越遺跡の場合は弓に巻かれていたものであるが、亀山市大垣内古墳では槍の柄の部分の装飾となっていたものである。⁹⁾

（總括昌）

（註）

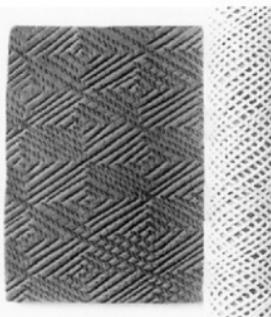
- ① 駒田利治、山田猛「N.木製品」〔三重県上野ノ原北斎遺跡発掘調査報告 第一分冊〕三重県教育委員会 1981年
- ② 中井均「上野ノ原湖遺跡（行司谷地区）発掘調査報告書－滋賀県立文化産業交流会館建設に伴う考古調査－」孝原町教育委員会 1988年
- ③ a. 平良泰久他「古殿跡発掘調査概要」「埋蔵文化財調査概報」京都府教育委員会 1978年 b. 戸原和人・鍋田勇「京都府遺跡調査報告 第9号 古殿遺跡」京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988年
- ④ 前掲註③
- ⑤ 萩原信儀・寺沢重「酒向石塚古墳跡調査（第4次）概報」桜井市教育委員会 1989年
- 寺澤重「三輪山の祭祀遺跡とそのマフリ」「大神と石上」筑摩書房 1988年



飾弓 表面 (1:2)



飾弓 裏面 (1:2)



糸巻きによる復元（製作 川戸達也）

- ⑥ 石野博信「古墳文化出現期の研究」学生社 1985年
- ⑦ 石野博信「祭祀と王權」「古墳時代史」雄山閣 1990年
- ⑧ 植木裕昌他「[高貴道跡] 平成2年度農業基盤整備事業地域歴史文化財発掘調査報告－第3分冊一」三重県教育委員会・三重都埋蔵文化財センター 1991年
- ⑨ 平成6年度から平成2年まで三重県教育委員会および三重県埋蔵文化財センター調査
- ⑩ 駒田利治「上野ノ原部・神部道路」「昭和55年度磐雲場整備事業地埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1981年
- ⑪ 伊藤久嗣「所道跡－道標と遺物－」三重県教育委員会 1980年
- ⑫ 渡辺悦生他「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報 I 森山東・太田道路」三重県教育委員会 1989年

- ⑨ 森川幸雄・近藤健也「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査報告書」三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991年
- ⑩ 増田安生他「松阪市深長町野村町新浦跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1986年
- ⑪ 河原信幸「松阪市深長町 新浦内遺跡」〔昭和61年度農業基盤整備事業地域歴史文化財発掘調査報告〕三重県教育委員会 1989年
- ⑫ 詳細について、森田常厚氏の御教示を得た。
- ⑬ 松田吉一他「相駒・森本直道」〔奈良県立橿原考古学研究会報告書〕
- 所 1989年
- ⑭ 西口周一「渡良瀬条里遺跡発掘調査概要・II」大阪府教育委員会 1991年
- ⑮ 出雲考古学研究会「石棺式石室の研究」1987年
- ⑯ 松本洋明「櫛原寺谷遺跡」「金良尾遺跡調査概報」1984年度」奈良県立橿原考古学研究所 1985年
- ⑰ 前掲註⑬文献
- ⑱ 前掲註⑭
- ⑲ 川戸安也氏から、観察による御教示を得た。
- ⑳ 鳥山市教育委員会鳥山麻氏の御教示による。

(6) B地区の大形掘立柱建物

先にも記したように、B地区からは、南面を増えて東西に並ぶ大形の掘立柱建物2棟（SB1とSB2）が発掘された。摺形や検出面には5世紀の土器が出土しており、その時期の建物かと思われるものである。

二つの建物は、建物の前面となる南側は柱筋を捕えて東西に並立する。向かって右側であるSB2のはうが柱間が大きく、側面からみると梁がより奥まで入っていることがよくわかるが、形は全く同じである。建物の特徴を列挙すると、

- ①四面庇建物であること
- ②身舎およびこれに取りつく庇とも平面形が正方形に近いこと
- ③身舎と庇の柱筋が通らないこと
- ④庇の出が広く、日一杯に建物の床面積を広げていること（SB1が145m²、SB2が171.25m²）
- ⑤身舎の隅柱と庇の隅柱とが45°の線上に一直線で並ぶこと
- ⑥身舎の妻中央柱の摺形が東西に縦長く、妻柱を外はずらした「近接棟持柱」の可能性が考えられるうこと
- ⑦SB1の隅柱摺形が建物に対して45°斜めに配置されていること

等があげられる。このうち、③は奈良県桜井市阿部丘陵中山遺跡や群馬県三ツ寺I遺跡や伊勢崎市原之城遺跡等でもみられるものである。⑤は、四面庇で建物を建てる場合には最も簡略な方法とされ、例えば城之越遺跡と同じ5世紀の群馬県三ツ寺I遺跡の主屋建物や、倉庫の例ではあるが大阪市法円坂遺跡

の大型倉庫群の建物も同様の手法をとる。⑥では、SB2の身舎西側の妻柱は柱頭や柱根自体の遺存からほぼ柱筋上にあることから、SB2の場合は片側（東側）だけが直接棟木を受ける近接棟持柱になっていたことも考えられる。⑦の隅柱摺形を斜めに配置する手法は、A地区の掘立柱建物の一部とも共通し、原之城遺跡の主屋も同様の手法をとる。

法円坂遺跡の倉庫群は、当然柱建物であるが、積木久氏の御教示によると、身舎内の東柱を取り払つて考えた場合、4本の隅柱と妻中央の棟持柱の計6本の通し柱となり、そのプランは基本的に城之越のものと非常に似通ったものになるという。城之越遺跡例との差異は、城之越遺跡例の場合には桁行の距離が長いため桁の中央にも通し柱を配置することである。

以上のような特徴をもつ城之越遺跡B地区の大形掘立柱建物に対して、宮本長二郎氏からは、「2×2間の身舎を切妻屋根とし、四方の庇屋根は一段落として別屋根を身舎にさしかける形式と考えられ、その場合には切妻屋根は草葺、四方寄棟屋根は板葺とするのが適当」との所見を頂いた。

5世紀代は近畿を中心として掘立柱建物が普及してくる時期ではあるが、こうした四面庇をもつ人形の掘立柱建物はほとんど類例がなく、わずかに豪族居館である群馬県三ツ寺I遺跡の主屋建物が知られる程度であった。6世紀代のものを含めても、城之越遺跡B地区的掘立柱建物は、各地で発見されている豪族居館のものと比べても全く遜色のない、むし

ろそれ以上の規模と格式（四面庇）をもった建物であると評価できるものであろう。

ところで、全国的に豪族居館の類例は、突出部を除くと基本的に方形プランの外郭ラインをもっており、濠（堀）で周囲を区画することが多い。こうした基本形は、当初関東地方を中心として類例が蓄積されてきたものであるが、近年の調査では近畿地方でも奈良県御所市名柄遺跡や奈良市南紀寺遺跡等でこういった形をとるものが確認されてきており、九州地方の大分県日田市小迫辻原遺跡でも同様の例が確認されている。

それに対して城之越遺跡B地区では、建物自体の規模や格式では相当な有力者に係わることが考えられるものであるが、建物が立地する場所自体は、丘陵斜面ということや谷筋に所在するという地形的な制約から、堀を巡らした「豪族居館」の構成をとることは立地的にも面積的にも不可能である。周辺部の

状況が不明なため確定できないが、おそらく、城之越遺跡を造営し付近一帯を支配したであろう豪族の居館は、別に存在するのであろう。その場合、B地区の建物の性格は、「別宅」的な性格を持ったものの可能性が考えられる。また、この場所に大形の建物が営まれた背景のひとつには、ここが、比土・占郡小盆地の木津川右岸部分の水田域への用水の供給源となる小河川「北川」が谷筋から盆地部へ流入する「水分」の地である、ということとも関係するものと思われる。

このように、B地区の大形掘立柱建物2棟は、周辺部の状況などまだまだ不明な部分も多いながら、建物部分自体は完掘しており、その構造上の特徴は古墳時代（5世紀）のものとして極めて重要な例と評価できる。四面庇をもつものとして、三ツ寺1遺跡例と並び、現状では日本最古の例の一つといえるであろう。

（徳富裕昌）

（註）

- ① 宮本長二郎氏の御教示による。
- ② 清水真一「奈良県桜井市 阿部丘陵遺跡群」桜井市教育委員会 1989年
- ③ 下城正「三ツ寺1遺跡」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社 1988年
- ④ 中澤貞治「原之城遺跡発掘調査報告書」伊勢崎市教育委員会 1987年
- ⑤ 横木久氏の御教示による。
- ⑥ 宮本長二郎氏の御教示による。
- ⑦ 前掲註④。なお、群馬県では原之城遺跡以外にも同様の手

法をとる遺跡がみられる。

- ⑧ 前掲註③
- ⑨ 豪族居館の全国的な傾向については、『季刊考古学第36号 将來古代の豪族居館』雄山閣出版 1991年を参考にした。
- ⑩ 藤田和尊「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42 日本文考古学会 1991年
- ⑪ 藤下浩行・武田和哉「南紀寺遺跡の調査 第2次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度」奈良市教育委員会 1992年
- ⑫ 前掲註⑨

（7）いわゆる「溜井」状の土坑について

今回の調査では、大溝内の井泉とは別に、出土遺物は全くないものの、調査中に湧水で苦労した若干の井戸状の土坑（形状によって最初から井戸として報告したものや、溝として報告したものもある）が存在する。こうした土坑（井戸）の例として、下段部分ではSK8、中段部分ではSE48・SK57、立会い調査部分でSD119があげられ、報告した以外にも形状は不安定ながらこれと同様の特徴を示す落ち込みが存在していた。いずれも大きさは長径で1m前後、深さ50~60cm程度の比較的浅いものが中心で指鉢状の断面形を呈している。これでも充分に湧

水層まで届いていることは、調査時の湧水のはか、枠材をもつ奈良時代の本格的な井戸であるSE20の底が検出面とほとんど変わらない高さであることや大溝の井泉がせいぜい1mの深さであることからもわかる。

上記のうち、SE48は溝（SD49）と繋がる一連のものであり、溝としたSD119は調査範囲が狭いため不明な部分も大きいが、溝自体が一部井戸状に深く掘り込まれたものである。また、SK57も、調査区外の部分では、おそらくSD52と繋がっているものと思われる。ただし、それらは、大溝の井泉と

は異なって、必ずしも溝の源流部に所在しているわけではない。

単独で存在するSK8については、何らかの生活用水をとるための掘りの「井戸」状の性格をもっていたものと考えられる。ただ、SE20のような枠材をもつ井戸に比べると当然簡易なものであり、飲料用かも含め、どのような目的で使用されていたかは明らかにできない。時期を判断する材料も全く欠けており今後の調査が期待されるところである。

これに対し、溝と連続しているものについては、そこから湧出した水を溝に引く目的があったものと思われ、SE47の出口付近にあった杭は、水量を調整した施設の存在を窺わせる。

これらの土坑は、それのみを一見すると、群馬県あたりで発掘例の多い「溜井」と呼ばれている灌漑用の井戸と類似している。ただし、規模的には群馬県例の半分以下であり、それが必ずしも溝の源流部ではないらしい（調査区の制約上確定的なことは不明）ことも群馬県でいう「溜井」とは異なる。群馬県で「溜井」とされているものは、河川からの用水確保が困難な場において「水田への灌漑用水の確保・取水を目的として掘られた井戸」であり「自噴によって農業用水を確保し、これを貯水しながら給水を計るという農耕施設」と定義されている。また、「溜井」と「井戸」との差は、溜井が湧出した地下水が常に導水路から流出する構造になっているのに対し、井戸が湧出した地下水がそのまま貯水されている点で区別されている。

城之越遺跡の場合、その用途については、出土遺物や土坑と繋がっている溝の行き先が明らかでないため具体的に明らかにする根拠がなく、状況から推量するしかないが、溝と接続するものについてはや

はり溜井と同様の灌漑用の水を供給する井戸であった可能性があるものと思われる。規模が小さいため、湧出した地下水を大量に貯水しておく程の貯蔵能力はなく、専ら地下水を湧出させることに主眼があつたものと思われる。立地的に、遺跡の前面を流れる小河川である北川から取水するには困難な微高地の水田化にとって、用水の確保は大きな問題であったのであろう。こうした施設も、水田化を進めるには重要な手段のひとつであったと思われる。

大溝源流部にあった井泉も、構造はこれらと共に通しており、同様の機能の存在が考えられるが、大溝井泉が祭祀の場としての石碑をもつて儀礼化された空間に存在していたのに対して、こうした土坑（井戸）は生活に密着し、より実利的で篤りのないものであったのであろう。

出土遺物がないため、土坑の時期を判断することは難しいが、SE48と接続するSD49が平安時代の掘立柱建物であるSB50とSB51に切られていることから、少なくともSE48についてはこの時期以前であろう。その他については、不明である。

伊賀地方は元来、盆地性の気候で雨の少ない地域であり、溜池への依存率は高い。溜池が増加するるのは江戸時代以降とされているが、それ以前においても土地の水田化の動きはあったであろう。

奈良県大和郡市原田遺跡では、庄内3式期のものとされる溝と接続する土坑があり、やはり溜井の可能性を想定されている。規模的には、城之越のものとはほぼ同じ大きさである。とともに関東地方ほど大規模はないものの、当地域においてもこうした施設が古くから利用されてきたであろうことを指摘し、今後の類例発見に注意したい。

（穂積裕昌）

（註）

- ① 能登健他「赤城山南麓における遺跡群の研究—鹿野集落の変遷と溜井灌漑の出現—」『信濃』第35巻4号 信濃史学会
1983年
- ② 同上。

③ 福永正二『尾張の町』1972年

④ 山川均ほか「原田遺跡第3次調査報告」大和郡市教育委員会 1992年

(8) 墨書き土器について

城之越遺跡A地区では、大溝を中心として、少數ながら墨書き土器が出土している。文字が書かれている土器のなかで時代がわかるものは、いずれも奈良時代のものである。墨書きされた文字が判読できるもののうち、353が「建」と一字のみ書かれたと思われる以外は全て破片資料で、444が「西□」、443が「□田」?と書かれた可能性があるが、文字数を含め、不明な部分が多い。

ここでは、墨書き土器のうち、「建」と書かれたものについて若干考えてみたい。

この文字は、大溝Ⅰ層から出土した奈良時代の須恵器杯で、全体の約60%が遺存した土器であるが、底部についてみれば完存であり、一字のみが墨書きされたことがわかる。

「建」ということまで連想されることは人名である。墨書き土器に人名が施される場合、姓名がともに記される場合、姓のみの場合、名のみの場合のいずれもが認められるが、「建」を姓と考えた場合、「建部」ではないかということが想起される。といふのも、城之越遺跡周辺地域で、建部の居住伝承に係わる記事が存在するからである。続日本紀延暦3年(784)11月21日条には、次のような記事がみられる。

「武藏介從五位上建部朝臣人等言。臣等始祖息速別皇子。就伊賀國阿保村居焉。逮於達明日香朝廷。詔皇子四世孫須羅都斗王。由地錫阿保君之姓(中略)長谷旦倉朝廷改賜建部君(中略)望請。返本正名蒙一鷦阿保朝臣之姓。詔許之於是。人上等鷦阿保朝臣。建部君黑麻呂等阿保公。」

これに関連する記事として、平安時代の『新撰姓氏録』右京皇別では次のような記事がみられる。

〔阿保朝臣〕

垂仁天皇皇子息速別命之後也。息速分命幼弱之時。天皇為皇子。築宮室於伊賀國阿保村。以為封邑。子孫因家之焉。允恭天皇御世。以居地名。鷦阿保君姓。廢帝天平宝字八年。改公鷦朝臣姓。統日本紀合。」

続日本紀の記事は、武藏介となっていた建部朝臣人が自らの系譜を述べた後、自ら希望して旧姓である阿保朝臣に復したことを伝えるものであるが、新撰姓氏録の記事も合わせて考えると、息速別皇子が阿保に居住したという伝承と、同皇子を始祖とする建部氏が阿保に居住していたらしいことがうかがえる。阿保は、現名賀郡青山町阿保で、城之越遺跡の所在する上野市比土とは丘陵を挟んで隣接する地区である。人上等は中央官人としての生活を送っていたが、在地には中央に出仕していない建部氏の同族がまだ存在していたことも考えられる。

その場合、阿保と比土との地理的な近接さを考えると、城之越遺跡の「建」の墨書きが、以上のような背景をもとに「建部」に係わるものと考えることも想定可能であろう。しかし、「建」を姓と考えずには名としての「たける」を示すものとみることも可能であり^①、そうした場合には上記の建部閑連という想定は成り立たない。

いずれにせよ、一字のみからの推定には限界があり、人名以外とはまた別の背景をもつものかもしれないが、ここでは、「建」から考へつくひとつの可能性をとりあえず提起しておいた。(徳倍裕昌)

〔注〕

① 築宮歴史博物館板村寛之の御教示による。



大溝出土「建」墨書き土器

(9) 「大溝空間」の性格とその意義

はじめに

城之越遺跡のなかで、最も注目を集めた遺構は、貼石や立石をもつ大溝である。実際、古墳時代を通じ、まさに城之越遺跡の根幹部分をしめるといつてもよい。

大溝は、大溝それ自体としても貼石や立石の存在の他、突出部や自ら水源となる井泉の存在、その曲線的な平面形や豊富な出土遺物など複雑な内容を有しているが、それとともに、大溝とはネガポジの関係となる部分、すなわち先の事実報告で「広場」や「方形壇」とした明確な遺構のない部分（「広場」は若干の盛土造成によって整地されているし、おそらく「空間地」であることに遺構としての存在意義があると思われるが）も、大溝上流部の貼石部分と一体のものとして捉えねばならないことはいうまでもない。これらは、合わせて「大溝空間」とでもいいくべき内容をもっている。

大溝からは多量の遺物が出土している（そのなかで「祭祀」関係遺物の比率が多いことは前節でみたとおりである）が、井泉自体からの出土は少なく、広場や方形壇の上面もあり認められていない。

ここでは、大溝とそれに囲まれた上流側の「空間地」部分を「大溝空間」として把握してその構成要素を各々検討し、全体の評価を考えていきたい。

1. 贴石を有する溝

古墳時代において、古墳の表石・周濠を除き、貼石をもつ溝は非常に稀である。通常の遺跡でこういった例が確認できる遺構は、豪族居館の掘があげられるが、これにしてもそのほとんどは素掘りの掘であり、貼石（石垣）を有する例は、群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡・本宿郷土遺跡・奈良県布留遺跡・名柄遺跡・南紀寺遺跡などが上げられるに過ぎず、いずれも5世紀以降のものばかりである。

和歌山市木ノ本釜山遺跡でも古墳時代の貼石をもつ溝があるが、この溝は脇に所在する前方後円墳である車駒之古墳古墳の「外堤を両側に溝」との評価をうけているものであり、古墳の関連施設として捉えられるものである。

また、長野市石川条里遺跡では、屈曲した貼石を

もつという点で城之越遺跡大溝と共通する内容をもつものであるが、報告がなされている長野市教育委員会の調査担当区域では護岸に係わるものと指摘されている。

堀以外の例で溝に貼石をされた例としては、5世紀後半から7世紀にかけての遺跡で、6世紀の石溝が発見された奈良県桜井市臨木遺跡と、6世紀末の居館遺構である奈良県桜井市上之宮遺跡があげられる。

いずれにしても、古墳時代の溝で貼石をもつものは極めて稀であり、その遺跡の性格も、古墳関連施設を除いた場合、豪族居館の掘や居館内の溝などに限られ、その場合の豪族居館も、規模が大規模であったり、皇室関連の特定個人との関係が想定されているものなど当時としてはその地の第一級の有力者に係わるものに限られる。城之越遺跡の場合、貼石の造営時期は4世紀に遡る時期的にも古いものであり、そういう点からも注目されよう。

2. 井泉の歴史的性質

A地区大溝の枝分かれしている3本の溝の源流部には、それぞれ水が湧出する井泉があった。このうちの2つには、折状石組みが敷かれており人間の手が加わったもの（井泉1・2）であり、もう一つは折状石組みこそないものの、底が若干滑鉢状に掘り窪められたものである（井泉3）。そして、こうした遺構は、機能的には溝の水源となる井泉であろうと考えた。大溝の貼石や立石・大溝全体の性格や城之越遺跡での大溝の位置づけを図るうえでも、この井泉の史的性質の解明が一つの鍵をなぎっているものと思われる。そこで、ここではまず、貼石大溝の性格を考えるうえで重要なポイントとなる井泉について考察を加えてみたい。

今回の発掘によって確認した井泉は、大溝の起点となる部分（源流）であり、大溝にとてはそこを溝の水源とする湧水点そのものである。

こうした井泉の重要性や、水の祭儀については、古くから多くの研究者によって考察が加えられてきた。

大場整雄博士は、広く祭祀遺跡の議相を考察する

なかで、その対象として水崇拜の存在することを指摘し、古文献に表れた水崇拜の内容を整理されたが、これについての当時の考古学的調査の制約上、考古学上の分類や意義づけには及んでいない。

これに対し、岡田精司氏は、風土記や日本書紀等の文献から、古代における「井」や「井水」の祭儀の重要性を考察し、神話に基づいてその「失われた祭儀」を復元して新舊をはじめとする宮廷儀礼との連続性を示し、さらにその祭儀には、「地方的祭祀権を掌握する首長層がそれぞれの地域ごとに井泉のほとりで行なっていた、さまざまな“水の呪儀”があり、大王の行なう井水の儀礼はその頂点に立つもの」として、井水の祭祀を、人王から地方の首長層まで支配者によって重層的に行われたものとして統一的に把握した。

また、辰巳和弘氏は、風土記に散見する井泉と係わる地名起源伝承から、池城首長が井水に対する祭祀を行なう風習が各地に存在していたとし、遺跡で表れる「水の祭儀」の諸相を考察して、それが地域首長にとっても、地域支配を進めるうえでの重要な王権儀礼であったことを説く。具体的な事例としても豪族居館で見られる水に係わる祭祀遺構をはじめ、各地の豊富な考古学的事例を通してそこから知りえる「水の祭儀」の復元も積極的に進めている。

氏はさらに、自ら発掘した静岡県天白磐座遺跡の報告のなかで、城之越遺跡を水源を対象とした水源祭祀として位置づけ、さらに天白磐座遺跡も城之越遺跡とは異なる型の水源祭祀とされている。

ここでいう水源祭祀とは、農耕の根源たる水を神聖視するなかでも、特にその水源を対象とした祭祀である、ということができよう。大臼磐座遺跡の場合も、実際に現地に立つと、そこが盆地（＝井伊谷）にとっては水分の地であり、水源と呼ぶべき内容をもったものであることが十分に理解される。そのこと自体は全く妥当性のあるものであるが、天白磐座遺跡の場合、あくまでその盆地への「水分」に対する祭祀であって、城之越遺跡のような湧水そのものではない。辰巳氏が、天白磐座遺跡を「城之越とは異なる型」とされるのは、天白磐座遺跡が磐座であるという遺構や遺物のあり方の違いからであるが、こうした点にも若干のあり方の差異があるようと思われる。

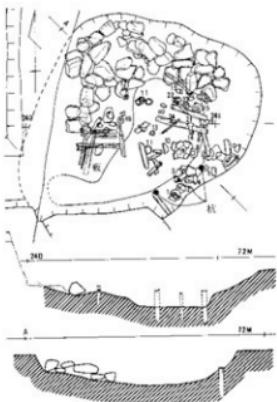
われる。

風土記等の古代の文献に現れた「井水」への神型視は、まさにそこから湧き出てくる水、あるいはその井泉に対して向けられている。水の祭儀といつても、水源や水分、河川そのものなどそれぞれの段階において、その対象や目的の差を認識したうえで、祭祀の実体を具体的に再トレースしていく必要があるのではなかろうか。

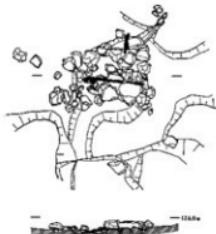
遺跡のなかで、水源そのものが発掘された例はいくらか類例が存在する。例えば、前節でみた「瀧井」がそれに相当するもののひとつである。しかし、水源を対象とした祭祀の跡や、そこで行われた祭祀の痕跡が知れる例は珍しい。ここでは、少ないながらも湧水点で行われた祭祀の内容がある程度わかる例を具体的にみていく。

①瀧向遺跡 奈良県桜井市に所在する、初期ヤマト政權との関わりを想定される人遺跡である。湧水点まで掘り抜かれた多数の土坑が存在し、そこに土器・農具や機織器などの木製品・焼木・植初などが含まれる。これらは「まつり」の後、埋棄されたものとされ、その遺物から復元できる「まつり」（具体的には、植初を脱穀し、炊飯し、盛りつけ、儀礼のち共食し、祭事に際して布を織るといった行為）と、後の時代の新谷祭等と共に通性が指摘され、またその起源は弥生時代に遡るとされる。こうした祭事形態は、「瀧向型祭祀」として呼称されている。

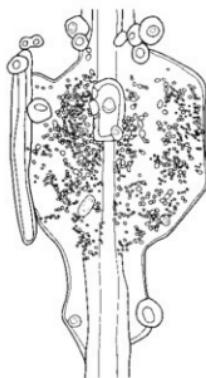
辻土壙1は、こうした土壙のひとつで、自然流水路の脇に存在して径5m×4.3m、深さ90cmと瀧向遺跡のなかでも規模の大きい土壙である。底は砂層に達していて湧水がある。塙壁には石積みが遺存し、前面には杭と板材の存在がみられた。土壙内からは、多量の土器の出土があり、また木製品・自然木も存在した。瀧向1式の遺構とされ、弥生時代末から古墳時代初頭にかけてのものであろう。「瀧向型祭祀」の土坑にあたるとされているが、たんに祭祀に使用した用具を穴に埋棄するのであれば石積みは必要でなく、比較的「瀧向型祭祀」を構成する木製品類も少ないとみられるところから、またちがった目的があったものと考えたい。その場合、石積みが存在する点で城之越遺跡



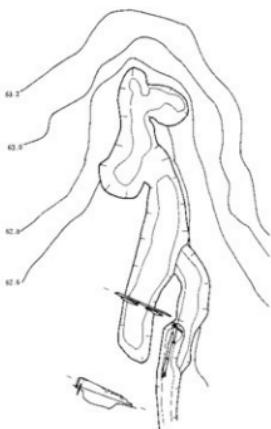
縦向遺跡 汗土塙1 (註⑮文献より転載)



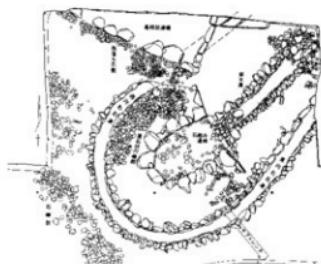
本位田遺跡「石組集水構造」(註⑯文献より転載)



三ツ寺I遺跡 1号石敷道橋
(註⑰文献より転載)



三空間ノ谷遺跡「谷頭」(註⑲文献を一部改変)



上之宮遺跡「圓池構造」(註⑳文献より転載)

の井泉と共に通している。

- ②本位田遺跡⁹ 兵庫県佐用町に所在する主に弥生時代後期から古墳時代の遺跡である。ここからは、径1.6m×1.8mを測る井戸状の石組集水遺構があり（石組みは2段程度遺存）、それを源流とする人工溝が長さ約22mにわたって検出された。この溝は、「人工溝であるにもかかわらず、規格性をもたず、自然地形に制約をうけて蛇行していく」で、「常時一定程度の水量を保てるようにプール状につくられて」いた。溝底に密着するかたちで布留式土器の出土があり、古墳時代前期には使用されていたようである。このほか、二次堆積中からの出土であるが、13個体の手づくね土器が出土しており、うち1個の剛部には穿孔がある。これらは、溝への祭祀との関連で考えられている。
- ③三室間ノ谷遺跡¹⁰ 群馬県東村に所在する遺跡である。台地上部に耕作用の水を確保するために掘られた井泉があり、そこから用水となる溝が伸びている。井泉の出口付近には、城之越遺跡同様、杭と縦板による堰が設けられ、一定量の水がそこに溜められるようにされていた。井泉からは高杯が出土し、また用水からは6世紀代の土器とともに木製のキヌガサや瓢箪・桃種などが発見されており、井泉あるいはそこから続く溝（用水）に対しての祭祀行為の存在が窺える。井泉や溝に貼石されているという状況はなく、溝の平面プランも直線的なもので城之越遺跡と比べると簡単なものであるが、埴輪としても使用されるキヌガサや、瓢箪の出土は、祭祀の存在を充分に物語っている。

以上のうち、纏向遺跡は、湧水に係わるものではあるが、水源（この場合、そこから取水される溝一導水路が存在することが前提となる）となったものではなく、辻土壤1もむしろ「井戸」的なものとして存在すると思われるが、湧水での祭祀ということでは共通するであろう。

こうした直接湧水もしくは湧水となる井に対する祭祀とは別に、流水を通した石敷遺構が群馬県三ツ寺1遺跡（5世紀後半）・奈良県上宮遺跡（6世紀末）¹¹で発見されている。三ツ寺1遺跡の石敷遺構からは、祭祀遺物とされる滑石製模造品の出土があつ

て、この遺構が祭祀に係わることであることを窺わせている。城之越遺跡より時代の新しい三ツ寺1遺跡と上之宮遺跡は居館遺構であり、居館内にこうした祭祀を取り込んでくる時期との問題とも係わって注目されるものである。

上記の二例、つまり直接湧水もしくは湧水の出る井に対して行われる祭祀（仮に城之越型としよう）と、石敷遺構に導水して行われる祭祀（仮に三ツ寺型としよう）は、ともに水に対する共通した意識が働いていたことは想像に難くないが、現状の資料でみるとかぎりそれらは深い関係があるものの比較対象する次元が異なるものと理解される。即ち、城之越型ではその水なり井を直接対象としている祭祀（ここにいわゆる「祭祀遺物」を投げ込んだりするという意味では当然なく、それを祭祀対象として神聖化するということ）であるのに対し、三ツ寺型では石敷施設自体が祭祀対象の存在としてあるのではなく、辰巳氏も指摘しているようにそれはあくまで禊や祓い等の儀式を執行する場として存在しているのである。そこで、城之越型の祭祀形態を、水が湧き出てくるその場所を対象とした祭祀という意味で、「湧水点祭祀」と呼称しよう。これは、辰巳氏のいう水源祭祀のなかでも特に湧水自体を対象とした祭祀であり、天白磐座遺跡のようないわば「水分祭祀」とはその背後に共通する聖水理念はともかく、考古学的には別個のものと捉えられよう（逆に、三ツ寺型とした石敷遺構での祭祀についても、その水源を井水等の湧水に求めているのが確認できれば城之越型に含められようが、遺跡としての性格は異なる）。そして、城之越遺跡の発掘は、地方の開発と併せて、風土記等の文献から指摘されてきた地方での井泉と地名起源に係わる井水への型水信仰を、考古学的にひとつの方針として示したものといえるのではないかろうか。

ところで今、湧水そのものや湧水の出る井泉に対して行われた祭祀をすべてひっくり返して湧水点祭祀と呼称したが、当然湧水点祭祀にも、祭祀行為为主体者の社会的地位などに応じて重層なものであることが予想される。このことは、宮庭で執行された井水の祭儀と地方の主に開発に伴って執行されたと思われる井泉の祭儀という目的の差異はあるものの、

文献史の立場から、井水の祭儀の執行者を天王から地域首長まで重層構造でとらえた岡田精司氏の所見⁸に対応できよう。これを遺構のうえからみた場合、

1. 自然の井泉を利用する
 2. 石敷はないが人工の井泉を造営する
 3. 人工的に石敷井泉による祭祀場を造営する
- というような段階が想定される。もちろん、祭祀対象となるものが水そのものや井であることから、どれが高次元かといった比較の議論にはならないが、少なくとも社会的地位の高い人の行う場合は1~3のどの場合の祭祀も選択可能であるのに対して、より下位の集団の祭祀においては少なくとも城之越遺跡のような独立した人工的な祭祀場を造営するというようなことはなかったのであろう。風土記の地名説話等に出てくる伝承での登場人物の多くが王・首長層クラスの説話として語られていことも、この祭祀形態の実修者がかなり社会的身分の高いクラスであったであろうことを窺わせている。

さらに、城之越遺跡の遺構を考えるうえで、豪族居館の例はあるが、上之宮遺跡の遺構には興味深いものがある。上之宮遺跡では、石敷遺構への水は石組み溝を通していくが、その源流部には方形の石組み遺構がある。報告者は、この遺構への給水は別の給水施設（木樋）の存在を考えておられるが、城之越遺跡の井泉のようにこれ自体から水が湧き出していたことも考えられ、その如何を一応は見て考えてみても城之越遺跡と上之宮遺跡とは石組み遺構から石組み（貼石）溝、さらに素掘り溝へと続く構造上の共通点が認められる。清水真一氏が指摘されているように、こうした上之宮遺跡での石組み遺構と石組み溝との組合せ（園池遺構とされているもの）は、この後、小笠原宮推定地・鶴庄遺跡（いずれも奈良県明日香村）・宮内遺跡（奈良県吉野町）へ、石を省略する簡略化を図りながら続いていくが、上之宮より後に出する遺跡では、祭祀関係と推定される石敷遺構を伴っていない。三ツ寺⁹遺跡で認められた石敷遺構と上之宮遺跡で認められた石敷遺構が、ともに祭祀を媒体とした同じ性格をもつものということが是認されるならば、このことは、時代とともにこうした遺構で行われる祭祀というものの変質、もしくは別の施設での祭祀の移転ということが想定

されねばならない。現在のところ、城之越遺跡とこれら「園池遺構」とされるものとは石組み施設から石組み（貼石）溝を通り、素掘り溝へ排水するという構造上の共通点と、上之宮まで明確に認められる祭祀の場としての共通性を指摘することができるが、城之越遺跡の曲線を重視した平面プランや立石の存在、「祭祀」の内容では当然のことながら差異も指摘できるわけで、城之越遺跡例のほうがより祭祀性が高いものと捉えられる。これらが一系列のものとして系統的に追えるかどうかは今後の検討課題のひとつであるが、少なくとも、石を使用することによる「神聖さ」の意識というものは時代を越えて共有されているものと思われる。

3. 祭祀遺物の出土と祭祀遺構

よく問題とされるところであるが、「いわゆる祭祀遺跡は、祭祀遺物が存在することによって証明されて」¹⁰ も、「祭祀遺物」の出土それだけをもって、その出土地点を「祭祀遺構」と呼ぶべきか否かはそれぞれの状況による。例えば、伊勢神宮の場合、神宮での祭祀に使用した祭具類はまとめて燃やすか一括して穴を掘って埋められたという。こうした場合には、たとえ祭具類の入った土坑が発見されたとしても、それが祭祀に係わる遺構に違いないが、「そこで祭祀を執行したところ」を祭祀遺構というのであればそれ自体は祭祀遺構とは呼べない。

さらにいえば、遺跡のうえでも、祭祀を目的として營まれた磐座等の「祭祀遺跡」と、一般集落等の「祭祀も行われた遺跡」とでは、祭祀遺物の多寡にかかわらず、その性格は異ったものとみなければならないであろう。

これに対し、文献で表れる「祭祀行為」には、土器を土中に据えたり、あるいは水辺（川辺）に土器やその他のを沈めたり投げ込んだりする、という直接的な祭祀行為の形をとるもののがしばしば見られる。例えば、

①日本書紀神武天皇段では、イツベを造って丹生川の川上へ上り、それを以て天神地神を祭った後、イツベを丹生川へ沈める、という説話がみられ、祭祀行為の最終段階で土器を川へ投げ入れたことを示している。

②日本書紀仁德天皇段では、河神を挙るのに瓠（瓢

筆）を水中へ投げ入れたという説話が2か所でみられる。物（この場合は瓢箪）によって投げ込む行為自体に祭祀性がみられると評価できるかどうかはともかく、広い意味ではこの行為も祭祀と関連するものと考えてもよからう。

③万葉集3243では、「斎事立て御瓶据え奉る祝部がうずの玉かけ見ればともしも」と歌わっているが、ここでは祭祀行為のなかで土器が土中へ埋置されたことが窺える。

というような例などである。もちろん上記の説話の示す内容が具体的な史実に基づくか否かを云々するものではないが、古代人の祭祀觀の一面を示すものであろう。①の場合には、祭祀行為終了後の行為とも取れるが、やはり川へ沈めることにも一定の意味をもっていたものと思われる。②の場合には、祭祀行為の存在は窺えるが、それを祭祀遺構とは呼ばないであろう。③の場合、それが遺跡のうえで表れるとあるいは「祭祀遺構」と呼ぶかもしれない。このように文献の示す内容も複雑である。

「祭祀」遺物の存在から知りえる「祭祀」関係の遺構にも、上記の2例、祭祀終了後その関連用具類をまとめて埋めたり投棄した遺構と、祭祀目的でそこに祭祀遺物が置かれたり投げ込まれた遺構（祭祀の対象となっている）の2者があり、前者の場合、祭祀遺構それ自体は本来清浄に保たれていたものと思われ、遺物の存在を本来的には残さない。先にあげた天白磐座遺跡の場合、磐座前面で発掘された遺物は存続期間の割には少なく、祭祀において使用された遺物はそのたびに脇を流れる神宮寺川へ投棄されたものとして考えられており、出土した遺物は片付けからもれたものとして捉えられている。

翻って城之越遺跡の大溝空間をみた場合、貼石大溝からの出土遺物は多量であったが、方形壇や広場、突出部上面等にあまり遺物の出土はなかった。従って、上流側のこうした部分は本来清浄に保たれていたものと思われ、まさに祭祀を執行する中心的な場であったと考えられる。また、井泉自身の出土遺物の僅少さも、同様の視点で考えられ、本来的に井泉部分も「湧き出す水」の根源地として清浄に保たれていたものと思われる。ここでの祭祀に使用された用具類は、祭祀終了後その脇を静かに流れる大溝

（おそらくその中心は階段状施設から下流部を中心とする）に投げ込まれたものと思われる。

4. 「大溝空間」全体の評価

前節までは、貼石をもつ溝の評価を行った後、井泉のもの史的意義、さらにこうしたものへ対しての祭祀を湧水点祭祀とでも呼ぶべきものであること、これが風上記等の文献に散見される井手への聖水信仰を具現化した非常に神聖な施設であろうこと、そしてそれがおそらく地域の開発と密接に結びついているであろうことを述べた。そして、遺物の出土状況から大溝空間のなかでも、広場や方形壇、突出部などは祭祀を執行していた場ではないかと考えた。最後に、こうした大溝空間全体での評価を考えたい。

先にも触れたように、城之越遺跡の大溝空間の特徴性は、井泉だけに終わらず、そこから素掘り溝に至るまでの貼石溝部分に独自性がある。すなわち、曲線的な貼石の流路をもち、突出部や磐座を思わせる立石が存在する点である。

城之越遺跡の場合、大溝の上流側の貼石をもつ部分と、下流側の貼石をもたない素掘りのままの部分とは明確に区別されており、井泉がある上流側は石を貼ることによってより「神聖な場」ということが意識されていたものと思われる。おそらく、貼石を施すという行為に、その場を聖域として区画する意団が働いていたものであろう。周辺部の遺構の状況とも考え合わせると、まさに「独立した祭祀場」である。本書V章の金原氏による大溝分析では、大溝のV～皿層階は少量の水が静浄に流れていると推定されている。出土遺物をもとに想像を逞しくすれば、井泉の水で祓や祓いを行った後、広場や方形壇において「祭祀」を執行し、井泉1では水神に対しての瓢箪を投げ入れ、井泉2では案のうえに神柵を掛け、階段状施設周辺と大溝となった下流部の素掘り溝部分では武器形を投げ入れ、溝の岸辺には土器類を配置する・・・といった様々な行為の存在が蘇る。これらも、貼石や立石の造営とともに、基本的には湧水の根源たる井泉、あるいは湧水自体に行われた湧水点祭祀をより儀礼化するために行われたものと考えることができよう。

大溝からの出土遺物をみても、小型丸底壺や高杯の多さは当該時期の土器組成上の特徴ということも

可能であるが、体部穿孔をもつ小型丸底壺や小形壺、朱塗り高杯の存在や、小型丸底壺や高杯でも火を受けた痕跡が一部に認められること、多量の桃核や瓢箪（これは1個）の出土などは、祭祀の存在を十分に想定させる。その場合、Ⅲ層は周期的に初期須恵器が入ってもよさそうな頃であるが、出土土器は上器器ばかりであり、須恵器と土器との使用時の区別がなされていた可能性がある。

木製品についても火を受けたものが多い。木製品の組成自体にも、農具の欠落とは逆に武器形等が目立っており、一般集落とはやや違ったあり方を示す。

このように遺物のうえからも、使用形態を示しているか複数形態を示しているかはともかく、祭祀で使用されたらしいものの存在が認められる。

木製の刀と弓を用いての水源となる用水に対しても祭祀は、すでに三ツ寺1号遺跡等で指摘され、その起源は弥生時代にまで遡らせることが可能である。優秀な鉄弓の存在や、大規模な施設の造営など、城

之越遺跡の祭祀の主体がかなりの有力者であったことを窺わせている。

以上のように、城之越遺跡の貼石大溝の性格は、機能的にみた場合、「祭祀」がまず第一義的なものとして考えることが可能である。その場合、祭祀の場を設定することにおいて、大規模な造形を施していることは注目されよう。

こうした城之越遺跡のような祭祀空間は、古代においては、日本書紀神代段に「斎庭（ゆにわ、いつきのにわ）」という用例があったり、神武天皇段では祭祀の場を「當時（れいじ・まつりのにわ）」と呼んだように、「ニワ」として捉えられたものと共通するものかもしれない。少なくとも、「かつては神事・公事の行われる場所」をニワと呼んだように「祭祀を執行する空間」としての場をニワというのであれば、ニワ本来が当然もつべき意味として城之越遺跡はまさに「ニワ」というに相応しい内容をもつものといえるのではなかろうか。（穂積裕昌）

註

- ① 『季刊考古学第36号「新発見の豪族居館」』越山閣出版 1991年。南紀1号遺跡については、奈良市教育委員会森下浩行氏から御借手を得た。
- ② 坂城信『木ノ本豪山（木ノ本1号）遺跡』和歌山市教育委員会・同志社大学考古学研究室 1989年
- ③ (財)長野県埋蔵文化財センターと長野市教育委員会による調査があるが、全体的な実体解明には至っていない。このうち、長野市による調査部分では、屈曲した石塀み縁構が検出されており、千曲川の氾濫原に対する築堤的な施設の可能性を考えられている。
- ④ 熊島哲也『竹田森里遺跡(6)』長野市教育委員会 1992年
- ⑤ 清水真・『筑城・鎌倉の時代』一大和の古代邸宅一展 桜井市文化財協会 1991年
- ⑥ 清水真・『奈良県桜井市 阿那近遺跡調査』桜井市教育委員会 1980年
- ⑦ 大塚修雄『木室信仰の考古学的考察』『祭祀遺跡－神道考古学の基礎的研究』1970年所収
- ⑧ 岡山耕司『大王と升木の祭儀』『講座 日本の古代信仰』3 1980年
- ⑨ 長谷川和弘『高殿の古代学』1990年
- ⑩ 長谷川和弘ほか『天白舞弊遺跡』引佐町教育委員会 1992年
- ⑪ 長谷川和弘氏の御教示による。

- ⑫ 石野博信・関川尚功編『跡向』桜井市教育委員会 1976年
- ⑬ 石野博信『古墳文化出現期の研究』1985年
- ⑭ 井高徳男『木本山遺跡』『中臣坂西自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告(化粧編)』長野県教育委員会 1976年
- ⑮ 大木神一郎・二宮則子『谷遺跡の調査』『上源名・衣神谷遺跡三宗間ノ谷遺跡 一般国道17号(上武道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財緊急調査報告』(著者: 郡馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1991年
- ⑯ 下城正徳『三ツ寺1号遺跡』郡馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社 1988年
- ⑰ 前掲註③
- ⑱ 前掲註⑧
- ⑲ 前掲註②
- ⑳ 前掲註⑤
- ㉑ 前掲註④
- ㉒ 石野博信『祭祀と巫權』『古墳時代史』1990年
- ㉓ 藤部明生『神宮神主－考古学－』上田正昭編『伊勢の大神』1988年
- ㉔ 前掲註⑨
- ㉕ 下城正徳『第X章まとめ』前掲註㉔文献所収
- ㉖ 松村明嗣『大辞林』三省堂 1988年

VII 総括

今回の城之越遺跡の発掘では、多くの新知見・成果を得るとともに、今後への多くの問題点も提起した。先に遺構・遺物についての概要やそれに伴う若干の考察を行ったので、ここでは、最も注目される古墳時代を中心とした城之越遺跡の調査成果をまとめるとともに、学術上の課題として今後に残された問題点を整理し、総括とする。

(1) 調査成果のまとめ

①. 祭祀の場としての「大溝空間」

今回の調査成果でまず注目されるものは、古墳時代前期の貼石・立石をもつ大溝とそれに伴う施設、およびその出土遺物である。これは、貼石をもつ大溝と、それに開まれた部分をもって「大溝空間」として位置づけることが可能で、その機能は祭祀を執行する場であると考えた。貼石が施された当初は、周辺部に類似な造構は認められない。したがって、豪族居館に取り込まれたものでもなく、区画施設も存在しないことから、まさに『独立した祭祀場』として造営されたものと思われる。そこで行われた祭祀はおそらく井泉から湧き出る水（あるいは水が湧き出てくるということ自体）を神聖視したものであろうと思われ、それを執行した主体は当地の有力者、おそらく首長クラスであろう。自然そのものを利用することでなく、貼石や立石などとともに大規模な造形を作りこののような祭祀場が発見された意義は非常に大きいものと思われる。

②. 大溝を囲む掘立柱建物群

大溝が次第に埋没していく過程で、大溝を取り囲むかたちで倉庫を中心とした小規模な掘立柱建物群が建てられる。これは、6世紀を中心とする時期の所産と思われるが、一部さらに遅るものも存在している可能性もある。祭祀の存在は不明ながらこの時期はまだ大溝は存在しており、大溝の造営主体と掘立柱建物群の建築主体が全く別個であったとは考え難く、そのあいだには造営集団の系譜的連続性を認めてよからう。

これまで、当該地域において、古墳時代に遡る掘立柱建物の報告例はないが、これは文化史的に近畿

地方周辺部での掘立柱建物普及の一様相を示すものとして理解されてきた。しかし、それはあくまで一般層におけるものであり、全国的に古墳時代の掘立柱建物の検出例が増える中で全く皆無という状況は近畿他府県と対照と合わないものであった。なかには、古墳時代の掘立柱建物が発掘されているにもかかわらず、そうした視点でみていないために新しい時期の所産として報告されている例もあるかもしれない。このようななか、城之越遺跡に古墳時代の掘立柱建物が存在することは、掘立柱建物の一般化が畿内地域よりも遅れる当該地域における城之越遺跡の先進性を示すとともに、ひいてはその導入を押し進めた主体が地域のなかの上位クラスであったことを窺わせている。

③. B地区大形四面庇掘立柱建物の発見

B地点で発掘された古墳時代の大形掘立柱建物2棟も注目されるものである。これは、出土遺物から5世紀の所産と考えられるもので、四面庇を持つものとして全国的にも稀な例といえる。規模や格式からは充分に有力者に係わる建物であることに疑いはないが、谷筋の斜面に立地しているため、いわゆる豪族居館としての構成をとらずに存在するものと思われる。そのため、かえってその位置づけには困難を伴うが、「別宅」的な存在であったのであろう。

このように、城之越遺跡は、まず独立した祭祀場としての大溝空間が整備され以後、埋没に従って周辺部に掘立柱建物群が建てらるようになり、B地区には大形の掘立柱建物が建てられる。その性格には変化がみられるが、いずれにせよ城之越遺跡は古墳時代を通して当該地域の有力者に係わる遺跡である。想像を逞しくすれば、城之越遺跡は、木津川上流の4小盆地群の扇の要を占めるような遺跡であるとも考えられ、そこに扱った主体は、近傍の有力な古墳である美旗古墳群や石山古墳等の有力な古墳群に葬られた被葬者とも何らかのかたちで関係するものと思われる。

(2) 今後の課題

今回の調査によって提起される課題は多岐にわたっており、祭祀の具体的な内容や「ニワ」との係わりなど遺跡の検討だけでは解決できない問題も多々存在するが、ここではまず、遺跡自体に課せられた今後に解明していかねばならない若干の課題を列挙することにする。

①. 今回の発掘では、祭祀の場としての大溝空間は居館とは別に独立して存在すると判断されたが、そうした場合、いわゆる豪族居館の所在地が課題として残る。発掘された範囲内で取てその候補を探すとA地区のSB9～11・13～14が挙げられるが、区画施設の有無も明らかでなく、おそらく調査範囲外に存在するとと思われる。独立した祭祀場や仓库群、大形の四面庇建物の存在など、城之越遺跡は広い範囲にわたって当時の相当な有力者が拠っていた遺跡であると思われるが、遠からず居館部分も存在するのであろう。それが解明された時にはじめて遺跡の正当な評価ができ、遺跡を残した集団の具体的な活動の姿が蘇ると思われる。

②. 関連することであるが、全体での建物配置や区画施設の有無、掘立柱建物の詳しい時期の限定も進めていかねばならない内容である。

③. 遺存しているかどうかはともかく、大溝は下流部が当然調査範囲外にも続いていくことは確実であり、その水が流れしていく先がどうなっていたかを知ることも重要である。具体的には、上流部の祭祀空間での祭祀終了後の水は、そのまま排水となって別の小河川や木津川に排出されるのか、あるいは水田耕作のための用水となって取水されていくのか、という問題であり、祭祀のさらに詳しい意味を知るう

えでも重要なものといえよう。

④. 当地は、隣接する古郡地区に古い郡家の存在が推定されているように、飛鳥時代以降も旧伊賀郡の中心地のひとつと思われる。飛鳥時代以降の遺跡の性格もいまひとつ不明な部分が多く、今後の調査・研究に委ねる部分が多い。

このように、遺跡自体に課せられた課題も多大のものがあるが、当然課題はそれだけでない。

城之越遺跡の発掘は、当該地域の当時の歴史を知るうえで非常に重要な成果であるとともに、それを地域の歴史のなかで正しく位置づけていかなければならない。その場合、美旗古墳群など有力な古墳群との関係とともに、当時の開発が、木津川の氾濫原となる盆地中央部からでなく、小河川灌漑によるより安定した存在形態であったと思われる上流部の小盆地群から開始されていたことが理解されねばならない。小河川が及ばない部分には、「溜井」的な施設を利用した灌漑も行われたらしい。城之越遺跡でみられる祭祀を正しく理解するためにも、開発と水の係わりを考えることが必要となろう。

そうした地域のなかでの位置づけとともに、今後は、当時の祭祀のあり方といった問題に対しても、城之越遺跡の遺構・遺物が提起できる内容があるものと思われる。本報告書が、今後こうした研究に少しでも寄与できることを念じ、総括したい。

(徳積裕昌)

(註)

① 山田篤「7世紀初頭における集落構成の変質」『考古学研究』第28巻第3号 考古学研究会 1981年

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴		動土	色調	残存度	備考		
					(縦部(杯部))	(底部(脚部))						
1	188-2	漆牛膝蓋	大溝 F-19 V面	11径12.1	口縁ヨコナデ後凹線 底部、板ナギ、板ヨコナデ	-	素	暗黄灰	小片			
2	182-3	*	*	*	-	-	ハケメ後擦挫波状文	やや青 -1mmの石英・長石	にぶい度 +			
3	182-4	*	*	F-9	-	-	*	*	墨褐	+		
4	170-2	*	D-7	底径 5.0	-	外、板ナギ 内、ていねいなナギ	-2mmの石英・長石	灰黄褐	底部1/10			
5	179-3	*	*	*	底径 6.0	-	外、板ナギ 内、ヨコナデ・板ナギ	-0.5mmの石英・長石	青褐	脚部3/5		
6	182-1	*	D-3	底	11径11.0	口縁ヨコナデ 裏部、ナギタケ・ヨコハカ	-	-	にぶい度	11径1/10		
7	182-5	漆脚筈	*	*	-	-	-	-	淡青灰色	先端部		
8	68-3	土器蓋	*	D-1 11V部 最高 6.8	口径 8.6 内側 ヨコナデ	内外、オサエ・ナギ	やや青 -1mmの石英・長石	黄褐	9/10			
9	99-2	*	*	D-4	11径 9.6	外 ヨコナデ	外 ナギ 内、板ナギ後ヨコナデ	*	*	9/10		
10	178-2	*	D-2	口径 9.8 最高 9.6	口径 9.8 内側 ヨコナデ	外 ナギ後ハケメ 内 ケズリ	やや粗 -2mmの石英・雲母	+	2/5			
11	111-2	*	D-1	11径10.2	外 ヨコナデ	外 ケズリ後ミガキ 内 ナギ	-0.5mmの赤色小粒	橙	1/5			
12	99-3	*	D-2	口径 9.5 最高 7.9	外 ヨコナデ	外 ナギ 内、板ナギ後ヨコナデ	やや青 -1mmの石英・長石	暗黄灰	4/5			
13	99-1	*	D-6	11径 7.6 最高 8.5	内側 ナギ	外 ナギ後ヨコナデ 内、板ナギ・ナギ	やや青 -1mmの石英・長石	黄褐	4/5			
14	111-1	*	D-3	口径 8.3 最高 8.7	内側 壁状工具、ヨコナデ	外 ナギ 内、板ナギ・ナギ	-0.5mmの長石	暗黄灰	2/5			
15	72-3	*	*	*	11径 8.7	内側 ヨコナデ	外 ハケメ 内 ケズリ	やや青 -2mmの石英・長石	青褐	完形		
16	119-4	*	D-1	11径 7.5 最高 7.9	外 ヨコナデ	外 ナギ後ヨコナデ	やや粗 -1.5mmの長石、白青	口縁の下大穴 を全く				
17	72-2	*	D-2	口径 8.6 最高10.9	外 ヨコナデ 内 オサエ後ナギ	ヨコナラミガキ 外、板ナギ	-2mmの石英・長石	灰黄褐	9/10			
18	111-3	*	*	*	11径 8.8	内 オサエ後ナギ	外 ナギ、ケズリ 内 ナギ	やや青 -1.5mmの石英・石英	にぶい度	焼成後、内側 から出る		
19	72-1	*	*	*	11径 9.4 最高11.6	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ後ヨコナデ	外 ハラケズリ 内 工具によるナギ	やや青 -0.5mmの石英・長石	にぶい度	9/10	黒有り	
20	118-3	*	D-4	11径10.3 最高12.7	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	外 ハラケズリ 内 指オサエ・ナギ	-0.5mmの石英・長石	淡青	1/2			
21	68-2	小型鉢C	*	D-2	11径10.8 最高 8.5	外、内側工具による 内、板ナギ	外 ナギ、ラハズリ 内 ナギ	やや青 -1.5mmの長石、長石	灰黄褐	4/5	焼成後、内側 から出る	
22	99-5	*	*	*	11径12.3 最高 6.3	外、内側工具のナギ 内、板ナギ	外、板ナギ 内、工具によるナギ	やや青 -1mmの石英・長石	黄褐	7/10		
23	106-2	*	D-3	11径16.6	外 ハケメ後ヨコナデ・ミガキ 内 ヨコナデ後ミガキ	-	素					
24	89-1	*	D-2	11径14.9	内、ヨコナデ	内、工具による横方向 ナギ	-1mmの石英・長石	にぶい度	難			
25	98-4	*	*	*	11径16.2	+	外 橫方向ナギ 内 ハケメ	-1mmの石英・長石	青褐	底部1/2 内面に黒斑		
26	100-2	*	*	*	11径16.4	+	外、横方向ナギ、敷ナギ 内、横方向ナギ	-0.5mmの石英・長石	にぶい度	+		
27	98-3	*	D-5	11径17.6	+	外、横方向ナギ、板ケズリ 内、ナギ、板ナギ	-1mmの石英・長石	*	*			
28	96-1	*	*	D-3	11径17.5 最高13.5	体部、板ナギ ケズリ、ヨコナデ	やや青 -1.5mmの長石	にぶい度	7/10	杯底黒斑有		
29	89-2	*	D-2	11径14.7	+	外、工具による横方向ナギ 内 ナギ	-0.5mmの石英・長石	オリーブ黄	杯底7/10			
30	89-3	*	*	*	11径16.6	内側 ナギ	やや青 -1mmの石英	灰オーバー	杯底5/5 内底に黒斑			
31	89-4	*	D-3	11径17.8	内側 ヨコナデ	内、工具による横方向 ナギ	-0.5mmの石英・長石	*	杯底1/2			
32	100-1	*	*	D-2	11径22.0	+	内、敷ナギナギ 底部、ナギ後ナギ	素				
33	95-2	*	*	*	11径15.0	+	体部、板ナギ後ヨコナデ 脚部、板ナギ、ヨコナデ	-0.5mmの石英・長石	暗黄灰	7/10		
34	119-3	*	*	D-7	底径11.8	-	脚柱部、ナギ 脚部基部、ヨコナデ	素 -2mmの石英	*	脚部1/2		
35	100-3	*	*	12-2	底径12.6	-	外 タケナギ、ナギ 内 ケズリ、ナギ	-1mmの石英・長石	にぶい度	+		
36	100-4	*	*	*	底径13.4	-	外、板ナギ 内 ケズリ、板ヨコナデ	-1mmの長石	*	*		
37	118-1	*	*	11-7	底径13.0	-	外 ナギ 内 ケズリ、板ヨコナデ	素 -2mmの石英・長石	黄褐	脚部のみ		
38	118-4	*	*	*	底径12.2	-	外、板ナギ 内 ナギ	-2mmの石英・長石	*	*		
39	104-3	C	*	D-3	11径12.6	内側 ヨコナデ	外 ナギ 内 タケナギ	-2mmの石英・長石	灰	11径1/4		
40	104-4	Aa	*	A-12	11径14.0	外 ヨコナデ 内 ヨコメ後ヨコナデ	外、細めハケメ 内 ハケメケズリ	-2mmの石英・長石	*	+1/4 外側スヌ付着		

第5表 A地区出土遺物観察表(木製造物を除く)

No.	登録番号	器種	出土位置	法葉(cm)	調査・技術的特徴		胎土	色調	残存度	備考				
					円錐部(杯部)									
					内	外								
41	118-2	土器器 蓋Ha	大溝 IV層	D-7 11径16.4	内外 ヨコナガ	外 ハケメ・刺突 内 ケズリ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	にぶい褐色	11縁1/3	外面スス付着				
42	104-2	*	*	D-3 11径12.2	*	外 ナギ・一部剥離 内 ケズリ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	灰褐色	1/2	*				
43	104-1	*	*	D-1 11径13.1	*	外 ハケメ 内 ケズリ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	灰黃褐色	1/2	*				
44	106-4	*	*	D-1 11径11.8	*	外 ハケメ後ヨコハケ 内 オリヰ・ケズリ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	にぶい褐色 体下半部欠						
45	106-1	壺Ca	*	D-6 11径19.2	*	—	粗	浅黃	1/8	二重口縁				
46	108-1	壺A	*	D-1 11径40.0	*	—	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	にぶい青褐色	1/8	側面に貼り付 け台面				
47	120-1	壺Ca	*	D-6 11径19.6	内外 ミガキ	外 ミガキ・一部ケズリ 内 上具よりよるナダ	やや密	にぶい青褐色	底部欠 体部分に黒斑					
48	103-1	壺	*	D-3 體底27.8	—	外 鉢ナギ 内 ケズリ・板ナギ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	にぶい青褐色	体部3/10	鉢が付く				
49	102-1	壺Ab	*	D-2 11径19.2	内外 ヨコナガ	外 タテハ・ヨコハケ 内 オリヰ・ケズリ	石英・長石多量 内 オリヰ・ケズリ	灰褐色	3/10	外面スス付着				
50	101-1	壺Ca	*	D-4 11径18.0	*	外 オリヰ・ナダ	やや密 ~1.0mmの白石	にぶい青褐色	1/2	二重口縁				
51	126-3	小型丸底壺A	*	D-2 11径16.6	*	外 オリヰ・ケズリ 内 ナダ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	灰	1/2	外面スス付着 内底炭化物付着				
52	112-4	*	*	D-6 11径8.8	外 ヨコハケ 内 ヨコハメ	外 ナギ・ケズリ 内 板ナギ	やや粗 ~3.0mmの石英・長石	にぶい青褐色 白灰や灰						
53	135-2	小型丸底壺C	*	D-6 11径8.0	内外 ヨコナガ	外 オリヰ・ケズリ 内 オリヰ・ナダ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	—	7/10					
54	135-1	*	*	D-6 11径8.7	*	外 オリヰ・ナダ	やや密 ~1.5mmの石英・長石	にぶい青褐色	4/5					
55	135-3	小型丸底壺D	*	D-6 11径6.3	内底 オリヰ・ナダ	外 オリヰ・ケズリ 内 ナダ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	湖褐色	11縁2/5次					
56	135-5	壺He	*	D-2 11径8.8	内外 ヨコナガ	外 オリヰ・ナダ 内 ナダ	やや密 ~2.0mmの石英・長石	粗	11縁やや次 底流痕孔					
57	127-1	壺C	*	D-2 11径12.5	*	外 ハケメ 内 オリヰ・ナダ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	灰褐色	11縁1/5	外面スス付着				
58	113-3	壺D	*	D-6 11径10.0	*	—	~2.0mmの石英・長石	粗	11縁や次 底流痕孔					
59	112-6	*	*	D-6 11径15.0	*	—	~2.5mmの長石多い	—	11縁1/4					
60	127-2	壺Ab	*	D-6 11径17.2	外 ハケメ後ヨコナダ 内 ヨコハケ後ヨコナダ	外 ハケメ後ナダ 内 ケズリ	やや粗 ~1.5mmの石英・長石	灰褐色	修部下干次	内底火照焼				
61	130-1	*	*	D-6 11径16.4	内外 ヨコナガ	外 鉢ナギ 内 オリヰ・ナダ	粗 ~2.5mmの石英・長石	にぶい褐色	11縁1/3					
62	112-5	壺D	*	D-6 11径18.4	*	—	~1.0mmの石英・長石	粗	11縁1/3	二重口縁				
63	130-2	壺Ca	*	D-6 11径18.5	内外 ヨコナガ	外 ナギ・板ナギ 内 板ナギ	やや密	にぶい青褐色	11縁1/3					
64	113-5	鉢	*	D-6 底径 4.0	—	内底 ナダ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	—	小片					
65	136-3	高付C	*	D-6 11径17.2	内外 ヨコナガ	底部オリヰ・ナダ	~2.0mmの石英・長石	にぶい青褐色	修部2/5	内底スス付着				
66	125-4	高杯A	*	D-6 11径14.0	*	外底 ナダ 内底 ハケメ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	灰黃褐色	修部1/4					
67	126-1	*	*	D-6 底高11.0	*	脚部工芸ナギ・ヨコナダ	やや密	粗	3/10					
68	135-4	*	*	D-6 11径16.0	*	脚部工芸ナギ・ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	にぶい青褐色	1/6					
69	126-4	*	*	D-6 11径15.4	*	外 工芸ナギ・ナダ 内 ケズリ・ハケメ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	—	1/2	全面火照焼				
70	71-1	小型丸底壺A	*	D-6 N-6 基高 7.0	D-6 11径10.8	外 ハケメ 内 ナギ・板ナギ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	にぶい青褐色	7/10					
71	67-4	*	*	D-3 基高 7.5	11径 9.9	内底 オリヰ・後ヨコナダ ヨコナダ内ナギ	やや密 ~1.0mmの長石	灰黃褐色	11縁1/3次					
72	71-3	*	*	D-6 基高 7.9	11径 9.9	内底 オリヰ・後ヨコナダ ヨコナダ	やや密 ~1.0mmの長石	にぶい青褐色	11縁火照					
73	75-1	*	*	E-3 基高 8.8	11径 9.5	内外 ヨコナガ 内 ナダ	ナギ・板ナギ ~1.0mmの石英・長石	灰黃褐色	11縁2/3次					
74	90-3	小型丸底壺B	*	F-2 脚底径4.7	—	外 ハケメ後ナダ 内 ナダ	やや密 ~0.5mmの長石	にぶい褐色	11縁欠					
75	179-1	小型丸底壺C	*	F-2 11径 8.8	内外 ヨコナガ	外 ハケメ後ナダ 内 ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	にぶい褐色	3/10					
76	90-4	*	*	D-5 脚底径5.5	11径 8.9	外 ハケメ後ナダ 内 ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	にぶい褐色	3/10					
77	78-1	小型丸底壺A	*	D-5 基高 8.1	11径 9.5	外 ケズリ 内 塗装ナダ	やや密 ~2.0mmの石英・長石	粗	4/5					
78	78-3	小型丸底壺B	*	F-2 基高 8.8	11径 8.4	外 ナギ 内 ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	灰褐色	4/5					
79	190-3	壺Be	*	F-2 11径 9.8	*	外 ハケメ・ナダ 内 オリヰ・ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	にぶい褐色	3/10	内底スス付着				
80	72-4	小型丸底壺B	*	D-5 脚底径4.0	—	外 ハケメ後ナダ 内 ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	灰黃褐色	7/10					

第6表 A地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)

No	登録No	器種	出土位置	法量(oz)	調整・技法の特徴		施土	色調	残存度	備考		
					(上部部(軸部))	(側部(輪部))						
81	76-2	土器 小型灰皿D	大溝 N.W.	D-5 内径 7.0 高さ 7.2	内径 7.0 ヨコナデ 内 内 外	外ナデ 内 内 内	やや黒 ~2.0mmの石英・長石 ~1.5mmの石英・長石	にぶい黒碧 灰黄	完形 黒斑あり			
82	71-2	*	*	*	内径 8.8 高さ 6.1	ヨコナデ後ヨコナデ 内 外	外ナデ 内 内	やや黒 ~1.5mmの石英・長石	灰黄	完形		
83	78-4	小型灰皿C	*	D-5 内径 7.4 高さ 6.6	内径 7.4 ヨコナデ 内 内	外ナデ 内 内	やや黒 ~0.5mmの石英・長石	灰黄	ほげ完形			
84	78-2	*	*	*	内径 8.0 高さ 8.1	ヨコナデ 内 内	外ナデ 内 内	やや黒 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黒 7/10	外面スズ付着		
85	67-2	*	*	*	D-3 内径 8.3 高さ 8.3	ヨコナデ 内 内	外ナデ 内 内	やや黒 ~1.0mmの石英・長石	灰黄	ほげ完形		
86	76-3	小型灰皿D	*	D-6 内径 8.3 高さ 8.3	内径 8.3 ヨコナデ 内 内	外ナデ後ナデ 内 内	やや黒 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黒 4/5	外面黒斑			
87	75-4	小型灰皿C	*	D-2 内径 9.6 高さ 9.6	*	外ナデ後ナデ 内 内	やや黒 ~1.0mmの長石	灰黄	1/3	内部化物		
88	67-1	*	*	*	D-3 内径 9.7 高さ 10.9	内 内 内	外ナデ後ナデ 内 内	やや黒 ~1.0mmの石英・長石	灰黄	ほげ完形 黒斑あり		
89	67-3	*	*	*	内径 7.2 高さ 8.0	*	外 内 内	やや黒 ~1.0mmの石英・長石 ナデ	*	*		
90	178-1	*	*	*	内径 7.4 高さ 9.1	-	外 内 内	やや黒 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黒碧	*		
91	90-2	*	*	E-3 輪部径5.5	-	内 内	ナデ ナデ	~2.0mmの石英・長石	灰黄	1回刷欠		
92	76-1	小型灰皿D	*	D-6 内径 7.7 高さ 7.4	内 内 外	外ナデヨコナデ 内 ナデ	やや黒 ~1.0mmの長石	にぶい黒碧	ほげ完形 部材剥離			
93	90-1	小型灰皿C	*	D-3 輪部径5.1	-	外 内	ナデ ナデ	~2.0mmの石英・長石	灰黄	1回刷欠		
94	75-2	小型灰皿D	*	D-2 内径 7.8 高さ 7.0	内 内 内	外ナデ後ヨコナデ 内 内 内	やや黒 ~1.0mmの石英・長石	灰黄	完形			
95	71-1	小型灰皿C	*	D-6 内径 8.7 高さ 9.1	内 内	外ナデ後ヨコナデ 内 ナデ	やや黒 ~2.0mmの石英・長石	灰黄	ほげ完形 造成後変化			
96	75-3	*	*	D-4 輪部径5.7	熱湯ヨコナデ	内 内	ナデ ナデ	~1.0mmの石英・長石	灰黄	1回刷 平底		
97	60-2	小型灰皿D	*	D-2 内径 12.1 高さ 5.3	内 内 内	外 外 内	ナデ ナデ ヨコナデ	やや黒 やや黒 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黒碧 4/5			
98	60-1	*	*	D-6 内径 10.0	*	内 内 内	ナデ ナデ ナデ	~1.0mmの石英・長石	*	1回刷1/3		
99	98-2	*	*	D-5 内径 11.4	*	外 内	ナデ ナデ	青 ~0.5mmの長石	にぶい黒碧	杯底3/10		
100	58-3	高杯A	*	D-6 内径 16.9	*	内 内	内 ナデ	青 ~0.5mmの長石	にぶい黒 杯底9/10			
101	94-2	*	*	D-4 内径 17.8	*	外 内	ナデ ナデ	青 ~1.0mmの長石	にぶい黒碧	1/2		
102	96-1	*	*	*	内径 14.8	-	外 内 内	青 青 ナデヨコナデ	青 青 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黒碧 杯底欠		
103	91-2	*	*	D-5 内径 15.4	内 内 外	内 内 ヨコナデ	ナデ ナデ ナデ	~3.5mmの石英・長石	にぶい黒碧	4/5 1回刷みあり		
104	91-1	*	*	D-6 内径 15.6	*	外 内 内	ナデ ナデ ナデ	~2.0mmの石英・長石	明黄碧	7/10	*	
105	93-3	*	*	-	内径 15.6	*	外 内 内	ナデ ナデ ナデ	~0.5mmの長石	青	1/4	
106	92-2	*	*	D-6 内径 17.0	*	外 内	ナデ後ナデ 内 ナデ	~2.0mmの石英・長石	淡黄	+ 2/5		
107	91-3	*	*	*	内径 22.2	*	外 内 内	ヨコナデ ナデ ナデ	~1.0mmの石英・長石	灰黄	1回刷1/3	
108	92-5	*	*	D-5 内径 16.6	*	内 内	ナデ ナデ	~1.0mmの石英・長石	明黄	杯底7/10		
109	93-5	高杯A	*	D-3 内径 17.0	*	*	*	~1.0mmの石英・長石	にぶい黒碧	3/4		
110	93-6	*	*	*	内径 17.0	*	外 内 内	ナデ後ヨコナデ ナデ ナデ	やや黒 ~3.0mmの石英・長石	*	3/5	
111	92-4	*	*	D-5 内径 19.6	*	外 内 内	ナデ ナデ ナデ	~1.0mmの石英・長石	*	9/10		
112	64-2	*	*	D-4 内径 17.0	*	内 内 内	ナデ ナデ ナデ	~1.0mmの長石	にぶい黒 7/10			
113	91-4	*	*	D-6 内径 17.4	ヨコナデ・内ミガキ	外 内 内	ナデ ナデ ナデ	~1.0mmの石英・ケズリ ~1.5mmの石英・長石	にぶい黒碧 杯底1/2 内面化物			
114	64-1	*	*	D-5 内径 19.0	ヨコナデヨコナデ	外 内 内	ナデ ナデ ナデ	~1.0mmの石英・長石	にぶい黒 7/10			
115	33-7	*	*	D-6 内径 18.2	ヨコナデヨコナデ・ナデ	外 内 内	ナデ ナデ ナデ	~1.0mmの石英・長石	にぶい黒 7/10			
116	94-3	*	*	D-4 内径 18.4	-	内 内 内	ナデ ナデ ナデ	~1.0mmの石英・長石	にぶい黒 7/10			
117	93-4	*	*	D-2 内径 18.6	内 内 ヨコナデ底部	ナデ ナデ ナデ	ナデ ナデ ナデ	~3.0mmの長石	にぶい黒碧 1/4			
118	93-2	*	*	*	内径 18.0	*	外 内 内	ナデ ナデ ナデ	やや黒 ~1.0mmの長石	杯底3/4		
119	190-2	*	*	F-9 内径 18.8	*	電部	ナデ	やや黒 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黒碧 2/5			
120	94-4	*	*	D-5 内径 17.4	*	*	*	~0.2mmの長石	にぶい黒碧 2/5			

第7表 A地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)

No.	登録番号	器種	出土位置	法量(cm)	調整・括法の特徴		胎土	色調	残存度	備考	
					口縁部(外部)	体部(腰部)					
121	92-3	土師器 高輪A	大溝 D-5 B面裏	口径19.0 内外 ヨコナダ	外底 オサエ・ナダ 内底 上品ナダ	やや粗 -15mmの石英・長石	灰褐色	灰褐色	2/5		
122	97-2	*	*	口径18.1 内外 ヨコナダ	基部内側ヨコナダ・内ケズリ 腰部底ヨコナダ	-25mmの石英・長石	*		2/5		
123	97-1	*	*	口径16.8 内外 ヨコナダ	底部ナダ	-25mmの石英・長石	にぶい黄	灰褐色	2/5		
124	98-1	*	*	口径17.4 内外 ナダ	ナダ	-0.5mmの長石	灰褐色	*	2/5		
125	92-1	*	*	口径13.8 内外 ナダ	外オサエ 内ナダ	-20mmの石英・長石	黄褐色部	1/5			
126	58-4	*	*	口径16.4 高輪D	腰部内外 ヨコナダ 腰部ヨコナダ	やや粗 -0.5mmの長石	にぶい黄	7/10			
127	65-1	*	*	口径18.7 内外 ヨコナダ・ナダ	柱脚部ナダ 腰部底ヨコナダ	やや粗 -15mmの石英・長石	褐	2/5			
128	70-2	*	*	D-3 底	底径 2.2 —	外 オサエ 内 ナダ・ナダ	-20mmの石英・長石	にぶい黄	1/2	底端穿孔	
129	93-1	山Bn	*	D-4 口径13.6	口縁部 ハケメ 口縁内 ハケメ後ミガキ	—	やや粗 -10mmの石英・長石	淡赤褐色	1/6	1/3	
130	69-4	*	*	D-5 口径12.0	内外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	-15mmの石英・長石	褐	1/8	外面スス付着	
131	94-1	*	*	口径9.8 基部 9.2	内外 ヨコナダ ヨコナダ・ナダ	外 ナダ・ハラミガキ 内 ナダ・上品ナダ	-10mmの石英・長石	灰褐色	1/6	2次体壁あり	
132	66-2	巻Bb	*	口径10.1 内外 ヨコナダ	内外 工具ナダ	やや粗 -10mmの石英・長石	にぶい黄褐色	3/5	外面スス付着		
133	63-1	*	*	D-4 口径12.6	*	外 ナダ	-20mmの石英	灰黃	体下部 残灰	*	
134	73-3	巻Cc	*	D-3 口径14.0	外 オサエ	後ヨコナダ 内 ヨコナダ	-3.0mmの長石	にぶい黄褐色	1/6		
135	73-1	山Bb	*	D-2 口径11.8	内外 ヨコナダ	外 ヨコナダ 内 オサエ・ナダ	-2.0mmの石英	にぶい黄	1/3	外表面スス付着	
136	69-2	巻Ab	*	D-5 口径16.0	内外 ヨコナダ 腰部 ヨコナダ	外 ナダ 内 オサエ	-1.5mmの石英・長石	灰白	口頭部2/5	内面黒化物付着	
137	60-5	*	*	D-6 口径16.2	内外 ハケメ後ヨコナダ	内 ケズリ	やや粗 -2.0mmの石英・長石	明黄褐色	体灰灰	外表面スス付着	
138	66-1	巻Cb	*	D-5 口径18.5	外 ヨコナダ 内 墓文状ハケメ	—	やや粗 -2.0mmの石英	にぶい黄褐色	1/6	二重口巻	
139	73-4	*	*	D-3 口径16.6	内外 ヨコナダ	—	やや粗 -2.0mmの石英	褐	1/3	二重口巻	
140	60-3	*	*	D-5 口径19.0	*	—	-3.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	1/5	*	
141	73-2	巻A	*	D-2 口径14.0 内 上品底	外 ナダ 内 ナダ	やや粗 -2.0mmの石英	褐	1/4	外表面スス付着		
142	62-1	巻C	*	D-5 口径15.8	内外 ヨコナダ	外 ハケメ 内 オサエ・ナダ	-1.0mmの石英・長石	褐灰	體白灰		
143	68-1	*	*	口径12.8 基部 25.8	外 ヨコナダ	外 ハケメ	-2.0mmの石英・長石	*	7/10		
144	61-1	*	*	D-4 口径15.2	内外 ヨコナダ	外 ハケメ	-2.0mmの石英・長石	灰黃	体部の一部 外表面スス付着		
145	69-3	巻D	*	D-5 口径10.2	*	内 ナダ	-1.5mmの石英・長石	*	1/6		
146	66-3	巻A	*	口径14.0 基部 14.3	内外 ナダ	やや粗 -2.0mmの石英	にぶい黄褐色	1/2	外表面スス付着		
147	60-4	巻B	*	D-6 口径13.5	*	外 ハケメ・腰剥離 内 オサエ・ナダ	-1.0mmの石英	にぶい黄褐色	1/3	*	
148	70-1	*	*	D-5 口径16.2	瓶内 ハケメ	外 ナダ	-2.0mmの石英・長石	*	1/3	*	
149	59-1	巻A	*	口径28.0 内外 ヨコナダ	外 ハケメ後ヨコナダ 内 ケズリ	-2.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	3/10			
150	69-1	巻B	*	D-5 口径11.5	*	内 ケズリ	-1.5mmの石英・長石	黑	口縁1/3	外表面スス付着	
151	73-5	*	*	口径15.6 瓶内 ハケメ	外 オサエ・ナダ 内 タケメ後ヨコナダ 内 ケズリ	やや粗 -2.0mmの石英	にぶい黄褐色	1/2	*		
152	110-2	二重口巻A	*	D-1 直径 4.2	—	腰部 工具による箆取り 瓶内 ナダ	-2.0mmの石英・長石	褐褐色部	4/5		
153	32-4	二重口巻A	*	口径4.6 基部 3.6	内外 オサエ	ナダ	褐	淡黄	1/4	手ヅクネ	
154	33-5	*	*	口径 4.0	*	—	-0.5mmの長石	にぶい褐	底部灰		
155	161-2	小型鉢B	*	D-2 口径11.4	内外 ヨコナダ	外 オサエ・ナダ 内 ナダ	-1.0mmの石英・長石	褐灰	*		
156	49-2	*	*	D-7 口径12.2	内外 ヨコナダ	外 オサエ・ナダ 内 ナダ	-0.5mmの石英	褐	1/5		
157	47-3	小型鉢B	*	D-5 口径10.8	—	腰部 オサエ・ナダ 瓶内 ナダ	-3.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	腰部定形		
158	33-6	(二重口巻A)	*	*	—	内瓶 オサエ・ナダ	やや粗 -2.0mmの石英	灰	2/5	手ヅクネ	
159	191-4	*	*	E-9 口径3.6	—	—	やや褐	黄褐色	口縁部灰		
160	32-1	*	*	D-6 口径 7.4 基部 7.0	内外 ヨコナダ	外 オサエ後ナダ 内 ナダ	-2.0mmの石英あり	西	口縁1/3	内底付着物	

第8表 A地区出土遺物観察表(本製造物を除く)

No.	登録番	種類	出土位置	法量(cm)	調整・注釈の特徴		粘土	色調	残存度	備考	
					口縁部(外部)	体部(脚部)					
161	27-4	土器器 小型丸底盤A	大溝 A-12 Ⅲ段10.0	外 ユピオサニ後ナデ 内 ナダ	外 オサエ-ナダ-カズリ 内 ナダ	やや青 やや青	~2.0mmの石英-長石	にぶい黄緑	3/5		
162	25-1	*	*	D-1 Ⅲ段 8.2	*	外 ナダケズリ 内 ナダ	~2.5mmの石英-長石	灰黄緑	ほぼ完形 焼成後空孔		
163	32-3	*	*	D-2 Ⅲ段 8.1	*	外 ナダサニ後ケズリ 内 ナダ	~2.0mmの石粒	黒褐色	9/10		
164	33-3	小型丸底盤C	*	13.5-1 Ⅰ段 7.6	*	内ナダ	~1.0mmの墨-石	黒	1/2		
165	35-3	小型丸底盤A	*	D-4 Ⅱ段 9.7	*	外 ナダケズリ 内 ナダ	~1.5mmの石英-長石	にぶい黄緑	3/5		
166	41-3	*	*	D-1 Ⅱ段 8.7	*	外 ナダ-ハケメ 内 ナダ	~1.0mmの長石	にぶい青	1/2		
167	177-3	小型丸底盤C	*	F-8 Ⅱ段 6.6	*	外 ナダ 内 ナダ	-	赤茶	1/3	外因スス付着	
168	177-2	*	*	F-9 Ⅱ段 7.3	*	外 ナダ 内 強い指ナダ	~4.0mmの石粒	赤茶	ほぼ完形		
169	37-4	*	*	D-8 Ⅲ段 7.4	*	外 ナダ 内 ナダ	~2.0mmの石英-長石	にぶい黄緑	口縁3/4 欠		
170	37-3	*	*	E-8 Ⅲ段 7.0	*	外 ナダ 内 ナダサニ-ナダ	~2.0mmの石英	黒	口縁一部 欠	黒斑あり	
171	189-2	*	*	F-9 Ⅲ段16.1	*	外 ナダ 内 ナダサニ-ナダ	~1.0mmの石英	淡赤茶	口縁部欠		
172	24-1	*	*	D-6 Ⅳ段 7.2	内 ナダサニ後ナコナ	外 ヨコナタナダケズリ 内 ナダサニ-ナダ	やや青 やや青	にぶい青	ほぼ完形		
173	25-4	*	*	D-5 Ⅳ段 7.6	内 ナダ	外 ヨコナタナダ	~1.5mmの石英-長石	灰	1/2欠		
174	37-5	*	*	D-1 Ⅳ段 8.1	*	外 ナダ 内 ナダ	~2.0mmの長石	褐色/1種	3/5欠		
175	33-2	小型丸底盤A	*	D-7 Ⅳ段14.0	*	外 ナダ 内 ヨコナタ	~3.0mmの石英	にぶい黄緑	1/2欠		
176	180-5	小型丸底盤C	*	E-8 Ⅴ段 8.4	内外 ヨコナタ	外 ヨコナタ 内 ヨコナタ	~1.0mmの石英-長石	淡青	7/10		
177	179-5	*	*	F-9 Ⅴ段 8.6	*	外 ナダ 内 強いナダ	やや青	にぶい黄緑	7/10 半底 中央くぼむ		
178	180-1	*	*	F-9 Ⅴ段 7.8	内外 ヨコナタ後オサエ	外 ヨサエナダ 内 ヨコナタ	~0.5mmの石英-長石	黒	9/10		
179	35-2	*	*	D-4 Ⅵ段 8.8	内外 ヨコナタ	外 ナダケズリ 内 オサエ-ナダ	~2.5mmの石英-長石	黒	4/5		
180	24-2	*	*	E-6 Ⅵ段 9.2	内 ナダサニ後ナダ	外 オサエケズリ 内 ナダ	~1.0mmの石英-長石	黒	ほぼ完形		
181	27-2	*	*	A-11 腰部断5.3	内 ヨコナタ	外 ナダサニ-ナダ 内 強い指ナダ	~1.0mmの石英-長石	にぶい黄緑	口縁欠		
182	32-2	*	*	D-4 腰部断5.9	-	外 ナダ-板ナダ 内 ナダ	~2.0mmの石粒	にぶい青	口縁部欠 内面化粧不着		
183	189-3	*	*	F-8 Ⅶ段 9.3	内 ヨコナタ	-	粗面	茶褐	口縁1/4 口縁欠		
184	187-3	*	*	*	腰部断5.5	-	外 ナダ 内 ナダ-板ナダ	青	暗黄赤	1/2欠	
185	27-1	壺Be	*	A-11 Ⅶ段10.4	内外 ヨコナタ	外 ナダ-ハケメ 内 ケズリ	~2.0mmの石英-長石	明赤褐	1/2		
186	187-2	小型丸底盤C	*	F-9 Ⅷ段 8.5	外 オサエ-ナダ	外 オサエ-ナダ 内 ナダ	やや青	暗黄赤	ほぼ完形		
187	35-4	小型丸底盤C	*	D-1 Ⅷ段 7.5	外 オサエ-ナダ	外 オサエ-ナダ 内 ヨコナタ	~1.5mmの石英-長石	にぶい青	4/5 底部黒斑		
188	25-2	小型丸底盤C	*	F-9 Ⅷ段 7.7	内外 ヨコナタ	外 オサエ 内 ナダ	~1.5mmの石英-長石	黄褐	口縁やや 欠		
189	32-5	*	*	D-2 Ⅸ段 9.0	*	外 ヨコナタ後ナダ	~2.0mmの石粒	にぶい青	口縁1/2欠		
190	35-1	小型丸底盤D	*	D-3 Ⅸ段 8.9	*	外 ヨコナタ 内 ナダ	~1.0mmの長石	黒	1/2		
191	33-1	小型丸底盤C	*	D-7 腰部断7.5	-	外 ナダケズリ 内 強いナダ	~1.0mmの石英-長石	にぶい青	口縁部欠		
192	41-2	*	*	D-3 Ⅹ段 8.2	内 ヨコナタ	-	~2.0mmの石英	黒	輪部のみ残	外因スス付着	
193	48-3	鉢	*	D-1 Ⅹ段 9.4	*	-	~1.0mmの石英	にぶい黄緑	口縁1/4		
194	25-5	小型丸底盤C	*	D-4 Ⅺ段 8.2	*	外 ケズリ 内 ナダ	~3.0mmの石英-長石	*	ほぼ完形		
195	33-4	*	*	F-9 Ⅺ段 8.0	*	外 オサエ-ナダ	~1.0mmの石英-長石	にぶい青	7/10		
196	25-3	*	*	D-3 Ⅺ段 8.8	*	外 オサエ-ナダ 内 ナダ	~2.0mmの石英-長石	灰褐	ほぼ完形 焼成後内側 から空孔		
197	48-2	*	*	D-1 Ⅺ段 9.5	*	外 オサエ-ナダナダ 内 ナダ	~1.0mmの石英-長石	にぶい黄緑	5/6		
198	37-6	*	*	D-8 Ⅻ段 8.1	*	外 オサエ-ナダ 内 ナダ	~1.0mmの石英-長石	にぶい青	1/2		
199	180-3	小型丸底盤B	*	F-9 Ⅻ段 7.6	外 ヨコナタ	外 オサエ-板状 内 ハイメ後ナダ	やや青	灰青	ほぼ完形		
200	28-1	*	*	D-2 Ⅻ段 7.5	内 ヨコナタ	外 オサエ-ナダ 内 ナダ	やや青	褐色	4/5		

第9表 A地区出土遺物観察表(本製造物を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調整・抜法の割合		胎土	色調	残存度	備考
					II標都(杯船)	体部(解剖)				
201	29-4	土蜘蛛 寺Bb	大溝 D-3 口徑9.2 高さ10.9 内 ヨコナデ	外 ハケメ後ヨコナデ 内 ヨコナデ	内鉢 ナデ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	はは定形	焼成後草孔	
202	123-4	壺Bc	。 E-6 。 。 。 。 。 。	口徑11.0 内鉢 ヨコナデ	外 ハケメ+ナデ 内 ナデ	やや粗 ~1.5mmの石英	灰白	体部欠		
203	41-4	。 。 。 。 。 。	D-3 口徑10.6 内鉢 ヨコナデ後ハケメ 高さ12.3 内 ヨコナデ	外 ヨコナデ後ハケメ 内 ナデ	外 ハケメ+ケズリ 内 ナデ	密	にぶい黄褐色	7/10	一部黒斑	
204	123-3	壺Bb	D-2 口徑 9.2 内鉢 ヨコナデ後ナデ	外 ナデ	内 鉢ナデや 外 ハケメ+ケズリ	やや粗 ~1.5mmの石英・長石	にぶい黄褐色	体部欠	外面スズ付着	
205	177-1	台付小壺C	P-9 。 。 。 。 。 。	口徑 9.8 内鉢 ヨコナデ	外 ハケメ+ケズリ 内 ナデ	やや粗 ~3.0mmの石粒	明黄褐色	台部欠	*	
206	29-1	壺Bb	D-3 。 。 。 。 。 。	口徑11.2 。 。 。 。 。 。	内鉢 ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	灰褐色	1/3		
207	51-2	壺	D-8 底径 6.0 。 。 。 。 。 。	外 ナデ 内 指すナデ	外 ナデ 内 指すナデ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	灰黄褐色	脚部のみ		
208	49-3	壺Ab	D-5 口徑14.4 内 ハケメ	外 ハケメ後ナデ 内 ハケメ	—	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	口縁1/5		
209	187-4	。 。 。 。 。 。	P-9 。 。 。 。 。 。	口徑18.0 内鉢 ヨコナデ	—	密	暗黄褐色	体部欠		
210	28-2	高杯A	D-4 。 。 。 。 。 。	口徑12.5 内鉢 ヨコナデ・工具ナデ 高さ10.6	ナデ・ヨコナデ	やや粗 ~3.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	7/10		
211	53-2	。 。 。 。 。 。	D-6 。 。 。 。 。 。	口徑11.8 内鉢 ヨコナデ+ナデ	外 ナデ・ヨコナデ 内 ケズリ・ヨコナデ	やや粗 ~3.0mmの石英・長石	褐	3/5		
212	39-2	。 。 。 。 。 。	D-4 。 。 。 。 。 。	口徑17.8 。 。 。 。 。 。	—	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	淡黒褐色	杯縁3/8		
213	180-4	。 。 。 。 。 。	P-8 。 。 。 。 。 。	口徑17.4 高さ11.9	外 ナデ 内 ケズリ+工具ナデ	やや粗 ~3.0mmの石英・長石	浅黄褐色	7/10		
214	37-2	。 。 。 。 。 。	D-4 。 。 。 。 。 。	口徑16.1 高さ11.5	ハケメ+ヨコナデ	やや粗 やや密	褐	3/4	脚部凸起 成形	
215	38-1	。 。 。 。 。 。	D-7 。 。 。 。 。 。	口徑17.0 。 。 。 。 。 。	—	やや粗 ~0.5mmの長石	にぶい黄褐色	杯縁2/5	外面スズ付着	
216	38-3	。 。 。 。 。 。	A-12 。 。 。 。 。 。	口徑18.2 。 。 。 。 。 。	外 ハケメ	やや粗 ~1.0mmの長石	にぶい黄褐色	杯縁2/5		
217	39-4	。 。 。 。 。 。	D-4 。 。 。 。 。 。	口徑18.6 。 。 。 。 。 。	—	やや粗 ~1.0mmの長石	暗黄褐色	杯縁1/4		
218	39-1	高杯A	E-8 。 。 。 。 。 。	口徑16.4 。 。 。 。 。 。	ナデ	やや粗 ~1.0mmの長石	暗黄褐色	杯縁3/4		
219	44-3	。 。 。 。 。 。	D-1 。 。 。 。 。 。	口徑16.0 ヨコナデ+ナデ	—	やや粗 ~1.0mmの長石	暗褐色	3/4		
220	53-3	。 。 。 。 。 。	D-4 。 。 。 。 。 。	口徑18.5 高さ12.3	脚部ナデ・板ナデ 脚部ヨコナデ	やや粗 ~0.5mmの長石	にぶい黄褐色	1/6		
221	37-1	。 。 。 。 。 。	D-4 。 。 。 。 。 。	口徑16.4 。 。 。 。 。 。	—	やや粗 やや密	褐	杯部1/2		
222	44-4	。 。 。 。 。 。	D-1 。 。 。 。 。 。	口徑18.4 。 。 。 。 。 。	—	やや粗 ~3.0mmの長石	にぶい黄褐色	4/5		
223	26-3	。 。 。 。 。 。	A-11 。 。 。 。 。 。	口徑18.6 武藏5号 板ナデ	—	やや粗 やや密	黑	2/25	内面朱塗付 側面スズ付着	
224	49-1	。 。 。 。 。 。	D-8 。 。 。 。 。 。	口徑18.5 ヨコナデ+ナデ	—	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	4/5		
225	38-2	。 。 。 。 。 。	E-8 。 。 。 。 。 。	口徑18.2 。 。 。 。 。 。	—	やや粗 ~2.5mmの石英・長石	にぶい黄褐色	1/2		
226	40-1	。 。 。 。 。 。	D-4 。 。 。 。 。 。	口徑17.6 内外 ハケメ後ヨコナデ+ナデ	—	やや粗 ~4.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	2/3	内面スズ付着	
227	42-4	。 。 。 。 。 。	D-6 。 。 。 。 。 。	口徑18.5 ヨコナデ+ナデ	—	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	3/10		
228	39-3	。 。 。 。 。 。	D-1 。 。 。 。 。 。	口徑16.4 ハケメ後ヨコナデ+ナデ	—	やや粗 ~3.0mmの石英・長石	暗褐色	1/2		
229	44-2	。 。 。 。 。 。	D-5 。 。 。 。 。 。	口徑18.6 外 ハケメ後ナデ	—	やや粗 ~3.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	1/3		
230	43-4	。 。 。 。 。 。	D-5 。 。 。 。 。 。	口徑17.6 外 ナデ 内 カゼナ	—	やや粗 ~2.5mmの石英・長石	褐	8/10		
231	53-1	高杯D	D-6 。 。 。 。 。 。	口徑17.2 内 ナデ	—	やや粗 ~1.5mmの石英・長石	にぶい黄褐色	4/5		
232	180-2	。 。 。 。 。 。	P-9 。 。 。 。 。 。	口徑15.6 高さ11.5 内 ナデ	脚部外 工具ナデ+ナデ 内 ケズリ+ナデ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	灰白	3/5		
233	38-4	高杯A	D-4 。 。 。 。 。 。	口徑17.2 ヨコナデ+ナデ	脚部外 四隅取 内 ナデ	やや粗 ~0.5mmの長石	褐	2/5		
234	43-1	。 。 。 。 。 。	D-1 。 。 。 。 。 。	口徑10.8 外 ナデ	内 ナデ 内 ナデ+ケズリ	やや粗 ~0.5mmの石英・長石	褐	2/5		
235	44-1	。 。 。 。 。 。	P-9 。 。 。 。 。 。	口徑19.0 外 ナデ	—	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	灰褐色	杯部定形		
236	52-1	。 。 。 。 。 。	D-5 。 。 。 。 。 。	口徑17.8 高さ13.4 内 ナデ	脚部外 オヤシ+板ナデ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	杯部2/2		
237	47-4	。 。 。 。 。 。	D-8 。 。 。 。 。 。	口徑18.8 杯都 ヨコナデ+ナデ	—	やや粗 ~3.5mmの石英・長石	暗黃褐色	杯部9/10		
238	26-1	。 。 。 。 。 。	A-12 。 。 。 。 。 。	口徑16.0 杯都	脚部ナデ+板ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	—	1/2		
239	43-3	。 。 。 。 。 。	D-5 。 。 。 。 。 。	口徑22.0 高さ13.4 内 ナデ	—	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黄褐色	杯部2/5		
240	40-2	。 。 。 。 。 。	D-6 。 。 。 。 。 。	口徑26.4 ヨコナデ+ナデ	—	やや粗 ~1.0mmの石英	灰褐色	1/6		

第10表 A地区出土遺物観察表（本製造物を除く）

No	登録No	器種	出土位置	法量(oz)	調整・技法の特徴		胎土	色調	残存度	備考
					1) 部(手部)	2) 部(脚部)				
241	42-3	土器器 高輪A	大溝・ E-2 基盤	1) 深21.6 内外 ヨコガタナダ・ナダ 2) 深2.9 外 ヨコガタナダ・ナダ 内 ヨコガタナダ・腹ナダ	脚部ナダ・ヨコナダ 内 ハセナダ・ヨコ方向ナダ	やや密 ~1.5mmの石英・長石 やや粗 ~3.0mmの石粒	赤褐色	杯底2/5		
242	184-6	鳥印	*	*	器高13.6 内 ヨコガタナダ・腹ナダ	内 ハセナダ・ヨコ方向ナダ	やや密 ~3.0mmの石粒	にぶい黄青	2/3	ZHAと類似の 形状
243	46-1	脚印A	*	D-5 底径10.8	脚柱ナダ・ズレ 脚部ヨコナダ	無	無	脚底3/5		
244	45-1	*	*	D-1 底径11.8	-	*	無	無	質素半丸	
245	48-1	高杯	*	*	底径12.0	-	ナダ・工具ナダ 内 カマナダ	やや密 ~2.0mmの石英・長石	褐灰	脚部完形 脚部と傾向の 折衷形
246	46-2	高杯A	*	D-5 底径11.4	-	脚 ハセナダ・ナダ 内 ケズリ・具ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黄青	9/10	
247	42-1	*	*	A-11 底径 9.0	-	外 面取・後ナダ 内 ハセナダ・ナダ	やや密 ~0.5mmの長石	*	1/2	
248	45-2	*	*	D-2 底径10.4	-	ナダ・ヨコナダ 内 カマナダ	無	*	9/10	
249	45-3	*	*	D-6 底径 9.6	-	脚柱 ヨコエゼリ 脚部 ヨコナダ	~1.5mmの石英・長石	褐灰	脚底7/10	
250	46-4	*	*	D-4 底径10.4	-	脚柱 ナダ・ズレ 脚部 ヨコナダ・ヨコナダ	~2.5mmの石英・長石	赤褐色	脚部3/5 欠	
251	45-5	*	*	D-6 底径10.0	-	脚柱 ナダ・ズレ 脚部 ヨコナダ	~2.5mmの石英・長石	にぶい黄青	1/2	脚部に黒斑
252	46-3	*	*	D-4 底径10.4	-	*	~1.5mmの石英・長石	にぶい黄青	天下 欠	
253	43-2	*	*	D-8 底径11.4	-	外 オカナダ 内 オカナダ・ナダ 外 ハセナダ	やや密 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黄青	脚底3/10 使成後空孔	
254	179-4	*	*	F-9 底径10.2	-	内 ケズリ	~2.0mmの石英・長石	にぶい橙	3/10	
255	45-4	*	*	D-6 底径12.2	-	脚柱 四面取り・ケズリ 脚部 ヨコナダ	やや密 ~0.5mmの長石	灰黄褐色	脚部1半	
256	47-2	*	*	D-4 底径11.0	-	外 ハセナダ・後ナダ 内 ケズリ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黄青	脚底9/10	
257	47-1	*	*	底径10.0	-	脚柱上げ成型 ナダ・ヨコナダ	無 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黄青	脚底3/4	
258	29-3	壺Ab	*	D-3 口徑16.1	内外 ヨコナダ	-	やや密 ~1.0mmの長石	灰黃	体部欠	
259	50-3	壺Cn	*	D-5 口徑18.8	*	-	やや密	*	1) 深1/10 2) 腹	
260	34-3	*	*	D-6 口徑18.4	*	-	やや粗 ~3.0mmの石英・長石	にぶい闇	口縁のみ残	*
261	51-1	*	*	D-4 口徑20.0	*	-	無	にぶい黄青	口縁1/6	*
262	50-5	*	*	D-2 口徑19.2	*	-	やや粗 ~2.0mmの長石	灰褐色	1/4	外腹ス付着
263	52-2	壺Ab	*	D-4 口徑18.8	*	内外 ナダ	~2.0mmの石英	明褐色	1/8	
264	177-4	壺Ab	*	F-9 口徑15.6	*	外 ハセナダ 内 工具ナダ	無 ~1.0mmの石粒	粘土基	体下半部欠	
265	36-1	*	*	D-6 口徑18.0	*	内外 ナダ・脚部ナダ	やや粗 ~1.0mmの長石	灰黃褐色	底部分	
266	123-2	*	*	D-4 口徑23.8	*	-	やや密 ~2.5mmの石英・長石	灰黃	口縁部のみ	
267	30-2	*	*	D-3 口徑19.6	*	外 ハセナダ 内 指オカナダ・ナダ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	灰黃褐色	1/2	二重口縁
268	190-1	*	*	F-9 口徑27.2	内外 ヨコ方向ナダ	外 ナダ 内 ケズリ	やや粗 ~0.5mmの長石	にぶい黄青	口縁部のみ 外腹ス付着	
269	193-2	輪状土器 裏	*	D-1 器高22.9	内外 ヨコナダ	外 ナダ 内 板ナダ・ナダ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	明褐色	4/5	
270	123-1	土器器 裏C	*	D-2 口徑15.2	*	外 ハセナダ 内 オカナダ・後ナダ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黄青	1) 深1/4 2) 腹	
271	58-2	*	*	D-6 口徑16.4	*	外 ハセナダ 内 脚柱ナダ	やや密 ~1.5mmの石英・長石	にぶい橙	3/10 外腹ス付着	
272	189-1	*	*	F-8 口徑14.3	*	外 ハセナダ 内 上工具・ナダ	無	暗黃褐色	1) 深1/3	
273	176-1	*	*	F-3 口徑15.5	*	外 ハセナダ 内 脚柱ナダ・ケズリ	無 ~1.5mmの石英・長石	暗黃褐色	S字1) 深 脚部欠 外腹ス付着	
274	267-1	*	*	D-4 器高24.5	*	外 ハセナダ 内 ハセナダ・ナダ	やや粗 ~1.0mmの石英・長石	研磨	S字1) 深 一様欠 外腹ス付着	
275	57-1	*	*	D-4 器高30.4	*	外 ナダ 内 脚柱ナダ・ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	灰黃褐色	1/3	
276	56-2	壺Ab	*	D-6 口徑20.6	*	外 ナダ 内 ケズリ	やや密 ~3.0mmの石英・長石	灰黃褐色	口縁1/4 外腹ス付着	
277	54-3	*	*	*	口徑14.6	内外 ナダ	やや密 ~2.0mmの石英・長石	にぶい黄	1/8	
278	132-4	*	*	D-2 口徑11.4	内外 ヨコガタナダ	外 ハセナダ 内 ナダ	やや密 ~1.0mmの石英・長石	にぶい黄	1/8	外腹ス付着
279	50-1	*	*	D-4 口徑10.8	内外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	やや粗 ~2.0mmの石英・長石	灰黃褐色	1/5	
280	128-2	壺Ab	*	*	口徑12.0	内外 ヨコナダ	内 オカナダ・ナダ 外 オカナダ・ナダ	やや密 ~0.5mmの石英・長石	体下半部欠	外腹ス付着

第11表 A地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)

No	登録No	器種	出土位置	法量(cm)	測量・技法の特徴		地 土	色 調	残存度	備 考
					口縁部(折部)	体部(脚部)				
281	30-1	土器部 要Ab	大溝 - Ⅱ層	D-3 高16.0	口径14.4 内 板ナデ	*	外 ハケナ 内 板ナデ	やや粗 ~2.0mmの石英、長石 内 ナデ	黒褐色 ほぼ完形	外面スス付着
282	132-1	要Ab	*	D-4	1口径12.1	*	内外 オサエ・ナデ	~1.5mmの石英、長石 内 ナデ	に bei 黄褐色 体下半部欠	*
283	191-1	*	*	F-9	口径14.4 外 折オサエ後ヨコナデ	*	外 オサエ後工具ナデ 内 工具ナデ(工具ナデ)	やや粗 ~2.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 口縁1/5	
284	34-1	*	*	D-4	1口径13.0	内外 ヨコナデ	内 ナデ	やや粗 ~2.0mmの石英	に bei 黄褐色 体下半部欠	外面スス付着
285	111-4	要Ab	*	E-7	1口径13.1	*	外 ハケナ後ナデ 内 オサエ・ナデ	やや粗 ~2.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 口縁3/4	*
286	50-4	要D	*	D-6	1口径13.6	*	-	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 1/8	
287	27-3	要Ab	*	A-11	1口径12.8	*	外 ヨコナデ 内 板ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 体部欠	外面スス付着
288	54-2	*	*	D-7	1口径13.2	内外 ヨコナデ	外 ハケメ 内 板ナデ	やや粗 ~0.5mmの石英、長石	に bei 黄褐色 11倍2/5	*
289	128-3	*	*	D-2	1口径13.8	*	外 ケズリ 内 板ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 内 ナデ	
290	28-2	*	*	A-11	1口径12.8	*	外 ハケメ 内 板ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	灰黄褐色 1/6	
291	187-1	*	*	F-9	1口径11.0	内外 ハケメ後ヨコナデ	外 ヨコナデ 内 ケズリ	青 内 ナデ	暗黃褐色 4/5	外面スス付着
292	49-4	*	*	D-8	1口径11.0	内外 ヨコナデ	外 ナデ 内 捺オサエ・ナデ	青 ~1.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 口縁1/2	
293	58-1	*	*	D-6	1口径11.2	内外 ヨコナデ	外 ハケメ 内 板ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 1/4	外面スス付着
294	188-1	*	*	F-9	1口径16.2	内外 ヨコナデ	外 ナデ 内 オサエ・板ナデ	青 内 ナデ	暗黃褐色 体下半部欠	*
295	29-2	要Bb	*	D-3	1口径15.6	外 ヨコナデ 内 ハケメ後ヨコナデ	外 ハケメ 内 ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	黄褐色 4/5	*
296	54-4	*	*	D-6	1口径17.8	内外 ヨコナデ	外 板ナデ 内 ナデ	やや粗 ~2.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 1/10	*
297	50-2	*	*	A-12	1口径12.4	*	外 ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	褐灰色 1/3	*
298	34-2	*	*	D-6	1口径22.0	*	外 ハケメ 内 ケズリ	やや粗 ~2.0mmの長石	に bei 黄褐色 1/6	*
299	189-4	*	*	F-8	1口径16.6	*	内 ヨコナデ 内 ナデ	青 ~2.0mmの石英	暗黃褐色 口縁1/4	*
300	54-1	要Bb	*	D-6	1口径18.2	内外 ヨコナデ	外 ナデ 内 ナデ	青 ~1.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 1/5	
301	132-3	*	*	D-4	1口径17.2	外 ヨコナデ 内 ハケメ後ヨコナデ	外 ヨコナデ 内 ケズリ	青 ~1.0mmの石英、長石	淡黃褐色 1/3	
302	115-1	高杯A	*	E-2	1口径18.0	ヨコナデ ヨコナデ	-	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	赤褐色 杯部2/5	
303	107-3	*	*	*	1口径16.6 基高13.0	ヨコナデ・ナデ	外 工具ナデ・ナデ 内 ケズリ・工具ナデ	青 ~2.0mmの石英、長石	暗褐色 1/5	
304	130-1	*	*	*	1口径20.4	*	外 ナデ・ヨコナデ 内 ケズリ・ヨコナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	暗黃褐色 1/5	
305	130-2	*	*	*	-	*	外 ハケメ・ヨコナデ 内 ナデ・ヨコナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	暗褐色 口縁・脚部欠	
306	131-1	*	*	*	1口径19.2	*	外 ナデ・ヨコナデ 内 ナデ・ヨコナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	青 2/5	
307	116-3	*	*	*	1口径18.4 基高12.8	*	外 タキナ・ヨコナデ 内 ケズリ・ヨコナデ	やや粗 ~2.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 3/5	
308	125-2	*	*	*	1口径10.4	-	外 ナデ・ヨコナデ 内 ケズリ・ヨコナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	褐灰色 杯部欠	
309	125-3	*	*	F-2	1口径13.0	-	外 ナデ・ヨコナデ 内 ケズリ・ヨコナデ	青 ~2.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 左上辺	
310	31-1	*	*	E-3	1口径59.4	ヨコナデ・ナデ	ナデ・ヨコナデ 内 ケズリナデ	青 ~1.0mmの石英、長石	青 4/5	外面黒墨あり
311	126-2	土器部 小型丸底C	*	E-2	1口径59.6 基高 6.7	内外 ヨコナデ	外 ナデ・工具ナデ 内 ナデ	青 ~1.0mmの長石	口縁2/5	
312	114-2	*	*	*	口径9.6 基高 8.6	*	内外 ナデ	青 ~1.0mmの石英、長石	青 2/1	
313	116-1	*	*	*	口径9.3 基高 9.3	*	*	~1.0mmの石英 内 ナデ	青 3/4	底部スス付着
314	114-5	*	*	*	口径 8.2 基高 8.3	*	外 折オサエ後ナデ 内 ナデ	やや粗 ~3.0mmの長石	暗黃褐色 口縁2/3・底黒墨	
315	114-4	小型丸底B	*	*	1口径 5.7	*	内外 ナデ	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	暗黃褐色 1/2	
316	161-4	*	*	*	- 内壁 ミガキ	外 ミガキ	やや粗 ~1.0mmの長石	*	盤面わずか 付着	
317	114-2	小型丸底D	*	*	1口径 7.2 基高 5.8	内外 ヨコナデ	外 ナデ・ケズリ 内 折オサエ後ナデ	青 ~0.5mmの長石	はぼ完形 口縁2/3	
318	107-2	*	*	E-3	-	-	*	やや粗 ~1.0mmの石英、長石	に bei 黄褐色 口縁小片	
319	161-2	要D	*	E-2	要部5.2	-	外 ナデ・ケズリ 内 ナデ	やや粗 ~2.0mmの石英、長石	*	1/3
320	131-2	小型丸底C	*	*	口径15.2	内外 ヨコナデ	-	やや粗 ~2.0mmの石英、長石	11倍1/5	二重口縁

第12表 A地区出土遺物観察表(本製造物を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴		粘土	色調	残存度	備考				
					口縁部(杯底)									
					全体(脚部)									
331	109-1	土師器 甕C	大溝 - S21	口徑14.2	*	外:ハケヌ 内:工具ナダ	中や青 内:工具ナダ	にぶい緑	4/5					
322	125-1	更Ab	* - (1.)	口徑12.0	*	外:ナダ	-1.5mmの石英・長石	やや緑	1/3	外側スス付着				
323	107-1	甕Aa	* - *	口徑14.2	*	外:板ナダ 内:ナダ	-1.0mmの長石	青	にぶい黄緑	脚部D半欠				
324	105-1	更Ab	* - *	口徑12.8 器高19.1	*	外:ナダ 内:工具ナダ	-2.0mmの石英・長石	中や青	にぶい青緑					
325	138-1	輪式土器 把手付鉢	* - (1.)	口徑26.2	*	外:ナダ 全体部:沈殿・柔	中や青	黒褐色	3/10					
326	9-2	土師器 小型立甕A	C-3 石底直上	頭部径5.3	-	外:ハケヌ・アズ 内:内凹ヌ・ナダ	-1.0mmの石英・長石	にぶい緑	口縁部欠	施成痕跡				
327	7-1	小型盆B	C-10	口徑12.0	内凹ヨコナダ	外:ミガヌ・ナダ 内:ナダ	-1.0mmの石英	中や青	にぶい黄緑	4/5				
328	190-4	?	F-11 角鉢	-	-	内凹 ハラミガキ	-0.5mmの石英・長石	黒褐色	わずか	麻状の器形				
329	13-4	高杯A 石	C-10 石底	口徑15.2	内凹後ミカキ	-	-2.0mmの石英・長石	中や青						
330	182-2	甕Ab	C-12	口徑17.2	-	舞白ハケヌ	-0.5mmの長石	灰黃褐色	3/4					
331	184-4	ミニチュア甕	E-8 石底	口徑3.4	-	手ブクヌ	-2.0mmの石英	中や青	定形					
332	110-6	?	D-6	-	ヨコナダ	内凹 ナダ	-2.0mmの石英	明黄色	口縁部欠	外側黒斑				
333	134-2	ミニチュア甕C	D-5 石底	底径5.0	-	外:ハケヌ 内:オサエ・ナダ	-1.0mmの石英・長石	灰黃褐色	器部3/4					
334	181-4	?	E-8 器高	11径10.0	内凹ヨコナダ	外:指ナダ 内:ナダ	-1.0mmの長石	にぶい緑	1/5					
335	161-3	小型立甕A	E-2 石底	11径 9.0	内凹 ハケヌ	内凹 ナダ	-1.0mmの石英・長石	中や青	にぶい	底盤欠				
336	116-2	?	E-2 石底	口徑10.0	内凹ヨコナダ	*	-1.0mmの石英・長石	灰褐色	1/6	BaとHbの中間				
337	188-5	?	E-10 直Bc	口徑11.1	*	-	青	暗茶灰	11径1/5					
338	124-2	直Aa	E-3 石底	口徑20.4	*	外:オサエ・ナダ 内:板ナダ	-1.0mmの石英・長石	中や青	9/10	体部外側 スス付着				
339	117-4	?	D-12 E-3 石底	11径17.4	*	-	中や青	にぶい黄緑	口縁部1/4	一重口縁				
340	114-1	?	E-3 石底	11径17.2	*	外:ナダ 内:ケズリ	-1.0mmの石英・長石	中や青	*	4/3				
341	115-4	高杯A	D-4 石底	口徑13.1	内凹ヨコナダ	-	-1.0mmの石英・長石	にぶい青	杯底1/5					
342	129-2	?	E-2 石底	口徑18.0	内凹ナダ 内工具ナダ	-	-1.0mmの石英・長石	中や青	杯部2/5					
343	117-2	高杯B	E-2 石底	-	内凹 ナダ	内凹 ナダ	-2.0mmの長石	にぶい緑	2/5					
344	191-2	高杯	F-8 石底	底径13.0	-	外凹 ナダ 内:板ナダヨコナダ	-0.5mmの石英・長石	にぶい青緑	杯柱軸上					
345	181-3	甕C	D-8 石底	11径13.1	内凹 ヨコナダ	外:タテ内方ナダ 内:ナダ・面オサエ	-0.5mmの石粉	にぶい青緑	1/3					
346	196-1	甕An	F-10 石底	口徑17.3	*	内凹 ナダ	青	明茶白	杯底1/5					
347	194-4	?	F-8 E-3 石底	口徑13.6	*	*	中や青	淡茶	1/2					
348	113-4	?	E-2 石底	11径13.8	*	外:ハケヌ 内:ケズリ	-0.5mmの石英・長石	中や青	2/3					
349	17-5	管玉	E-5 長さ2.1	径 0.5	-	-	青	灰	完形	蝶玉製				
350	23-1	土師器 把手付鉢	C-11 石底	11径30.0	内凹 ハケヌ	外:ハケヌ 内:板ナダ	-1.0mmの長石	中や青	にぶい青緑	底部欠				
351	124-3	?	E-2 石底	口徑12.6	内凹 ヨコナダ	外:ハケヌ後ケズリ 内:工具ナダ	-1.0mmの石英・長石	中や青	4/5					
352	124-1	頸部器 瓶	D-12 石底	-	ロクロナダ	ロクロナダ	-1.0mmの長石	暗灰	3/10					
353	127-1	?	D-6 石底	口徑12.2	*	内:ナダ 底付高台	中や青	灰白	3/5	底部外に 施成跡[建]				
354	110-4	土師器 瓶	E-7 器高3.3	口徑13.2	内凹 ヨコナダ	外:ナダ 内:底ナダ	-1.0mmの石英・長石	中や青	にぶい青緑	外側に墨書				
355	110-7	何れ屋	D-9 石底	-	-	-	-1.0mmの長石	中や青	1/3					
356	204-1	?	F-10	11径22.4	内凹 ヨコナダ	外:ハケヌ 内:工具ナダ・ナダ	-1.0mmの石英・長石	中や青	にぶい青緑	ほぼ完形				
357	134-4	須彌器 瓶	D-12 石底	口徑12.6	ロクロナダ	天上下部非調整	-1.0mmの長石	青	2/5					
358	112-1	?	E-9 石底	11径18.8	*	外:底ロクロケズリ 内:底ナダ	-1.0mmの石英・長石	中や青	青白	1/3				
359	129-3	切削器	D-8 石底	口徑11.6	*	外底 ロクロケズリ 内底 ロクロナダ後ナダ	-1.0mmの長石	青	1/2					
360	186-1	?	E-8 石底	口徑13.0	*	下平ロクロケズリ 軸付高台	-1.0mmの長石	明青灰	1/3					

第13表 A地区出土遺物観察表(本製造物を除く)

No	登録No	品種	出土位置	出土量(cm)	調査・技法の特徴		始土	色調	残存度	備考
					口縁部(外部)	体部(脚部)				
361	186-2	須佐器 杯	大溝 F-9 Ⅲ層 基壇 3.6	口径12.3 高さ 3.6	ロクロナデ	ヘラ切り未調整	黒	赤茶灰	1/3	ロクロ左回転
362	184-5	*	*	口径17.4 高さ 4.1	*	大上部 ロクロケズリ	黒	灰白	3/5	転用段 ロクロ右回転
363	191-3	杯	*	口径17.2 高さ 3.2	*	外底 ナデ	黒	灰	1/5	
364	194-2	土師器 杯	*	口径14.2 高さ 3.2	内側 ロコナデ	外底 抱オサエ	黒	淡赤茶	1/6	
365	115-5	*	*	口径14.0 高さ 2.8	*	外底 ナデ 内底 板ナデ	黒	にぶい褐	3/10	
366	184-1	*	*	口径18.0	*	外底 ケズリ	黒	褐	1/8	内面に刷文
367	184-2	*	*	口径17.4 高さ 2.9	*	外底 ケズリ 内底 ナデ	やや青	*	1/8	*
368	186-3	*	*	口径20.6 高さ 3.0	*	外底 ナデ	黒	淡黄褐	1/9	*
369	186-4	須佐器 杯	F-11 Ⅲ層 基壇 3.4	口径12.5 高さ 3.4	内側 ロコナデ	外底 ヘラ切り未調整	黒	暗青灰	1/2	
370	8-2	*	*	口径8.4	*	内側 ロコナデ	やや青	灰	底部欠	外側に自然輪
	有月器 土師盆	C-6				~1.0mmの石英				
371	8-4	*	B-11 二ニナガア	口径3.8	内側 ナデ	外 ナデ 内 壁オサエ	やや青	にぶい黄褐	1/2	
372	8-6	*	C-11 土師盆A	口径9.6 高さ 7.0	内側 ナキ	内 壁ナデ	やや青	*	3/5	
373	13-3	*	B-11 小型丸底A	口径9.5 高さ 7.5	内側 ロコナデ	内 ケズリ	~1.0mmの長石	淡黄褐	1/3	
374	6-5	*	C-11 小型丸底B	口径8.9 高さ 5.9	内側 ナデ	~1.0mmの石英-長石	にぶい褐	3/5	焼成痕穿孔	
375	5-3	*	C-12 小型丸底B	口径7.8 高さ 8.2	外 ハケメハラケズリ 内 壁オサエ+ナデ	やや青	にぶい褐	9/10		
376	10-3	*	C-11 要Bb	口径9.6 高さ 9.7	外 ハケメ 内 壁ナデ	やや青	~0.5mmの長石	にぶい青褐	1/2	外面上に物の 付着
377	10-4	*	*	口径16.0 内 ミガキ	*	外 ハケメ後日コナデ 内 ミガキ	~2.0mmの石英-長石	灰褐色	1/3	
378	1-3	*	B-9 要Ca	口径18.8	外 ロコナデ	~1.0mmの長石	やや青	*	1141-8	二重口縁
379	2-5	*	B-10 要Ca	口径14.0	*	外 ハケメ 内 ケズリ	~1.0mmの石英-長石	やや青	1/2	*
380	14-1	*	*	口径33.6	外 ナデ後テナミガキ 内 ヨコミガキ	~1.0mmの石英-長石	やや青	にぶい褐	口径1/6	外面上スズ付着
381	13-2	*	B-11 要C	口径16.2	内側 ロコナデ	外 ハケメ	~2.0mmの石英	淡黄褐	1/2	S字口縁 外面上スズ付着
382	3-1	*	B-10 要Ab	口径10.8 高さ 14.6	*	外 ケズリ 内 壁ナデ	~2.0mmの長石	黄褐	体部1/6 體部缺角-穿孔	体部1/6 外面上スズ付着
383	22-2	*	C-11 要Aa	口径12.3	*	内 ケズリ	やや青	灰褐色	底部欠	外面上スズ付着
384	11-1	*	*	口径13.4 高さ 7.0	95 ヨコナデ後板ナデ	内側 板ナデ	~0.5mmの石英-長石	にぶい褐	先形	体部に焦斑
385	8-1	*	*	*	内側 ヨコナデ	内側 ナデ	~1.0mmの石英-長石	灰褐色	口縁小片	
386	6-3	*	C-11 小型丸底A	口径11.8 高さ 7.0	内側 ヨコナデ後ハミガキ	外 ハケメガキ+ケズリ 内ナデ+ハミガキ	黒	明赤褐	2/5	
387	6-4	*	C-4 小型丸底B	口径6.6 高さ 6.8	内側 ヨコナデ	外 ナデ 内 壁ナデ	~2.0mmの石英-長石	にぶい褐	9/10	粘土巻上げ 成形
388	18-3	*	C-6 小型丸底C	口径8.6 高さ 7.5	内 壁ナデ	内 壁オサエ+ナデ 内 壁ナデ	黒	淡黄	9/10	
389	8-3	*	C-11 要Ca	口径12.4	*	内 壁ナデ	~1.5mmの石英-長石	やや青	にぶい褐	口径1/3 二重口縁
390	3-3	*	B-11 要C	口径9.5 高さ 13.3	*	外 ナデ+板ナデ 内ナデ	~1.5mmの長石	やや青	部	上縁取立て 底部スズ付着
391	19-1	*	C-5 要Ba	口径12.6	*	外 壁ナデ 内 壁ナデ	~2.2mmの石英-長石	やや青	底部欠	外面上スズ付着
392	14-3	*	C-11 要C	口径13.8	*	外 ハケメ 内 ケズリ	~1.0mmの石英	黑褐色	1/6	
393	8-5	*	C-3 二ニナガア	口径3.8	-	内 壁ナデ	~1.0mmの長石	にぶい青褐	ほぼ完形	
394	6-2	*	C-11 小型丸底D	口径8.2	内側 ヨコナデ	内 オサエ接ナデ 内 壁ナデ	~3.0mmの石英-長石	にぶい褐	完形	軸土巻上げ 成形
395	10-1	*	C-3 小型丸底E	口径7.1 高さ 8.1	*	外 壁オサエ後ナデ 内 壁ナデ	~2.0mmの石英-長石	灰褐色	*	
396	6-1	*	C-11 小型丸底F	口径7.4 高さ 8.6	*	外 ナデ 内 壁ナデ	~1.0mmの長石	にぶい褐	ほぼ完形	外面上スズ付着
397	9-4	*	C-2 小型丸底G	口径8.6 高さ 6.8	*	外 オサエ+ナデ 内 壁ナデ	~1.0mmの石英-長石	青	にぶい青褐	9/10
398	5-2	*	C-11 小型丸底H	口径7.9 高さ 6.7	ヨコナデ	外 ナデ+ケズリ 内 オサエ+ナデ	~1.0mmの石英-長石	やや青	にぶい褐	2/5
399	18-2	*	C-8 小型丸底I	口径9.4 高さ 9.1	内 壁ナデ	外 オサエ+ナデ 内 オサエ+板ナデ	~2.5mmの石英-長石	灰褐色	底部欠	外面上黒斑
400	5-4	*	C-2 小型丸底J	口径8.4 高さ 9.4	*	外 オサエ+ナデ 内 オサエ+ナデ	~0.5mmの長石	にぶい褐	1141完形	

第14表 A地区出土上遺物観察表(木製道具を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(oz)	調整・接法の特徴		施土	色調	残存度	備考
					内縁部(外部)	体部(脚部)				
401	10-6	土器類 小形鉢C	大溝 加須地区	B-10 内 瓶身ナダ	外 ヨコナダ 内 ハケメ 内 サザ	外 ハケメ 内 オサエ・ナダ 内 フタサエ・ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	灰黄褐色	1/3	
402	15-3	小型丸底碗C	*	C-3 内 外 ヨコナダ	内 ヨコナダ	外 オサエ・ナダ 内 フタサエ・ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 変形		
403	7-3	壺Bb	*	C-5 内 外 ヨコナダ	内 ヨコナダ	外 ハケメ 内 ハケメ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 やや黒	4/5	
404	12-2	小型丸底碗A	*	B-8 内 外 ヨコナダ	内 ヨコナダ	外 ハケメ 内 ハケメ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 やや黒	1/2	
405	12-1	壺Bb	*	B-7 内 外 ヨコナダ	内 ヨコナダ	外 ハケメ 内 オサエ・ナダ 内 オサエ・ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	灰白	1/4	
406	5-1	小型丸底盤D	*	D-9 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ハケメ 内 オサエ・ナダ 内 オサエ・ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	明灰褐色	9/10	
407	9-1	小型丸底碗A	*	C-3 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 はるか先孔	燒成後内から 取出	
408	15-4	小型丸底碗C	*	C-6 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ハケメ 内 フタサエ・ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 灰黒	9/10	底堅厚
409	9-3	小型丸底盤B	*	B-11 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ 内 ハケメ	細 ~2.0mmの石英・長石	黒褐色	3/10	外腹骨付 外腹スリ付 外腹スリ付 外腹化粧付
410	4-1	壺Ha	*	C-2 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ハケメ 内 ナダ	細 ~1.0mmの長石	にぶい濃 やや粗	1/2	
411	7-4	壺Hb	*	C-8 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ハケメ 内 ナダ	細 ~3.0mmの石英・長石	淡黄褐色	ほぼ丸形	
412	4-2	壺Hc	*	C-6 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ 内 ハケメ	細 ~2.0mmの長石	灰褐色	1/3	外腹スリ付
413	4-3	壺Hd	*	C-10 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ハケメ 内 ナダ 内 ハケメ	細 ~2.0mmの石英・長石	淡黄褐色	1/3	*
414	1-5	壺Ca	*	C-14 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 はるか先孔	1/4	二重口縁
415	2-4	壺Cb	*	C-4 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	*	1/3	*
416	1-2	壺Cc	*	C-3 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	灰黃褐色	1/1	*
417	1-4	壺Cd	*	C-19 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 やや粗	1/4	*
418	2-2	壺Ce	*	C-4 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	灰褐色	1/6	*
419	2-1	壺Cf	*	C-5 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	*	1/5	*
420	3-2	壺D	*	H-9 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~2.0mmの長石	にぶい濃 やや粗	1/5	外腹スリ付
421	1-1	壺D	*	C-8 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	褐灰	1/4	
422	16-2	蓋伴A	*	H-15.6 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	灰黃褐色	杯部2/3	
423	14-2	蓋伴B	*	H-9 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~0.5mmの石英・長石	黑褐色	1/3	
424	12-4	蓋伴C	*	D-11 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	黃褐色	1/2	
425	22-1	蓋伴D	*	C-3 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~3.0mmの長石	灰褐色	瓣部欠	
426	15-2	蓋Ab	*	B-8 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 やや粗	3/10	
427	12-3	蓋Bb	*	C-10 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.5mmの石英・長石	灰褐色	1/7	
428	2-3	蓋Bb	*	C-10 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	褐灰	1/1	外腹スリ付
429	18-1	蓋Ab	*	C-2 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	黑褐色	1/2	*
430	13-1	蓋C	*	B-11 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	にぶい濃 はるか先孔	1/8	*
431	16-4	蓋Cb	*	C-2 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	灰褐色	胸部2/3 外腹スリ付	
432	17-1	蓋Ca	*	C-11 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 やや粗	3/10	外腹スリ付
433	7-5	蓋Ca	*	D-7 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~3.0mmの長石	淡褐色	1/3	二重口縁
434	18-1	小型丸底碗C	*	C-11 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	褐灰	4/5	
435	10-2	小型丸底碗C	*	C-11 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~2.0mmの石英・長石	灰褐色	1/2	黒斑あり
436	15-1	高杯A	*	C-10 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 やや粗	杯部3/5	
437	14-4	蓋Cb	*	B-8 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	褐灰	1/1	二重口縁
438	19-2	蓋Cb	*	C-10 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	にぶい濃 はるか先孔	1/1	
439	17-2	壺H	*	C-9 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	淡黄褐色	1/5	外腹に墨痕
440	7-2	壺H	*	C-7 内 外 ヨコナダ	内 外 ヨコナダ	外 ナダ 内 ナダ	細 ~1.0mmの石英・長石	褐灰	3/5	黒斑モルタル

第15表 A地区出土遺物観察表(木製造物を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴		粘 土	色 滅	残存度	備 考
					上部部(外部)	底部部(脚部)				
441	129-1	土器部 付 属	大塚 - D-5 P1	口径13.6	内外 ヨコナデ	底部 ナデ	やや青 -1.0mmの長石	にぶい黒櫻	2/5	
442	134-3	土器部 付 属	*	D-6 P1	口径12.6	クロコナデ	内 ナデ	青 -1.0mmの長石	灰	2/5
443	17-4	*	*	C-7 H-	口径12.8	*	外底 ナデ	青 -0.5mmの長石	*	2/5 外底に墨書き
444	17-3	土器部 付 属	*	*	-	-	-	青 -0.5mmの長石	淡褐色	小片 *
445	115-2	土器	*	D-1 H- P1	内径 2.3	-	外 ナデ	青 -0.5mmの石英-長石	にぶい櫻	ほぼ完形
446	112-3	*	*	D-4 H- P1	内径 2.1	-	外 ナデ	青 -0.5mmの石英-長石	灰黄褐色	4/5
630	195-1	土器部 付C	SH3	口径18.2	外 一部ハケメ後ナデ 内 ハケ	外 工具によるナデ 内 ケズリ	青	淡黃褐色	完形	二重口11様
631	197-1	*	*(底局付付)	口径11.0	内外 ヨコナデ・ナデ	外 一部ハケメ後ナデ 内 ホコナデ・ナデ	青 -1.0mm長石-石英-雲母	にぶい黒櫻	11様1/10	
632	195-2	小型灰陶壺	*	口径 9.4	*	外 体下半部ケズリ 内 ナデ	青	淡黃褐色	完形	
633	188-3	*	*	口径 8.8	*	*	青	明茶褐色	完形	横口付口凹 ケズリに付けた ケズリ付内部 のみ残る
634	178-5	*	*	口径 8.5	*	外 ケズリ後ナデ 内 ナデ	青 -5mm長石-石英-青は	にぶい櫻	4/5	
635	178-4	小型灰陶壺	(上部)	口径 8.0	*	外 *	青	にぶい櫻	2/5 *	
636	192-2	壺	(J面)	底径 3.6	-	内付 ハマミガキ	青 -2.0mm長石-石英-雲母	浅黃褐色 体下部 少量		
637	181-1	壺Ab	*	口径12.7	内外 ヨコナデ・ナデ	外 指さし後工片ナデ 内 工具によるヨコナデ	青 -2.0mm長石多数	にぶい黒櫻	3/5	
638	181-2	壺Bb	*	口径14.0	*	外 ハケメ 内 ケズリ	青 やや粗	にぶい櫻	口14様/3	
639	192-5	*	*	口径13.6	外 ヨコナデ・ナデ 内 ハケメ後ナデ	外 ハケメ 内 工具によるナデ	青 -4mm長石-小石	淡黃褐色	口13様/3 体下部1/4	
640	192-1	*	*	口径14.6	内外 ヨコナデ・ナデ	-	青	口14様/5		
641	193-1	高杯A	*(底局付付)	口径10.4 基高12.1	内外 ヨコナデ	外 ナデ 内 ナデ-被膜模ナデ	青 -5mm長石-石英-雲母	淡黃褐色	ほぼ完形 内面しきり倒	
642	197-3	*	*	口径16.0 基高12.8	ヨビヨビサエ・ナデ ヨビヨビサエ・ナデ 内 ヨコナデ	外 ヨビヨビサエ・ナデ 内 ナデ	青 -2.0mm長石-石英	淡黃褐色	1/2	
643	192-3	*	*	口径19.7	*	*	青	11様1/8 体側11様		
644	192-4	*	*	底径12.2	-	内外 ナデ	青 -3mm長石-石英-雲母	内 浅黃褐色 外 棕褐色		
645	195-3	*	*	底径11.2	-	内 ケズリ・ナデ	青	明茶褐色	脚部のみ	
646	178-3	壺Ba	SH3 (上部)	口径13.0	内外 ヨコナデ・ナデ	外 ナデ 内 ケズリ	青 -3mm長石-石英	内 棕褐色 外 明茶褐色	口13様1/6	
647	199-9	壺内B	*	口径10.2	*	内外 ヨコナデ・ナデ	青 -2.0mm長石-石英-雲母	青白	1/2	
648	122-3	壺Aa	SH25	口径12.0	内外 ナデ後ヨコナデ	外 ナデ後ヨコナデ 内 ナデ	青 -1mm長石-長石	青褐色	3/10	
649	173-4	*	*	口径 6.3	内外 ヨコナデ・ナデ	外 ケズリ 内 ナデ	青 -2.0mm青母	淡黃褐色	完形	
650	173-3	小型灰陶壺	*	口径 6.1	内外 ヨコナデ	内外 ナデ	青 -1.0mm石英-長石	淡黃褐色	頭部1/6	
651	110-1	ミニチュア壺	*	口径 4.1	内外 オサエ・ナデ	内付 オサエ・ナデ	青	青	完形	
652	121-7	壺台	*	-	-	外 ナデ 内 邵注痕	青 長石微粒少	青小片	内面に 筋と状の網目	
653	173-5	高杯A	*	底径 4.0	外 ナデ 内 ヨコナデ	青 -3.0mm長石-石英-雲母	青 -3.0mm長石-石英-雲母	淡黃褐色 杯下部欠損 脚部3所孔		
654	201-9	*	*	SB9-1D P1-1断面	-	内外 ナデ	青 -2.0mm長石-石英-雲母	白樺	小片	
655	201-5	小型灰陶壺	*	口径11.0	内外 ヨコナデ・ナデ	内付 ヨコナデ・ナデ	青 -1.0mm石英-長石	淡褐色	1/5	
656	201-3	高杯A	*	底径 2.2	-	外 3.0mm3孔缺	青 -1.0mm石英-長石	青	1/3	
657	201-8	高杯	SB13 P1	-	内外 ハケメ後ナデ	-	青 -3.0mm長石-石英-雲母	淡黃褐色	1/10	
658	200-12	高杯B	SB25 P1	-	内外 ナデ	-	青 -2.0mm石英-長石	灰白	小片	杯側断面に アクセント
659	198-3	杯	SA16 P1	-	*	-	青 -1.0mm石英-長石	青白	小片	
660	198-4	盛付杯	*	-	-	底部外 指オサエ	青 -1.0mm長石	淡白褐色	小片	高台有
661	198-8	高杯	SB17	底径 2.5	-	外 ナデ 内 ケズリ	青 -1.0mm青母-長石	脚部のみ 残存		
662	183-6	手捏土器	SD24	-	内外 指オサエ・ナデ	内外 指オサエ・ナデ	青 -2.0mm長石-石英	にぶい黒櫻 内付欠損	無無	
663	183-5	*	*	口径 4.6 基高 3.0	*	*	青 -1.0mm長石-雲母	*	*	*

第16表 A地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調整・挂法の特徴		胎土	色調	残存度	備考
					口縁部(外側)	体部(内側)				
664	183-3	土師器 手附ねこ器	SD24	口径4.2 基高4.2	内外 ヨコナダ・ナダ	内外 振オキニ・ナダ	やや赤 ~2.0mm石・石英	にぶい赤橙	ほぼ完形	頭付・横有
665	185-4	土師器 杯身	SD19	高台径9.8	内外 ロクロナダ	底部外 ハラ切り縁ナダ	青 ~1.0mm灰石 硬軸用か	褐色	底部1/3	内面に墨痕
666	185-3	*	*	高台径9.0	*	*	~1.0mm長石	青灰色	底部1/4	
667	185-1	杯身	SE20	口径16.4 基高2.5	内外 ロクロナダ	薄ヨロナダ上端ヨロケズリ 内 ロクロナダ	やや赤 ~2.0mm長石・石英	青灰色	5/5	内面に墨痕 硬軸用か
668	185-2	*	*	*	*	内外 ロクロナダ	青 ~1.0mm長石	灰白色	1/3	
669	183-1	杯身	*	口径13.2 基高3.4	*	底部外 ハラ切り縁ナダ 内 ロクロナダ	~3.0mm長石・石英	*	ほぼ完形	杯部外面に 墨痕
670	183-2	*	*	口径15.2 基高3.8	*	*	青 ~1.0mm長石	暗灰色	1/8	
671	183-4	*	*	口径16.4 基高4.0	*	*	青 ~1.0mm長石	灰白色	1/10	
672	183-7	*	*	高台径10.2	*	*	青 ~1.0mm長石・石英	灰	1/5	
685	185-5	*	SK18	高台径9.6	*	*	青 ~4.0mm長石・雲母	灰白色	底部1/6	底部附近に墨痕
687	土師器 杯or皿	下段腹分離片	-	-	ナダ	*	青	淡黄灰色	底部觸面	底部外面面者
688	202-6	白陶	W-11	口径16.6	横板ヨコナダ	-	青	白色	口縁の一部 袖は体に差まで	
691	205-1	土師器 裏A	SH54	口径13.0 内 ヨコナダ	-	*	青 長石・青母	淡黃灰色	口縁1/4	頭付のみ上
692	152-3	小形鉢A	*	内 頭ヨコナダ	内外 ヨコナダ	青 雲母	青 雲母	青	小片	
693	146-1	鳥柄A	*	口径15.6 基高15.5	内 外 ミガキ、内ケズリ 外 ミガキ 内 ケズリ	外 ミガキ 内 ケズリ ~1.5mm灰心・青母	にぶい青 ~1.5mm灰心・青母	4/5		
694	197-2	壺	*	底部 5.4	外 ヨコナダ	外 ヨコナダ 内 オサエ・ナダ・板ナダ	青 ~1.0mm長石・青母	青 灰黄色	底部1/3	
695	200-1	壺A	SB37	口径14.4 内 ヨコナダ	外 ハケメ後ヨコナダ・ナダ	-	青 ~2.0mm長石・石英	内面赤褐色	1/3	
696	201-5	高杯	*	内外 ナダ	-	-	~2mm長石・長石	暗褐色	1/10	
697	201-10	*	*	口径 9.4	外 ヨコミガキ 内 ヨコミガキ後ナミミガキ	外 ナミミガキ後上部 内 ナミミガキ後ナミミガキ	~1.0mm長石・青母	白褐色	1/3	
698	201-11	頭付 舟形 舟形	*	-	内外 ヨコナダ・ナダ	-	青 長石・微粒	青 灰	小片	
699	200-11	土器B 蓋	SB39	内外 ヨコナダ・ナダ	-	-	~1.0mm長石・長石	淡黄灰色	小片	
700	161-5	壺	口径 7.2	内外 良いナタミガキ	外 ナタミガキ 内 ナタミガキ	青 ~1.0mm石英混	にぶい青色	完形	透孔有	
701	159-2	壺B	SD35	口径 8.2	内外 ヨコナダ・ナダ	内 工具によるナダ 内 ナタミガキ	青 ~3.0mm長石・長石	灰白色	1/2	
702	159-1	高杯A	*	底径 9.4	-	外 工具によるナダ 内 ナダ	~2.5mm長石・石英・青母	にぶい青色	頭部2/3	
703	159-3	青磁 碗	SD58	底径 6.0	内外 ロクロナダ	底部外 高部はケズリ出し 内 ヨコナダ	青 輪モリープ底	素灰白	底部のみ残	頭付4/5に 輪モリープ有り 底部有り
704	110-3	絆付器 碗	(上側)	底径 6.9	内外 ロクロナダ	底部外 ハラ切り後ナダ 内 ヨコナダ	青	青色	底部2/3	底部有り
705	159-4	杯身 包	A-19	口径 8.5	内外 ヨコナダ	底部外 ヨコナダ 内 ヨコナダ	やや青 ~3.0mm長石・長石	青灰色	9/10	底部有り
706	202-5	杯	A-18	口径 13.2-13.6	*	外 細半分ロクロケズリ	~1.0mm長石灰化完形	灰	完形	
707	202-4	杯身 包	D-19	口径11.4	*	ロクロナダ	微粒の長石・青母	青灰色	1/10	
708	203-1	*	A-18	口径10.9 基高3.4	*	底部内ケズリ	~2.0mm長石多い	灰	1/8	
709	110-5	絆付器 碗	E-23	底径 7.0	-	ロクロナダ	やや青	青色	底部のみ残	底部有り 残存率少
710	205-4	平耳 包	B-24	-	-	-	やや青	灰	小片	内面に毛目模
711	146-3	土師器 壺	SH62	口径19.0	内外 ヨコナダ・ナダ	外 ナタミガキ 内 ヨコナダ	やや青 ~3mm石英・青母	淡青	口縁1/3	
712	121-8	小型鉢A	SH65	口径10.3	内外 ナタミガキ	-	青 ~1.0mm長石・青母	淡青色	体部欠損	
713	142-2	*	*	口径16.2 基高8.4	内外 ヨコミガキ	外 底部ケズリ後ヨコミガキ 内 ナダ	やや青 ~0.5mm長石・青母	明赤鉄	ほぼ完形	
714	173-2	小形鉢B	*	口径11.5 基高5.6	*	内外 ヨコミガキ	~2.0mm長石・石英	深褐色	2/5	
715	146-2	高杯C	*	口径12.5	-	外 ナタミガキ後ナダ 内 ケズリハケメ	やや青 ~1.0mm長石・石英	にぶい青色	底部1/3	
716	122-2	小形鉢C	*	口径14.0	内外 ヨコナダ	内 ハケメ後ヨコナダ	やや青 ~2mm長石・長石	暗褐色	1/5	
717	142-3	小形鉢A	SZ67	口径13.0	内外 ヨコミガキ	内 ヨコミガキ	やや青 ~0.5mm長石・青母	明赤鉄	底部欠損	
718	152-1	*	壺Cn	口径21.8	内外 ヨコナダ	外 ナダ 内 オサエ・ナダ	やや青 ~1.5mm長石・青母	淡青	頭付のみ上	完形

第17表 A地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調整・接法の特徴		胎土	色調	残存度	備考	
					右横部(杯部)	左横部(杯部)					
719	152-2	土師器 子壺ねう器	S267	口徑3.7 高さ2.7	内側 オサエ-ナデ	内外 オサエ-ナデ	やや赤 -1.0mm長石-石英-雲母	灰	完形	無頭	
720	173-1	*	*	-	内 廊い-ミガキ	-	粉白 -1.0mm雲母	青灰	小片		
721	173-6	瓦石	*	13.6× 3.8×3.0	-	-	-	浅綠灰	完形		
722	121-2	土師器 壺	SH70	口徑24.2 内 高さ10.7	外 ヨコナデ-ナデ 内 ハケ後ナデ	内外 ハケメ	-2mm長石-石英-雲母 -2mm粉白	浅黃灰	口徑1/5		
723	121-3	*	*	口徑16.0	内ヨコナデ-ナデ	外 ハケハナ 内 ナナメハナ	-1mmヨウ酸鉄石-石英-雲母	浅黃灰	口徑1/4		
724	121-4	土師器 壺	*	-	内外 ロクロナデ	-	青	灰	小片		
725	121-6	土師器 壺	SH73	口徑13.0	外 ヨコナデ-ナデ 内 ハケ後ナデ-ナデ	外 ハケナデ	-1mm長石-雲母 -1mm長石-石英-雲母	灰 にぶい青	鷹斑1/8		
726	121-5	小形壺	SH73	口徑16.4	外 ハケ後ナデ-ナデ-ヨコナデ	内 ハケメ	-2mm長石-雲母 -2mm粉白	にぶい青	口徑1/8		
727	121-1	須志器 舟身	SH77	口径10.7 高さ5.0	内外 ロクロナデ	外 ヨコクロケズリ 内 ロクロナデ	-2mm粉白 -1mm長石	青 やや赤	完形		
728	147-3	土師器 壺	SH78	口径11.8	内外 ヨコナデ-ナデ	外 ハケナデ 内 ヨコハナ	やや青 -1mm長石	にぶい青	口徑1/4		
729	148-5	須志器 舟身	SH80	口径12.1	内側 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	-1mm長石-石英 -1mm長石-雲母	青 やや青	淡黄	1/7	
730	147-7	土師器 舟身	*	口径13.0	内外 ヨコナデ-ナデ	内外 ナデ	-1mm長石-雲母 -1mm長石-青母	明褐	1/10		
731	147-2	高杯	*	口径14.3	内 気泡化により不明	内外 ナデ	-1mm長石-石英 -1mm長石-石英	青 にぶい青	脚部少欠		
732	148-6	*	*	口径14.6	*	-	-2mm長石-石英-雲母	*	桿模1/2		
733	147-1	*	*	口径22.2	杯部内外ヨコナデ-ナデ	-	-	青			
734	147-4	*	*	口径22.0	外 ヨコナデ-ヨココロコロナデ	外 ハケナデ 内 ヨコハナ	-2mm長石-石英-雲母 -1mm長石-石英-雲母	青 やや青	1/6 口縁のみ	桿模直接 突合状になる	
735	122-1	壺Ab	SH83	口径16.5	内外 ヨコナデ-ナデ	内外 ナデ	-1mm長石-雲母 -1mm長石-石英-雲母	淡黃灰	1/3		
736	165-5	小形鉢B	*	口径10.8 高さ5.5	*	外 ハケナデ-ナデ 内 ナデ	やや青 -2.0mm長石-石英	浅黃灰	121完形		
737	166-4	小形鉢C	*	口径9.5	*	内 ナデ	内 良好によるナデ	青 やや青	淡黃灰	2/3	
738	175-1	*	*	口径16.8	外 ヨコミガキ	外 ヨコミガキ後ナタミガキ 内 ヨコミガキ後ナタミガキ 内 オサエ-ナデ	青 -3.0mm長石-長石	青 1.0mm長石	ミガキの原粒 は細い		
739	122-4	高杯A	*	口径10.8	外 ヨココロコロナデ	-	-	青	青褐	1/2	
740	125-2	小型丸底A	*	口径9.5	内 ヨココロコロナデ	-	-1mm長石	青	1/3	*	
741	203-2	高杯A	*	口径15.8	内外 ヨコナデ-ナデ	内部内外 ナデ-オサエ	青白	淡黃灰	脚部のみ欠 脚部少欠		
742	202-8	小型丸底A	*	*	脚部折A	-	内側 ナデ	-1mm長石-長石	青白	脚部9/10	
743	154-1	小型丸底C	*	口径6.6 高さ7.3	内外 ヨコナデ-ナデ	外 ナデ 内 オサエ	-	青 -1mm長石-雲母	青	1/5	
744	149-3	壺Ba	*	口径8.4 高さ11.35	*	外 ナデ-底部ケズリ 内 オサエ-ナデ	-1.5mm長石-雲母	にぶい青	121完形		
745	142-1	壺Cb	*	口径11.7 高さ17.8	*	外 ハメナ 内 オサエ-ナデ-瓶ナデ	-0.5mm長石-雲母	暗赤灰	2/3		
746	154-2	壺TaA	*	口径9.2	内外 ヨコナデ-ナデ	-	青	青	1/5		
747	150-1	壺Ba	*	口径12.2	内側 ヨコナデ-ナデ	外 ヨコナデ後ヨコハナ 内 ハケナズリ	-3.5mm長石-石英-雲母 -1mm長石-雲母	外 明赤褐 内 にぶい青	口縁1/5 脚部上部1/3		
748	143-1	壺Ab	*	口径18.4 高さ18.4	口径工具によるナデ 内側 オサエ-ナデ	内側 工具によるナデ 内側 オサエ-ナデ	-1mm長石-青母 -1mm長石-青母	淡黃灰	1/2		
749	133-1	土焼内	*	口径15.7 高さ23.5	内外 ヨコナデ-ナデ	内 ヨコナデ-ナデ 内 工具によるナデ-オサエ	-2mm長石-石英-雲母 内 オサエ	淡黃	1141/2 脚部元形		
750	149-2	高杯A	*	口径14.5 高さ16.0	ヨコナデ-ナデ	外 ナデ 内 カゼリ	-5.0mm長石-石英-雲母 内 カゼリ、解部はナデ	青 やや青	1141/2元形 脚部2/3		
751	151-3	*	*	底径10.2	-	*	金雲母	にぶい青	2/5		
752	151-4	*	*	口径16.8 高さ26.6	内外 ヨコナデ-ナデ	外 工具によるナデ-ナデ 内 オサエ-ナデ	-1mm長石-青母-青白-小片	にぶい青	2/5		
753	149-1	*	*	口径18.0 高さ18.1	*	*	-4.5mm長石-青白	にぶい青黄 桿模9/10 脚部9/10			
754	151-2	杯	SH85	口径10.3 高さ3.6	*	内外 ヨコナデ-ナデ	-1.0mm長石-青白	青	1/2		
755	144-3	*	*	口径16.0	外 ヨコナデ後ヨコミガキ 内 ヨコミガキ	-0.5mm粉白	*	1141/8			
756	139-1	*	*	口径22.2	*	外 ヨコハナ後一部ナデ	-2mm長石-石英	にぶい青	7/10		
757	144-2	瓶	*	底径10.7	内側 ロクロナデ	内 ヨコハナ	-0.5mm粉白	青	1/3		
758	143-4	壺身	*	口径8.2 高さ2.6	*	外 返照ハラ切り未調整 内 ロクロナデ	-1mm長石	青 やや青	1141完形		

第18表 A地区出土遺物観察表（木製造物は除く）

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(ox)	調整・技法の特徴		胎土	色調	残存度	備考
					上縁部(杯底)	体部(脚部)				
759	143-2	頭部器 杯身	SH86	口径 9.6 器高 3.4	内外 ロクロナデ	外 ロクロケズリ 内 ロクロナデ	やや青 ~2.0mm灰石	青灰	口縁1/6	
760	144-1	*		口径18.2	*	外 タテキヘラカキメ 内 齢痕波文	青 ~1.5mm灰石・石英	青灰	1.0底3/4	
761	137-5	底盤板	*	4.3× 2.0×0.25	—	—	—	墨茶	小片	謹か
762	148-1	頭部器 杯身	SH87	口径14.0 器高 4.2	内外 ロクロナデ	外 底盤ヘラ切り後ナデ 内 ロクロナデ	やや青 ~1.0mm長石	青灰	ほぼ完形	
763	148-3	*	*	器高 4.2	*	*	青 ~2.0mm灰石・石英	青灰	1/2	
764	145-5	*	*	器高 3.4	*	*	青 ~1.0mm長石	灰	2/5	
765	145-2	*	*	底径 9.0	*	*	青 ~1.0mm長石	灰	1/5	
766	148-2	*	*	口径10.8 器高 3.8	*	*	青 ~1.0mm長石	青灰	4/5	
767	202-9	土器器 皿	*	口径18.2 器高 2.4	内外 ヨコナデ・ナデ	風化のため調整不明	青灰 青母粒	淡青白	1/6	
768	145-6	頭部器 杯蓋	SH88	口径15.6 器高 2.6	内外 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	青 ~1.0mm長石・青母	灰	9/10	
769	145-3	杯身	*	口径14.0	内外 ロクロナデ	外 底盤ヘラ切り後ナデ 内 ロクロナデ	青 ~1.0mm長石・青母	灰白	7/10	
770	145-4	*	*	口径13.6 器高 3.4	*	*	青 ~1.0mm長石	灰白	4/5	
771	145-1	*	*	器高 3.0	*	*	青 ~1.0mm長石・石英	灰白	完形	
772	145-3	*	*	底径10.0	*	*	青 ~1.0mm長石・石英・青母	明暎灰	底部1/5	
773	151-1	*	*	口径18.6 器高 2.5	*	外 ロクロケズリ 内 ロクロナデ	青 ~3.0mm長心・青母	灰	完形	口縁部開く
774	141-1	土器器 皿	燒土	口径20.2	外 ハケメ後ヨコナデ	外 ナラハメ後ヨコナデ	青 ~1.0mm長石・石英・青母	青 にぶい青	1/2	
775	165-2	*	SH89	口径18.0	内外 ヨコナデ・ナデサエサエ	内 外 ヨコナデ・ナデ	やや青 淡黄緑	淡黄緑	1.0縁1/3	
776	165-1	*	*	口径20.0	外 ハケメ後ヨコナデ	内 外 ハケメ	青 ~1.0mm長石	淡黄緑	1.0縁1/6	
777	166-1	*	*	口径26.2	外 ヨコナデ・ナデ	—	青 ~3.0mm長石	青	1.0縁1/2	
778	165-3	*	*	口径29.4	内外 ヨコナデ・ナデ	内 外 ハケメ	青 ~2.0mm長石	青緑	1.0縁1/8	
779	165-3	頭部器 杯身	*	口径14.2	内外 ロクロナデ	外 脚部/3ロクロケズリ 内 ロクロナデ	青 ~1.0mm長石	灰	口縁1/5	
780	165-4	碗石	*	8.1× 3.9×1.9	—	—	—	—	都久留	
781	154-5	*	*	9.0× 3.3×3.1	—	—	—	—	完形	
782	166-2	*	*	22.7× 11.9×3.9	—	—	—	—	完形	
783	154-3	頭部器 杯身	SH95	口径12.6 器高 0.5	内外 ロクロナデ	外 底盤ヘラ切り後ナデ 内 ロクロナデ	青 ~1.0mm長石	灰	ほぼ完形	
784	162-1	土器器 皿	SH96	口径12.6	内外 ヨコナデ・ナデ	内 外 ヨコナデ	青 ~0.5mm長石	—	口縁1/5	
785	203-4	羽釜	SH64 P1	口径24.0	*	内外 ヨコナデ・ナデ	~1.0mm青石・灰石	暗黄緑	1/5	青はやや 下向き
786	199-4	頭部器 皿	SH69 P1	口径10.2	内外 ロクロナデ	—	青 ~1.0mm灰石	白灰	1/10	1.0縁部やや 厚壁
787	199-5	土器器 皿	*	口径16.8	外 ヨコナデ後ヨコナデ 内 ヨコナデ	外 底盤オヤエ・ナデ 内 ナデ後ヨコナデ	青 ~1.0mm灰石	暗緑	1/5	
788	201-1	土器器 杯	SB74 P1	口径5.8~6.0	内外 ヨコナデ・ナデ	—	~1.0mm長石・青母	白緑	小片	
789	201-2	*	*	底径 7.0	—	高台部 ヨコナデ・ナデ	青 底緑	青台1/4		
790	198-2	頭部器 杯身	SB90 P1	口径19.8	内外 ロクロナデ	—	~1.0mm青石・灰石	白灰	1/5	
791	198-1	杯身	*	高台径10.2	—	外 底盤ヘラ切り後ナデ 内 ロクロナデ	青 ~2.0mm長石	淡灰	1/10	
792	201-7	土器器 皿	SB91 P2	口径15.2	内外 ヨコナデ	底盤部 外 オヤエ・ナデ	青 粗粒・灰石	内 白緑 外 淡緑	1/2	
793	199-7	頭部器 杯身	SB101 P1	口径17.6	内外 ヨコナデ・ナデ	—	~1.0mm長石・青母	林緑1/10		
794	198-11	頭部器 杯身	SB101 P1	口径 8.2	内外 ロクロナデ	—	青 長石微粒	灰	口縁1/8	
795	198-10	*	*	—	—	内外 ロクロナデ	青 ~1.0mm長石	小片		
796	199-8	土器器 皿	SB104 P1	—	内外 ヨコナデ・ナデ	—	~1.0mm長石・石英・青母	淡灰緑	1/10	
797	199-6	頭部器 杯身	SB106	—	内外 ロクロナデ	—	青 ~1.0mm長石	灰白	1/10	
798	157-3	土器器 杯	SD75	—	内外 ヨコナデ	内外 ヨコナデ	やや青 青母	にぶい青	小片	

第19表 A地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴		地土	色調	残存度	備考				
					口部部(有柄)									
					内	外								
799	157-2	土器器 杯	SD75	口径16.0 基高4.2	内側 ヨコナダ	外 指オサニナデ 内 ハケメスナダ	~5.0mm長石・石英・雲母	灰黄褐色	1/3					
800	157-1	*	*	口径16.0 基高3.6	*	外 ハケメスナダ	~3.0mm長石・石英・雲母	灰	1/2					
801	155-1	寺Cn	*	口径13.5	内外 ヨコナダ・ナダ	-	~2.0mm長石・石英	灰白	1/10					
802	160-1	壺	*	口径9.0	*	外 オサヌ後ナダ 内 工具によるナダ	~0.5mm長石・雲母	やや青 やや青	1/3					
803	154-4	*	*	口径16.0 基高4.2	内外 ハケメスナダ	内 ハケメスナダ	~1.0mm長石・雲母	灰	1/3					
804	157-4	直筒器 杯	*	口径12.0 基高4.2	内外 ロクロナダ	外 上部/2クロケズリ 内 ロクロナダ	~2.5mm長石	青灰	1/3					
805	157-5	杯	*	口径9.4	*	内外 ロクロナダ	-	青灰	底部欠					
806	160-2	壺	*	口径8.2	-	外 カキメ 内 ロクロナダ	-	青灰	底部欠	方形溝孔3				
807	160-4	*	*	口径12.0 基高4.0	体部 外面 1/2斜へ 斜部ラグアリ	内外 ロクロナダ	~1.0mm長石	青灰	完形					
808	155-4	壺	*	口径15.6	外 ラタキ後ナキメ 内 ロクロナダ	-	~1.0mm長石	灰白	1/10					
809	155-5	*	*	口径15.2	外 カキメ	-	~0.5mm長石	灰	1/10					
810	163-1	壺 (最上層)	口径11.9	内外 ロクロナダ・淡灰文 内 ロクロナダ	外 ロクロナダ・淡灰文 内 ロクロナダ	~2.0mm長石	灰	1/3	残存部分には 透かなし					
811	167-1	壺	*	口径7.4 基高21.4	内外 ロクロナダ	外 ロクロナダ 内 カキメ後ロクロナダ	~1.0mm長石・石英	青灰	完形					
812	160-3	土器 土罐	*	5.3× 10×1.0	ナダ調整	-	-	黑	*					
813	158-3	直筒器 杯	SD97	口径12.4 基高3.6	内外 ロクロナダ	外 底部へ切り後ナダ 内 ロクロナダ	~5.0mm長石・石英・小石	灰白	7/10					
814	158-2	土器 不明	*	口径25.0	ナダ調整	内 面はハケメ・指オサニ 外 底部へ切り後ナダ	~2.0mm長石・石英	浅黄褐色	底部1/4 内孔有					
815	155-3	直筒器 杯	SD102	口径16.0 基高13.0	内外 ロクロナダ	外 底部へ切り後ナダ	金合母	灰	1/10					
816	155-2	*	SD103	底径13.0	*	-	-	灰	1/10					
817	163-5	土器器 杯	SK68	口径15.6 基高3.6	内外 ヨコナダ・ナダ 底部は不明	外 ヨコナダ・ナダ 内 ヨコナダ	~6.3mm長石・雲母	暗	1/10					
818	162-5	白磁 壺	*	口径16.0	内外 ロクロナダ	-	~1.0mm長石	灰白	口径1/8					
819	170-3	壺	SK68	口径 4.2 基高 1.6	内外 ヨコナダ	内外 ナダ	~1.5mm長石・石英・雲母	灰	1/3					
820	163-3	*	*	口径 5.5 基高 1.5	*	*	~1.0mm長石・雲母	やや青 やや青	1/2					
821	163-4	*	*	口径 8.6 基高 1.9	*	*	~0.3mm長石・雲母	*	ほぼ完形					
822	169-3	瓦器 壺	*	口径 9.1 基高 1.9	外 指オサニ・ナダ 内 ミガキ	内 ミガキ	~1.0mm長石	暗灰	ほぼ完形					
823	174-1	*	*	口径 10.0 基高 2.8	*	*	~1.0mm長石	暗灰	ほぼ完形					
824	169-1	*	*	口径 10.0 基高 5.3	*	*	-	暗灰	2/5					
825	172-1	*	*	口径 10.6 基高 7.0	*	*	-	灰	1/2					
826	172-2	*	*	口径 10.6 基高 5.2	*	*	-	灰	1/3					
827	169-2	*	*	口径 14.2 基高 5.1	*	*	-	暗灰	ほぼ完形					
828	168-2	*	*	口径 14.2 基高 5.0	*	*	-	灰	2/5					
829	174-2	*	*	口径 14.2 基高 5.2	*	*	-	暗灰	2/3					
830	172-4	*	*	口径 15.6 基高 5.5	*	(内面は粗)	-	灰	5/6					
831	172-3	*	*	口径15.4	*	*	-	灰	2/5					
832	168-3	*	*	口径15.6 基高5.5	*	(内面は粗)	-	灰	2/5					
833	171-1	土器器 羽茎	*	口径24.4	*	外 ナダ・指オサニ 内 工具によるナダ	~2.0mm長石・石英・雲母	浅黄褐色	口径1/7 口縁部外反					
834	170-2	*	*	口径22.7	*	*	~1.5mm長石・石英・雲母	暗	口径1/6 *					
835	164-5	*	*	口径23.6	*	*	~2.5mm長石・石英・雲母	暗	口径1/5 *					
836	170-1	*	*	口径24.8	*	*	~1.5mm長石・石英・雲母	暗	口径1/2 *					
837	168-1	*	*	口径26.8	*	内 無ナダ	~1.5mm長石・石英・雲母	灰	口径1/10 口縁部外反 せり					
838	164-2	土器器 羽茎	SK93	口径 8.0 基高10.55	*	外 指オサニ・後ナダ 内 ナダ	~1.0mm長石・石英・雲母	暗	ほぼ完形					

第20表 A地区出土遺物観察表(木製造物を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調査・技法の特徴		胎上	色調	残存度	備考	
					1)縁部(外縁)	体部(内縁)					
839	164-4	* 小型灰瓦AorC	SK93	口径 8.3 高さ 3.5	内外 ヨコナデ・ナデ	内外 ナデ	雅 素な・長石・石英 ~1.5mm粒の白磁粉	淡黄	完形		
840	164-3	*	*	口径 7.7 高さ 2.3	*	*	やや粗 ~2mm長石・石英	にせい・橙	完形		
841	150-4	*	Sz79	口径 12.6 高さ 3.1	*	外 指オサエ・ 内 ナデ	やや粗 ~1.5mm長石・長石・赤母	淡黄褐	1/4		
842	150-2	柄巻	*	口径16.2 高さ 2.2	内外 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	やや粗 ~0.5mm長石	明青灰	1/2		
843	150-5	柄身	*	口径13.6 高さ 3.2	*	外 ロクロケズリ 内 ロクロナデ	~1.0mm素な・長石・石英	灰白	1/4~1/3		
844	158-1	*	*	口径15.6 高さ 3.1	*	外 ハラ切り後ナデ 内 ロロナデ	やや粗 ~1.5mm石英・長石	灰白	4/5		
845	150-3	*	*	底径13.8	*	*	素 ~3.0mm灰石	灰白	底部1/4		
846	205-3	翼端土器	*	口径16.0	外 指オサエ・ナデ 内 ナデ	-	~3.0mm小石	藍	1/10	氯化水	
847	137-2	*	*	-	*	-	雅 ~2.0mm小石	藍	小片	*	
848	137-3	*	*	-	*	-	雅 ~3mm小石内	青	小片	*	
849	158-4	*	*	-	*	-	雅 ~2.0mm長石・石英	藍	小片	*	
850	137-4	* ふちご 口沿	*	13.0× 8.2×7.5	-	ナデか?	やや粗 ~2mm小石	灰灰 内 浅黄褐	褐色欠け 焼けくれ有		
851	162-4	柄巻	Sz98	口径 9.6 内径 ヨコナデ・ナデ	内外 ヨコナデ・ナデ	-	~3.0mm長石・石英・赤母	にせい・淡黄	1/5		
852	162-2	*	*	口径 9.6	*	外 ナデ・赤母ケズリ 内 ナデ	素 ~3.0mm長石・石英・赤母	*	1/3		
853	162-3	* 小型灰瓦C	*	口径 4.9 体部 8.6	*	内外 ヨコナエ・ナデ	やや粗 ~1.0mm石英・黄母	*	1/3		
854	153-1	甕A	*	口径13.2 高さ 24.0	*	外 ナデ 内 指オサエ・ナデ	やや粗 ~2.0mm長石・石英・赤母	*	9/10		
855	156-1	*	*	口径14.3 高さ 22.8	*	外 ケズリ 内 ナデ	やや粗 ~2.0mm長石・石英・赤母	*	7/10		
856	202-7	Ca-38	甕Ca	口径17.4	*	-	素 微粒の長石・赤母	灰白	1/4~1/10		
857	202-3	* 小型灰瓦A	*	口径 7.2	*	外 下半部ケズリ 内 ナデ	~2.0mm石英・雲母・長石	灰白	口縁なし 削鉗完形		
858	202-2	P-39	*	口径 9.0	*	-	素 ~1.0mm長石	白褐色	1/10		
859	202-1	甕B	*	口径14.4	*	外 ナデ 内 ケズリ	素 ~1.0mm石英・長石	白褐色	1/5		
860	203-3	O-41	*	口径16.2	*	外 ハナメ 内 ナデ	素 ~3.0mm小石	黄褐	1/4		
861	112-2	*	D-28 甕	口径 9.8 高さ 1.8	内外 ヨコナデ	外 ナデ 内 ナデ	素 ~1.0mm石英・長石	青	灰白	完形	
862	200-2	*	N-41 P-46	口径 7.5 高さ 3.7	*	内外 指オサエ・ナデ	外 ヨコナエ・ナデ	素 ~1.0mm石英・長石	白褐色	9/10	
863	164-1	*	C-27 甕	口径12.7 高さ 2.9	内外 ヨコナデ	底部 外 指オサエ 内 ナデ	素 ~2mm長石・素母等	素 ほは完形			
864	113-1	柄巻	O-40 P1	口径11.8	-	外 ナデ 内 ロロナデ	素 ~1.0mm長石・ケズリ 内 ロロナデ	素 灰	口縁のみ欠		
865	200-4	柄身	M-44H近 表段	底径 9.8	-	外 ハラ切り後ナデ 内 ロクロナデ	素 ~2.0mm石英・長石	白灰	底部完形 底部外側に ハラ切		

第21表 A地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)

No.	登録No.	器種	出土位置	法量(cm)	調整・仕法の特徴		胎土	色調	残存度	備考
					口縁部(有部)	体部(無部)				
7	198-9	土師器 小型丸底亞	SB1 P3側面	縦幅8.6	-	内外 ナデ	青 ~1.0mm灰石・土母	灰褐色	1/2	
8	198-7	*	*	縦幅7.7	-	*	青 ~1.0mm灰・良石	褐色	頭部のみ	
9	185-5	有孔鉢?	P4側面	口径23.0 器高8.5	内外 ヨコナデ・ナデ	内外 ヨコナデ・ナデ	青 ~8.0mm石美・灰石	白褐色	2/5	
10	209-1	須志器 壺	横断面	口径32.2	内外 ロクロナデ	-	青 灰	(裏面)灰青 (裏面)灰	14縫1/10	
11	209-2	*	*	-	*	-	青 灰	(裏面)灰青 (裏面)灰	小片	
12	209-3	*	*	-	*	-	やや青 ~2mm砂粒多	灰	小片	
13	209-4	*	*	-	-	外 桜子タキ後ナデ消し 内 ナデ	青 ~2mm砂粒	灰 外 灰褐色	小片	
14	200-5	土師器 壺Ca	P19側面	-	内外 ヨコナデ・ナデ	-	青 ~2mm灰石	外 灰褐色 内 白褐色	17縫小片	
15	198-6	高杯B	P1側面	縦幅11.7	*	-	青 ~7mm灰石・黄母	淡黃灰	杯部1/10	
16	198-8	高杯A	P10側面	-	*	-	青 ~1.0mm灰石少	暗赤褐色	小片	
17	210-2	高杯A	SH13 直径17.5 底径11.5	*	内外 ヨコナデ・ナデ	-	青 淡黃褐色	ほぼ充形		
18	210-1	壺	P1径15.8	*	外 黒化により不明 内 ケズリ	青 ~1.0mm石英	*	口縁 部		
19	208-2	*	SH4	-	内外 ヨコナデ・ナデ	内外 ヨコナデ・ナデ 杯底縫12mm開	青 淡赤褐色	小片		
20	208-1	須志器 杯身	SK5	口径10.9 器高4.6	内外 ロクロナデ	外 L/2をロクロケズリ 内 ロクロナデ	青 ~1.0mm石美内淡褐色	外青灰	3/5	
21	208-3	土師器 壺Bb	B地区表探	口径8.2 器高8.0	内外 ヨコナデ・ナデ	外 ナデ・底堅ケズリ 内 ナデ	青 淡黃褐色	1/2		

第22表 B地区出土遺物観察表(木製遺物を除く)

No.	登録番	名 称	出 土 状 態	法 番 (cm)			木 取 り	材 種	特 徴	備 考	
				長さ	幅	厚さ					
447	92-1	刀形 黒灰粘	大頭 C-6 D-2	(81.9)	3.0	2.1	板目, 迹材	ヒノキ	刃部は比較的作り出す。 裏面は削りだす。		
448	6-1	+	日暦	(56.3)	2.3	1.7	板目, 迹材	カヤ	刃部は比較的作り出す。 裏面は削りだす。		
449	16-4	脚部	直管 D-7	(10.5)	3.2	2.2	内面の裏部分 を木芯とする	-	直管	直管は平形に作り出す。	
450	66-2	刀形	IV-b型 D-3	(24.0)	2.8	1.0	板目	ヒノキ	刃部は比較的作り出す。		
451	85-2	+	直管 D-7	(42.0)	2.6	0.8	板目	ヒノキ	直管を板で削り出す。		
452	79-2	+	IV-b型 D-2	77.3	4.6	1.7	板目	ヒノキ斜 面	刃部は直角方形でやや變 曲する。		
453	100-1	+	N型 F-9	(78.8)	2.0	1.1	板目	ヒノキ	直管と柄部の間を繋ぐして 固定する。		
454	81-3	+	N-b型 D-2	(96.3)	3.7	1.5	板目	ヒノキ	大形。調整は無い。	先端部欠損	
455	104-1	+	直管 D-3	(16.8)	1.2	0.6	板目	ヒノキ	身の部分が思われるが、やや 細く、範圍も残る。		
456	66-3	+	IV-b型 D-2	(20.2)	2.4	0.9	板目	ヒノキ	調節竿等はあるが、先端 部は欠損する。		
457	66-1	+	日暦 E-8	(34.0)	2.7	1.15	板目→直板目	ヒノキ	身に接し、棒は刀身の 約1/3位の大きさで作成。		
458	48-5	+	日暦 E-8	(17.7)	1.7	1.3	直目	ヒノキ	身の表裏ないが、柄部 作成は457と共通。		
459	46-3	刺形	直管 D-2	(23.3)	2.5	0.8	板目	ヒノキ	刃尖は直形に突き出る。		
460	45-1	+	直管 D-7	(29.6)	2.8	1.0	板目	ヒノキ	柄部非常に細く仕上げ されている。		
461	1-2	+	大頭 N-a型	(37.5)	2.3	1.3	板目	ヒノキ	直管		
462	36-5	+	直管 D-1	(14.3)	4.6	1.1	直板目	ヒノキ	欠損しているが、本來は460のよ うになるか、纏合の可能性有。		
463	59-3	小刀形	日暦 E-8	(25.3)	1.6 約3.0 約2.6	1.4	板目	モミ属	刃身部が小さく、粗い調整。		
464	36-1	+	直管 B-8	(18.6)	1.6 約1.6 約2.1	2.1	板目	ヒノキ	刃身部が63より大きくなり、 全体に変化した感。		
465	72-1	鉛形?	直管 E-5	25.3	2.0 約2.0 約2.6	1.4	板目	ヒノキ	先端が丸く、 溝く削り出す。	467とあわせ て1セット	
466	59-1	鉛頭	直管 E-8	49.5	内面 4.0	1.2	板目	スギ	溝く削り出す。		
467	59-2	+	直管 E-8	49.7	5.9	1.1	板目	スギ	溝く削り出す。		
468	48-3	刀頭	D-3	(26.6)	5.4	1.9	直板目	スギ	丁寧な作り。		
469	29-1	櫛状	直管 D-2	(18.2)	-	7.7 直管2.3	芯材	ヒノキガ	やや厚手。形状は初期 と同じ。		
470	75-1	+	IV-b型 D-2	(15.5)	5.7	5.9	芯材	アカガシ属	細部と柄の端はややく斜め の段。細部先端は削用か。 やや崩れ。整件とされた 可能性もある。		
471	24-2	+	N-a型 E-9	(10.7)	6.0	5.4	芯材	ニシキギ属	細部と柄の端は斜めを 残らず。先端部再利用。		
472	61-2	杵	IV-b型 D-2	(21.2)	-	7.5	芯材	サカキ	細部のみ残る。	使用軸脚著	
473	8-1	臼	D-5 N-b型	(42.0)	60.0	-	芯材	モミ属	臼外部面材。		
474	14-3	木鍬	IV型 D-7	(6.8)	7.9	-	芯材	モミ属	側面中央へ度量具。		
475	40-2	+	IV型 D-7	12.0	中央4.5	-	芯材	サカキ	中央部を裂いて鍬状に する。全身上にやや丸み有。		
476	40-1	+	IV型 D-7	(6.0)	6.5	-	芯材	ヒサカキ属	欠損部大。475と同様か。		
477	12-2	輪扁の日暦板	F-9 D-7	(33.4)	4.1	1.7	板目	ヒノキ	日暦部にかけて丸削り込 研ぐくなる。日暦部は約12.2		
478	36-4	木各	大頭 直管	30.4	5.0	1~1.7	板目	ヒノキ斜 面	材表面を輪削りする。厚さやや 大きし。木各部をよく開ける。		
479	106-1	轆轤具	直管 F-9	(72.0)	6.0	2.4	板目	カヤ	大形。直管の先端からやや 下がった部位を両側から抉る。		
480	17-1	+	C-4 直管 (N型) D-7	43.7	4.1	1.4	板目	ヒノキ	両溝部は丸く抉る。		
481	23-2	+	IV型 D-7	35.6	4.2	1.7	板目	ヒノキ	両端部は丸く抉る。		
482	13-1	+	直管 F-9	(50.1)	6.1	1.5	板目, 志近い	ヒノキ	溝部は平行に作り出す。 抉りは比較的ゆるやかな。	樹皮をとつて すぐ	
483	50-3	+	直管 D-5	(15.9)	3.7	2.0	板目	スギ	抉り込みは大きい。		
484	72-3	+	IV-a型 不明	(37.2)	4.0	2.3	板目	スギ	比較的厚い。抉りは三角形 状に削り込まれる。		
485	15-1	+	不明	(33.3)	4.6	1.8	板目, 志近い	ヒノキ	直管は方形に作り出す。 抉り込みは浅いがやや広い。		
486	14-2	+	B.C-8-9 直管	(31.9)	2.6	1.7	芯部分で半裁	-	丸棒を半裁して丁寧な作り。		

第23表 A地区出土木製品観察表

（ ）は現在の数値

No	登録番号	名 称	出 土 位 置	法 品 (cm)			木 取 り	樹 種	特 徴	備 考
				長さ	幅	厚さ				
487	70-2	齒費具	大溝 Ⅳ-2	D-3 (24.5)	1.8	1.35	板目	ヒノキ	先端よりやや内側を削り、先端を切り出す。運転部等。 運転部が削り込みによる切り出しがある。	
488	70-1	*	四層	E-8 (21.5)	3.0	1.6	追削目	スギ		
489	16-1	家もしくは 机状木製品	昭和砂	C-12 (30.4)	19.6	1.7	追削目	ヒノキ	下面中央を舟形状に削ける。	
490	91-1	*	N-2	D-6 (27.0)	15.0	1.6	裏目～追削目	ヒノキ	下面中央を舟形状に削ける。	
491	2-1	*	(矢行)	D-3 (27.5)	2.3	1.3	追削目	ヒノキ	下面中央を舟形状に削ける。 やや内側。	
492	94-1	*	(+) 月牙	D-12 (62.6)	(25.9)	2.3	板目	ヒノキ	脚の接合部は断面M字形の溝。上面削りを薄く削る。	
493	27-1	*	(+)	D-4 (42.6)	(12.3)	1.6	板目	スギ	接合部裏面は舟形 削下面削りを薄く削る。	
494	29-4	*	D-3	F-9 (30.3)	(8.6)	0.5～1.8	板目	ヒノキ	下面削りを薄く削る。	
495	86-1	*	N-2	D-2 (63.4)	(16.3)	2.5	板目	ヒノキ	接合部は斜方の抉り。 下端削りを薄く削る。	
496	37-1	*	N-2	D-5 (77.0)	(8.7)	1.2	板目	ヒノキ	下端削りを薄く削る。 長脚部に舟形の抉り。	
497	84-1	*	四層	C-11 (44.5)	12.9	2.4	板目	ヒノキ	厚くなつた部分に二段の ・本体からの削り出し。手手で 削広がる。	小形の机の脚材等。
498	10-1	椅子	四層	D-2 (54.7)	高さ 21.6	3.6	板目～追削目	ヒノキ	中央脚に向かって幅が広くな る。	
499	58-3	大坪脚	黒灰粘	B-8 (91.2)	横(4.8)	1.8	板目	ヒノキ		
500	49-1	工具柄	黒灰粘	E-9 (10.2)	3.4～3.5	2.7	柄部分が芯材 ヒサカキ属		内部上面はやや丸みを 持つ。	
501	7-4	柱材	N-2	D-5 (19.1)	—	14.9	追材	—	下端部を少し尖り出す。	
502	7-2	*	三層	C-8 (80.7)	—	13.6	衝管	クリ	抉り有。	
503	67-2	*	三層	D-5 (99.0)	—	11.3	追材	ヒノキ	下端部を少し尖り出す。	
504	7-1	*	N-2	D-5 (69.5)	—	15.6	衝管	モミ属	調整削不明。	
505	55-1	*	三層	D-1 (83.8)	10.4	6.2	追材	アカガシ属	角材、高床木上の部位等。	
506	99-2	*	四層	F-9 (214.4)	—	5.7～8.2	追材	—	直取り有。	
507	105-1	*	四層	C-8 (268.5)	11.0	10.3	衝管	—	直取り有。中央の抉りは二次的 的なもの可能性有。	
508	3-2	柱材	黒灰粘～粗粘	C-8 (14.3)	17.3	2.3～4.4	板目	モミ属	大方材と小方材4 中央部の不定形穴は軸用時 小方材。	
509	9-3	柱材	大溝 黒灰粘	C-8 (128.8)	19.3	4.2	板目	モミ属	中央の大きめの孔は軸用時。 軸用時に薄くや断面を	
510	74-1	台輪	四層	D-1 (74.2)	21.4	3.7	板目	ヒノキ	風化・欠損のため詳細不明だ が、追削片薄部を突起状にする。	
511	79-2	まぐき材	N-2	D-3 (49.5)	9.3	4.7	板目 (実驗部 は板目となる)	ヒノキ料	カット	
512	102-1	棒木	四層	D-5～6 (142.4)	—	3.2	芯材	—	細かい調整有。	
513	89-1	*	四層	D-1 (56.4)	—	5.1	芯材	モミ属	やや太く、一端樹皮残る。	被取席。
514	90-1	*	四層	D-7 (63.0)	—	3.0	芯材	モミ属	細部の抉りは断面構から 入れられ。	
515	33-1	*	N-2	D-6 (56.5)	—	2.7	芯材	—	軸用時に薄くなる。直削部 中央の抉りは斜めぞん。	
516	81-1	壁板	黒灰粘	C-4 (101.1)	12.8	1.3	追削目	ヒノキ		
517	3-1	*	黄灰粘	C-12 (163.0)	28.0	4.0	板	モミ属	手削による削り。	
518	4-2	*	暗灰粘	A-11 (158.6)	14.8	1.8	板目	ヒノキ	手削による削り。 薄手。	
519	3-3	*	黒灰粘	C-3 (151.3)	14.7	2.1	板目	—	やや薄手で、調整小明。	
520	102-3	*	N-2	F-10 (156.6)	18.1	2.8	板目	スギ	調整は手斧によるもの。	
521	4-1	*	黒灰粘	C-10 (148.2)	(17.2)	3.3	板目	モミ属	調整不明	
522	76-1	*	四層	D-8 (129.1)	(4.9)	1.9	板目	スギ	やや薄手。	
523	58-1	*	四層	C-8 (128.0)	16.7	2.5	板目	モミ属	中央部に方孔有。	
524	52-2	*	四層	D-3 (126.2)	12.1	2.6	板目	ヒノキ	手削による削り。 方孔有。	
525	52-1	*	N-2	D-6 (123.7)	7.0	1.9	追削目	ヒノキ	先端の頭はぞん中央の方孔 は軸用時の仕事か。	
526	77-2	*	暗灰粘	C-11 (86.6)	13.9	2.5	板目	ヒノキ	断面をやや丸くする。軸用 か。	

第24表 A地区出土木製品調査表

No.	登録番	名 称	出 + 横 番	法 量 (cm)			木 取 り	樹 種	特 性	備 考	
				長さ	幅	厚さ					
527	67-3	堅板	+ E-9 + N-82	(70.0)	16.5~14.0	1.8~2.5	板目	ヒノキ	手斧による調整。		
528	80-1	*	+ C-12	(11.7)	(23.2)	2.8	板目~追板目	ヒノキ	軸用により小形化。軸用材		
529	87-1	*	+ C-12	(51.1)	22.8	2.2	板目	ヒノキ	手斧による調整。		
530	62-1	*	堅板	(37.8)	17.7	2.8	板目	ヒノキ	やや薄手。 工具痕有り。		
531	69-1	*	C-7	(34.6)	11.8	1.8	追板目	ヒノキ	方形の有り。 工具痕有り。	表面に塗装。	
532	35-1	*	D-7	(17.5)	14.5	2.1	板目	ヒノキ	軸用により小形化。 工具痕有り。		
533	28-1	妻立堅板	+ D-4	(48.1)	15.4	3.0	追板目	ヒノキ	鉛筆で記入。		
534	32-1	*	D-7	(33.8)	27.3	2.6	板目~追板目	ヒノキ	手斧を使用。		
535	56-1	*	F-9	(25.0)	-	2.4	縦・板目(横面)	-	手斧を使用か。		
536	78-1	堅材	+ F-8	(131.2)	(40.0)	(3.2)	板目	ヒノキ	外表面は削り、内部を軸用時の把手取り取るは手斧による。	背面側に手も手斧を施した痕跡。	
537	25-6	丸板	+ F-11	(13.0)	-	5.0	芯材	モミ属	芯下段は四面削り。		
538	39-2	軸用角材	+ F-11	(26.5)	-	6.7	芯材	シロダモ	角材を軸用して枕に使用。		
539	39-1	*	I-11	(25.3)	-	4.5	芯を中心に4分割したうちのひとつ	ヒノキ	下端は圓筒削り。		
540	30-3	丸丸	F-10	(31.9)	-	4.5	芯材	アガシ等属	下端は圓筒削り。 腹皮残る。		
541	25-1	*	板剣	(15.4)	-	4.5	芯材	モチノキ属	板剣はコンパクトな四面削り。		
542	25-2	*	板剣	(11.6)	4.0	3.4	芯材	アガシ等属	下端はコンパクトな六面削り。 腹皮残る。		
543	103-1	*	F-9	152.8	-	7.2	芯材	ヒノキ	ほぼ完璧。真っ直ぐな丸太材。		
544	102-2	*	F-9	(122.8)	-	6.0	芯材	モミ属	一部樹皮残る。		
545	82-3	*	C-4	86.0	-	1.8	芯材	ヒノキ	細材。下端は二面削り。		
546	6-2	*	F-10	(54.5)	-	3.5	芯材	モミ属	下端はコンパクトな二面削り。 腹皮残る。		
547	26-1	*	E-9	(61.4)	-	2.5	芯材	モミ属	下端は1方向から切り落としのみ。		
548	104-2	*	N-b端	(72.8)	-	(皮食) 5.7	芯材	ヒノキ	下端は2面削り。上部に抉り有。		
549	29-3	*	D-2	(18.0)	-	4.0	芯材	-	腹皮残る。		
550	25-3	角軸	N端	(43.0)	2.4	2.3	追材	ヒノキ	比較的細い角軸の先端を削り込む。		
551	60-1	丸軸	V端	(34.0)	-	13.0~14.5	芯材	アガシ等属	腹皮残り少い。		
552	1-1	*	C-9	(41.5)	-	8.5	追材	モミ属	下端は7面削り。軸用材。 腹皮残る。		
553	43-1	種もしくは 水底裏	C-11	(65.3)	(12.3)	2.9	板目~追板目	ヒノキ	欠損するものの、凹部の内壁のみ残る。		
554	75-3	?	D-7	15.0	2.6	2.6	芯材	針葉樹	上端に鋭打痕。		
555	73-2	把手木製品 自転	F-9	13.6	6.0	5.7	追材	スギヒノキ	コンセント状の差し込み形狀で、逆側へ枝条を割り込む。		
556	20-2	*	C-4 黒炭刷(?)	(18.5)	柄 4.0 頭 10.2	納 2.2 頭 4.0	追材	ヒノキ	柄中央には老穴。		
557	81-5	軸物	D-3 N-b端	63.5	12.2	1.4	板目~追板目	ヒノキ	側脚部に多数の小孔を開く。		
558	13-2	*	F-9	(50.1)	6.1	1.5	板目	ヒノキ	中央の方に4枚切りの側脚内溝に小方孔。緊締用孔。		
559	63-1	*	茎等	E-8	53.5	6.0	1.7	板目	スギ	両側脚出しぞのになる。	
560	48-1	*	D-3	(25.2)	5.4	0.9	板目	ヒノキ	片側は出しそを作りつける。		
561	61-1	*	自転	D-1	(31.5)	5.5	1.1	板目	ヒノキ	561と同形。	
562	48-2	*	自転	D-6	(28.5)	4.4	0.6	板目	ヒノキ	側脚部に小方孔。失敗板に使用か。	560や561を受けるものか。
563	107-1	加工小厚板	黒炭刷(?)	B-9	14.4	9.2	3.4	板目	ヒノキ	片側足を2枚側に削り出す。 側材の使用か。	
564	44-3	*	D-6	(39.4)	19.1	2.3	板目	アガシ等属	片側足を2枚側に削り出す。		
565	50-1	*	N-a端	D-6	(25.5)	4.6	3.0	板目	モミ属	一隅を斜めに切る。	
566	2-3	*	N-b端	F-9	(17.5)	6.8	4.1	板目	ヒノキ	長方形厚板の短辺を二面から切り込む。	

第25表 A地区出土木製品観察表

No.	登録No.	名 称	地 土 位 置	法 量 (cm)			木 取 り	樹 種	特 殊 性	備 考
				長さ	幅	厚さ				
567	14-1	加工小厚板	大湊 D-7 N-a層	(6.5)	13.4	2.8	道板用	ヒノキ	辺を二面から切り込み、失せせる。	
568	108-1	*	N-b層	24.0	4.8	2.4	板目	スダジイ	長方形板の中央に方孔有。	本種の可能性有。
569	73-3	*	N-g層	D-5 (8.6)	7.1	2.1	板目	スダジイ シノダ	全面有る。	
570	75-2	*	N-b層	D-1 (8.6)	7.2	3.3	道板用・板目	スダジイ	板の内曲面に向かって薄める。	
571	70-5	*	人面 田端	D-5 (17.0)	7.0	1.9	板目	アガチス	長辺部の内面がひざき異なる。 無い方に半円形の小さい切込。	板台の長板側の可能性有。
572	41-2	板状木製品	田端	D-8 (49.0)	2.1	1.0	板目	ヒノキ	半円から方形板を作れる。	
573	40-3	*	田端	F-9 (50.0)	4.1	1.2	板目	ヒノキ	鋼線をために切り落とした板。	
574	72-2	*	V型	D-5 (42.5)	6.2	1.7	道板用	スギ	材中央に大方孔と鋼線跡とし く小孔有。	造基部材とするにはやや小さい。
575	64-1	*	目蓋	D-3 (42.6)	9.2	1.3	道板用	ヒノキ	前面に斜かって左下の部分は 加工由。	
576	35-2	*	目蓋	D-2 (47.5)	5.1	1.0	板目	ヒノキ	先端を尖板状に失せせる。	
577	83-2	*	黒板	C-6 (42.5)	11.6	1.5	板目	ヒノキ料	鋼線に沿って小穴5個有。	塊肉存在。
578	24-1	*	黒板	E-9 (36.6)	12.0	1.9	板目	スギ	577よりも厚手の板材。	
579	29-2	*	N-a層	D-7 (27.6)	4.7	1.2	道板用	ヒノキ	板の狭い部。	
580	30-1	*	N-a層	D-2 (22.7)	4.4	1.2	板目	ヒノキ	片面のみ工具痕。	
581	39-6	*	N-a層	D-7 (23.7)	1.8	0.7	板目	ヒノキ	鋼線の板で、長辺に斜か て片面に工具痕明瞭。	
582	50-2	*	N-a層	D-5 (23.4)	5.0	1.3	板目	ヒノキ	平行四邊形の板	
583	31-1	*	N-a層	F-9 (27.6)	10.5	7.1	板目	ヒノキ	平行四邊形の薄板	
584	20-1	*	黒板粘・黒漆粘	C-4 (15.2)	4.0	0.7	板目	ヒノキ	前面の板の端部に小円孔。	縦方向に幾筋。
585	44-1	*	N-a層	D-5 (25.5)	7.9	0.8	板目	ヒノキ	長方形の端部に小円孔。	
586	85-1	*	N-a層	D-7 (35.0)	11.8	1.8	板目	スギ	やや薄手の板材。	
587	21-1	*	N-b層	(56.8)	10.1	2.0	板目	ヒノキ	側縁部に抉り有。	
588	92-2	*	目端	D-3 (72.2)	4.0	0.7-1.7	板目	ヒノキ	幅の狭い板。	
589	82-4	*	黒板粘	C-4 (61.5)	13.5	1.8	道板用	ヒキ	丁寧な仕上げ。	
590	54-1	*	田端	E-2 (74.2)	15.6	2.1	板目	ヒノキ	欠陥しているが、材半側に 方孔有。	
591	45-1	*	N-a層	D-5 (66.9)	8.3	2.6	板目	ヒノキ	丁寧な仕上げ。	
592	62-1	*	N-b層	D-2 (115.0)	8.5-11.2	1.5	道板用	ヒノキ	側縁を大きく方向に抉る。	
593	74-2	*	田端	D-8 (64.9)	10.1	0.9	板目	ヒノキ	薄手で、端部は丸みをもつ。	
594	64-2	*	田端	D-7 (15.8)	-	0.9	道板用	ヒノキ	円形の木材の中空部を丸く 空孔。	
595	67-1	両端丸り棒	目蓋	F-9 (115.0)	-	7.5-8.0	石材	ヒノキ	両端を板状に尖らせている。	
596	19-2	有柄鉗	黒漆粘	C-9 (49.2)	柄18 頭4.5	-	芯材	ヒノキ	非常に丁寧な仕上げ。	
597	7-3	*	目蓋	D-1 (49.5)	-	4.1 5.1	道材	ヒノキ	丁寧な仕上げ。	
598	101-1	尤実棒	目蓋	D-8 (61.2)	2.0	1.3	板目	ヒノキ	先端は刀の初矢植に尖 らせせる。	
599	2-2	*	黒漆粘	C-9 (42.0)	2.0	1.4	板目	ヒノキ	先端の尖りはゆるい。	
600	48-4	*	目蓋	D-3 (31.2)	2.0	1.2	道材	ヒノキ	断面円形を成す。	
601	85-3	*	目蓋	D-1 (26.0)	1.8	1.2	板目	ヒノキ	断面半円形を成す。	
602	36-2	*	目蓋	E-8 (12.6)	-	0.7	道材	マツ 鋼線接着剤	断面円形で先端は比較的 鋭い。	純実且。
603	30-4	*	目蓋	D-2 (26.3)	2.4	1.2	道材	ヒノキ	断面方形で、先端はゆるい。	先端部剥けている。
604	66-4	抉入棒	目蓋	E-9 (20.1)	3.0	1.8	道材	スギ	溝墜丁字	
605	70-4	*	N-b層	D-3 (23.3)	1.9	1.35	道材	ヒノキ	半載鉗に何かと組み合わす。	
606	18-2	*	黒板粘	C-9 (34.4)	3.3	2.7	道材	ヒノキ	面取りし、さらに一部を乾燥 して切り落す。	

第26表 A 地区出土木製品観察表

No.	登録No.	名 称	出 上 位 置	法 量 (mm)			木 取 り	樹 種	特 性	備 考	
				長さ	幅	厚さ					
607	17-2	抉人棒	大清 N'-b層	D-5	(41.5)	1.9	1.2	造材	ヒノキ	切り落とさない部分は断面 がなるべく丸い形にならん。	
608	46-2	*	*	D-3	(14.0)	—	1.8	造材	ヒノキ	断面が方形の棒の機械に抉 りを入れる。	
609	22-1	*	N'-a層	D-3	(51.0)	2.8	1.6	造材	ヒノキ	断面が方形の棒の機械に抉 りを入れる。	
610	12-1	*	ア哥	あ-12	(36.0)	—	2.4	造材	ヒノキ	断面が方形の棒の1辺に抉 りを入れる。	
611	36-3	*	A-14	C-6	(21.5)	1.8	0.5	造材	ヒノキ料	造形を作り出す。	
612	68-1	*	黒炭粘	C-6	(59.1)	4.2	3.5	造材	ヒノキ	方柱棒の通孔を作り出し、 抉りを入れる。	
613	45-2	*	不明	94.6	—	2.4	造材	スギ	末端部に抉り。	不規格品とするにはやや堅い。	
614	73-1	椎状木製品	目柄	F-9	(38.0)	—	2.5	造材	ヒノキ	長軸に平行する工具柄。	
615	18-1	*	黒炭粘	C-4	(38.4)	—	2.0	造材	ヒノキ料	長軸に平行する工具柄。	
616	15-2	*	N'-b層	A-12	(48.0)	—	2.3	造材	ヒノキ	長軸に平行する工具柄。	
617	30-2	*	N'-a層	D-2	(26.5)	—	2.2	造材	ヒノキ料	側面丁字で、端部彫る。	
618	19-1	*	N'-a層	D-3	(15.2)	—	2.8	芯材	ヒノキ	造形を面取りする。	
619	70-3	*	N'-a層	D-5	(18.1)	1.3	1.3	造材	ヒノキ	長軸に平行する工具柄。	
620	23-1	*	ア哥	D-2	(21.0)	—	4.3	造材	ヒノキ	断面方形。	全体に焼いてある。
621	9-2	*	ア哥	D-4	101.6	2.8	1.8	造材	ヒノキ	角材状。	
622	9-1	*	ア哥	D-4	(93.6)	—	4.5	造材	ヒノキ	角材状。	
623	82-2	*	ア哥	E-9	(91.5)	2.0	1.2	造材	ヒノキ	角材状。	
624	33-2	*	N'-b層	D-6	(60.0)	2.1	1.8	造材	ヒノキ	角材状。	
625	88-1	*	目柄	D-2	(72.7)	24.0	2.3	造材	ヒノキ	長軸に沿った丁寧な調整 穴をなす。	
626	77-1	*	暗伏筋	C-11	(105)	—	3.2	芯材	ノリウツギ	材壁皮残る。	
627	58-2	*	目柄	D-6	(81.5)	7.3	5.7	芯材	アカシヤ	調査不明。	
628	58-4	*	目柄	D-8	(27.8)	1.6	1.2	造材	アカシヤ	曲面のある棒 調査未定。	
629	81-4	*	透孔 黒炭	C-8	(49.0)	2.8	2.5	芯材	—	丸柱の一端を半蔵する。	
630	101-2	角桿	S F-29	(85.0)	10.8	7.4	—	造材	ヒノキ・ミソク	転用板。	
631	42-1	丸桿	*	(58.0)	9.7	9.1	—	芯材	セカキ	側面削を採用。	
635	51-1	角桿	*	(32.4)	7.3	5.0	—	造材	セイ属	転用板。	
636	34-1	丸桿	*	(25.0)	5.0	4.8	—	芯材	カヤ	樹幹部を焼用。	
637	65-1	昇J-材	*	(44.7)	(15.5)	4.7	—	造材	モミ属	1端辺を2面削り。	
638	47-1	*	*	(24.7)	17.2	4.0	—	造材	モミ属	1端辺を2面削り。	
639	53-1	*	*	(31.9)	18.6	3.0	板目～追板目	モミ属	1端辺を2面削り。		
640	11-3	*	*	(27.7)	21.1	3.0	板目	モミ属	1端辺を2面から削り溝と 突もれ跡。		
641	57-1	*	*	(42.4)	16.7	2.5	板目	モミ属	1端辺を2面削り。		
642	41-1	*	*	(40.5)	28.5	4.3	板目	モミ属	1端辺を2面削り。		
643	38-1	*	*	(44.2)	39.8	2.4	板目	モミ属	1端辺を2面削り。		
644	71-1	*	*	(48.0)	32.1	4.0	芯に長い部分の 板目	モミ属	1端辺を2面削り。		
645	30-5	小円板	*	—	3.9	3.2	0.3～0.5	板目	ヒノキ	周円を面取り。	
646	4-3	梯子	A-15孔	(147)	12.5	3.8 (見張6.5)	—	板目	ヒノキ料	腐蝕大。転用時の抉り有。	
649	4-4	梯子もしくは木造り	*	(131)	(12.4)	高さ8.0	—	芯部分を抉り取る。	ヒノキ料	本著は円筒の製品か。	

第27表 A地区出土木製品観察表

No	登録No	名 称	出 土 位 置	法 量 (cm)			木 取 り	樹 種	特 徴	備 考
				長さ	幅	厚さ				
1	97-1	柱根	SB 2 P13	(56.3)	—	(17.1)	樹幹	ヒノキ		
2	96-1	*	*	P 3	(95.4)	—	(24.4)	樹幹	ヒノキ	
3	95-2	*	*	P 1	(58.0)	—	(24.9)	樹幹	ヒノキ	
4	95-1	*	*	P 2	(72.9)	—	(21.9)	樹幹	ヒノキ	
5	96-2	*	*	P 8	(72.0)	—	(21.6)	樹幹	ヒノキ	
6	97-2	*	*	P15	(43.2)	—	(17.0)	樹幹	ヒノキ	

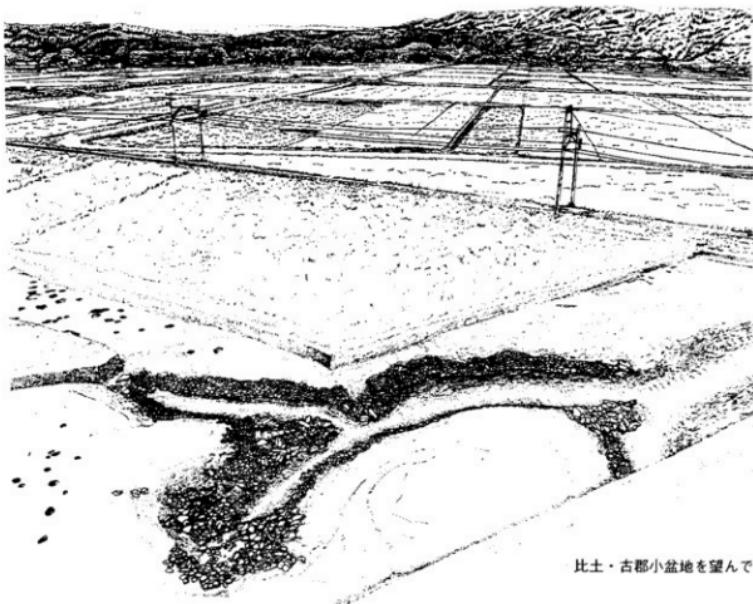
第28表 B地区出土木製品観察表

No	登録No	名称	出 土 位 置	年代
—	—	板材	Ⅳ層	A. D. 130
566	2-3	加1小厚板	Ⅳ層	A. D. 139
575	64-1	板状木製品	Ⅳ層	A. D. 162
528	80-1	堅板	結灰砂	A. D. 169
498	10-1	椅子	夏層	A. D. 192
497	84-1	葉もし(切削木製品)	結灰砂	A. D. 199
—	—	板材	黑灰砂	A. D. 248
528	14-1	堅板	Ⅳ-a層	A. D. 290
—	—	板材	黑灰砂	A. D. 292
533	28-1	菱形堅板	Ⅳ-a層	A. D. 322
—	—	板材	Ⅳ層	A. D. 329

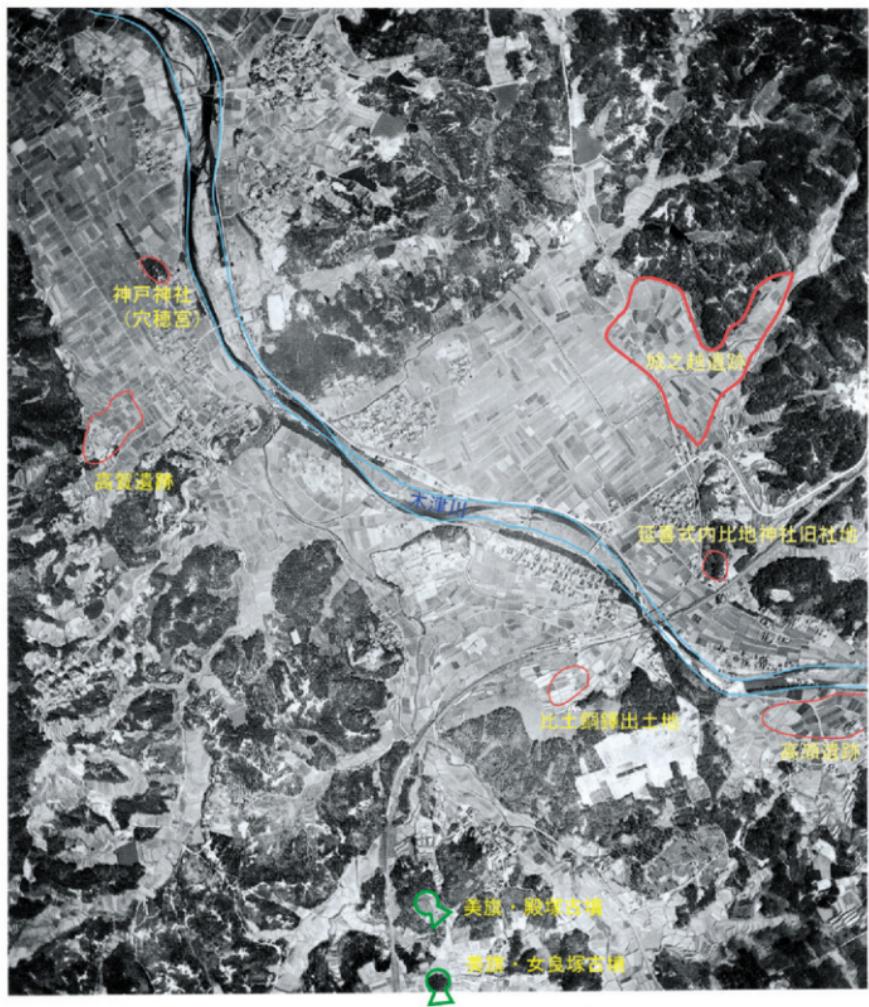
第29表 大溝出土木製品年輪年代測定結果

大溝から出土した木製品のうち、11点を任意に抽出して奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏にお願いし、年輪年代測定をしていただいた。大溝Ⅳ層の年代は、出土遺物から4世紀後半と推定しているがⅣ-a層出土の533はA. D. 322年には立っていた木を伐採した後に製品としたものであり、先の年代觀とも矛盾しない。

図 版



比土・吉郡小盆地を望んで



比土・古都小盆地空中写真

この写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の空中写真を複製したものである。
(承認番号) 平5部掲、第40号



城之越遺跡遠景（西から）



城之越遺跡A地区全景（B地区は丘陵中央の裏側の谷筋）



大溝上流部及び比土集落（写真右上の奥に美旗古墳群）



大溝及び古都集落（東から）



大溝上流部調査風景（第1突出部付近）



大溝上流部木製品出土状況（西から）



井泉 2 調査風景



井泉 2 案 (492) 出土状況

P L 6



井泉 2 から第 1 合流点



井泉 3 から第 1 合流点



第1合流点（南西から）



第1突出部（正面から）



第1突出部の貼石及び立石の状況（北から）



第2突出部（北東から）



階段状施設（北西から、石の下は胴木）



大溝上流部全景（北から、この時点では井泉1は未掘）

P L 10



井泉1から延びる溝の木製品出土状況（北西から、奥に見える横木は井泉1の蓋板）



井泉1（東から）



大溝上流部全景（北から）

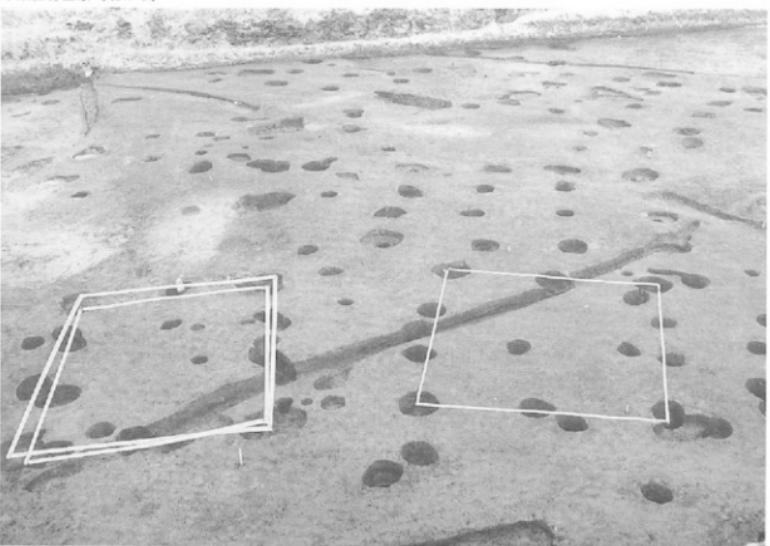


大溝下流部埋土の堆積状況

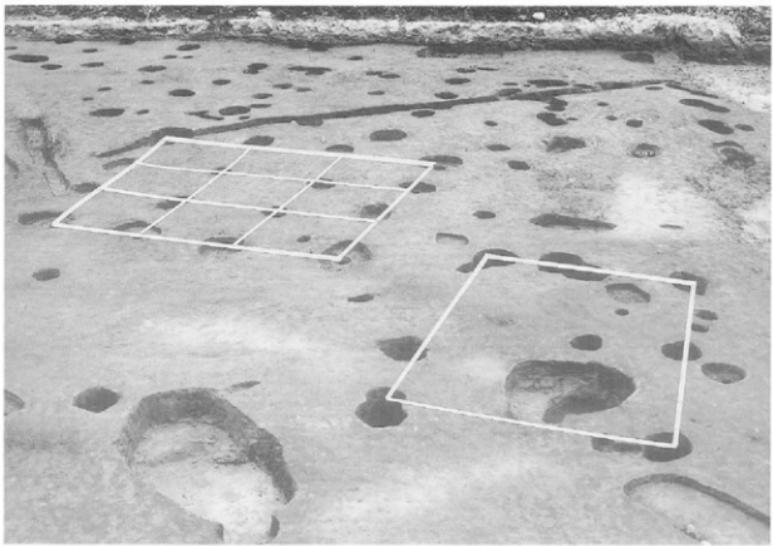
P L 12



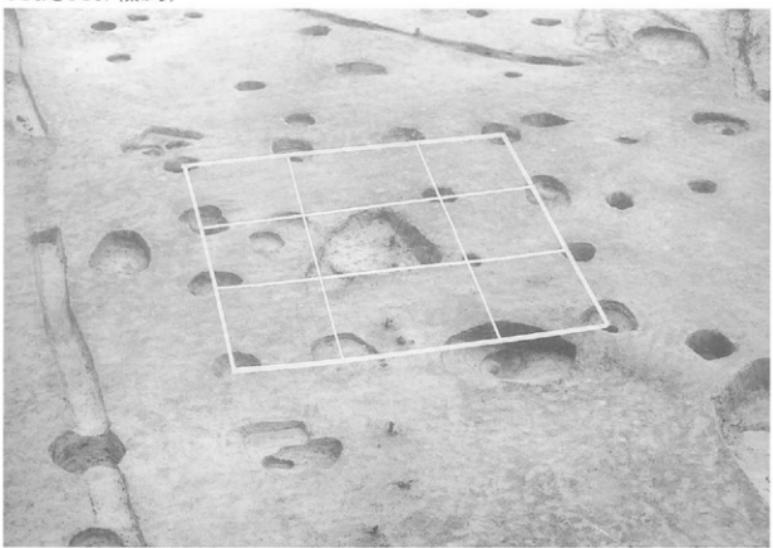
中段部分全景（北から）



S B 31・32とS B 36（南西から）

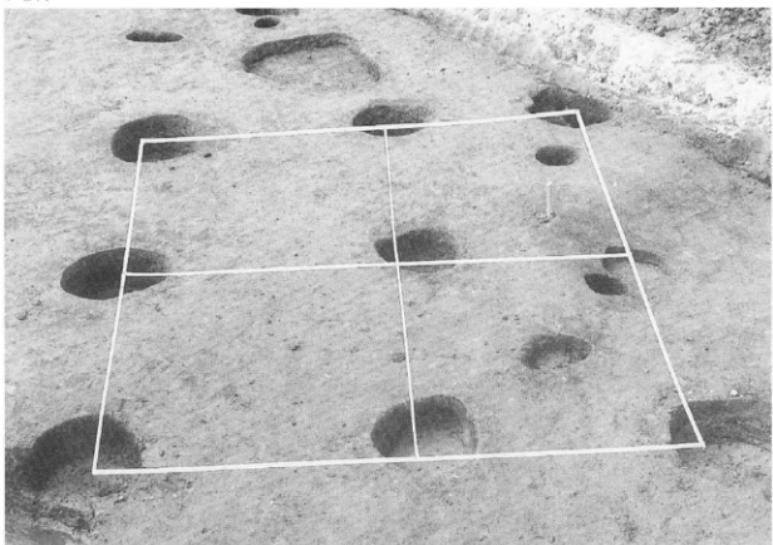


S B37とS B34（東から）



S B39（北から）

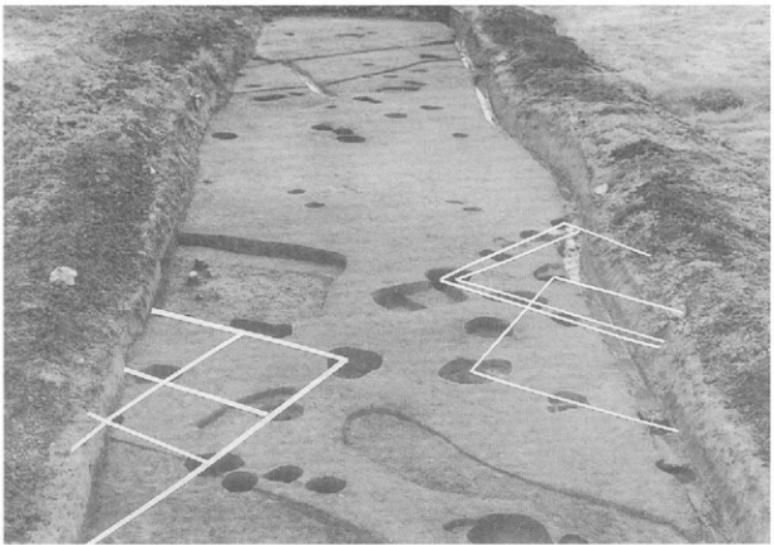
P L 14



S B 38 (東から)



下段部分 S B11 (手前)・S B12・13・14 (北東から)



S H26とS B25（左手前）・27~29



上段部分の竪穴住居群（東から）

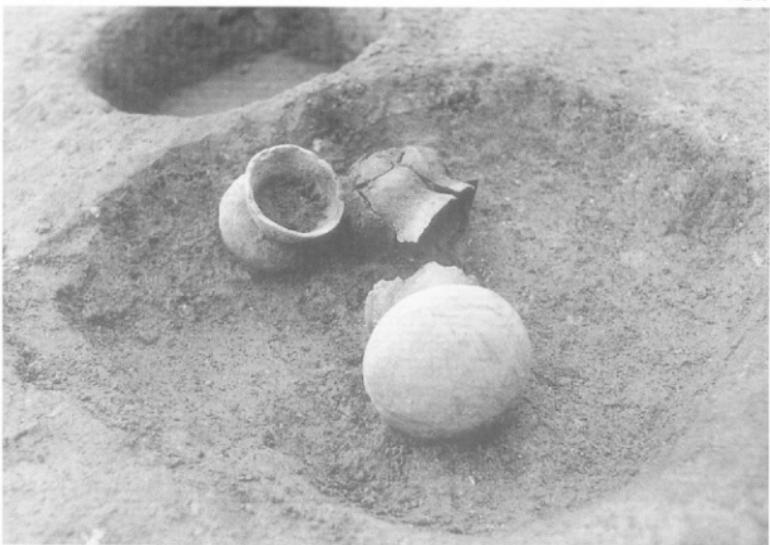
P L 16



S H84内土坑遺物出土状況（749と753）



S H88 遺物出土状況（南から）



SK 93遺物出土状況（東から）



SD 19・SE 20（南西から）

P L 18



S K 68全景（西から）



S K 68遺物出土状況（西から）



城之越遺跡B地区から望む比土集落



B地区 SB1・SB2 (南東から)

P L 20



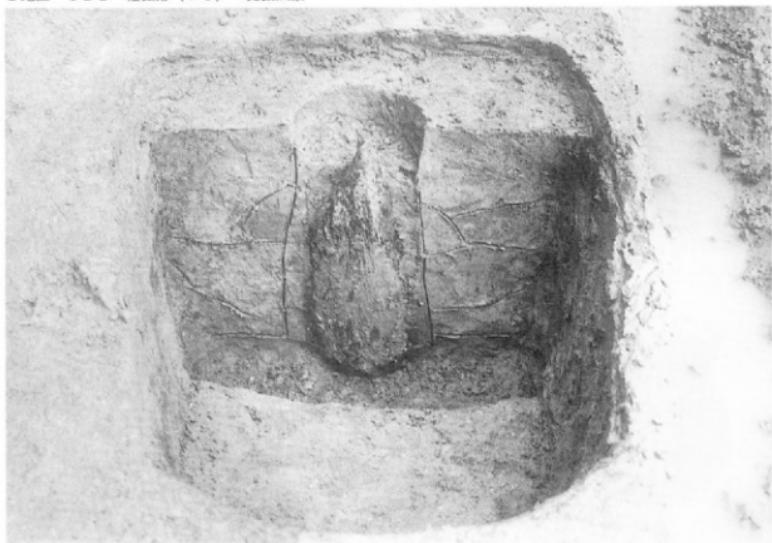
B地区 SB 1 (東から)



B地区 SB 2 (南から)



B地区 SB2 柱掘形 (P 8) 発掘風景



B地区 SB2 柱掘形 (P 8) 断面



8



9



49



12



15



17



47



50

19



48

28

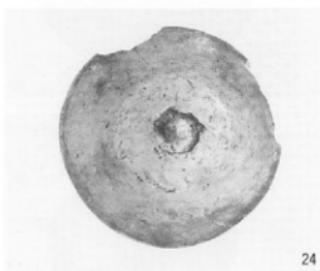
大溝IV b層出土遺物 (1 : 3)



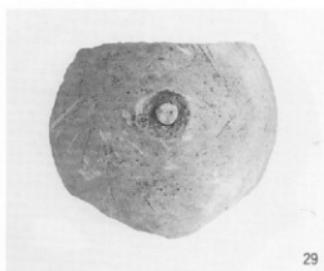
24 杯部斜下から



29



24 杯部下から



29



51



53



55



52



54



67



60



69



70



71



72



77



81



82



83



88



85



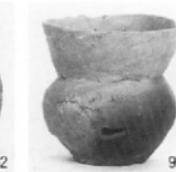
89



90



92



95



131



132



148



149



146



143



151



113



114



115



112



122



108

杯部横から



125



108

杯部斜下から

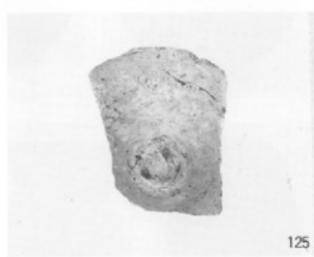


125

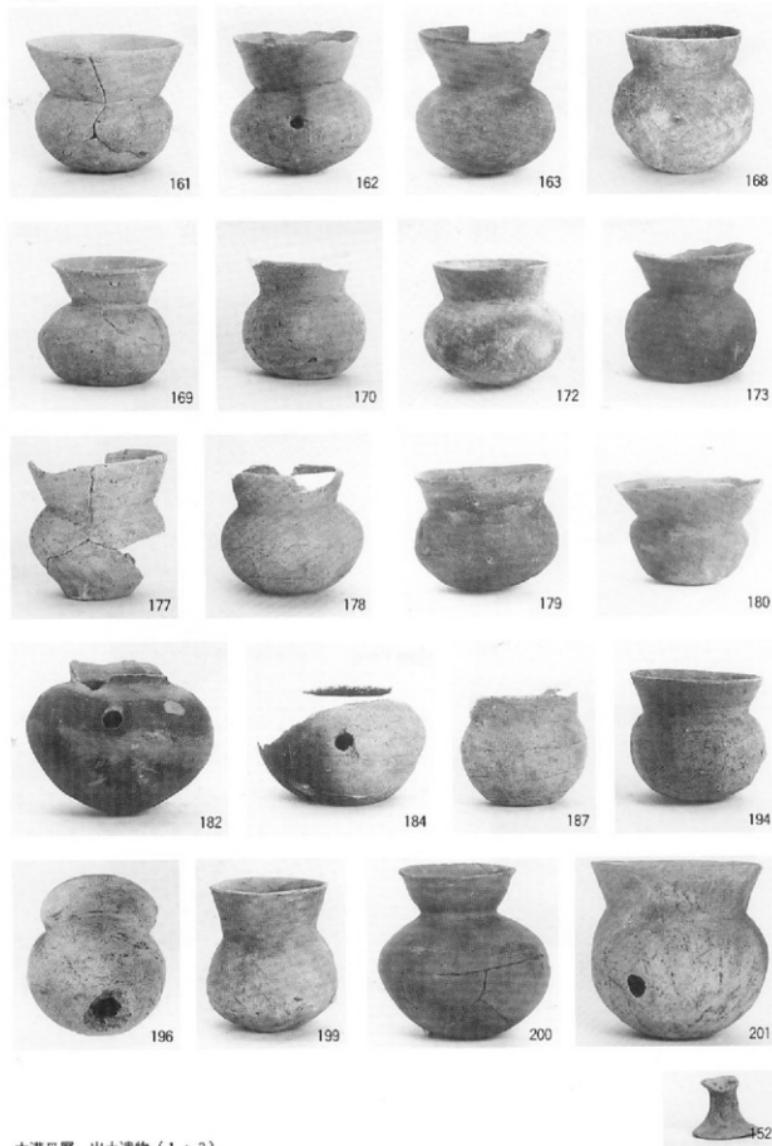


108

杯部下から



125



大明台出土遺物 (1 : 3)





210



211



213



214



220



232



236



238



242

P L 30



205



268



263



205 (底)



299



275



269



281

大溝Ⅲ層出土遺物 (1 : 3)



311



312



324



313



315



325



304



305

大满 S Z 1 出土遗物 (1 : 3)



303



307



310



338



355



359



444



370

大溝 S Z 1 (303・307・310)・I・II層・その他出土遺物 (1 : 3)



326



372



373



374



387



388



394



407



371



393



408



409



411



356



447



448



460



459



464



462



468外



468内



466外



466内



467内



466内



480



481



484



483



487



478



478



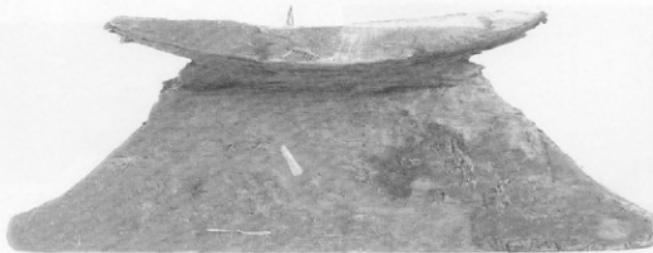
477



497



497



498

大溝出土木製品（紡織具・椅子・脚材）



492表



492裏



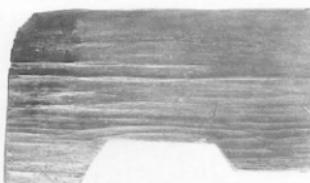
493裏



495裏



489

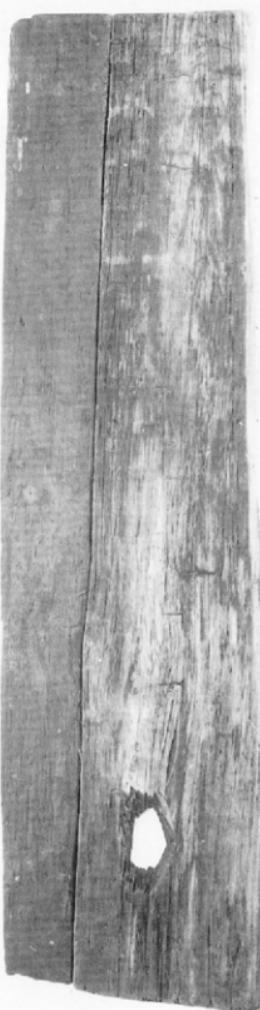


490



536表

大溝出土木製品（扉板）



536裏

P L 38



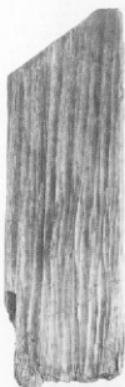
508



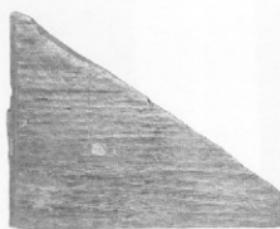
509



517



533



535



534



613



596



597

大溝出土木製品（朽材・壁板・挿入棒・有頭棒）



553



577内



577外



558



559



560

大溝出土木製品（組物・用途不明品）

577

P L 40



632



633



634



642



638



641

▲ SH 3



649



653



◀ SH 54
651 (649-653-651)

▼ SH 54

▼ SH 65



727

▲ SH 77



693

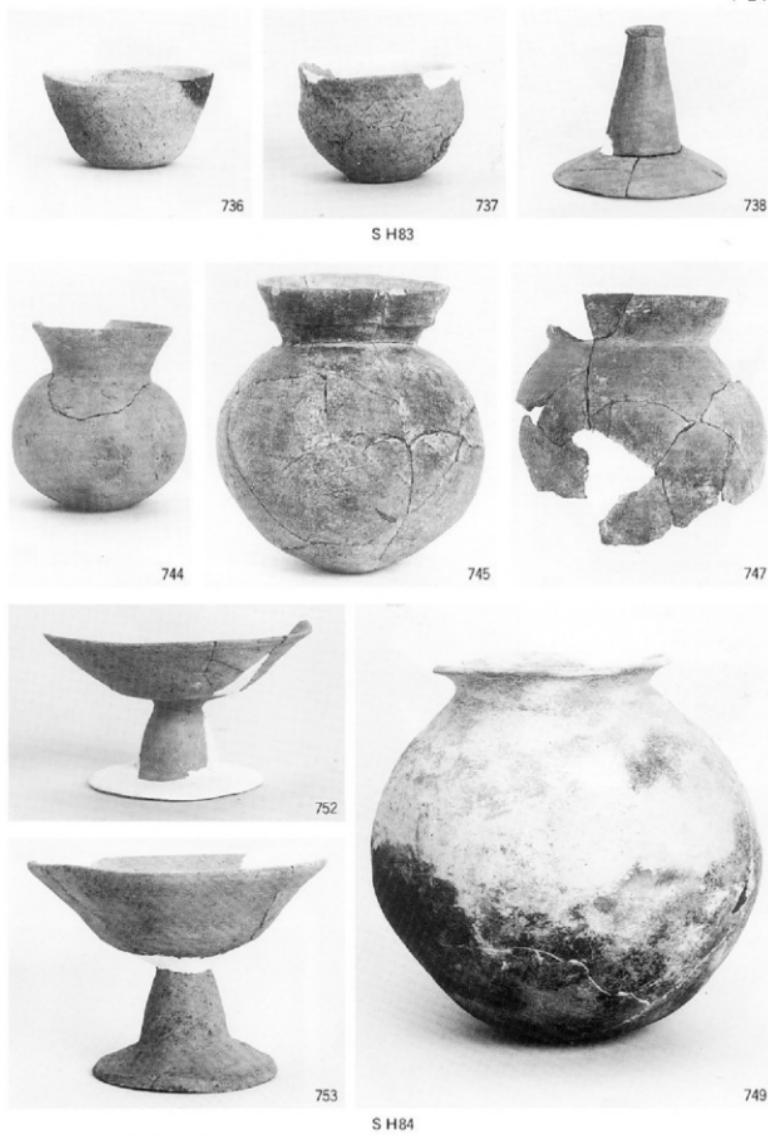


713



731

S H 3 · 26 · 54 · 65 · 77 · 80 出土遺物 (1 : 3)



S H83・84出土遺物 (1 : 3)



754

S H85



762



763



766

S H87



771



769



773

S H88



756



760

S H86



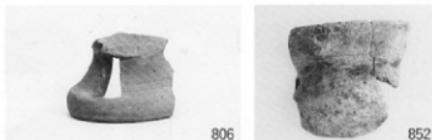
781



776

S H89

P L.43



S D 75 (800 · 806 · 807 · 810 · 811) · S Z 98 (852 · 854 · 855) 出土遺物 (1 : 3)

P L 44



各遺構出土遺物 (1 : 3)

平成4(1992)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年3月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 99-3

城之越遺跡

—三重県 上野市比土—

1992年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行

印刷 東海印刷株式会社

